

徳山ダム水没地区埋蔵文化財

発掘調査報告書 第3集

追分遺跡・下開田村平遺跡

1992

水 資 源 開 発 公 団

財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

揖斐川最上流域に位置する徳山村は、徳山ダム建設に伴って全村水没することになり、昭和62年4月1日に藤橋村に合併されました。豊かな山々に囲まれた旧徳山地区には、縄文時代からの遺跡が数多く残されていますが、これらの文化遺産も同時に水没することになりました。

このため、水資源開発公団の委託を受け、昭和61年度から岐阜県教育委員会が、平成3年度からは(財)岐阜県文化財保護センターが引き続いて発掘調査を実施し、現在も発掘調査を継続しています。調査は、全まで空白地帯であった西美濃地域の遺跡の様相や東西・南北の文化交流の様相などの解明が期待されることから、全国的に注目されています。

本報告書は、徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告の第3集であり、平成元・2年度にわたって実施した「追分遺跡」と平成2年度に実施した「下開田村平遺跡」の調査成果をまとめたものであります。

この報告書の刊行にあたり、発掘調査及び出土品の整理・報告書の作成にご指導・ご協力を賜りました関係諸機関・各位に深く感謝を申し上げますとともに、本書が旧徳山地区のみならず、東海地方の歴史研究の一助になることを願うものであり、今後とも一層のご指導・ご協力を賜ることをお願い申し上げます。

平成5年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 吉田 豊

例 言

1. 本書は、徳山ダム建設に伴う水没予定地内にある「追分遺跡」と「下開田村平遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、水資源開発公団と岐阜県が委託契約を結び、岐阜県教育委員会が実施した。
報告書の編集・刊行は、(財)岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 「追分遺跡(G19T06381)」は、岐阜県揖斐郡藤橋村大字開田字追分に所在する。本遺跡の発掘調査は、平成元年4月1日から平成3年3月31日まで2年度にわたって実施した。
「下開田村平遺跡(G19T06382)」は、岐阜県揖斐郡藤橋村大字開田字村平に所在する。
本遺跡の発掘調査は、平成2年4月1日から平成3年3月31日まで実施した。
4. 徳山ダム建設に伴う水没予定地内にある遺跡の発掘調査は、平成2年度まで岐阜県教育委員会が実施してきたが、平成3年度からは(財)岐阜県文化財保護センターが引き継いで実施してきた。
5. 「追分遺跡」・「下開田村平遺跡」の水準測量・地形測量は、(株)イビソクが実施した。
6. 報告書の執筆は、大参義一教授の指導のもとに、各担当者が分担して執筆した。執筆者名は文末に示した。但し、第4・6章は大参義一教授に執筆を依頼した。全体の編集は宇野が担当した。
7. 遺物の整理・実測図等に関しては、調査担当者・補助調査員のほか、下記のセンター職員諸氏に協力を願った。各務 光洋・佐野 康雄・上嶋 善治・谷口 和人・長屋 幸司・藤田 英博
安江 祥司・川部 誠・只腰 正知
8. 本発掘調査にあたって、水資源開発公団・地元藤橋村・久瀬村・揖斐川町・揖斐県事務所・西濃教育事務所には、多大な協力を得た。
9. 調査および報告書執筆にあたって、下記の地元の研究者・県内外の研究者諸氏には、ご指導・ご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。
伊藤 淳史(京都大学助手)・内堀 信雄(岐阜市教委)・大江 命(岐阜県考古学会)
篠田 通弘(藤橋中)・徳松 正廣(羽島高)・富井 眞(京都大学大学院)・保坂 康夫
吉朝 則富(高山考古学研究会) (氏名順不同)
10. 調査団の構成。

平成元年度	団 長	岐阜県教育委員会 教育長	篠田 幸雄
(調査年次)	副 団 長	同 指導部長	小林 峯夫
	指導調査員	岐阜県文化財保護審議会委員 信州大学教授	大参 義一
	調査担当者	岐阜県教育委員会 文化課	
	学芸主事	只腰 正知 課長補佐 町川 克己 教育主事	佐野 康雄
	学芸主事	宇野 治幸 教育主事 大熊 厚志	
	補助調査員	名古屋大学大学院修了	成瀬 正勝
	事 務 局	岐阜県教育委員会 文化課長	加藤 英夫
		同 文化課文化財第2係長	丸山幸太郎
		同 文化課	文化課職員
平成2年度	団 長	岐阜県教育委員会 教育次長	竹中 寿一
(調査年次)	副 団 長	同 指導部長	大宮 義章
	指導調査員	岐阜県文化財保護審議会委員 信州大学教授	大参 義一
	調査担当者	岐阜県教育委員会 文化課	
	課長補佐	只腰 正知 学芸主事 武藤 貞昭 課長補佐 町川 克己	
	学芸主事	宇野 治幸 教育主事 佐野 康雄 教育主事 大熊 厚志	

	補助調査員	岡山大学大学院修了 明治大学文学部卒業	田中 弘志 西村 勝弘
	事務局	岐阜県教育委員会 文化課長 同 文化課文化財第2係長 同 文化課	加藤 英夫 波多野寿勝 文化課職員
平成4年度 (報告書刊行年次)	理事長	(財)岐阜県文化財保護センター理事長	吉田 豊
	調査責任者	(財)岐阜県文化財保護センター調査課長	西村 覺良
	指導調査員	岐阜県文化財保護審議会委員 愛知学院大教授	大参 義一
	調査指導	岐阜県教育委員会	
	調査担当者	(財)岐阜県文化財保護センター 調査課 総括課長補佐 北洞 勝臣 課長補佐 学芸主事 加藤 栄二 学芸主事	武藤 貞昭 小谷 和彦
	報告書担当者	(財)岐阜県文化財保護センター 調査課 課長補佐 宇野 治幸 学芸主事 千藤 克彦 学芸主事	鈴木 昇 村木 誠
	補助調査員	京都大学大学院終了	山崎 春夫
	事務局	(財)岐阜県文化財保護センター 事務局長 同 総務課総括課長補佐 同 総務課主事 同 総務課事務嘱託 同 総務課事務補助	小林 哲夫 原田東支夫 岩手 正実 岩谷 美里

11. 発掘調査参加者及び整理作業参加者（順不同）

京都大学院生	伊藤 淳史
愛知学院大学院生	福田 真
愛知学院大学学生	目加田 哲
その他	村井 美代・北原 絵美
発掘作業員	清水 義太・清水おぎの・小西 直政・小西きよ子・清水 勝三・清生 満雄 小玉 長八・小玉 春子・泉 武光・扇間 重男・佐島 岩吉・佐島みさを 井部 政男・小倉 富恵・堀田 勉・堀田 信子・丹度 由子・広瀬小ひな 川口ふじゑ・加藤きよこ・本多 博道・市田 岱子・山岸 孝枝（揖斐川町） 増元 みち・高橋 春枝・竹中 直太・増元なつゑ・五十川シズ・杉山 はる 竹中としゑ・高橋 花子・高橋 しも・小寺ひさえ・高橋ゆりの・竹中 春子 杉山 利子・河合ふみゑ（久瀬村） ・中石 たけ・小林さずゑ・中川 操 中川 逸枝・高橋みやの・中川みさを（藤橋村） ・中村 玲二・中村たみゑ 村山みつ子（岐阜市） ・堀田 信夫（糸貫町） 中村 菊子・瀬里崎陽子（本巣町）
整理作業員	高嵩 桂子・脇野 伸子・駒田 香絵・澤井 梅子・河本 節子・中村とよみ 米津 光枝・服部みどり・豊田 圭子・傘木 文恵・伊藤 節子・松岡美代子 広瀬 宣子・新藤有美子・水谷八重子・加納 恭子・佐藤まさみ・酒向 邦子 江間香代子・山本 真理・岩平 澄子・浅野紀美代・竹内 恒子
岐阜県教育委員会	加藤 英夫・北条 統督・菱田 慶治・丸山幸太郎・波多野寿勝 吉田 忠芳・安藤 和男・高橋 宏之・篠田 昌利・鷺見 哲郎 平工 吉枝・今井 雅巳・長島 一明・古田 勝利・藤沢 昌利 中嶋 里美・山口 知子・丹羽 雅子

目 次

序	
例 言	
目 次	
挿図目次	
付表目次	
図版目次	
第1章 遺跡の環境	1
第1節 自然環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の目的と方法	12
第1節 調査に至るまでの経過	12
第2節 追分遺跡の発掘調査	13
第3節 下開田村平遺跡の発掘調査	16
第3章 追分遺跡の遺構・遺物	21
第1節 基本的層序と遺構	21
第2節 土器類・その他の遺物	25
第3節 石器類	30
第4章 追分遺跡の考察	39
第5章 下開田村平遺跡の遺構・遺物	41
第1節 基本的層序	41
第2節 遺構	43
第3節 土器類・陶器類	67
第4節 石器類	93
第6章 下開田村平遺跡の考察	118
参考文献	120
図版	123

挿図目次

第1図	遺跡周辺の地形	2	第36図	焼礫集積接合図	64
第2図	徳山地域の遺跡分布図	4	第37図	第1～4号焼礫集積遺構重量構成	65
第3図	徳山地域の中世墓分布図	8	第38図	屋外炉跡	66
第4図	追分遺跡地形図	14	第39図	第Ⅷ層遺物集中地点分布図	66
第5図	追分遺跡グリッド設定図	15	第40図	包含層出土縄文土器(1) S1～4群	68
第6図	下開田村平遺跡地形図	17	第41図	包含層出土縄文土器(2) C1・2群	69
第7図	下開田村平遺跡グリッド設定図	19	第42図	包含層出土縄文土器(3)C2群	71
第8図	追分遺跡A地区土層柱状図	21	第43図	包含層出土縄文土器(4)C3群	73
第9図	追分遺跡7列土層図	22	第44図	包含層出土縄文土器(5) C3～5群	74
第10図	追分遺跡G列土層図	23	第45図	包含層出土縄文土器(6) C5・6群, K1群	76
第11図	追分遺跡14列土層図	23	第46図	包含層出土縄文土器(7) K1・2群	78
第12図	追分遺跡A地区	24	第47図	包含層出土縄文土器(8) K2～4群	79
第13図	追分遺跡B・C地区	24	第48図	包含層出土縄文土器(9) B1・2群	81
第14図	包含層出土土器	26	第49図	包含層出土縄文土器(10)	82
第15図	包含層出土その他の土器・陶器類	28	第50図	包含層出土その他の土器・ 陶磁器類	87
第16図	縄文土器分布図	29	第51図	須恵器・山茶碗・古瀬戸製品 分布図	88
第17図	その他の土器・陶器類分布図	29	第52図	大窯製品・近世陶磁器分布図	89
第18図	包含層出土石器(1)	31	第53図	土錘・土鈴・土師皿分布図	90
第19図	フレークの長幅比分布図	32	第54図	銭貨分布図	90
第20図	包含層出土石器(2)	33	第55図	包含層出土銭貨	91
第21図	発掘A区49列北壁・M列東壁土層 断面図	42	第56図	包含層出土石器(1)	94
第22図	下開田村平遺跡第Ⅱ層A区遺構 配置図	44	第57図	包含層出土石器(2)	96
第23図	下開田村平遺跡第Ⅱ層B区遺構 配置図	45	第58図	包含層出土石器(3)	98
第24図	第1号竪穴住居跡	46	第59図	包含層出土石器(4)	99
第25図	第1号竪穴住居跡出土縄文土器(1)	48	第60図	包含層出土石器(5)	100
第26図	第1号竪穴住居跡出土縄文土器(2)	49	第61図	包含層出土石器(6)	102
第27図	第1号竪穴住居跡出土縄文土器(3)	50	第62図	包含層出土石器(7)	103
第28図	第1号土塙	53	第63図	包含層出土石器(8)	105
第29図	第2号土塙	54			
第30図	(折込図1)第Ⅵ層礫・配石 分布図	55			
第31図	(折込図2)重量別礫分布図	57			
第32図	第1・2号焼礫集積遺構	60			
第33図	第3号焼礫集積遺構	61			
第34図	第4号焼礫集積遺構	62			
第35図	重量別礫分布図	63			

付表目次

第1表	徳山地域の縄文遺跡一覧	5
第2表	徳山地域の縄文以外の遺跡一覧	7
第3表	徳山地域の中世墓一覧	9
第4表	縄文土器観察表	27
第5表	包含層出土石器計測表(1)	35
第6表	包含層出土石器計測表(2)	36
第7表	包含層出土石器計測表(3)	37
第8表	包含層出土石器計測表(4)	38
第9表	第1号竪穴住居跡出土縄文土器 観察表(1)	51
第10表	第1号竪穴住居跡出土縄文土器 観察表(2)	52
第11表	包含層出土縄文土器観察表(1)	82
第12表	包含層出土縄文土器観察表(2)	83
第13表	包含層出土縄文土器観察表(3)	84
第14表	包含層出土縄文土器観察表(4)	85
第15表	包含層出土縄文土器観察表(5)	86
第16表	銭貨一覧表	92
第17表	包含層出土石器計測表(1)	106
第18表	包含層出土石器計測表(2)	107
第19表	包含層出土石器計測表(3)	108
第20表	包含層出土石器計測表(4)	109
第21表	礫計測表(1)	110
第22表	礫計測表(2)	111
第23表	礫計測表(3)	112
第24表	礫計測表(4)	113
第25表	礫計測表(5)	114
第26表	礫計測表(6)	115
第27表	礫計測表(7)	116
第28表	礫計測表(8)	117

図版目次

図版1	123
図版2	124
図版3	125
図版4	126
図版5	127
図版6	128
図版7	129
図版8	130
図版9	131
図版10	132
図版11	133
図版12	134
図版13	135
図版14	136
図版15	137
図版16	138
図版17	139
図版18	140
図版19	141
図版20	142
図版21	143
図版22	144
図版23	145
図版24	146

第1章 遺跡の環境

第1節 自然環境

位置と地形 遺跡が所在する徳山地域は、木曾三川のひとつ揖斐川の最上流部にあり、岐阜県の北西端で福井県と滋賀県の県境に位置する。周囲は、越美山地と呼ばれる山々に囲まれている。

地形を概観すると、越美山地は能郷白山をのぞいて 1,200m前後の峰で占められ定高性を示す。これらの山頂付近はいずれも傾斜の比較的ゆるい平頂峰であり、このことから越美山地は長い間に準平原化された後、現高度に隆起したことが考えられる。この山地を揖斐川が深い谷をつくって流れている。揖斐川本流(東谷)は山地帯の北西から南東方向に直線的に流下するが、これは揖斐川断層と呼ばれる断層線上を流れているためである。一方、西谷川は曲流し、先行性流路をたどっていると考えられる。

どちらの谷も急であるが、それぞれに小規模な河岸段丘・扇状地が形成されている。徳山地域の人々の生活の場は、これらの狭い段丘や小扇状地上にある。東谷には、上流から塚・榎原・山手・上開田・本郷・下開田、西谷には門入・戸入の各集落があった。

地質 徳山地域を構成する地質は、大部分が古生代から中生代に海で堆積したと考えられる岩石(中古生層)である。徳山地域の谷では中古生層の堆積岩である粘板岩・砂岩・礫岩・チャート・石灰岩・輝緑凝灰岩の礫が見られる。

一方、北東部の能郷白山・若丸山付近には花崗岩・花崗閃緑岩・閃緑岩・安山岩などの火成岩の層がみられる。このため能郷白山から流れる白谷は、花崗岩・花崗閃緑岩が多い。

「追分遺跡」の立地する東谷と西谷の合流地点や「下開田村平遺跡」の立地する下開田地区付近の岩層は、中古生層の輝緑凝灰岩や粘板岩を主とし、チャート・砂岩・石灰岩などの薄層を狭有している。

気候と植生 徳山地域は北陸地方と東海地方の境にあり、四方を海拔 1,200m前後の越美山地に囲まれている。こうした位置的・地形的特徴がこの地域の気候を大きく左右している。夏は南東季節風の影響を受けて多量の雨が降り、冬は北西季節風の影響を受けて大雪が降る。このため徳山地域は年間降雨量が 3,000mmを超える日本でも有数の降水量の多い地域である。

気温では年較差・日較差が大きい。冬は -10°C 近くも気温が下がり、夏には 30°C をこす暑さを記録する。これは四方を高い山で囲まれた盆地で、内陸的気候のためであると考えられる。

徳山地域の植生は、基本的にはブナ・ミズナラを主とする落葉樹林帯に属する。この地域で見られるブナ林は、林床にチシマザサを伴っており、日本海側の地域に見られる植生をしている。太平洋側にありながら日本海側型の植生を示すのは、この地域が冬に積雪が多いという日

2 第1節 自然環境

本海型の立地条件のためである。樹木には他にトチノキ・ケヤキ・ホウノキ・クリ・サワグルミ・ヤマボウシなどがみられる。

「追分遺跡」や「下開田村平遺跡」付近は、近年以降の伐採によって植生が大きく変わっているが、現在見られるのはスギ・ヒノキの植林とミズナラを中心とした落葉広葉樹林である。

(千藤克彦)



第1図 遺跡周辺の地形

第2節 歴史的環境

「追分遺跡」は、揖斐郡藤橋村大字開田字追分に所在する。支流の西谷川が揖斐川本流との合流地点から約 500m上流に遡った左岸段丘上に位置する。この遺跡の周辺には、合流点の右岸段丘上に「上開田村平遺跡」、この対岸の左岸段丘上に「本郷遺跡」、中・近世の「徳山城跡」・「徳山陣屋跡」・「城山城跡」が分布する。

また「下開田村平遺跡」は、揖斐郡藤橋村大字開田字高に所在する。この遺跡は、徳山地区の遺跡の中で最も下流に位置し、揖斐川本流の右岸段丘上に位置する。この遺跡の周辺には、中世の寺院跡「普賢寺跡」がある。

徳山ダム建設に伴って廃村になった旧徳山村(昭和62年3月31日廃村)には、現在約34箇所の遺跡(平成4年4月現在)が知られている。この内、ダム建設に伴う水没地域内に所在する遺跡は24箇所である。

旧徳山村の遺跡は、すでに大正年間に小川栄一氏によって調査され報告されている。第二次大戦後も小川氏の調査によって報告されたが、5箇所の遺跡しか知られていなかった。その後も、小澤一弘氏らによって「塚奥山遺跡(宮ヶ原遺跡)」の遺物紹介がなされただけであった。ダム建設の話が本格化した頃から、根尾弥七氏・篠田通弘氏ら地元の研究者たちは、村内を踏査し、多くの成果を発表された。岐阜県教育委員会は、先達の成果を踏まえ、徳山ダム建設に伴う水没地内の埋蔵文化財の分布調査を実施し報告した。ここでは、分布調査の結果を基にして、現時点(平成4年4月末現在)までの発掘調査や整理作業の結果を中心に概観を述べることにする。

旧石器時代 徳山地域では、旧石器時代の遺跡はまだ発見されていない。地元研究者たちの分布調査などで「塚奥山(宮ヶ原)遺跡」や「小の原遺跡」など5遺跡からナイフ型石器に類似する石器が採集され、旧石器時代遺跡の可能性が報告された。しかし、昭和62・63年度に発掘調査した「小の原遺跡」では、旧石器時代に属すると思われる石器は出土していない。現在のところ明確な遺物が発見されていないため、徳山地域に旧石器時代から人々が生活していたとは一概には言えないであろう。

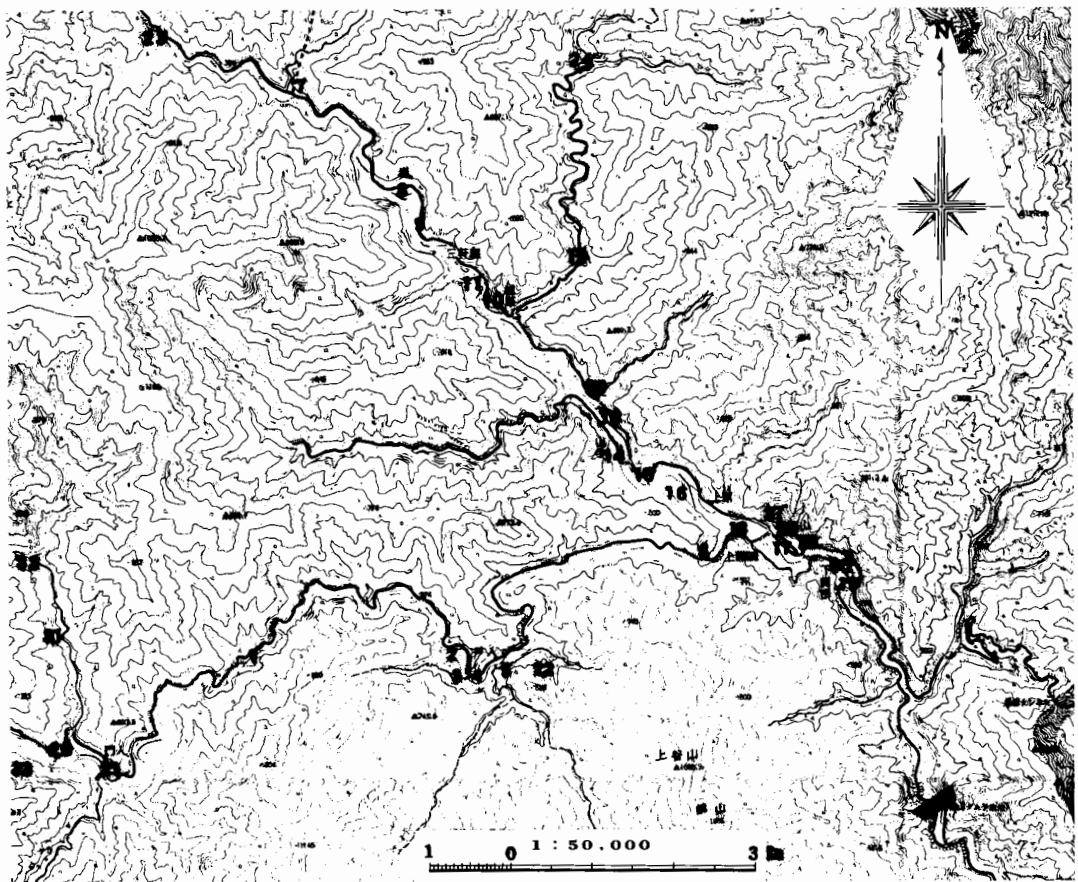
縄文時代 徳山地域に人々が本格的に生活し始めたのは縄文時代に入ってからである。縄文時代の遺跡は、現在25箇所(第2図、第1表)が知られている。この内、水没地域内にある遺跡は19箇所、平成3年度までに発掘調査が終了した遺跡は9箇所である。

縄文時代草創期の遺跡は、現在のところ有舌尖頭器を検出した「小の原遺跡」1箇所だけである。この時期の土器では、多縄文系の表裏縄文土器(椀ノ湖Ⅱ式並行)を検出しており、草創期末の遺跡といえる。現時点において他にはこの時期のものは認められない。今後、調査の進

4 第2節 歴史的環境

展に伴い、東谷筋でもこの時期の遺跡が発見されることが期待される。

早期になると徳山地域の各地に遺跡が点在してくる(11遺跡)。揖斐川本流域の東谷筋では、「塚奥山遺跡」・「長吉遺跡」・「尾元遺跡」・「上原遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」などで遺物が出土している。特に「尾元遺跡」では、付替道路進入路の確認調査時に、大形の異形部分磨製石器を検出した。また、平成2年度に発掘調査した「下開田村平遺跡」では、押型文土器・茅山下層式土器・上ノ山式土器やこの時期の焼礫集石遺構・配石遺構を検出した。詳細については本書の第4章で述べることにする。また、「長吉遺跡」では少量ながら茅山下層式土器がまとまって出土している。西谷川流域の西谷筋では、「いんべ遺跡」・「はいつめ遺跡」・「小の原遺跡」・「戸入村平遺跡」・「追分遺跡」で遺物が出土している。「小の原遺跡」について、既刊の第2集で述べているように、早期の集石炉や石器を大量に出土している。土器では早期の各小時期のものが出土している。山形や楕円の押型文土器をはじめとして、関東系の田戸下層式・田戸上層式・野島式・鶴ヶ島台式・茅山下層式土器や、東海系の八ッ崎式・粕畑式土器・上ノ山式・入海式土器などが出土している。「いんべ遺跡」では、平成2年度の発掘調査の結果、



第2図 徳山地域の遺跡分布図

押型文土器をはじめとして早期後半の茅山下層式・入海式土器等や集石炉を検出した。「はいづめ遺跡」でも押型文土器が出土しているが、小破片で磨滅しているため「小の原遺跡」からの流れ込みと考えられる。「戸入村平遺跡」では「小の原遺跡」出土のものと異なる押型文土器や繊維土器が出土している。また、「追分遺跡」でも押型文土器が出土している。詳細については本書の第3章で述べることにする。

No.	遺跡名	縄文時代					弥生	発掘調査結果					
		草	早	前	中	後		晩	遺物	遺構	備考		
1	いんべ		○	○	○	○	○	早期：押型文土器、茅山下層式・入海式 中期：里木式・中富式・取組式、 後期：宮籠式・壺之内式など、 晩期：五貫之森式～下り松式など土器多数出土。石器：多数出土	・集石炉跡5基、 ・土器棺墓跡11基、 ・石組み土壇墓跡3基など	H24年度発掘調査	水 没 地 区 内 の 協 定 書 に よ る 発 掘 調 査 を 実 施 す る 遺 跡		
2	小の原		○	○	○		草創期：表裏縄文土器など。 早期：押型文土器(継合式等)、田戸下層式・入海式・石山式・天神山式・壺屋式土器など 前期：清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式・北白川下層Ⅰ～Ⅱb式・諸磯式など多数出土。石器：旧石器未検出。有舌尖頭器・他各種の石器多数出土。	・前期の住居跡2基 ・早期の集石炉跡11基等検出	S62・63年度発掘調査報告書				
3	はいづめ			△	○	△	○	早期から後期までの土器は少量。 晩期：西之山式・五貫之森式・下り松式、大洞B-C式～大洞C式・浮線網状文土器など。 弥生：前期の遠賀川式土器2個体検出。 石器：異形部分磨製石器・石刀・石棒・石冠4点など各種多数出土	・住居跡3基 ・土器棺墓16基等遺構検出	S61・62年度発掘調査報告書			
4	戸入村平		○	△	○	○	○	早期：押型文土器・茅山下層式土器等 前期から晩期までの各時期の土器多数 石器：各種多数出土。	・住居跡8基 ・後晩期の土器棺墓11基等遺構検出	S63・H1年度発掘調査			
5	戸入障子暮							・土器小破片出土。 ・石器(砥・朝飯・船形)出土	時期・遺構不明	H1年度発掘調査報告書			
6	追分		○				○	・早期・後晩期の縄文土器少し。 ・打製石斧多数出土他の石器は少量。	遺構検出できず。	H12年度発掘調査			
7	塚奥山	?		△		○	○	△				(原・藤野)	
8	塚						○	○	○	・中期から晩期までの縄文土器や石器 各種多数出土。		・住居跡6基 ・土器棺墓1基、 ・集石遺構3基検出	H23年度発掘調査
9	長吉		○					○		・石鏃少しのみ。 ・茅山下層式・標王式土器出土		・遺跡の中心は滅失	H33年度発掘調査
10	嶺原村平			△	○	○	○						
11	嶺原神向									・石鏃・打製石斧・スライパ等少し			
12	いじま									・縄文土器細片少し。			
13	織谷口						○			・中期の里木式土器など出土。 ・古代の須恵器が出土。		・遺構無し。	H22年度発掘調査
14	山手宮前						○						H44年度発掘調査
15	尾元			△	△					・石器のみ。確認調査により異形部分磨製石器を検出。			
16	上(あ)原	?		△	○	○	○	○	○	・縄文時代から古代までの複合遺跡。 ・縄文時代早期から弥生時代前期の遠賀川式土器までの土器が出土		・住居跡11基、 土器棺墓6基	H22年度～発掘調査継続中
17	本郷									・石皿のみ。			
18	上開田村平						○			・中期後半の縄文土器 ・石鏃・石鏢・打製石斧など		・住居跡1基検出。	H44年度発掘調査
19	下開田村平		○	○	○	○	○			・早期：押型文土器、茅山下層式、上ノ山式土器など ・中期後半の土器から晩期の標王式土器まで出土。石器は多くない。		・住居跡1基 ・早期の炭石焼機遺構3基等検出。	H22年度発掘調査
20	しょうじょ									石鏃・打製石斧・石鏢・スライパ等		水 没 地 区 外 の 遺 跡	
21	門入村平									石鏃少し。			
22	上(う)原									縄文土器小片少し。石鏃・石鏢少し。			
23	石橋					△				縄文土器少し。石鏃・石鏢・石鏢等。			
24	小屋どこ	?		△	○	○	△	△					
25	冠平												

※ アミカケの遺跡は、平成3年度までに発掘調査を終了したものの。
 ※※表内の○・◎・△は、発掘調査で出土した土器の量による。ただし、未調査遺跡については、文献34.35による。
 ※※※Noは、第2図の遺跡番号に準ずる。

第1表 徳山地域の縄文遺跡一覧

6 第2節 歴史的環境

前期では東谷・西谷両流域に7遺跡が分布する。東谷筋ではまだ発掘調査が進んでいないため、遺跡の様相は採集資料だけで明確ではないが、「樋原村平遺跡」・「尾元遺跡」・「上原遺跡」・「小屋どこ遺跡」が知られている。今後の発掘調査の進展によって明らかになることを期待したい。平成2年度から発掘調査を継続している「上^(あげはら)原遺跡」では、北白川下層式土器や蝶形石器・糸巻形石器と呼ばれる異形石器を検出しているが、まだ未整理の段階のため詳細は不明である。西谷筋では、「小の原遺跡」が特筆する。住居跡や集石炉を検出し、前期全般にわたる大量の遺物が出土している。土器を見ると前期前半では東海系の清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式土器が主体をなし、後半になると関西系の北白川下層式土器やこの影響を強く受けた在地ものが主体となり、関東系の諸磯式土器は列孔文土器が主で他のものは非常に少ない。「いんべ遺跡」では、平成2年度の発掘調査で前期前半までの集石炉跡と土器を確認した。他に「はいづめ遺跡」で若干の遺物を検出している。

中期になると遺跡数が増大する(12遺跡)。東谷筋では、「塚奥山遺跡」や「上原遺跡」などのように面積的に広く、大集落が営まれていた可能性が大きい遺跡がある。平成2年度から発掘調査を継続している「上^(あげはら)原遺跡」では、住居跡を11基・土器棺墓を4基検出しており、今後も増加すると思われる。土器・石器も予想を上回る程大量に出土した。このような大集落が営まれていた反面、平成2年度に発掘調査した「下開田村平遺跡」や「磯谷口遺跡」のような小規模な遺跡も散在する。「下開田村平遺跡」では住居跡を1基検出したが、遺物量も少なく遺跡の範囲も狭い。「磯谷口遺跡」でも遺跡の範囲は狭く、遺物は検出したが遺構は検出できなかった。また「塚遺跡」は平成2・3年度に発掘調査を実施し、中期の住居跡6基・集石遺構3基・土器棺墓1基のほか、土器・石器など大量に検出した。今年度調査中の「上開田村平遺跡」でも中期後半の土器を検出している。「樋原村平遺跡」・「山手宮前遺跡」・「石橋遺跡」・「小屋どこ遺跡」なども採集資料によればこの時期の遺跡と思われる。西谷筋では、「戸入村平遺跡」が中心である。昭和63・平成元年度の発掘調査結果によれば、中期後半の住居跡を7基検出した。土器を見ると東海系・関東系・信州系・関西系・北陸系のものが混在する。他に「いんべ遺跡」がある。平成2年度の発掘調査結果によれば、遺構は検出できなかったが、中期後半の関西系の里木式土器や東海系の土器が出土している。このように、中期になると遺跡が増大するが、中期後半の遺跡が多い。

後期になると一般的に遺跡数は減少する傾向であると云われているが、徳山地区ではこの傾向は認められないと思われる(11遺跡)。東谷筋で発掘調査で確認されたのは「塚遺跡」と「上原遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」である。「上^(あげはら)原遺跡」ではこの時期の遺構の確認はできていないが、土器棺墓を1基検出し、土器も多数出土している。表採資料によれば「塚奥山遺跡」・「樋原村平遺跡」・「小屋どこ遺跡」などがある。西谷筋では「戸入村平遺跡」や「いんべ遺跡」・「はいづめ遺跡」・「追分遺跡」がある。「戸入村平遺跡」では住居跡は

検出できなかったが、土器棺墓を2基検出した。後期前半の関東系や東海系の土器が出土している。「いんべ遺跡」でも後期前半の土器が出土している。

晩期になると東谷では、発掘調査が進んでいないため明確には言えないが、遺跡の規模が縮小すると思われる。「塚奥山遺跡」・「塚遺跡」・「樫原村平遺跡」・「上原遺跡」・「小屋どこ遺跡」・「長吉遺跡」・「下開田村平遺跡」がある。「塚遺跡」や「上原遺跡」では、平成2・3年度の調査で大洞系の土器や土器棺墓を検出した。「上原遺跡」は調査を継続しているため今後詳細が判るであろう。「長吉遺跡」・「上原遺跡」や「下開田村平遺跡」でも樫王式土器が出土している。西谷筋では「はいづめ遺跡」・「戸入村平遺跡」・「いんべ遺跡」で大量にこの時期の土器棺墓を検出した。「はいづめ遺跡」14基、「戸入村平遺跡」11基、「いんべ遺跡」11基である。「はいづめ遺跡」で3基の住居跡を検出しただけで、他の遺跡では住居跡は検出していない。これらの土器棺墓は、晩期後半の五貫森式期から下り松式期のものと考えている。関東系の大洞式土器なども出土している。また、「追分遺跡」でも少量の土器が出土している。

No	遺跡名	古代	中世	近世	その他	遺跡	遺物	備考
4	戸入村平		○	○		中近世集落跡。	天目茶碗・鉄貨・陶磁器類他。	563・H1年度発掘調査
5	戸入陣子巻		○	○		中世集。	古瀬戸瓶子・近世陶器他。	H1年度発掘調査
6	追分	△		△		なし	須恵器・近世～現代陶器他。	H1・2年度発掘調査
7	塚奥山			○				
8	塚		○	○		近世集落跡。	近世陶器。鉄貨。	H2・3年度発掘調査
10	樫原村平			○		近世集落跡。		
13	織谷口		○				須恵器・灰輪陶器他。	H2年度発掘調査
24	寺院敷跡			○		寺院跡。		
14	山手宮前			○		近世集落跡		
16	上(山内)原	○	○	○			須恵器・灰輪陶器など検出。	H2～発掘継続中
17	本郷	○	○			中・近世集落跡。		
27	徳山城跡		○			中世城館跡。		
28	徳山陣屋跡		○	○		近世陣屋跡。		
29	城山城跡		○			中世城館跡。		
18	上開田村平			○				H4年度発掘調査
10	善賢寺跡	△	△			中世寺院跡。遺構検出できず	寺院跡に伴う遺物検出できず。	H3年度発掘調査
19	下開田村平	△	△	○		中近世集落跡。	須恵器。山茶碗。中～近世陶磁器。近現代陶磁器。鉄貨。	H2年度発掘調査
31	入谷村跡			○		集落跡。		
32	こうもり穴				○			
33	弘法穴				○	水堀探掘嵐山跡。		
21	門入村平			○		集落跡。		
23	石橋	○						

水没地区内の協定書による発掘調査を実施する遺跡

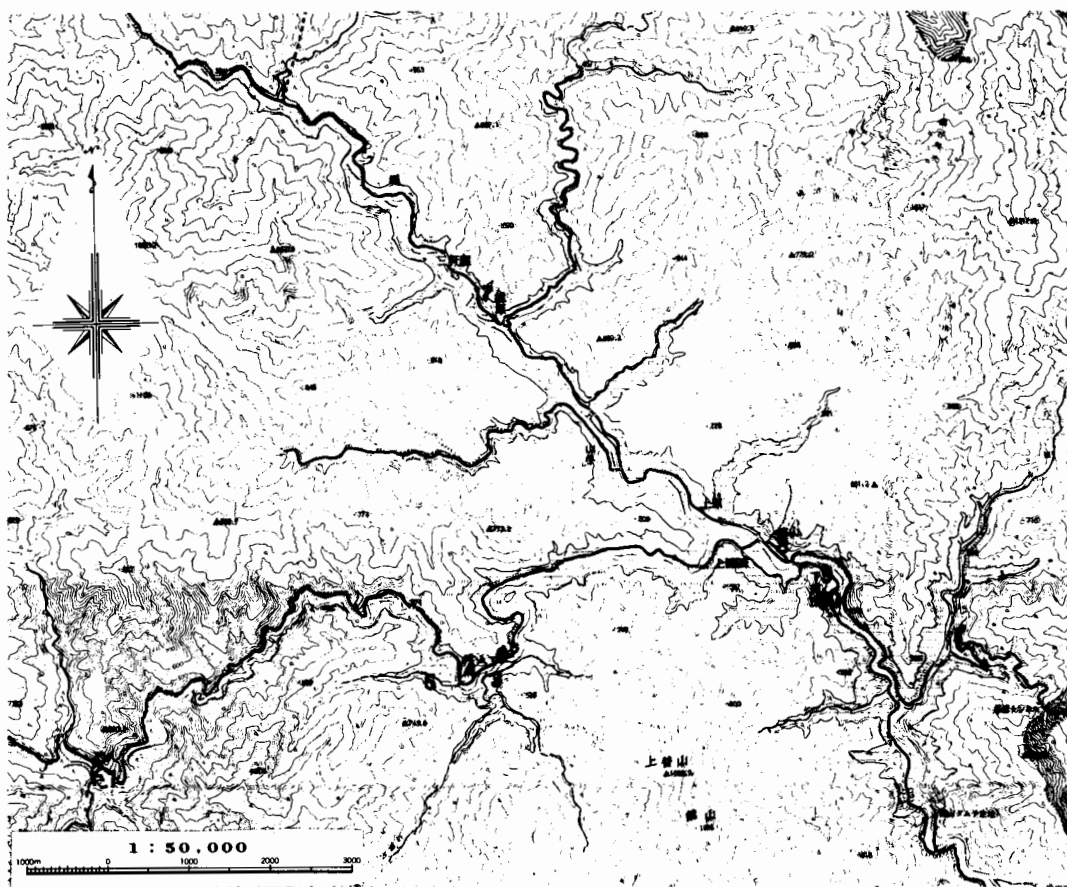
水没地区外の遺跡

※1. アミカケの遺跡は、平成3年度までに発掘調査を終了したもの。
 ※2. 表内の○・◎・△は、発掘調査で出土した土器の量による。ただし、未調査遺跡については、文献34.35による。
 ※3. △は、第2図の遺跡番号に準ずる。
 ※4. 最近「七平城跡」の報告がなされたが、遺跡の概要や調査の有無について、県教委文化課からはセンターに何も報告されていないので、現時点では不明である。(H14.11.16.現在)

第2表 徳山地域の縄文以外の遺跡一覧

弥生時代 弥生時代の遺物を出土している遺跡は、現在のところ、「はいづめ遺跡」と「上原(あげはら)遺跡」だけである。「はいづめ遺跡」では、前期の遠賀川系土器が2個体とその他のものが若干出土しているだけである。遠賀川系土器は土器棺墓として検出したもので、2個体の甕形土器の他は出土していない。また、「上原遺跡」でも数点の遠賀川系土器片が出土しているが、未整理のため詳細は不明である。したがって、現時点では弥生文化が徳山地域にもたらされたということではなく、まだ縄文文化を継承していた人達が、弥生文化を受容していた他地域との接触によりもたらされた搬入品と考えられる。この時代の徳山の様相については、資料が少ないため、今後の調査の進展によって明らかにされることを期待したい。

古 代 現時点では「磯谷口遺跡」・「上(あげはら)原遺跡」・「下開田村平遺跡」・「追分遺跡」・「石橋遺跡」では、須恵器や灰釉陶器が採集され、奈良・平安時代の遺跡(遺跡の性格は不明)と考えられている。平成2年度に発掘調査した「磯谷口遺跡」では、須恵器や灰釉陶器の破片が少し出土しているだけで遺構は検出できなかった。「上原遺跡」・「下開田村平



第3図 徳山地域の中世墓分布図

遺跡」・「追分遺跡」でも若干の遺物が出土しているだけで、遺跡の性格は不明である。現時点では遺構の未検出・遺物量の少なさなどから、この時期での集落の存在の可能性は少ないと思われる。

中世以降 中世以降の遺跡としては、中世墓の「戸入障子暮遺跡」や「徳山城跡」・「城山城跡」・「徳山陣屋跡」がある。「戸入障子暮遺跡」では蔵骨器として使われた古瀬戸瓶子を検出した。この古瀬戸瓶子は鎌倉時代末期のものであるが、この遺跡の対岸の「戸入村平遺跡」の発掘調査(現在整理中のため明確にはいえないが)では宋銭や明銭・大宰期以降の陶磁器類は出土しているが、山茶碗(白瓷系陶器)は確認していない。したがって、戸入地区では室町時代後半期以降の生活の痕跡しか認められない。「下開田村平遺跡」ではこの時期の遺構は検出で

第3表 徳山地域の中世墓一覧

No	名称	旧所在地	備考
1	門入村平 中世墓	掛斐郡藤橋村大字門入 字門入2071-1	門入集落の入口の墓域の一角に2群からなる五輪塔4基が建つ。1基は総高30cmの一石五輪塔。1基は地輪・水輪・火輪・風輪・空輪ともよく残る総高39cmの五輪塔。1基は台石に火輪がのるだけのもの。1基は地輪が失われているが、自然石の台石に水輪・火輪・風輪・空輪が残るもの。
2	門入 八幡神社裏 中世墓	" 藤橋村大字門入 字門入2166-1	八幡神社境内地の本殿裏の一段高くなったところに前列に五輪塔2基、後列に宝篋印塔3基が建つ。宝篋印塔は右端のものが宝珠と蓮花が欠失する他はほぼ完全に残っており、姿体は秀美である。
3	戸入障子暮 中世墓	" 藤橋村大字戸入 字障子暮552-2	宝篋印塔1基、五輪塔2基及び自然石を利用した墓石からなる。宝篋印塔の前庭部に頸部を打ち欠いた古瀬戸瓶子が蔵骨器として転用され埋納されている。宝篋印塔は露盤と塔身のみが残る。五輪塔は一石五輪塔であり、全高42cmの大きさ。
4	戸入村平 道場西 中世墓	" 藤橋村大字戸入 字村の内163-12	宝篋印塔1基、五輪塔1基、道祖神1基からなる。傍の自然石に「(表銘)当区歴代道場坊之碑(裏銘)昭和二十八年三月二十八日喜寿記念広瀬新次郎」と刻された碑が建ち、これら中世墓の基壇もこの時に再整備されたものと見られる。宝篋印塔は相輪部が残り塔身・基礎部は五輪塔の転用である。五輪塔は各輪とも良く残り総高55cmを測る。
5	はいづめ 中世墓	" 藤橋村大字戸入 字ハヒツメ715	宝篋印塔1基が祀られる。宝珠・露盤・塔身・基礎が残り、現存高50cmを測る。露盤の馬耳形突起が直立し、古い様式を留めている。
6	戸入小谷戸 中世墓	" 藤橋村大字戸入 字小谷戸467-89	宝篋印塔1基が祀られる。宝珠・塔身・基礎が残り、現存高38.5cmを測る。宝珠が塔身上に逆置されている。
7	榎原 白山神社 五輪塔	" 藤橋村大字榎原 字村平230-1 境内地の内	水輪・火輪のみ残る。傍らに自然石に陰刻された「奉納仁田四郎由定島山神社 年号不詳五月廿八日 八七原村中」の碑が建つ。
8	増徳寺 中・近世墓	" 藤橋村大字徳山 字村平360 墓地の内	徳山村内で唯一の宗教法人である曹洞宗増徳寺の境内に墓域が設けられ、中世以降の墓碑が建っている。
9	下開田 普賢寺跡 中世墓	" 藤橋村大字開田 字村ノ内145, 146	中世の寺跡と伝えている普賢寺跡の一角に近世以降の墓碑に混じて3基の五輪塔が建っていたと伝えるが、分布調査において確認されなかった。
10	下開田塔仏 中世墓	" 藤橋村大字開田 字北野64-1	かつて宝篋印塔が建っていたが、昭和46年に盗難にあい、今日では所在不明である。

(掛斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書 昭和60年3月 岐阜県教育委員会 より)

きなかったが、山茶碗の小破片を数点・陶磁器類の小破片を検出した。したがって、下開田地区では鎌倉・室町時代前半期からなんらかの人が生活を営んでいたとはいえるであろう。

(宇野治幸)

文献等より見る古代中近世の徳山

律令下の西濃地方北部は、揖斐川を境として、右岸を池田郡、左岸を大野郡に区分し、徳山の地も東西に二分されている。「徳山」関係の史料は、江戸時代以降のものがほとんどである。

近代以前の集落の地名として、揖斐川上流東谷左岸に「塚」「樋原」「徳山(本郷)」が、東谷右岸に「山手」「池田(上開田)」「漆原・志津原(下開田)」、西谷に「門入」「戸入」が挙げられている。徳山の古代については、史料がないために不透明な部分が多い。「徳山」関係の地名が史料に現れるのは、「美濃神名帳」(天慶～天徳 [947～957] 年間の頃に修撰された官簿)の「山手」集落の加茂神社の記載が最初である。「揖斐郡史」「徳山村史」では、「上開田(池田)」の六社神社の創建は保元元(1156)年としている。

平安時代のこの地方の歴史を解く鍵の一つに、白山信仰がある。この信仰は岐阜・石川県境の白山を中心に、僧泰澄によって開かれた山岳宗教である。平安末期に成立した「白山之記」には天長9(832)年に美濃・加賀・越前に信仰の三馬場を開いたと記している。「文徳天皇実録」には元慶8(884)年の僧宗叡による白山修行の記事があり、平安初期に白山がすでに山岳修験の霊場として著名であったことを示している。越美山地で最も標高の高い能郷白山は、福井県大野市・岐阜県根尾村・藤橋村(徳山)の境界に位置し、白山を中心とする広域な山岳修験の霊場の一つと位置付けられていたと考えられる。僧泰澄の開山と伝える能郷白山神社は、根尾村能郷にあり、能郷白山信仰の中心馬場として栄えた。越前馬場の福井県勝山市の白山平泉寺への道は、温見峠(能郷～温見)を越えて通じている。能郷と徳山は同じ大野郷に含まれ、江戸時代にはともに旗本徳山氏の領地であり、歴史的に密接な関係を持つ両地の往来は、能郷白山信仰が展開された時代にも活発に行われていたと考えられる。「塚」「本郷」「樋原」にあった白山神社の神像には、いずれも興国元(1340)年の銘文があり、能郷白山信仰が南北朝時代にも徳山に浸透していたと考えられる。平成4年度に発掘調査された上開田村平遺跡から14世紀頃の鑄造と考えられる和鏡(松鶴鏡)一面と、「さし銭」の状態の唐代の「開元通寶」9枚・宋銭21種の78枚が出土した。今後の整理と調査を待たねばならないが、能郷白山信仰との関連も推測される。徳山でこの信仰がどのように展開していたかは不明である。「徳山村史」によれば、「下開田」集落にあった普賢寺は真言宗の寺院と伝え、山岳信仰との結びつきが考えられる。普賢寺跡の発掘調査は平成3年度に完了しているが、信仰に関連した遺構・遺物については確認されていない。

徳山・根尾の地が、南北朝抗争の中で南朝方の拠点の一つであったことは、「太平記」等に記

載されている。「榎原」には新田義貞の榎原死亡説伝承が残されている。越前で再挙を計った義貞が、越前藤島での敗北後徳山の地で没したという。勿論、この説は伝承の域を出ないが、この時代に美濃〔杉ノ谷〕峠（徳山～福井県大野市）・冠峠（徳山～福井県池田町）・松尾峠（徳山～福井県池田町）・高倉峠（徳山～福井県今庄町）等を経由した徳山と越前の往来が想定できる。

近世における徳山と隣国との往来は、東谷から越前への街道の他、西谷の「門入」からホハレ峠を越え坂内村に入り八草峠を経て近江の木之本へ通ずる街道がある。本書の第3章で述べるように追分遺跡では、少量の須恵器や中近世の陶片が出土した。西谷下流の「追分」は、東谷右岸を遡り「山手」「塚」から越前への街道と、「上開田」「徳山（本郷）」・馬坂峠を経て「能郷」への街道の分岐点にあたる。近江・越前・能郷へ向うこの地は、その出土遺物等から中世以前よりの往来の可能性を示している。西谷の集落形成は14～15世紀頃と考えられる。「門入」の八幡神社の鰐口には、文明8（1476）年銘が刻まれている。昭和63年・平成元年度の戸入村平遺跡の発掘調査では、古瀬戸の陶片と宋・明銭等が出土している。「揖斐郡史」には、永享3（1431）年の山の年貢、永享6（1434）年の畑作・土地所有・麻作・狩猟等に関する史料が記載され、はしはら・やまて・いそたに・さもと・とにゅう・かんだに・つかなどの地名も確認できる。

古代・中世に栄えた白山信仰は、蓮如を中心とした浄土真宗本願寺派の布教活動の前に衰退していく。徳山へも越前との各峠を通り浄土真宗の勢力が浸透してくる。中世以降、徳山では殆どの住人が浄土真宗に転宗し、在地の人々の手で作られた道場を中心に展開していく。近世以降各道場は、越前にある誠照寺派西福寺、根尾村にある誠照寺派専念寺・西本願寺派西光寺に属している。

戦国時代以降、土着の豪族として「徳山」を支配していたのは、鎌倉・室町時代に美濃国守護の土岐氏の支族、徳山氏である。「徳山村史」によれば、徳山氏が活躍し始めたのは、室町時代の応永年間（1394～1427）以降としている。徳山氏の家系図によると永享10（1438）年頃に、本郷の徳山氏の菩提寺である増徳寺（曹洞宗）の記載があり、徳山氏の出現とほぼ一致する。戦国時代の徳山氏は、美濃国に在住しながらその地理的環境から越前との結びつきも強く、東海地方の勢力に左右されない行動をとっている。戦国期の道三・信長の頃でもこの様相の変化はない。

江戸時代、徳山氏は徳山の領地（約800石）が安堵されたのに加え、各務郡更木領（約4,300石）を新たに封ぜられ、5,000石の旗本となった。これに伴って、徳山の地には徳山陣屋が設けられ、大政奉還に至るまで代官と在地の庄屋によりその統治が行われている。なお、西谷に関する最古の記録として、「戸入」の六社神社に寛文5（1665）年の造立をしるす棟札がある。

江戸時代初期の古文書に現われる徳山氏領の村名として、徳山の「徳山（本郷）」「山手」「榎原」「塚」「池田（上開田）」「漆原・志津原（下開田）」「戸入」「門入」の8ヶ村と根尾の「能郷」の名が記録されている。このうち「下開田」に関しては、慶長14（1609）年の石見検地に関する記録が最古である。

（鈴木 昇）

第2章 調査の目的と方法

第1節 発掘調査に至るまでの経過

徳山ダム建設は、昭和32年電源開発株式会社が発電を主目的に建設計画を発表した。その後、伊勢湾台風をはじめとして相次ぐ下流域の大出水により、昭和41年度からは、建設省が引き継いで調査を行ってきた。昭和48年 3月木曾川水系の水資源開発基本計画の変更により、水資源開発公団が事業を実施することになった。

ダムは、流水の正常な機能の維持、水道用水及び工業用水の供給、並びに発電を目的として建設する多目的ダムで、ロックフィル形式である。貯水容量は6億6000万 m^3 、堤高は161 m である。このダム建設により、洪水満水位水没線は海拔401 m となり、旧徳山村のほぼ全戸が水没・離村する(門入地区だけが水没からまぬがれる)こととなった。当然埋蔵文化財のほとんどが湖底に沈むことになる。

このため、昭和58年10月12日に、水資源開発公団徳山ダム建設所長より遺跡の分布調査の依頼があった。これを受けて岐阜県教育委員会は、昭和59年10月2日から11月17日にかけて、文化庁の昭和59年度国庫補助事業として分布調査を実施した。昭和60年3月にはこの調査に基づき、「揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書」を発刊した。

さらに、昭和60年5月9日、水資源開発公団徳山ダム建設所において、徳山ダム水没地内埋蔵文化財発掘調査計画のための打ち合せを行った。昭和60年夏から秋にかけて発掘調査計画策定のために、岐阜県文化財保護審議会委員(当時信州大学教授、現在愛知学院大学教授)の大参義一氏の指導のもとに、数回の現地調査を実施した。以上の調査結果に基づき、昭和61年3月17日、徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査計画書を水資源開発公団に提出した。

昭和61年4月7日、水資源開発公団から岐阜県に対し、昭和61年度の発掘調査の委託契約締結の依頼があり、これを受託した。岐阜県教育委員会は、昭和61年度の発掘調査を「はいづめ遺跡」2,007 m^2 の調査面積のうち600 m^2 に限定して実施した。徳山ダム建設に伴う水没地区内の埋蔵文化財の発掘調査は、昭和61年度から平成9年度までの長期にわたる発掘調査である。このため、昭和61年度の発掘調査は、協定書締結のための資料を得る意味も合せ持っていた(協定書締結のための試行的発掘調査)。

昭和62年3月27日、計画書の一部手直しを行い、水資源開発公団と岐阜県の間で「徳山ダム建設事業に伴う水没地区埋蔵文化財発掘調査に関する協定」を締結した。

岐阜県教育委員会は、この協定書に基づき、昭和62年度から発掘調査を実施することになった。昭和62年度は、前年度に引き続き、「はいづめ遺跡」1,407 m^2 ・「小の原遺跡」1,500 m^2 、合計2,907 m^2 の発掘調査を受託した。しかし、「はいづめ遺跡」の範囲が当初の発掘予定面積

(1,407㎡)よりも、さらに拡大(1,952㎡)することが判明した。このため「小の原遺跡」は 980㎡しか発掘調査ができなかった。しかし、この調査は「小の原遺跡」の遺跡範囲の確定を主としたため、この結果当初の発掘調査面積(1,527㎡)より拡大することが判った。

昭和63年度は、協定書に基づき「小の原遺跡」1,308㎡、「戸入村平遺跡」2,000㎡、合計3,308㎡の発掘調査を受託した。しかし、調査の過程で「小の原遺跡」は、3時期2生活面があることが判明した。そのため当初の発掘予定面積よりもさらに拡大(2,528㎡)することとなった。このため「戸入村平遺跡」は800㎡しか調査できなかった。「小の原遺跡」は、昭和62・63年度合わせて3,508㎡を発掘調査した。

平成元年度は、協定書に基づき「戸入村平遺跡」1,200㎡、「戸入障子暮遺跡」20㎡、「追分遺跡」1,560㎡、合計2,780㎡の発掘調査を受託した。しかし、調査の過程で「戸入村平遺跡」は、当初の発掘予定面積(1,200㎡)よりもさらに拡大(1,505㎡)することとなった。この結果「戸入村平遺跡」は、昭和63年度と平成元年度合わせて2,305㎡発掘調査した。また「戸入障子暮遺跡」も当初の発掘予定面積(20㎡)より拡大(61㎡)することとなった。このため、「追分遺跡」は遺跡範囲の確認を主目的として1,214㎡発掘調査し、残りの面積を次年度に発掘調査することになった。

平成2年度からは、協定書に基づく調査面積の増大に対して調査班を2班にした。このため、「追分遺跡」626㎡、「いんべ遺跡B・C地点」660㎡、「塚遺跡」1,494㎡、「下開田村平遺跡」1,327㎡、「磯谷口遺跡」600㎡、「上原遺跡」858㎡、合計5,565㎡の発掘調査を受託した。したがって、「追分遺跡」は平成元・2年度合わせて1,560㎡を発掘調査した。「いんべ遺跡B・C地点」は、当初発掘予定面積(660㎡)より拡大する(1,858㎡)ことになった。ただし、「いんべ遺跡A地点」は未買収のため平成4年度に発掘調査する予定である。「塚遺跡」は当初1,494㎡発掘調査する予定であったが、296㎡しか発掘調査できなかったため、遺跡範囲の確認調査を実施した。また、「下開田村平遺跡」は当初国道より山側地点を遺跡範囲と考えていたが、調査の結果、国道より川側に遺跡が分布することが判明したため、当初発掘予定面積(1,327㎡)より拡大する(1,688㎡)ことになった。「磯谷口遺跡」は予定どおり600㎡を発掘調査した。したがって「上原遺跡」は当初858㎡発掘調査する予定であったが、497㎡しか発掘調査できなかった。

第2節 追分遺跡の発掘調査

発掘調査前の状況 「追分遺跡」は、揖斐川本流と西谷川の合流点から約500m上流の西谷川左岸の河岸段丘上に所在する。この河岸段丘は、東西約200m・南北約50mの広さを持つ低・中・高位段丘からなり、本遺跡は中位段丘を中心に分布する。これらの段丘は、水田に開田さ

れ、低位段丘と中位段丘の比高差は約 0.8m、中位段丘と高位段丘の比高差は約 1.5mである。この中位段丘面から石鍬が1点採集され、県教委の分布調査時でもチップが2点採集されただけである。これらの水田は、買取後放置され身の丈以上の茅におおわれていた。

グリッドの設定 本遺跡では、当初の予想遺跡範囲から、磁北に合わせて基線を設定し、グリッドの単位は、一辺を4mとした。

遺跡は当初の範囲より拡大することを想定し、当初の範囲地点をA地区、その北東地区をB地区とした。これら両地区のさらに北東地区をC地区とし試掘調査を実施した。A・B地区にはグリッドを設定し、南西端を基点に、北方向へA～W、東方向へ1～29へと順次番号を付した。試掘調査を実施したC地区のトレンチはA～Jの記号を付した。(宇野治幸)

平成元年度の発掘調査の経過 平成元年度の本遺跡の現地での発掘調査は、8月17日から開始し、12月15日に終了した。発掘調査面積は、当初 1,280㎡を予定していたが、934㎡に縮小した。これは、「戸入村平遺跡」の範囲が、当初の発掘予定面積(2,000㎡)よりもさらに拡大(2,305㎡)することが判明したからである。そこで、本年度は石鍬1点採集された地点周辺の確認と遺物包含層や遺構面(地山面)までの深さの確認を主目的に、グリッドを千鳥掘りで掘削し調査を実施した。



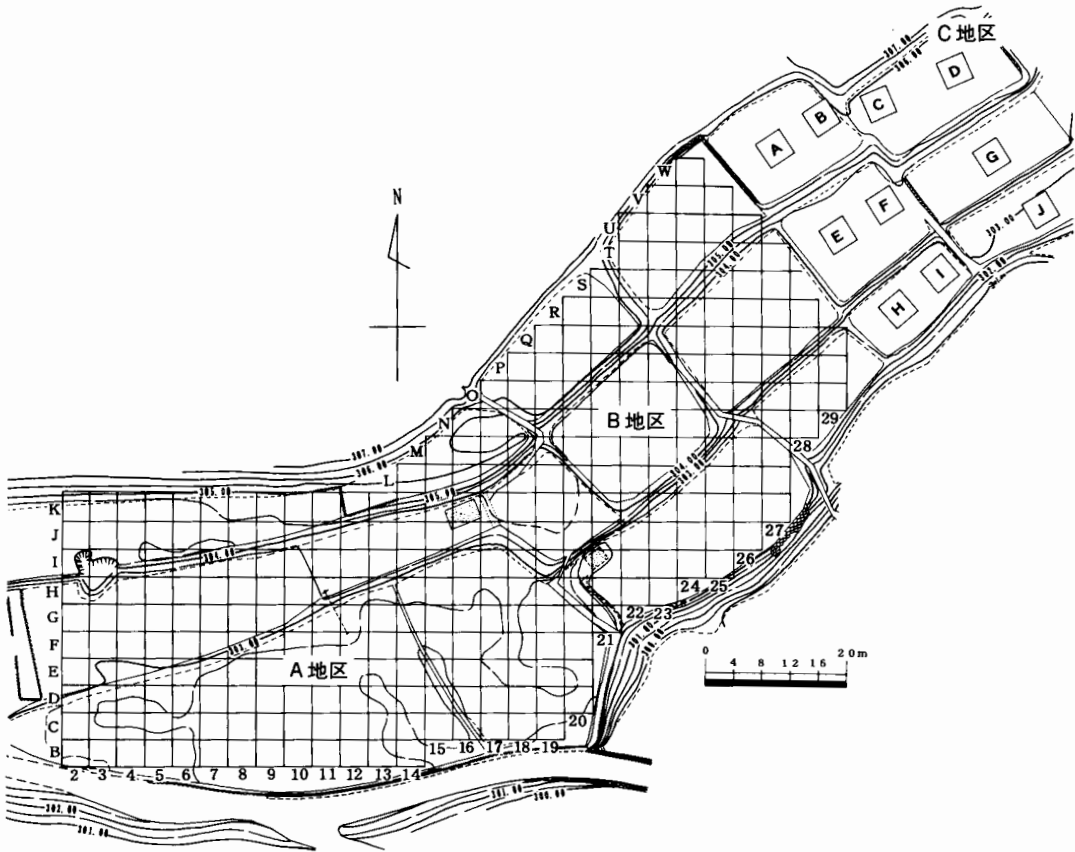
第4図 追分遺跡地形図

第1・2週(8.17~9.8) 遺跡の除草作業とグリッド設定作業を実施した。水田面には身の丈以上の茅が繁茂しており、除草作業は困難を要した。「戸入村平遺跡」の発掘作業と並行して進めた。

第3・4週(9.11~9.22) 層位を調べるため7列グリッドを中心に掘削を行う。低位段丘の水田は第I層(表土)のみで、地表面から約0.25mで地山面が確認された。出土遺物はほとんど無く、打製石斧・縄文後期の土器片を少し検出しただけである。雨天のため、4日間作業中止。

第5週(9.25~9.29) 中・高位段丘を中心にグリッドを千鳥掘りで行う。高位段丘は山に隣接しているため、山からの流入土(崖錐土)が多く、約1.5m程の堆積が確認された。したがって、地表面から地山までの深さは2m以上である。雨天のため、1日作業中止。

第6週(10.2~10.6) 第5週末からB地区の千鳥掘りを開始する。遺物は打製石斧を中心に若干数出土するだけである。C地区にトレンチを入れて試掘をしたが、地表面から約3m以上掘っても地山がでず崖錐堆積物におおわれている。



第5図 追分遺跡グリッド設定図

第7週(10.23~10.27) C地区の試掘を継続したが、第6週と同様であった。

第8週(12.13~12.15) 調査員のみ現地に上がり、地形測量を行う。12月15日をもって本年度の追分遺跡の現地調査を終了し、資料整理にあたる。

平成2年度の発掘調査の経過 平成2年度の本遺跡の現地での発掘調査は、4月19日の鍬入れ式を以て開始し、6月22日に終了した。前述のように前年度の発掘調査面積減に伴い、今年度の当初発掘調査予定面積は620㎡である。今年度は、前年度の発掘調査区のA地区を中心に発掘調査した。この結果、平成元・2年度の発掘調査面積の合計は1,560㎡である。グリッドは前年度に設定したものを使った。グリッドの基軸は磁北である。

第1~4週(4.19~5.11) 4月19日の鍬入れ式を以て発掘調査を開始した。前年度調査済のグリッドの清掃作業・除草作業から始める。2~6列にかけて千鳥掘りを実施した結果、打製石斧を中心に遺物を検出した。雨天・祝日・会議などのため8日ほど作業ができなかった。

第5~7週(5.14~6.1) 昨年度の調査結果に基づき、少量ながら土器片がまとまって出土したE~I列を中心にグリッドを広げて掘削した。打製石斧などが若干出土しただけで、遺構は確認できなかった。雨天のため2日作業中止。

第8~10週(6.4~6.22) 5~7・E~G列のグリッド掘削と畦畔除去作業を実施した。7・14・G列のセクション図の作成完了。この結果、追分遺跡の基本的層位は、第I層表土、第II層暗褐色土(崖錐土)、第III層黒褐色土、第IV層地山であり、第II・III層が遺物包含層であることがわかった。遺構の検出はできなかった。6月22日「追分遺跡」の現地調査を終了し、「いんべ遺跡B・C地点」の現地調査に移行した。(鈴木 昇)

第3節 下開田村平遺跡の発掘調査

発掘調査前の状況 「下開田村平遺跡」は、揖斐川本流の右岸段丘に立地する。本遺跡が立地する段丘は、旧徳山村の集落のなかで最下流部に位置する下開田集落が所在していたところである。この河岸段丘は、東西約200m、南北約300mの広さを持つ。本遺跡の既出土遺物は石器類のみで土器類の発見例は報告されていない。県教委の分布調査においても春日神社東側の畑地からチップの採集例のみ報告されていた。そのため段丘中央西側、国道417号より山側の畑地や水田を遺跡の範囲と報告されていた(第1地区)。その後、民家の移転時にゴミ穴を掘ったところ土器や石器類が採集され、この地点に遺跡が所在することが判明した(第2地区)。したがって、当初は第1地区の1,327㎡の面積を予定していたが、第2地区が判明したため、発掘調査面積は1,688㎡に拡大した。

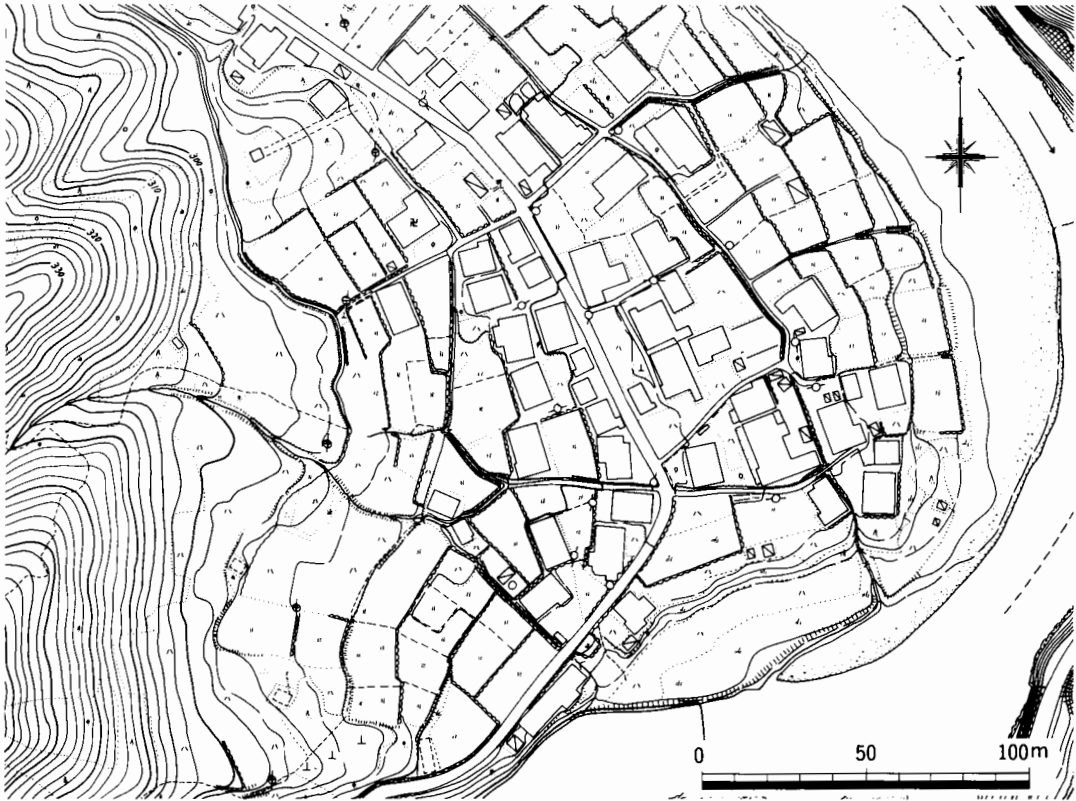
調査区の設定 本遺跡では、磁北に合わせて基線を設定し、グリッド単位は一辺4mにした。当初第1地区だけを考えていたため、地区の南西端を基点に東へA～Z、北へ1～20としたが、第2地区の判明により東方向のZの続きはA'～O'に、南方向の1の続きは50～46とした。

第2地区は移転前住宅が密集していたため、建物基礎などが多く残り、調査が制限を受けた。このため、調査可能な地点を中心にA～C地区を調査した。 (只腰正知)

発掘調査の経過 本遺跡の発掘調査は、4月19日の鍬入れ式をもって開始し、現地での調査は10月9日に終了した。

第1～2週(4,19～4,28) 第1地区の北西部のグリッドから掘削を開始した。3・H区は土層を見るために深く掘り下げる。その結果、表土より褐色土、黄色粘質土とつづき、その下から黒色土が出始めることがわかった。遺物はチップが1点出土したのみであった。

第3～4週(5,1～5,11) 先週の続きのグリッドを行う。また北東部のM列にトレンチ状にトレンチを設定し掘削する。遺物は土器片が数点、石錘1点とわずかであった。一方、第1地区より国道417号線をはさんだ東側のゴミ捨て穴の壁面に、遺物包含層があることが確認された。



第6図 下開田村平遺跡地形図

第5～6週(5,14～5,26) 先週までの結果を受けて道路東側を3ヵ所試掘する。その結果上部の攪乱された黒色土層より土器片、フレイク等が出土した。そこでこの地区も遺跡に含まれていると考え、第2地区として新しくグリッドを設定する。この地区は河岸段丘になっており、下位段丘面をA地区、上位段丘面の南側をB地区、北側をC地区とする。A地区とB・C地区との段丘面の高さの差は約1mである。まずB地区の3列とI'列にトレンチ状にグリッドをいれる。どのグリッドとも黒褐色土層に攪乱がみられ、土器片が数点検出された。地山まで掘り下げると、30～50cmで達した。掘削するグリッドの範囲を広げると、1・C'区、2・C'区、2・F'区、4・D'区から多数の土器片や石錘、敲石が検出された。また、2・E'区からは、住居跡とみられる遺構を検出した。

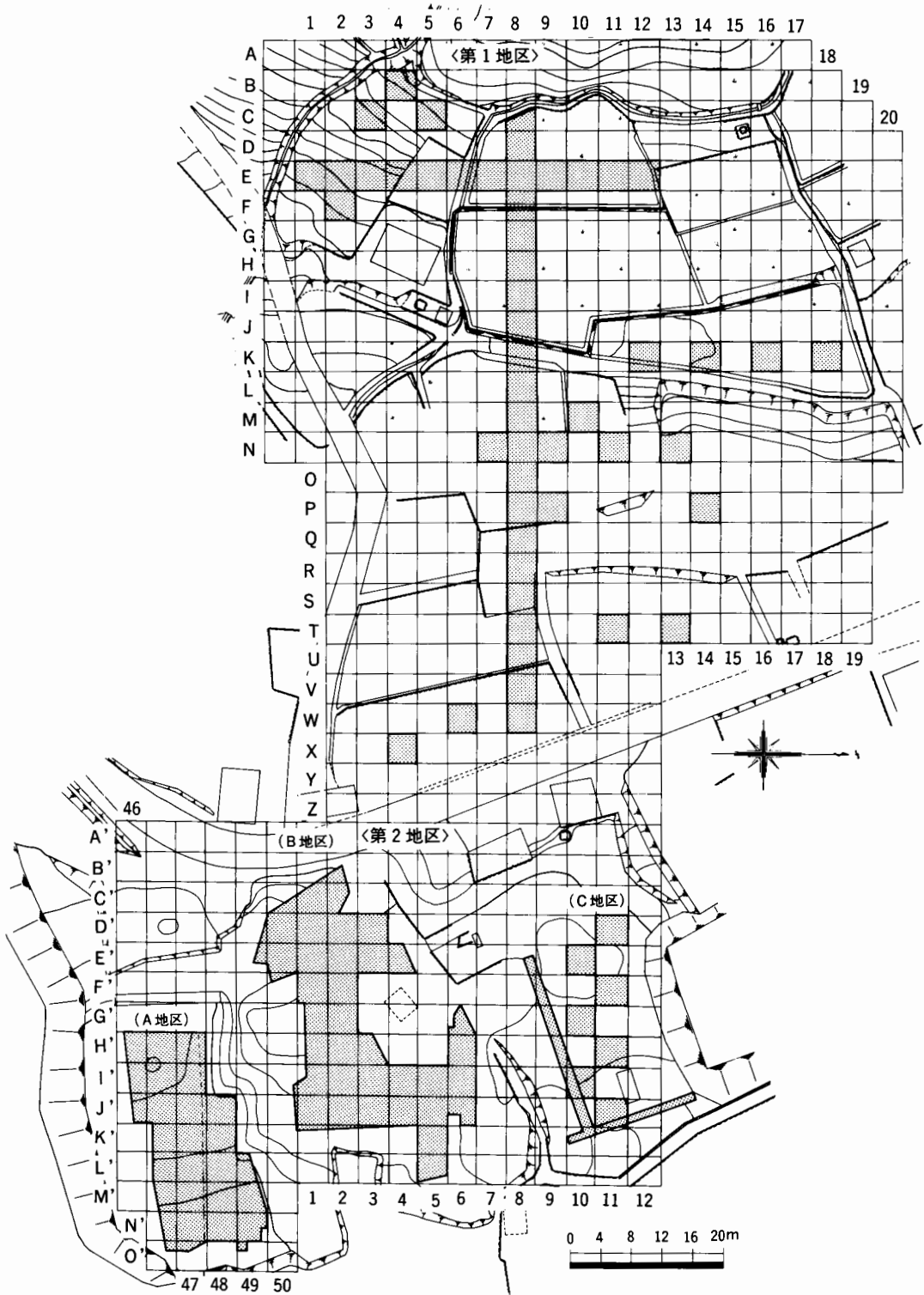
第7～8週(5,27～6,8) 先週に引き続きB地区のグリッドの掘削を行うのと並行して、A地区の調査を開始する。また第2地区の遺跡の範囲と土層を調べるために3ヵ所にトレンチを掘る。第1地区では重機により10列とF'列にトレンチをいれてセクションを実測する。A地区で48・I'～J'区、49・J'区にかけてと49・N'区に配石や掘り込みが検出された。このA地区では黄褐色砂層の上下に遺物包含層が確認され、上の層がB・C地区の遺跡包含層と対応することが考えられた。さらに6月7日には49・K'区の下に包含層から縄文早期のものと思われる押型文の土器片が検出された。そのため下層は上層よりも古い時代の包含層であることがわかった。早速49・K'区を全面発掘し、層位を観察する。その結果、黒褐色土下位層の下には地山があることがわかった。

第9～10週(6,11～6,22) A地区とB地区の調査を並行して続ける。両地区ともに多数の土器片、石錘、フレイク、打製石斧、敲石などが検出された。また50・K'区より集石炉跡を検出した。47・H'～I'区のピット、土壌の平面図の実測を行う。B地区の畦畔をはずし、黒褐色土層へむけてのトレンチ入れを行う。黒褐色土下層から検出される遺物については、番号をつけてとりあげる。

第11～12週(6,25～7,6) 梅雨のため雨天の日が多く、6日間しか作業できなかった。A・B地区の発掘を継続する。A地区で、床面検出作業をおこなう。47、48・L'区、47・M'区で集石炉跡を検出。また、47・L'区、49・I'区より集石遺構を検出した。47、48・L'区、47、48・M'区の遺物分布微細図を作成する。

第13～14週(7,9～7,20) この週は雨天により作業ができなかった日は1日だけであった。連日暑い日が続き、作業員に疲労の色がみられ欠席が目立った。引き続きA・B地区のグリッド掘削と、B地区の床面検出、ピット掘りを行う。両地区とも土器が多数出土し、2・D'区からは石刀が出土した。さらに2・D'区より1号住居跡を検出したが、攪乱が多くプランも不明確である。

第15～17週(7,23～8,9) 新しくC地区のグリッドの掘削に入る。A・B地区は床面検出



第7図 下開田村平遺跡グリッド設定図

と平面実測図作成を行う。49列とK'列のセクション図を作成し、その後畦畔はずしにかかる。49列の畦より磨製石斧が出土する。

第18～19週（8,13～8,24） 8月13日より16日までお盆休み。先週からの続きでC地区の掘削を行う。A地区では、床面検出と集石遺構の実測、礫や遺物の取り上げを行う。

第20～35週（8,27～12,14） この週より作業員は磯谷口遺跡の調査を行い、調査員だけで下開田村平遺跡の調査を続ける。1～3号集石遺構の検出、実測と遺物と礫の取り上げを行う。第23～24週にかけては台風19号の影響により2日間しか作業できず、グリッドの壁面が崩壊したためその復旧作業を作業員で行う。10月4日に復旧し全体写真を撮影する。そして12月14日に現地調査を終了した。この後は、報告書作成のための整理作業を行った。（千藤克彦）

第3章 追分遺跡の遺構・遺物

第1節 基本的層序と遺構

1. 基本的層序

「追分遺跡」が立地する段丘は、揖斐川支流の西谷川の左岸に位置し、揖斐川と西谷川の合流点より約 500m程遡った地点である。この段丘(海拔約 304m前後)のA・B地区は、古くから開墾されていたと思われるが、現在のような水田に改田されたのは、明治時代以降と考えられる。この改田時に傾斜地の上部を削平し、上・中・下段の三段の水田が形成された。

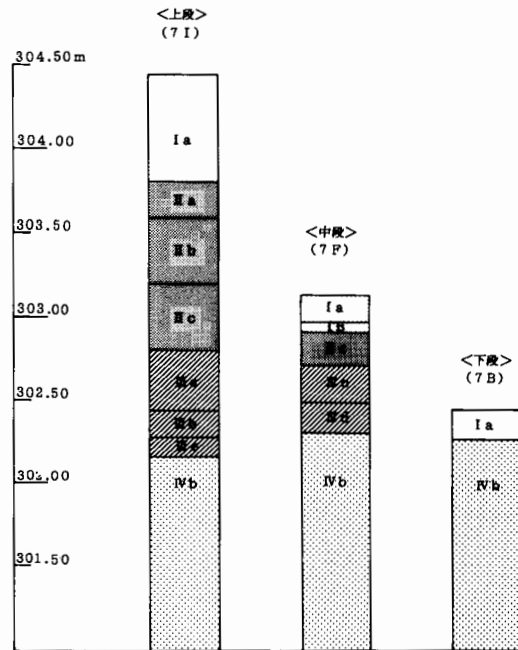
本遺跡の段丘の形成から層位を巨視的に見ると、西端では岩盤が基盤となるが、A・B地区では西谷川の堆積による円礫の砂礫層・沖積性堆積層から形成されている。地山は、この円礫の黄色砂礫層と堆積性ローム層から成り立っている。また、地山や暗褐色土の形成後背後の山地からの角礫混じりの流入土(崖錐堆積物)の堆積がみられる。A・B地区の山際の上段部では、この堆積物の厚さが約 1 m以上である。C地区では背後の山地に小さな谷があり、そこからの角礫混じりの流入土の堆積が厚く、約 3 m以上掘り下げても地山を検出することができなかった程である。

本遺跡は、改田時に地山まで削平された部分もあるが、地山の上部は基本的には第8図のように3つの層位に分けることができる。上部から第I層(表土・耕作土など)、第II層(黒褐色土層:角礫混じりの崖錐堆積物)、第III層(暗褐色土層)である。

第I層 表土や耕作土等がこれにあたる。

I a層:表土や耕作土等。水田に利用されていた耕作土は締まりが良くやや粘質的な褐色土である。

I b層:耕作土の下にある水漏れを防ぐための敷土層である。地山の黄褐色粘質土と黒色土などを混ぜて叩き締めで作られた層で、5~10cm程の薄い層である。水田では、常に水が滞水していたため、鉄分やマンガン分が層中に沈殿・堆積し、非常に堅く赤茶けている。



第8図 追分遺跡A地区土層柱状図

I c 層：礫溜まり

第II層 角礫を多く含む黒褐色土を本層とする。この層は、背後の山地からの崖錐堆積物である。3層に分けることができる。この層はA・B地区の上段では1m以上、中段でも約0.5m程堆積している。下段ではほとんど見られない。改田時に削平されたためかも知れない。

II a 層：径5～20cm大の角礫を多く含む黒褐色土を本層とする。

II b 層：径5～10cm大の角礫を多く含む黒褐色土を本層とする。

II c 層：径1～5cm大の角礫を多く含む暗褐色土を本層とする。打製石斧などの石器類や須恵器などの包含層である。

第III層 暗褐色土を本層とする。地山の上部の土層で、やや粘質である。角礫をあまり多く含まない。縄文時代の遺物の包含層である。

III a 層：II層より角礫をあまり多く含まない明黒褐色土。

III b 層：径2～10cm大の角礫を含む暗茶褐色土。

III c 層：径2～3cm大の角礫を多く含む暗茶褐色土。

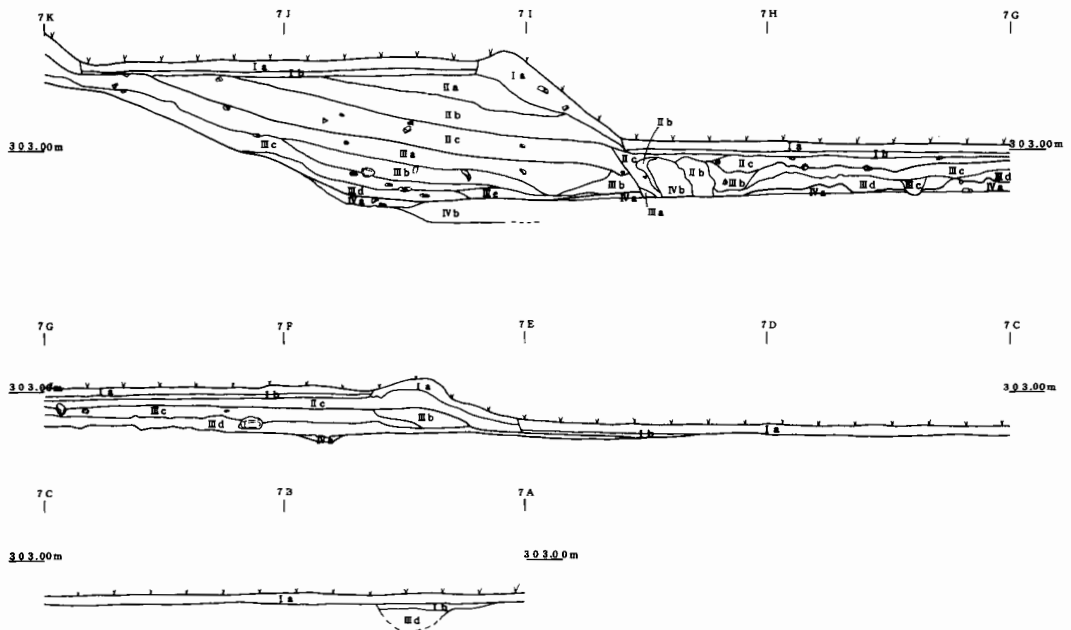
III d 層：径3～10cm大の角礫を多く含む明茶褐色土。

III e 層：角礫をあまり含まない暗茶褐色土（シルト質）。

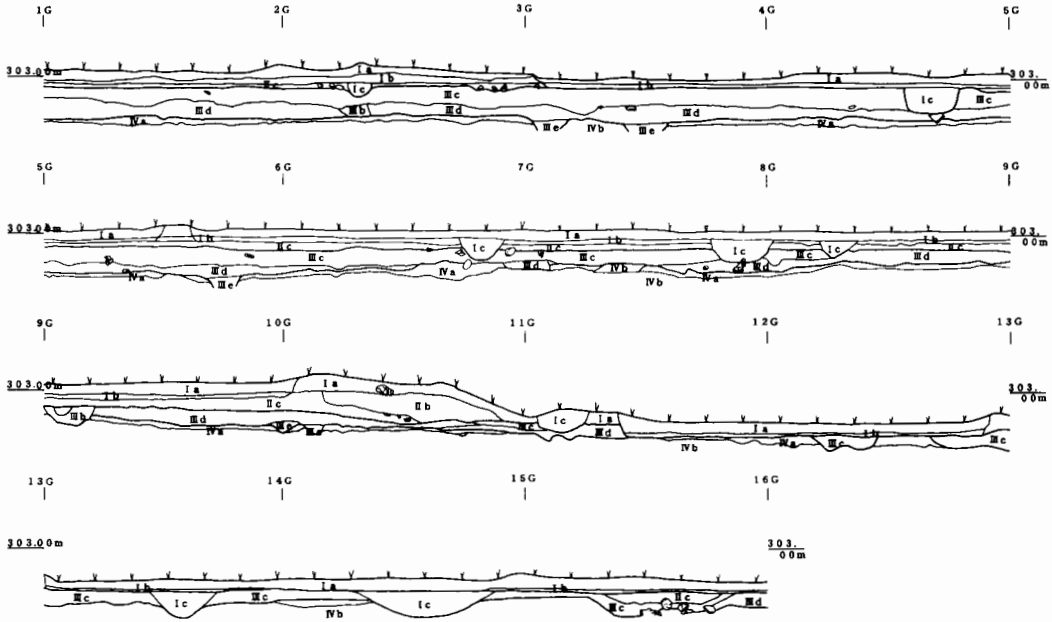
第IV層 地山の層である。

IV a 層：暗黄褐色粘質土。

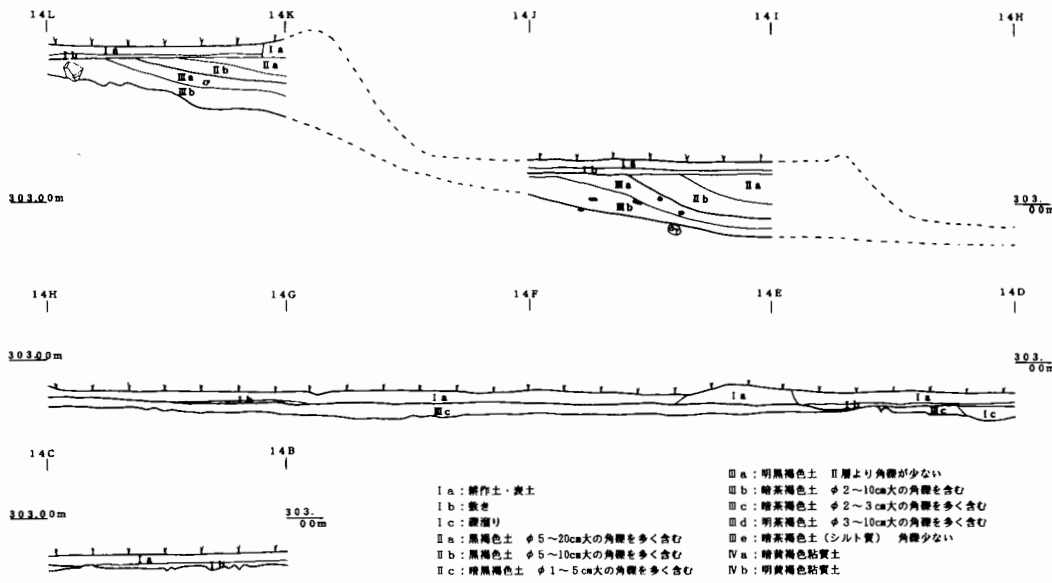
IV b 層：明黄褐色粘質土。



第9図 追分遺跡7列土層図



第10図 追分遺跡 G列土層図



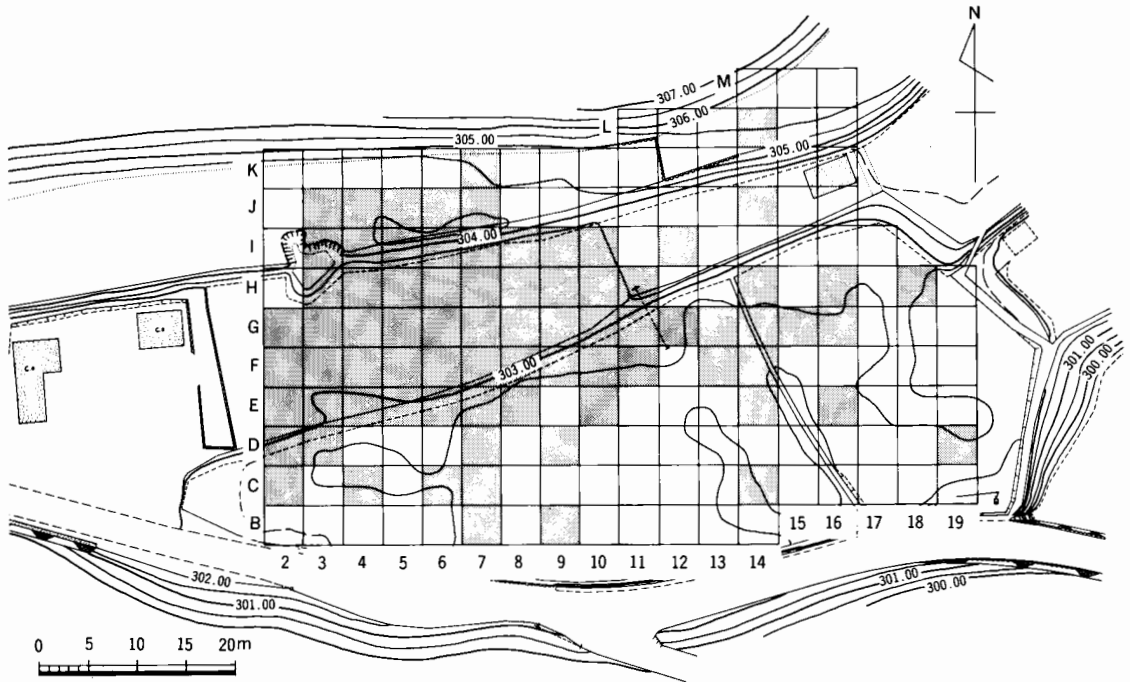
第11図 追分遺跡14列土層図

2. 遺 構

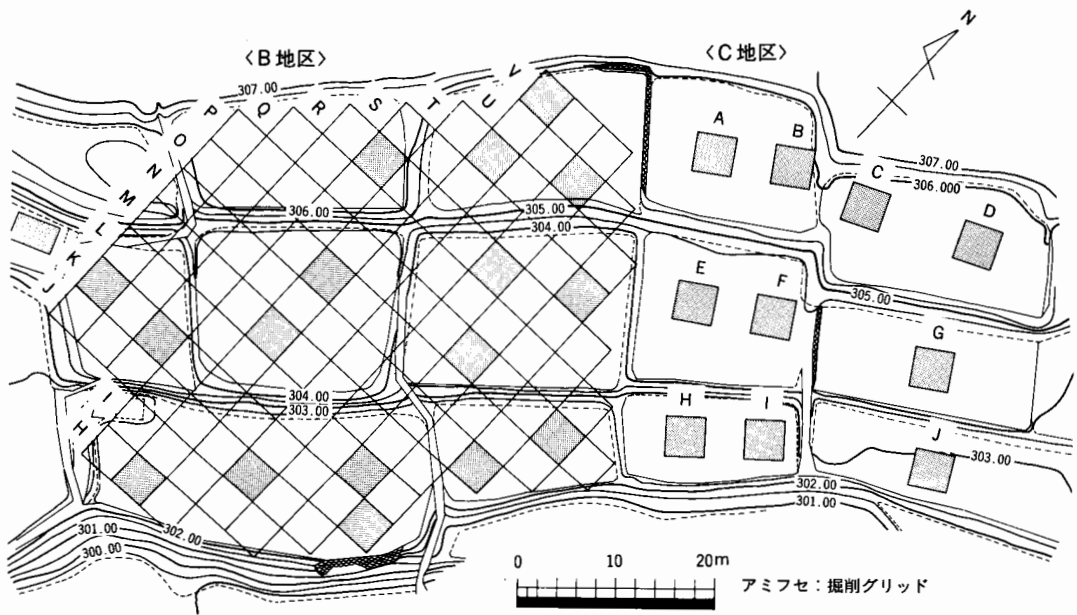
追分遺跡では、第12・13図で示したグリッドを地山まで掘削したが、第II・III層から縄文時代の遺物等を検出しただけで、この時期だけでなく他の時期の遺構の検出もできなかった。ピットや土壇も全く検出できなかった。

(宇野治幸)

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| I a : 耕作土・表土 | II a : 明褐色土 φ5~20cm大の角礫を多く含む |
| I b : 敷き | II b : 暗褐色土 φ5~10cm大の角礫を多く含む |
| I c : 露溜り | II c : 暗褐色土 φ1~5cm大の角礫を多く含む |
| III a : 暗褐色土 II層より角礫が少ない | III a : 暗褐色土 φ2~10cm大の角礫を含む |
| III b : 暗褐色土 φ2~3cm大の角礫を多く含む | III b : 暗褐色土 φ2~3cm大の角礫を多く含む |
| III c : 明褐色土 φ3~10cm大の角礫を多く含む | III c : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| III d : 暗褐色土 φ3~10cm大の角礫を多く含む | III d : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| III e : 暗褐色土 φ3~10cm大の角礫を多く含む | III e : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| IV a : 暗褐色土 φ1~5cm大の角礫を多く含む | IV a : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| IV b : 暗褐色土 φ1~5cm大の角礫を多く含む | IV b : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| V a : 暗褐色土 φ1~5cm大の角礫を多く含む | V a : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| V b : 暗褐色土 φ1~5cm大の角礫を多く含む | V b : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| V c : 暗褐色土 φ1~5cm大の角礫を多く含む | V c : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| V d : 暗褐色土 φ1~5cm大の角礫を多く含む | V d : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| V e : 暗褐色土 φ1~5cm大の角礫を多く含む | V e : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |
| V g : 暗褐色土 φ1~5cm大の角礫を多く含む | V g : 暗褐色土 (シルト質) 角礫少ない |



第12図 追分遺跡 A 地区 < A 地区 >



第13図 追分遺跡 B・C 地区

第2節 土器類・その他の遺物

1. 縄文土器 [第14図 1～36]

追分遺跡からは、何れも少量かつ細片ではあるが、縄文時代早期・後期・晩期の土器が出土している。早期・後期・晩期の土器に分類し、その中ではあえて分類項目を立てずに順に記述していく。

① 早期の土器（I群土器）[1～6]

早期の土器と考えられるものは6点ある。1は押型文土器である。外面の風化が著しく、詳細は解らないが、角度のゆるい山形文が縦位に施されていると思われる。2は口縁部である。外面には断面V字形の斜方向の沈線が見られる。焼成は良好。「上ノ山式」に比定されるか。3～6は胴部の小片である。胎土中に繊維を大量に含むことから早期のものだと判断した。

② 後期の土器（II群土器）[7～16]

後期の土器と考えたものは10点で、うち3点は同一個体のものである。7～11は磨消縄文を持つものである。7～9は同一個体。7は口縁部で、平口縁かあるいはわずかな波状を呈するものかもしれない。端部は丸くおさめる。縄文はLR。胎土中に雲母を含む。10も口縁部である。磨耗が著しい。口縁部はわずかに内湾し、端部はやや平坦な面をつくる。11は胴部の破片である。2条の太い沈線が見られる。

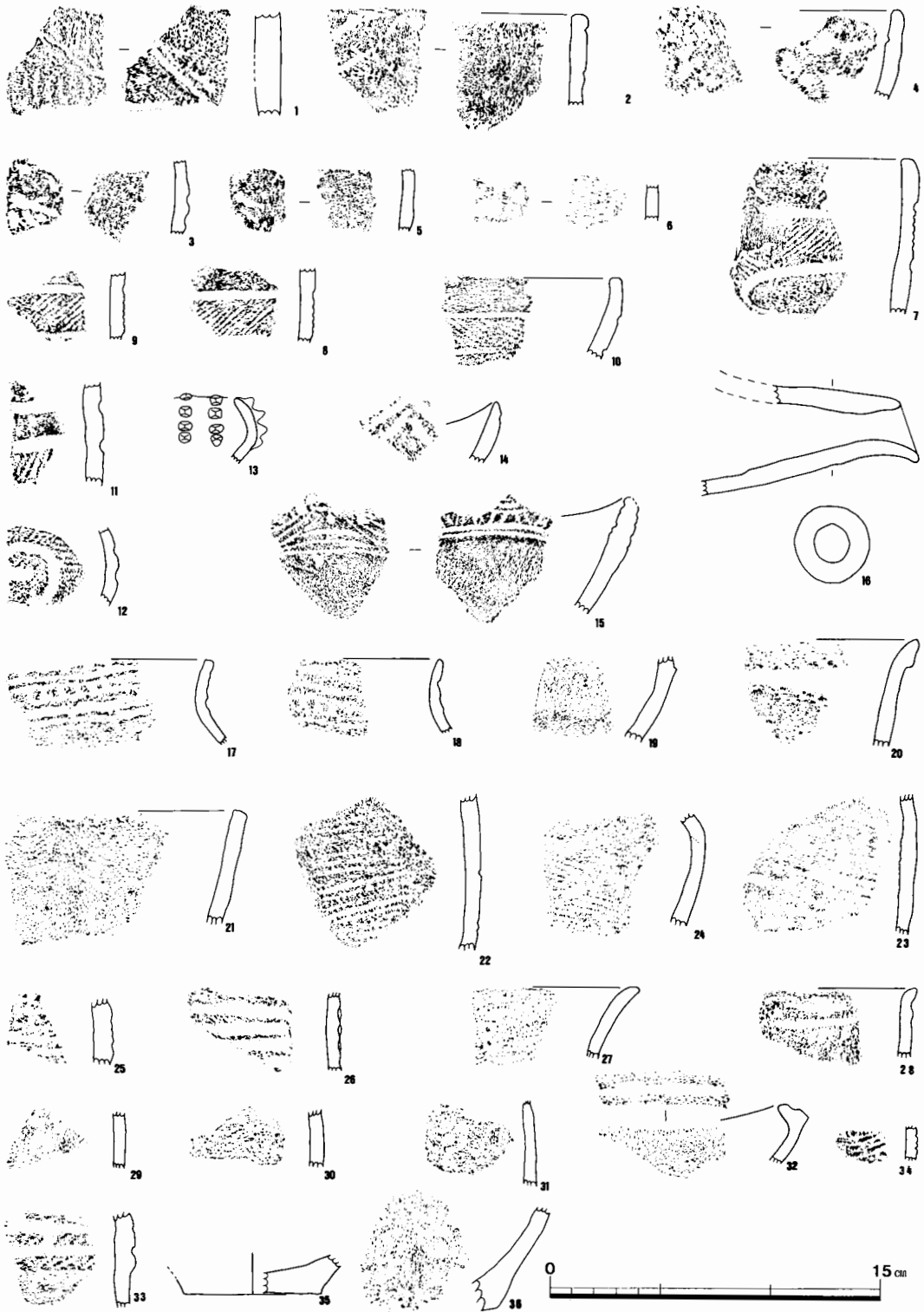
12は渦文である。沈線を施した後に縄文を付ける。13は口縁部である。内湾する口縁部の外面には上下に4個並んだ突起が2列見られる。黒褐色を呈し、焼成はもろい。14は波状口縁の波頂部である。2条の沈線が施される。15は口縁部に近い部位であろう。内外面とも同一の原体による細い沈線で文様を描いている。堅い焼成である。16は注口である。注口部先端をわずかに下方に屈曲させている。内面に粘土の継目を明瞭に残す。焼成はもろい。

③ 晩期の土器（III群土器）[17～36]

17～22の6点は、条痕調整の粗製深鉢である。17は口縁部。口縁部直下は波状に条痕を付ける。端部はわずかに平坦な面を持つ。焼成もろい。18は粗い条痕をもち、内面には炭化物が付着する。19は内面にも条痕が付けられている。内面には炭化物が付着する。20は外面には粗い条痕、内面は粘土接合部を中心に指頭による圧痕、ナデが施される。深鉢とするにはやや屈曲が変ではある。21は、条痕がきわめて粗く、胎土にも砂粒を多く含む。

23～25は同一個体と考えられ、内外面共にナデ調整する薄手の土器である。晩期の土器であると判断した。

26・27も同一個体である。口縁端部から頸部までを圧痕あるいは刺突文と横方向の沈線で飾



第14図 包含層出土縄文土器

る浅鉢形の土器である。内面は丁寧に研磨している。北陸系の晩期中葉の土器と見ることができ
る。

28は口縁部に、圧痕のある凸帯を貼付けたものである。口縁端部は外反しながら薄くなって
終る。磨耗が著しく、押圧の原体などは不明。

29・30は共に口縁部である。端部はわずかに外反しながら薄くなって終る。28は器面の風化
が進んでいるが、2条の沈線が巡っていることが観察できる。

31は口縁部を内側に屈折させ、そこに断面U字形の沈線を1条施すものである。波状の口縁
が復元できる。

32は胴部であり、2条の隆帯が貼付けられているが、1条は途中で途切れている。33は、胴
部片で外面には沈線が見られる。内面は条痕調整されている。34は楠描文であろうか。

35・36は底部である。35はしっかりした平底、36は小さな平底をなすと思われる。

(村木 誠)

第4表 縄文土器観察表

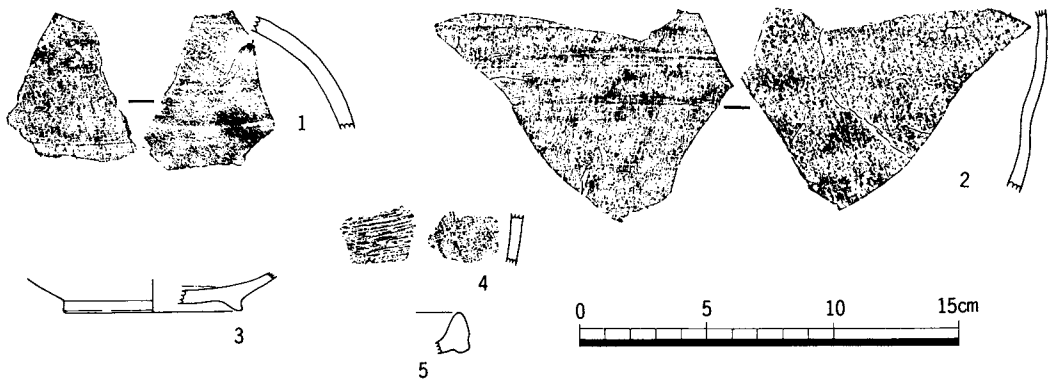
No	グリッド	層	No.	器種	遺存度	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考	挿図	図版
1	22H	II	01	深鉢	胴部片		ナデか?	1~5mm砂粒多い	普通	赤褐色		12	
2	7H	II	02	"	口縁部片	ナデ	ナデ	1~5mm砂粒多い	堅緻	じい赤褐色		12	
3	9I	III	01	"	胴部片	"	"	繊維多く含む	"	褐色		12	
4	5G	III	02	"	"	"	"	"	"	黄褐色		12	
5	9I	III	04	"	"	"	"	"	"	じい黄褐色		12	
6	10H		"	"	"	"	"	"	"	黄褐色		12	
7	3F	III	02	"	口縁部片	"	"	1mmの砂粒多く粗い	"	橙色	縄文L, 8・9と同一個体	12	
8	3F	III	03	"	胴部片	"	"	1mmの砂粒雲母片有り	"	じい 橙色	縄文L, 7・9と同一個体	12	
9	3F	III	04	"	"	"	"	"	"	"	縄文L, 7・8と同一個体	12	
10	4I	III	01	"	口縁部片	ナデか?	ナデか?	2mmの砂粒多く粗い	やもろい	橙色	磨耗著しい	12	
11	5G	E	01	"	胴部片	ナデ	ナデ	3・4mmの砂粒多い	普通	浅黄褐色		12	
12	26L	III	01	"	"	縄文	"	1mmの砂粒多い	"	"		12	
13	4H	II	01	"	口縁部片	ナデか?	ナデか?	1mm以下の砂粒多い	やもろい	黒褐色		12	
14	7H	I	12	"	胴部片	"	"	5mmの砂粒有り	"	褐色		12	
15	9G	III	01	浅鉢	"	ナデ	ナデ	精良	堅緻	じい 橙色		12	
16	5J	II	01	注口土器	注口部	"	ナデ(注)	1mm以下砂粒多雲母有	やもろい	黄褐色		12	
17	6H	III	01	浅鉢	口縁部片	"	ミガキ	1mmの砂粒多い	普通	灰褐色	18と同一個体	12	
18	6H	II	01	"	"	"	"	"	やもろい	じい 橙色	17と同一個体	12	
19	7I	III	01	"	胴部片	"	条痕	1mm以下の砂粒有り	良好	じい赤褐色		12	
20	3F	III	05	深鉢	口縁部片	条痕	ナデ	2~5mmの砂粒含み粗い	普通	橙色	磨耗著しい	12	
21	8G	II	01	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	やもろい	じい 橙色		12	
22	2F	II	01	"	胴部片	"	"	1mm以下の砂粒含む	普通	"		12	
23	8G	II	06	"	"	"	条痕	0.5mmの砂粒有り	堅緻	浅黄褐色		12	
24	3J	III	01	"	"	"	ナデ	1mmの砂粒有り	普通	じい 橙色		12	
25	AIV	IV	01	"	"	不明	不明	2mm大の砂粒含む	"	灰白色		12	
26	14G	II	01	"	"	ナデ	ナデ	1mm大の砂粒多く粗い	もろい	じい 褐色		12	
27	8F	A	01	"	"	"	"	3~5mmの砂粒多く粗い	普通	じい黄褐色		12	
28	5J	II	06	"	"	ナデか?	ナデか?	1~5mm砂粒多く粗い	もろい	黄褐色		12	
29	8G	II	04	"	"	ナデ	ナデ	1~5mm大の砂粒含む	普通	赤褐色	30・31と同一個体	12	
30	8G	II	05	"	"	"	"	"	"	じい赤褐色	29・31と同一個体	12	
31	9G	III	02	"	"	"	"	"	"	"	29・30と同一個体	12	
32	5H	II	02	浅鉢か?	口縁部片	"	"	1mm大の砂粒有り	"	橙色		12	
33	5H	II	04	深鉢	胴部片	"	"	1・2mmの砂粒含む	"	じい 褐色		12	
34	6C	II	03	"	"	"	"	0.5mm以下の砂粒有り	"	赤褐色		12	
35	JIV	II	01	"	底部片	"	"	2・3mmの砂粒含む	"	橙色		12	
36	7H	I	04	"	"	"	"	1mm大の砂粒多い	"	赤褐色		12	

2. その他の土器・陶器類 (第15図 1～5)

① 須恵器 (1～3)

本遺跡出土の須恵器は小破片ばかり5点である。このうち4点は壺類の破片で、1点は坏の破片である。図示したものは3点である。1は壺類の肩部の破片。外面はへラケズリ調整、内面はヨコナデ調整を施す。外面に自然釉がかかる。胎土は砂粒少なく密。焼成良好。色調は淡灰色。2は壺類の胴部の破片。外面へラケズリ調整、内面はヨコナデ調整を施す。胎土は長石などの砂粒多くやや密。色調は暗灰色。3は高台を有する坏の底部小破片。胎土は密。色調は灰白色。焼成良好。外面に自然釉がかかる。

これらの須恵器は、24J、27Sグリッドの第Ⅲ層(黒褐色土)中より出土。時期不明。



第15図 包含層出土その他の土器・陶器類

② 土師器 (4)

22Hグリッドから1点出土しているだけである。甕の小破片。外面にクシケズリ調整。砂粒多く、淡褐色。焼成良好。時期不明。

③ 中近世陶磁器 (5)

大窯期のものは1点だけである。5は播鉢の口縁部小破片。内外面に錆釉を施す。大窯2期、16世紀のものと考えられる。7Iグリッドより出土。

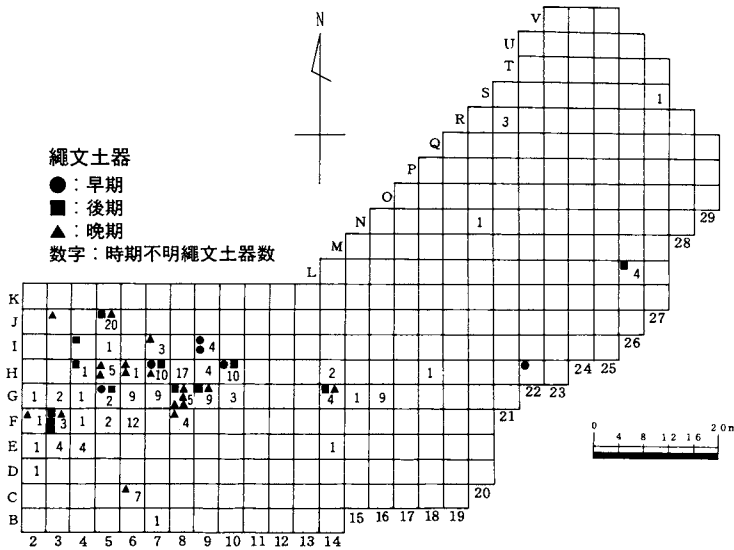
近世陶磁器は全部で10点出土しているが、図示できるものはない。ペコカン徳利の破片2点の他は器種不明である。

④ 近現代陶磁器

近現代のものは5点出土しているが、いずれも小破片のため器種不明である。

3. 出土土器の分布 (第16・17図)

本遺跡から出土した縄文土器の破片は、細片まで入れて全部で240点である。これらの土器の中で時期がわかったものは40点だけで、このうち図示に耐え得るものは36点だけである。大多数を占める残りのものは、無文粗製土器の破片や磨滅して文様が不明のもの・細かすぎて図示できないものなどである。

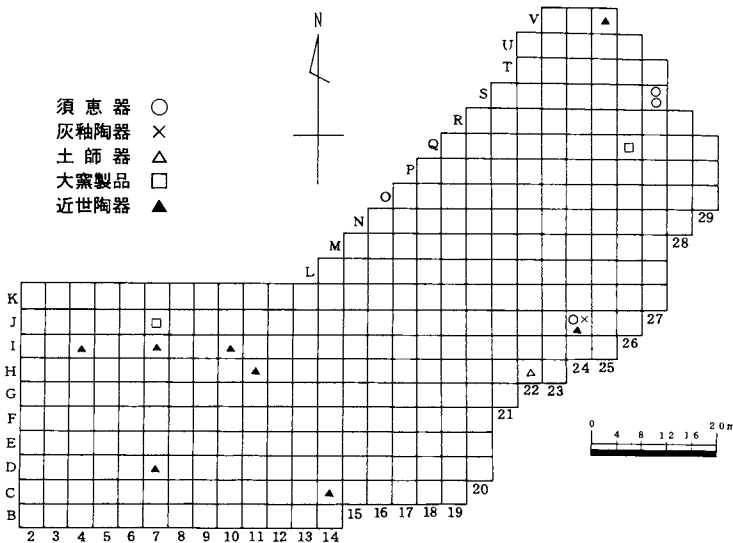


第16図 追分遺跡出土縄文土器分布図

本遺跡をA・B・C地区の3地区に分けたが、地区毎の土器数を見てみると、A地区217点、B地区9点、C地区14点であり、B・C地区のものは磨滅したものや細片や小片が多いため、遺跡の中心はA地区と思われる。そこで、第16・17図ではC地区の図示を省略した。

時期の判明した土器片から見てみても、BC地区出土のものは早期のもの1点B地区、後期のものはB・C地区各1点、底部の破片1点、計4点だけである。

遺跡の中心と思われるA地区を見てみると、圧倒的に中位段丘に集中していることが分かる。高位段丘では5Jグリッドにまとまって出土しているだけである。低位段丘では6C・14G・16Gグリッドにまとまりが見られるだけで、改田時に中位段丘のものが混入したと考えられる。次に、



第17図 追分遺跡出土その他の土器・陶器類分布図

時期的にみると、早期のものは中央部に少し点在しているだけであるが、後晩期のものはそれより広くまとまって分布している。したがって、本遺跡の時期の中心は縄文時代後晩期と考えられるが、遺構が検出できなかったことや石器の中でも打製石斧の割合が高いことなどから、キャンプ地ではなく、根菜類などの食料の採集地などではなかったかと推測される。

次に、古代以降の遺物の分布を見てみると、各地区に遺物が点在していることが分かる。これは、ここを生活の場として長期間いたのではないと考えられる。戸入や門入に住んでいた人の話であるが、山手の集落の方へ行くのに上開田集落を通らず、BC地区を通して山沿いを通行していたということである。おそらく古代から旅人などの往来に使われた道があり、この道沿いに遺物が点在しているのではないかと思われる。 (宇野治幸)

第3節 石 器 類

本遺跡から出土した石器は総数 185点で、その内訳は石鏃 3点、石匙 2点、削器 2点、剥片 43点、石核 2点、打製石斧68点、打製石斧製作に伴うと思われる剥片51点、石錘 8点、磨石・叩石 1点、凹石 1点、潰れの見られる縦長剥片 6点と、打製石斧中心の組成を見せる。石材は、剥片石器・石核の類ではチャートが主に用いられ、計52点中50点あり、約96%を占める。他には泥岩・安山岩があるが、いずれも 1点と少数である。

石 鏃 (第18図 1～3)

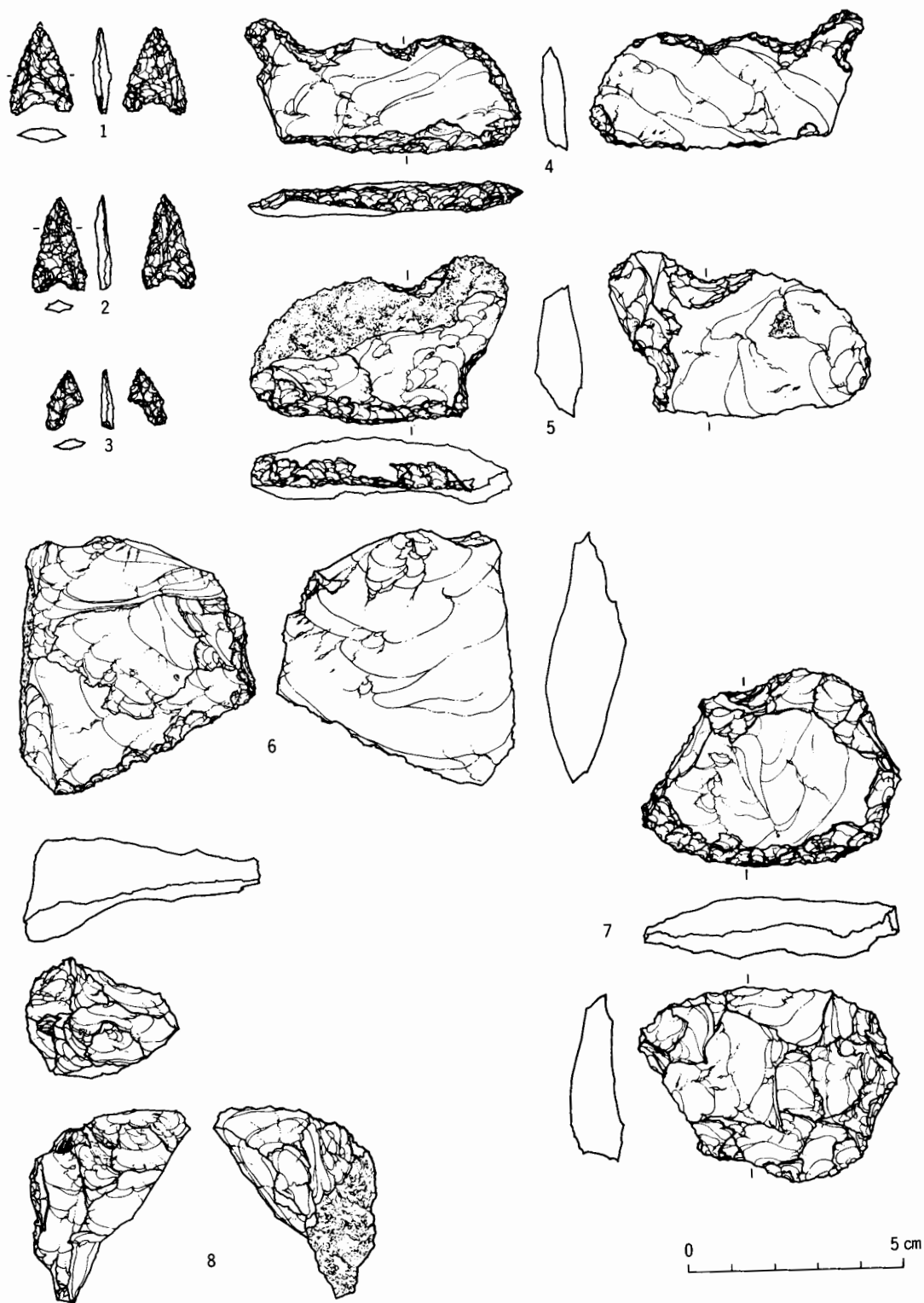
3点出土した。いずれもチャート製で、調整は緻密とまではいかないが、押圧剥離が器面全面におよび、素材剥片の面は残さない。基部は1・2が凹基鏃で、弧状の抉りを入れている。3は、片脚は作り出されているもののもう一方の脚部は作り出されおらず、片脚鏃となっている。

石 匙 (第18図 4・5)

2点出土した。4は煉瓦のような質と色調を呈する安山岩製。5はチャート製である。どちらも素材となる剥片の末端部に表裏両面から剥離を施してつまみ部を作出している。また、刃部は打面を含む一縁辺に、裏面側から調整を加えて作られており、似たタイプの石匙だといえよう。刃部の平面形は直刃であるが、バルブ付近は穏やかな弧を描く。4は両面ポジティブな剥片を用い、一部折損する。5は自然面を有する厚手の剥片を用いている。

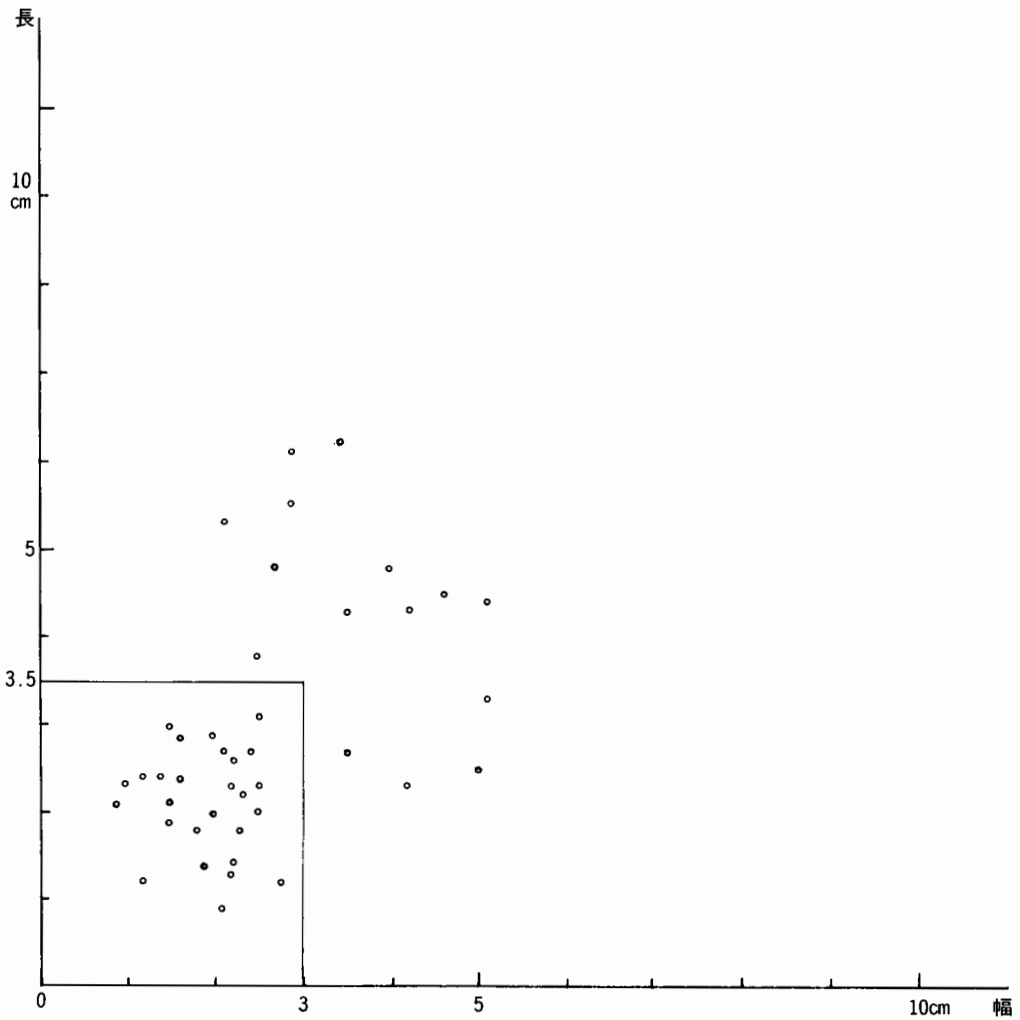
削 器 (第18図 6・7)

2点を削器とした。どちらもチャート製である。6は正面下部にポジティブな面を有するこ

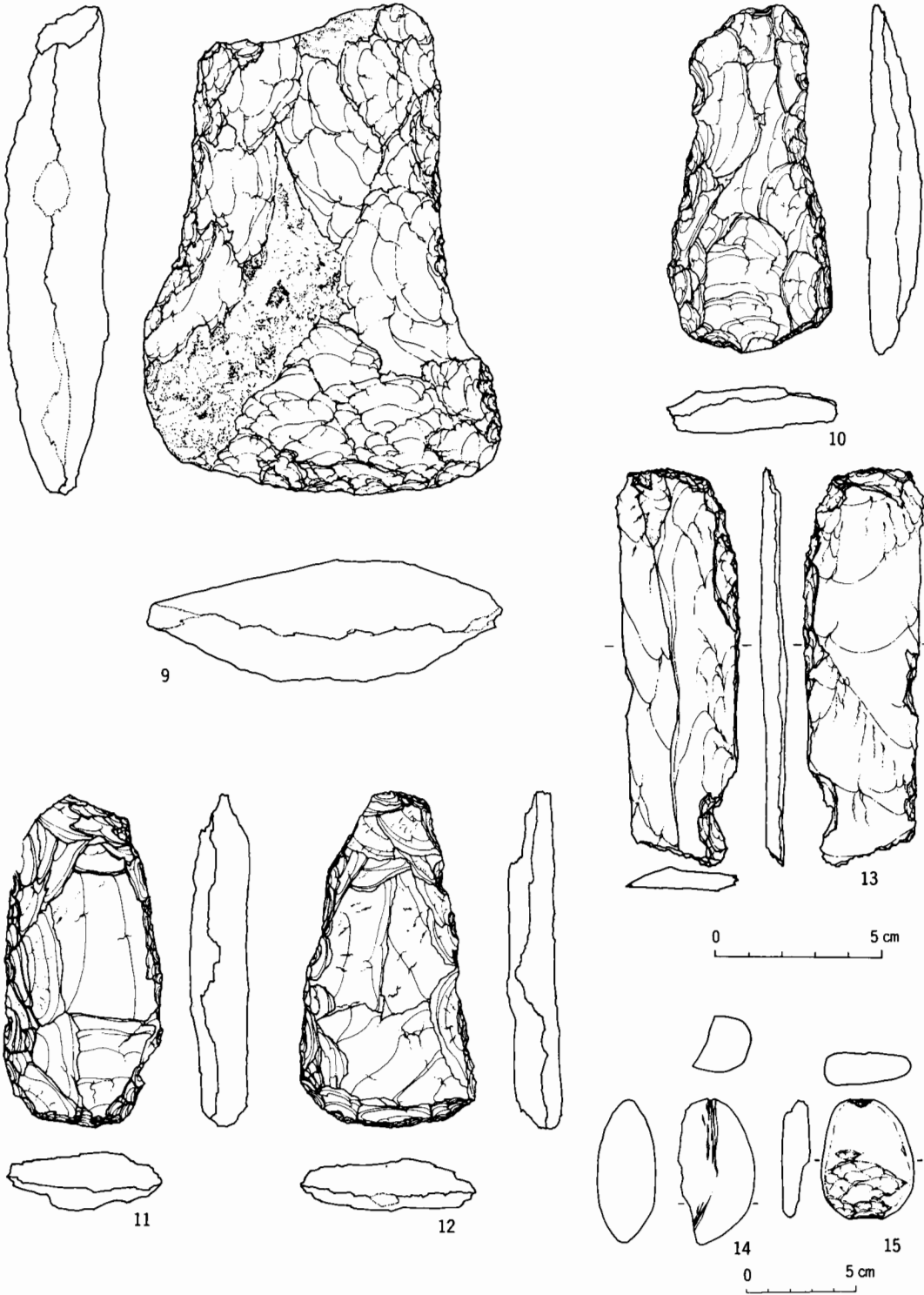


第18図 包含層出土石器(1)

とから、剥片を石核に用いた剥片剥離作業が行われていたことが分かる。打面側は折断によって除去され、剥片の端部に裏面側からまばらな調整を施して刃部としている。刃角は 50° とやや鋭角である。7は全面に調整を施している。正面の剥離面は、リングの状況から推測してバルブはそう遠くないところにある。したがって素材剥片の剥離面というより、剥離された後の調整と判断したほうが妥当である。剥片の正面にまず粗く大きな剥離を施し、その面を打面にして裏側の端部に、やや丁寧に調整を加えて刃部を形成している。刃角は 55° 程である。



第19図 フレークの長幅比分布



第20図 包含層出土石器(2)

剥片・石核 (第18図 8)

剥片は43点で、そのうちチャートが42点を占めるが、節理の発達する粗悪なチャートも数多く見受けられる。第19図の通り、長幅 3.5× 3.0cm以下の一群28点と、それ以上の一群15点に大別することができる。小型の一群では背面に自然面を有するものが1点で約 3.6%。大型の一群では4点で約26.7%見られる。いずれにせよ自然面を有する剥片は全体で11.6%にすぎず、極めて少ないといえよう。また、石核は折損した残核が2点見られるのみである。

遺物は包含層から出土したものではなく、これらの遺物を一括資料としてとらえることには若干の問題がある。したがって石器だけから遺跡の性格を検討できるのかどうか不安はあるが剥片生産の過程における遺跡の位置付けを試みたい。すなわち、自然面を有する剥片が少ないことから、石核調整を含め剥片生産の初期段階は当遺跡では行われなかったことが推測できる。また、石核が少ないことから、石核は持ち出されているものと思われる。ただ、折損した残核は持ち出す必要がなかったため残されたのであろう。以上のことから、ある程度剥離を受けた石核が持ち込まれ、当遺跡で若干の剥片を生産した後石核は持ち出されるという、剥片生産の一過性が特徴として指摘できるであろう。

打製石斧 (第20図 9～12)

計68点出土している。未製品や折損などで形態不明のもの18点を除くと、胴部が平行な短冊型が20点、基部に向かってやや収束する撥型が16点、胴部がくびれる分銅型が14点である。

9は分銅型の打製石斧であるが、使用による磨滅は刃部の角で顕著に見られる。柄に対して十字に装着されたであろうことを示す資料である。

石材は砂岩が28点と最も多く、ホルンフェルスが17点、泥岩8点、粘板岩7点と続く。形態別にみると、短冊型・撥型は砂岩とホルンフェルスが同じような割合で見られるのに対し、分銅型は14点中10点が砂岩で、ホルンフェルスは見られない。

打製石斧製作に伴う剥片としたものはホルンフェルス・砂岩がほとんどである。

石 錘 (第20図 14・15)

8点出土した。5点は打欠石錘で、3点は切目石錘である。砂岩・泥岩製のもののほか、打製石斧の剥片と思われる粘板岩・ホルンフェルスを用いたものも見られる。

磨石・叩石

1点のみ出土した。長軸両端に敲打・擦痕が見られるが顕著ではない。

凹石

1点のみ出土した。表裏の平坦面に2箇所ずつの凹みがみられる。

潰れの見られる縦長剥片 (第20図 13)

打製石斧製作に伴う剥片として分類していた粘板岩・ホルンフェルス製の剥片の中に、薄くて細長い(長さ12cm 幅4cm 厚さ1cm程度)剥片が数点目についた。粘板岩・ホルンフェルス製の打製石斧は10cmを越えないものがほとんどであり、打製石斧製作に伴うものとは考え難い。また、長軸の両端に潰れが観察される。そこで潰れの見られる縦長剥片として別に分類した。

(長屋幸二)

第5表包含層出土石器計測表(1)

石鏃計測表

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	G16	II	チャート	21	15	4.3	1	凹基	図18(1)
2	G4	II	チャート	22	13	2.5	0.7	凹基	図18(2)
3	H9		チャート	14	8	3	0.3	片脚	図18(3)

石匙計測表

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	F8	II	チャート		63	35	11.2	横型	図18(4)
2	I10	III	チャート	40	64	12.8	29.9	横型	図18(5)

削器計測表

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	C14	I	チャート	56	60	20.5	60		図18(6)
2	V23	III	チャート	58	49	13	41.2		図18(7)

石核計測表

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	E2	III	チャート	38	25	25	30.4		図18(8)
2	F2	II	チャート	36	27	17	13.3		

潰れの見られる縦長剥片

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	10H	II	ホルンフェルス	127	38	11	73.1		
2	4G	II	ホルンフェルス	114	35	13	67.4		
3	10H	II	ホルンフェルス	69	43	11	45.6		
4	6H	III	泥岩	91	35	6	24		
5	8F	II	ホルンフェルス	114	34	5	36.7		図20(13)
6	7J	III	泥岩	79	44	10	59.3		

第6表 包含層出土石器(2)

剥片計測表

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	23V	Ⅲ	チャート	62	34	15	23.1		
2	16G	Ⅱ	チャート	48	40	10	20.7		
3	2F	Ⅱ	チャート	45	46	11	24.2		
4	22H	Ⅱ	頁岩?	44	51	11	22.8		
5	10G	Ⅱ	チャート	55	29	10	15.9		
6	16G	Ⅱ	チャート	43	42	8	16		
7	14H	Ⅱ	チャート	23	22	4	1.9		
8	2C	Ⅰ	チャート	18	23	8	4.1		
9	8F		チャート	14	19	11	3.1		
10	4G	Ⅲ	チャート	23	15	3	1		
11	4F	Ⅱ	チャート	24	14	4	1.5		
12	27S	Ⅵ	チャート	31	25	7	4.3		
13	11F	Ⅲ	チャート	21	15	2	0.8		
14	20K	Ⅲ	チャート	12	28	9	3.2		
15	2F	Ⅱ	チャート	27	21	5	4.4		
16	9G	Ⅲ	チャート	14	19	5	1.5		
17	7E	Ⅱ	チャート	25	5	11	13.4		
18	22M	Ⅲ	チャート	29	16	7	2.4		
19	6F		チャート	9	21	6	0.9		
20	4G	Ⅲ	チャート	12	12	3	0.5		
21	2E	Ⅱ	チャート	14	22	4	1.5		
22	14H	Ⅱ	チャート	29	20	8	4.2		
23	3F	Ⅲ	チャート	48	27	18	22		
24	2E	Ⅲ	チャート	61	29	10	13.7		
25	3F	Ⅲ	チャート	23	42	9	7.8		
26	11F	Ⅲ	チャート	27	24	11	7.1		
27	7K	Ⅱ	チャート	38	25	7	9.1		
28	4C	Ⅰ	チャート	43	35	12	17.7		
29	26P	Ⅱ	チャート	24	12	5	1.3		
30	9G	Ⅲ	チャート	24	16	3	1.8		
31	9G	Ⅲ	チャート	13	22	5	1.3		
32	14F	Ⅱ	チャート	33	51	14	27.8		
33	10H	Ⅱ	チャート	27	35	5	4.6		
34	14C	Ⅰ	チャート	26	22	8	5.8		
35	3E	Ⅱ	チャート	53	21	10	13.3		
36	9G	Ⅲ	チャート	22	23	4	2.2		
37	10F		チャート	20	25	7	3.9		
38	9F	Ⅱ	チャート	18	18	4	1.4		
39	8F	Ⅱ	チャート	19	15	5	1.5		
40	19D	Ⅰ	チャート	20	20	8	3.3		
41	3E	Ⅱ	チャート	30	15	8	3.4		
42	22H	Ⅱ	チャート	23	10	6	1.6		
43	22H	Ⅱ	チャート	21	9	5	0.8		

第7表 包含層出土石器(3)

打製石斧計測表(1)

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	6II	II	砂岩	113	64	25	241.7	短冊型	
2	9H		泥岩	111	45	17	132.4	短冊型	
3	8H	II	ホルンフェルス	95	49	16	99.3	短冊型	
4	8H	II	ホルンフェルス	83	45	17	87.2	短冊型	
5	4G	III	泥岩	87	71	14	129.5	短冊型	
6	Iトレ	III	ホルンフェルス	69	53	13	86.9	短冊型	
7	10I	II	泥岩	78	55	24	154.7	短冊型	
8	10II	II	ホルンフェルス	104	49	16	108.5	短冊型	
9	8F	II	ホルンフェルス	99	47	18	103.4	短冊型	図20(11)
10	9H		砂岩	68	66	23	168.5	短冊型	
11	14II	II	礫岩	79	70	29	224	短冊型	
12	3E	II	砂岩	82	52	20	139.2	短冊型	
13	23V		砂岩	74	71	40	285.7	短冊型	
14	4G	II	砂岩	72	60	23	136.9	短冊型	
15	8H	II	不明	84	58	25	140.6	短冊型	
16	2G	II	花崗岩	108	75	24	321.2	短冊型	
17	8F	I	粘板岩	79	55	14	78.5	短冊型	
18	4G	II	ホルンフェルス	65	64	11	62.9	短冊型	
19	23V		ホルンフェルス	132	63	15	211.9	短冊型	
20	6G	II	砂岩	130	73	25	310	分銅型	
21	26F	III	砂岩	79	74	15	128.2	分銅型	
22	14F	II	泥岩	81	48	16	87.6	分銅型	
23	5F	III	砂岩	100	94	25	309	分銅型	
24	14H	III	砂岩	98	55	17	89.1	分銅型	
25	10I	II	泥岩	101	49	12	77.5	分銅型	図20(10)
26	26P	III	砂岩	111	77	20	298.2	分銅型	
27	5G	II	砂岩	105	78	17	177.1	分銅型	
28	6F	III	砂岩	118	72	29	272.8	分銅型	
29	Kトレ	II	砂岩	138	78	34	407	分銅型	
30	7J	VI	粘板岩	124	55	18	177.1	分銅型	
31	16G	II	泥岩	48	72	11	65.9	分銅型	
32	8H	II	砂岩	96	59	13	106.6	分銅型	
33	2E	II	砂岩	146	112	27	564.4	分銅型	図20(9)
34	10G	I	玢岩	110	61	21	156.5	揆型	
35	6C	II	ホルンフェルス	119	52	18	173.2	揆型	
36	10H	II	ホルンフェルス	121	46	12	81	揆型	
37	4I	III	ホルンフェルス	102	44	21	142	揆型	
38	10G	II	砂岩	82	82	25	221.7	揆型	
39	2F	II	砂岩	95	74	23	193.6	揆型	
40	27S	III	砂岩	64	61	17	85.7	揆型	
41	Iトレ	II	ホルンフェルス	112	70	20	225.5	揆型	
42	2E	III	ホルンフェルス	101	52	14	101.2	揆型	図20(12)
43	10I	II	不明	71	53	15	100	揆型	
44	9H	I	砂岩	105	64	24	204.4	揆型	

第8表 包含層出土石器計測表(4)

打製石斧計測表(2)

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
45	Eトレ	Ⅲ	砂岩	200	82	22	349.4	揆型	
46	Kトレ	Ⅱ	泥岩	108	65	21	288.4	揆型	
47	I7	Ⅱ	不明	86	45	19	91.6	揆型	
48	G4	Ⅱ	砂岩	126	67	19	221.2	揆型	
49	H8	Ⅱ	安山岩	124	65	24	241.1	揆型	
50	G7	Ⅱ	砂岩	83	69	23	159.1	不明	
51	H9	Ⅲ	ホルンフェルス	73	47	14	52.7	不明	
52	F5	Ⅲ	砂岩	68	69	24	129.8	不明	
53	F7	Ⅱ	泥岩	72	39	10	46.4	不明	
54	I7	Ⅱ	砂岩	84	80	22	203.4	不明	
55	H8	Ⅱ	玢岩	45	78	11	48.2	不明	
56	J5	Ⅱ	砂岩	24	80	20	43.4	不明	
57	E3	Ⅱ	砂岩	58	62	19	109.4	不明	
58	V23	Ⅲ	砂岩	72	87	19	174.7	不明	
59	V23	Ⅲ	粘板岩	62	42	14	50.8	不明	
60	H10		ホルンフェルス	58	49	8	37.5	不明	
61	F3	Ⅱ	粘板岩	61	55	10	50.5	不明	
62	H7	I	粘板岩	86	48	16	77.1	短冊型	
63	H4	Ⅱ	粘板岩	80	47	13	49.6	不明	
64	H4	Ⅱ	粘板岩	83	50	12	54.4	不明	
65	F2	Ⅱ	ホルンフェルス	64	55	11	36.3	不明	
66	S27	Ⅲ	ホルンフェルス	86	35	10	42.2	不明	
67	D7	Ⅲ	ホルンフェルス	81	44	10	43.1	不明	
68	F2	Ⅱ	不明	56	57	12	38.4	不明	

石錘計測表

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	J3	Ⅲ	泥岩	61	57	16	66.1	打欠	
2	J3	Ⅲ	砂岩	58	41	16	49.7	打欠	図20(15)
3	J3	Ⅲ	泥岩	58	49	17	74.4	打欠	
4	J3	Ⅲ	砂岩	50	42	21	57.6	打欠	
5	G2	Ⅲ	ホルンフェルス	66	33	8	18.7	打欠	
6	G2	Ⅲ	粘板岩	42	28	4	6.3	切目	
7	F5	Ⅲ	粘板岩	72	27	9	21.6	切目	
8	F9	Ⅱ	砂岩	69	41	28	84.7	切目	図20(14)

磨石・敲石計測表

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	Jトレ	Ⅱ	砂岩	123	96	53.5	920		

凹石計測表

NO	出土区	出土層位	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考
1	E16	Ⅲ	砂岩	94	68	48.5	390.1		

第4章 追分遺跡の考察

揖斐郡藤橋村大字開田字追分にある追分遺跡は、揖斐川最上流部の支流の一つ西谷川が本流に合流する地点から、約500m遡った西谷川左岸の河岸段丘上に位置する。この段丘は東西約200m、南北約50m、面積1万㎡以上に及ぶひろい範囲にわたっている。予備調査の段階では、石鏃や石器製作過程の碎片、奈良～平安時代の須恵器や灰釉陶器類が若干ずつ採集されただけではあったが、この地が西谷川流域の西谷筋へ進入する要の地にあたるために、揖斐川上流地域の縄文時代から古代にかけて、重要な遺跡の一つとして注目されていた。

発掘調査は、平成元年度には遺跡の範囲確認を主目的として934㎡、平成2年度には626㎡、合わせて計1,560㎡にわたって行われた。その結果、堆積層は基本的には3層——第Ⅰ層：表土と耕作土、第Ⅱ層：角礫混じりの崖錐堆積物を含む黒褐色土層、第Ⅲ層：暗褐色土層——からなることが明らかになった。第Ⅱ層からは打製石斧などの石器類や須恵器などが出土するが、縄文時代遺物の主要な包含層は第Ⅲ層であることが確かめられた。

縄文土器は240点を数えるが、すべて小破片ばかりで、そのうち所属時期を判別できる土器は計36点で、内訳は早期前半の押型文土器と後半の条痕文系土器が計6点、後期土器が10点、晚期土器が20点である。古代以降のものは、須恵器5点、土師器1点、中・近世陶磁器11点、近代・現代陶磁器5点である。第2節で観察したように、遺物包含層は西谷川の堆積した円礫の砂礫層や沖積世堆積層から形成されているが、その包含層の中にも、背後の山地からの角礫混じりの崖錐堆積物が流入しており、遺構も全く検出できなかったことから、ここに集落が存在していた可能性は非常に少ない。

出土した石器類は187点を数えるが、そのほとんどは縄文時代のもので、そのうち剥片・石核類102点を除くと、定形石器は85点となる。その内訳は石鏃3点、石匙2点、削器2点、打製石斧68点、石錘8点、磨石・叩石1点、凹石1点で、打製石斧が約45%を占め、石錘が10%弱で、これに次いでいる。

打製石斧は未製品や折損品18点を別にするると49点であり、短冊形・撥形・分銅形に分かれるが、長さによって分類すると、最小は48cmで、最大は200cm、71～130cmのものが40点で約82%を占める。原材はホルンフェルス、砂岩、泥岩、粘板岩などの比較的軟質な石材がほとんどで、細工が粗雑であることからみても、打製石斧は木工具とは考え難く、土堀り用の道具と考えるべきであろう。竪穴住居を掘削するための用具とする意見があるが、根栽植物の採集や、あるいは植栽用に使用された道具とみてよいであろう。つまり、追分遺跡は居住遺跡というよりは、生産遺跡であった可能性が強いと考えられるわけである。

なお、打製石斧製作過程に生じた剥片51点を含めて、剥片は100点にのぼり、石器製作工程の

一部がこの地で行われた可能性も考えられる。

今後、さらに揖斐川上流の発掘をすすめるにあたり、集落跡と追分遺跡のような遺物散布地との関わりについても、解明することに意を用いる必要があるといえよう。

(大参 義一)

第5章 下開田村平遺跡の遺構・遺物

第1節 基本的層序

今回調査にあたった第2地区（A・B・C区）は揖斐川右岸の中位河岸段丘上に位置しているが、従来宅地及び畑・田地として利用されてきており、また、下開田地区の移転に伴う住居等の埋め戻しによる削平・掘削がかなり入っており、B・C区においては基本的層序が失われていた。A地区においてもやはり部分的に攪乱が入ってはいたが良く残存していたので、以下にA区48列北壁グリッドの層序を見てみよう。なお、第III層で縄文時代中期・後期・晩期、第VI・VIII層で縄文時代早期の文化層を確認している。（第21図）

第I層（5YR3/1 黒褐色土）表土。耕作ないしは現代の宅地によるものと思われる盛土である。詳細に見るならば上部の耕作土、その中位の敷部分、下位の開田・開畑地の盛土に区分できる。厚さ30～40cmである。

第II層（5YR2/1 暗黒褐色土）A区においては不安定な状態であったが、B区に厚く堆積していた。縄文時代中期・後期・晩期の遺物包含層であるが、住居移転等に伴う埋め戻し等によってほとんどの部分で攪乱を受けている。全体的に粘性は弱いが、しまりはある。細礫を多く含む。厚さ30cmである。

第III層（7.5YR4/3 褐色土）径約1mmの砂礫層である。径5mm程度の円礫、亜円礫を非常に多く含む。非常にかたくしまっている。厚さ40～60cmである。

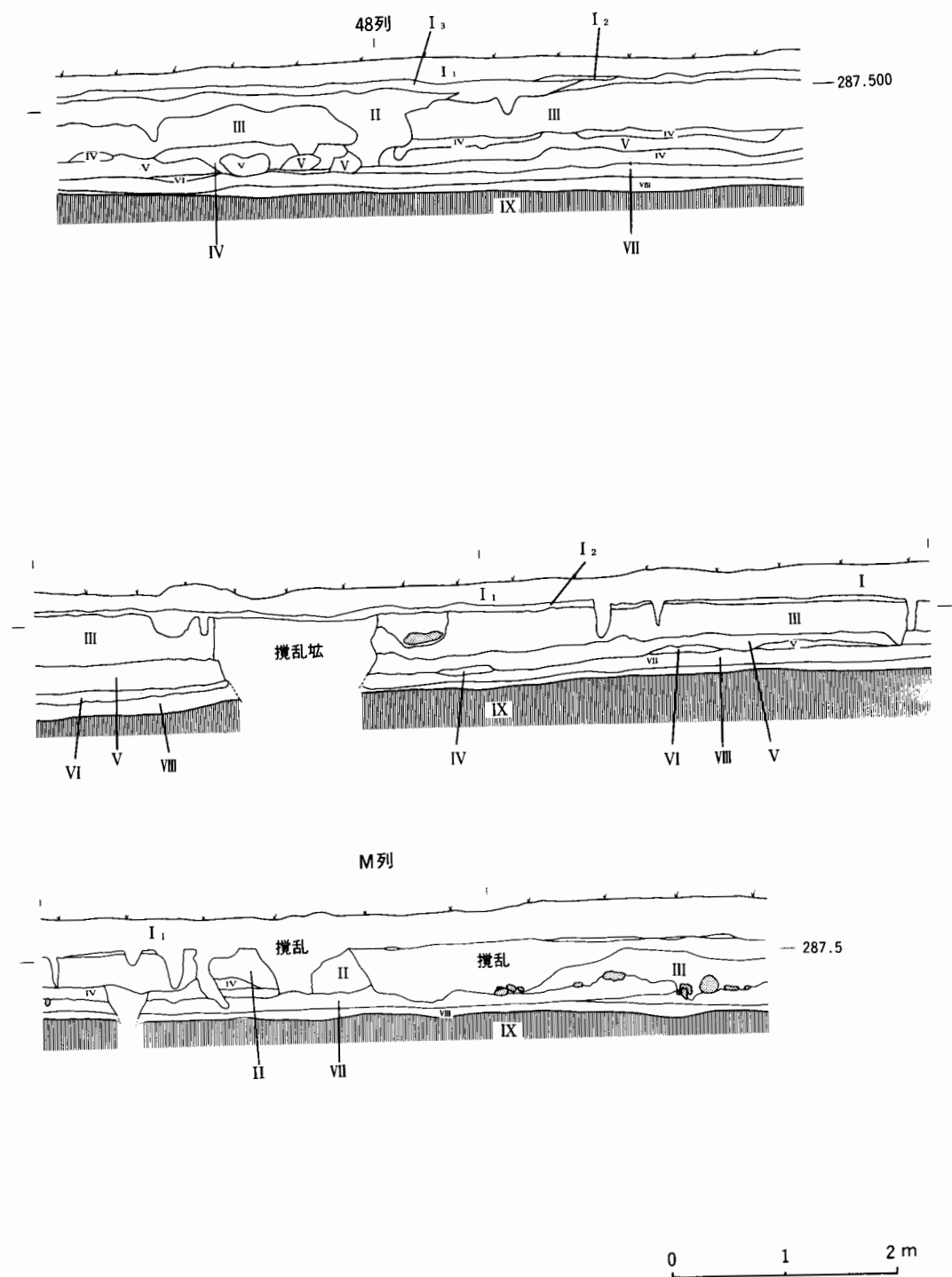
第IV層（7.5YR3/4 暗褐色土）径約0.5mmの砂層である。径5mm程度の礫を若干含んでいる。一部で堆積のない部分も存在するが約10cm程度である。

第V層（7.5YR5/6 明褐色土）第IV層より一段と細かい砂層である。1～5mm程度の礫をまばらに含み・下部に向かうほど粘性が強くなる。なお、第III層～V層は河川による堆積と考えられ、遺物の包含は皆無であった。厚さ30cmである。

第VI層（7.5YR3/2 暗黒褐色土）A区において良好に残存していたが、やはりこの部分までも攪乱が及んでいる。厚さは10～20cm程度であり、粘性、しまりともある。縄文時代早期の遺物包含層である。

第VII層（7.5YR4/6 褐色土）第V層に近似した砂層である。A区西部に向かうほど厚くなる。厚さ10cm～30cm程度である。粘性は弱いが堅くしまっている。

第VIII層（7.5YR3/2 暗黒褐色土）1～2mm程度の炭化物を若干含む。調査地域西部ではみられなかつた。厚さは約10cm程度で縄文時代早期の遺物包含層である。粘性、しまりともある。



第21图 发掘A区49列北壁·M列東壁土層断面图

第IX層（黄褐色土） 砂層であり多く細礫を含む。本層からの遺物の出土はなかった。

第2節 遺 構

A・B地区で竪穴住居跡1軒・土壇2基・ピット群を第III層上面で、焼礫集積遺構4基・屋外炉1基・配石遺構4基を第VII層上面でそれぞれ確認した。ただし、層序の項でふれたようにB・C地区においては特にひどい攪乱が入っており、詳細な遺構確認はできなかった。焼礫集積遺構については、従来、各報告によって「集石遺構」・「集石土壇」・「礫群」・「集石炉」と呼ばれてきたものであるあるが、本報告では以下に詳述するように、人為的に火気を受けたと考えられる拳大を主体とする礫のまとまりを焼礫集積遺構と呼ぶこととし、自然礫の集石遺構・配石遺構とは厳密に区分している。

なお、C地区においては遺構は確認していない。

1. 第1号竪穴住居跡（第24図）

① 遺 構

2～3-E'～F'グリッドに位置する。遺存状態は非常に悪く北東隅、南西隅、炉の一部分を残すのみであるが、隅丸方形を呈する住居と考えられる。また、遺存している部分においても覆土上部はほとんど消失しており、床面確認部分上部にわずか数cmほどであった。残存していた4個の炉石より炉は中央よりやや西寄りに存在したと考えられ、周辺には火気による硬化部分が存在していた。貼り床などはなされておらず、南西部分の一部に床の硬化部分が確認できたが、硬化状態は弱い。柱穴等については確認できなかった。（佐野康雄）

② 遺 物（第25～27図1～65）

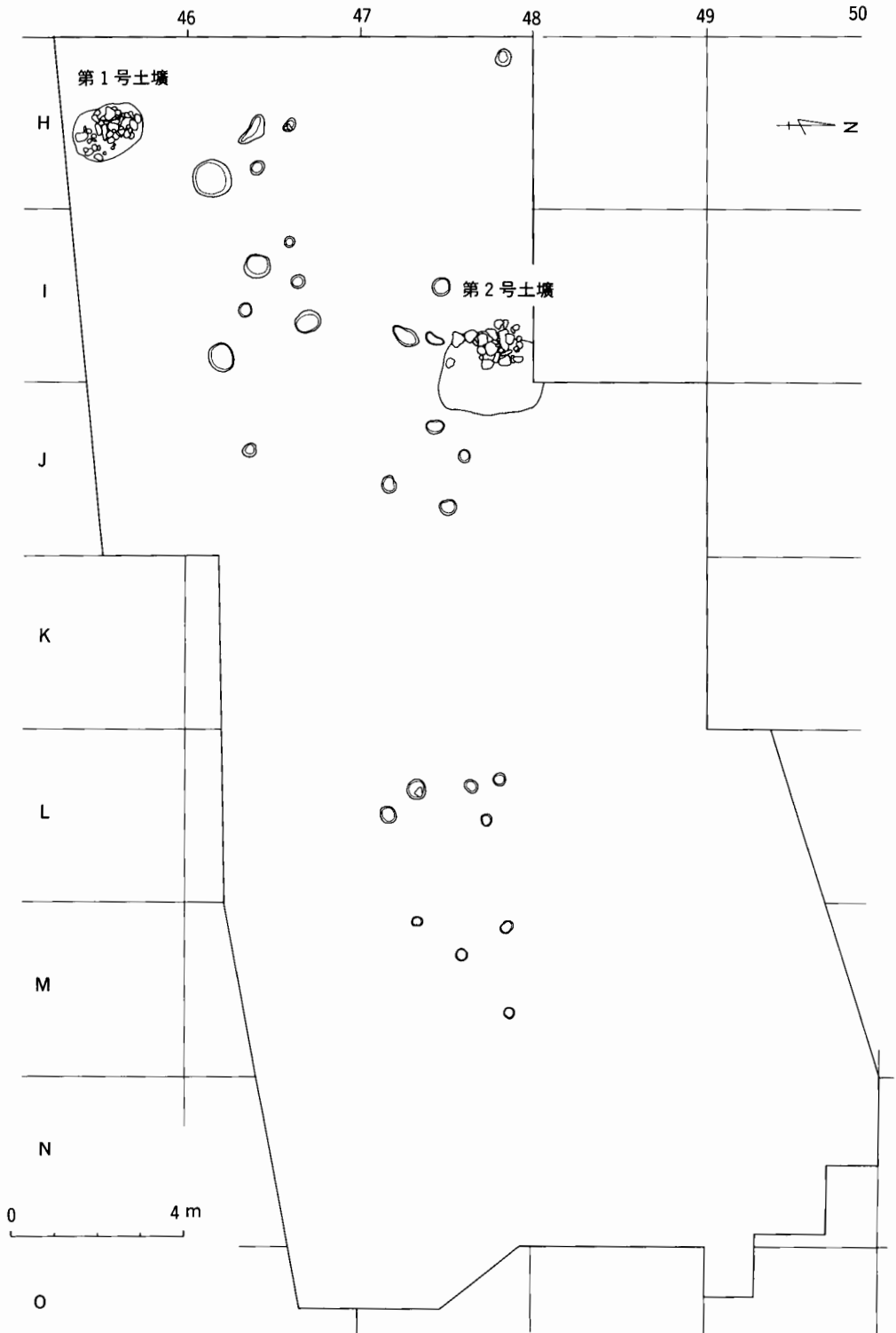
本住居跡の覆土からは、早期から後期に及ぶ土器が出土している。有文土器を中心に、後述する包含層の土器分類によりつつ、順に記述する。

早期の土器（1・2）

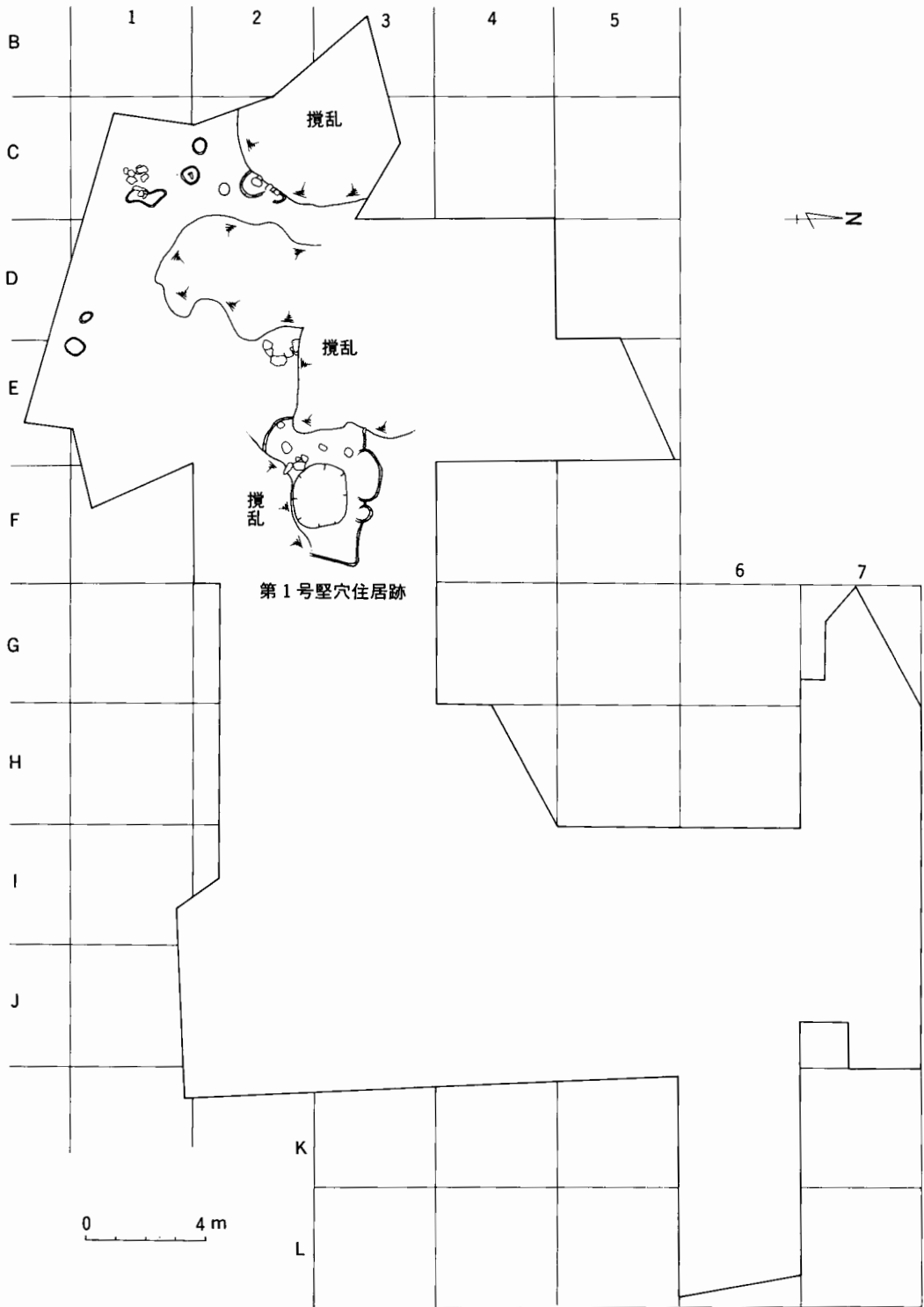
早期の土器と考えられるのは2点ある。内外面共に条痕が観察できる。器壁は厚く、焼成は比較的良い。「茅山下層式」あるいは「上層式」に比定できると思われるが、これだけの破片からはどちらとも決めかねる。

中期の土器（3～58）

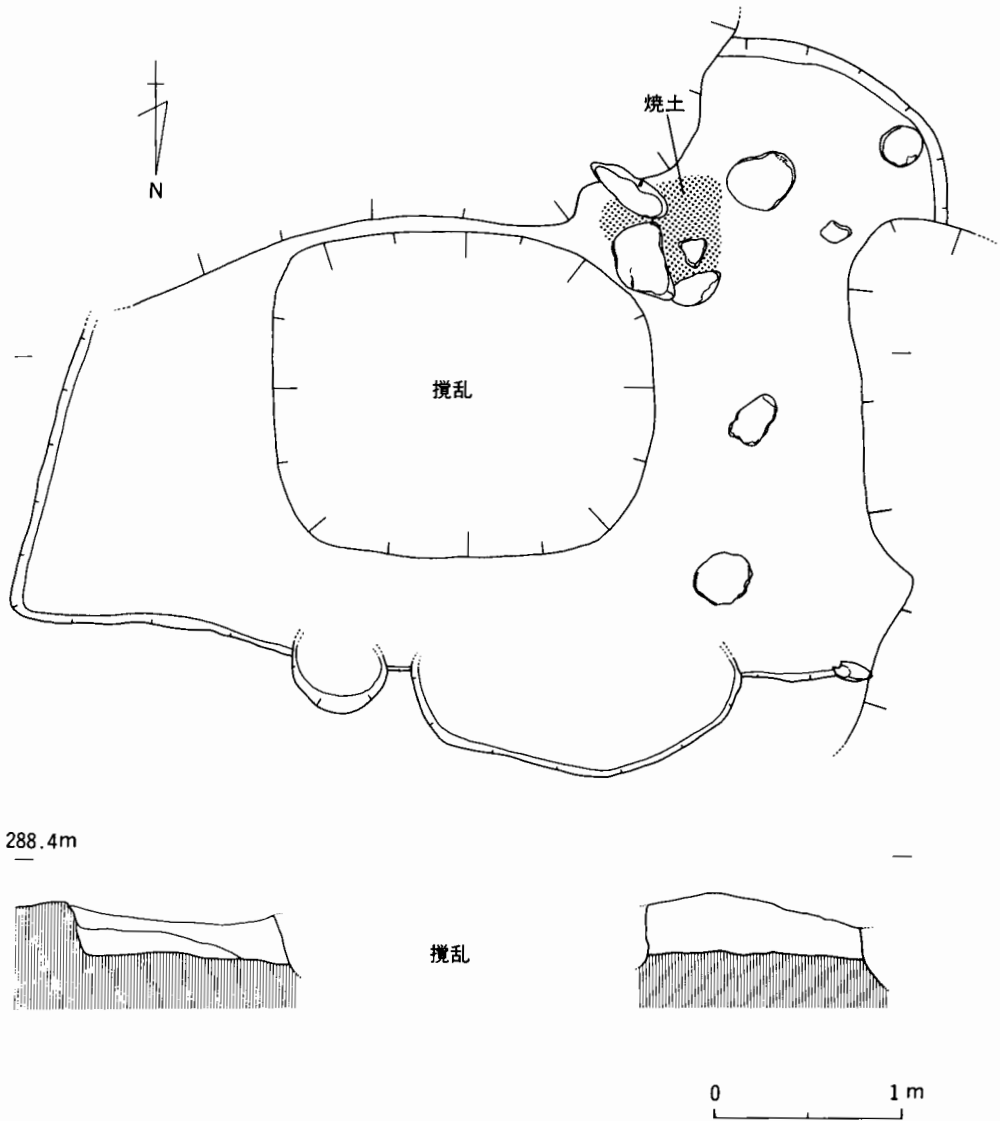
中期の土器を順に記述する。3は半截竹管状工具による平行沈線内に爪形文を施したものである。4・5は撚糸文を地文とし半截竹管状工具によって文様を描いたものである。4は口縁



第22図 下開田村平遺跡第II層A区 遺構配置図



第23図 下開田村平遺跡第II層B区遺構配置図



第24図 第1号竪穴住居跡

部で、波状文が見られる。5は連弧文の一部であろうか。6・7は磨耗が著しく地文は不明であるが、半截竹管による文様が描かれている。包含層分類と対応させるならば、3はC1群a類、4～7はC1群b類に属する。瀬戸内・関西系の土器である。

8は隆帯による渦文の一部から胴部にかけての破片である。隆帯上と隆帯に沿って刺突が連続する。胴部には縦位の羽状沈線文が見られる。9～11も同様な土器である。いずれも隆帯とそれに沿った刺突文がみられ、その周囲には羽状沈線文あるいは斜方向の沈線を施している。

12は渦文を隆帯によって施したもの、13は区画文を隆帯によって施したものである。13の渦文の内部には、斜方向の沈線が充填されている。また、13の区画内には羽状文が充填されている。以上の土器(8~14)は、包含層分類のC2群a類になる。

15は磨耗や剥離が著しいが、沈線によって渦文を描いたものであると判断した。C2群b類に属する。

16~18は胴部の破片で、隆帯を持つものである。羽状文が見られる。19~30は胴部で縦位の沈線間に縦位の羽状文を施している。沈線はへら状工具を原体とする細く深いものが中心であるが、縦位の沈線のみを棒状工具によって幅広で浅く施しているものもある。これらの土器(16~30)は東海西部の中期後半のものであり、C2群胴部b類に分類されるものである。

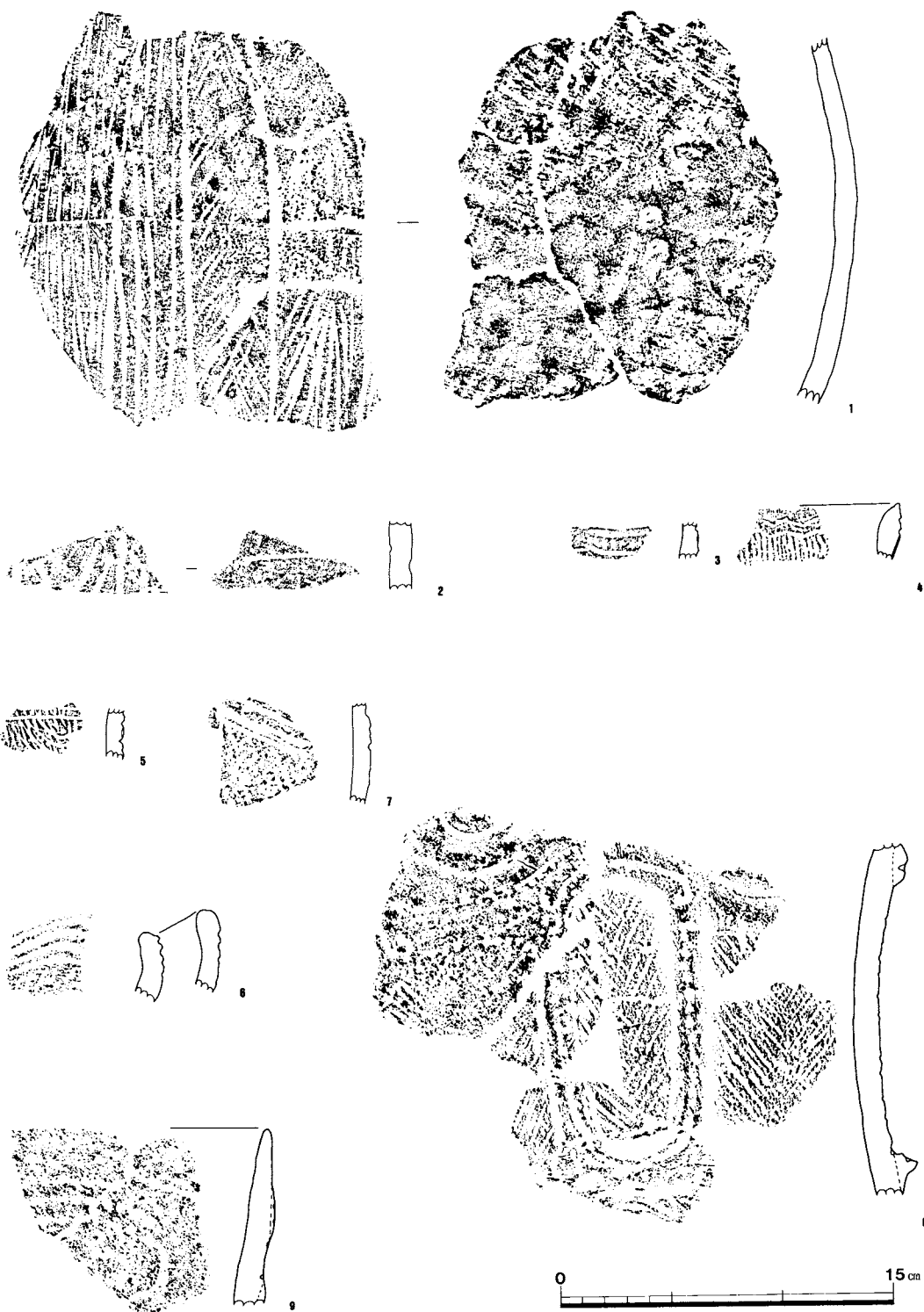
31は波状口縁を持つ。曲線的な文様を沈線で描き、その内部に縄文を充填する。32は口縁部にRLの縄文が施されている。沈線は太く深い。33は口縁部。34と36~38の4点は胴部の破片で、34・36は直線的な沈線、37は曲線的な沈線と縄文が認められる。38は沈線による文様の一端をうかがうことができる。以上の土器は広義の磨消縄文を持つものであるが、積極的に後期とする根拠が認められないため、中期末のものであろうと考える。包含層の分類ではC3群に相当する。

39~43は直線的な沈線のみを持つものである。39は波状口縁である。沈線が一条見られる。40は直線と縦位の波状文を持つものであるが、包含層の分類で言うC2群土器の胴部であろう。43は器形・文様とも判断つきかねる。44と同一個体であろうか。45は口縁部で、2条の沈線と、その下位に斜方向の沈線が付けられる。これもC2群とすべきものであろう。

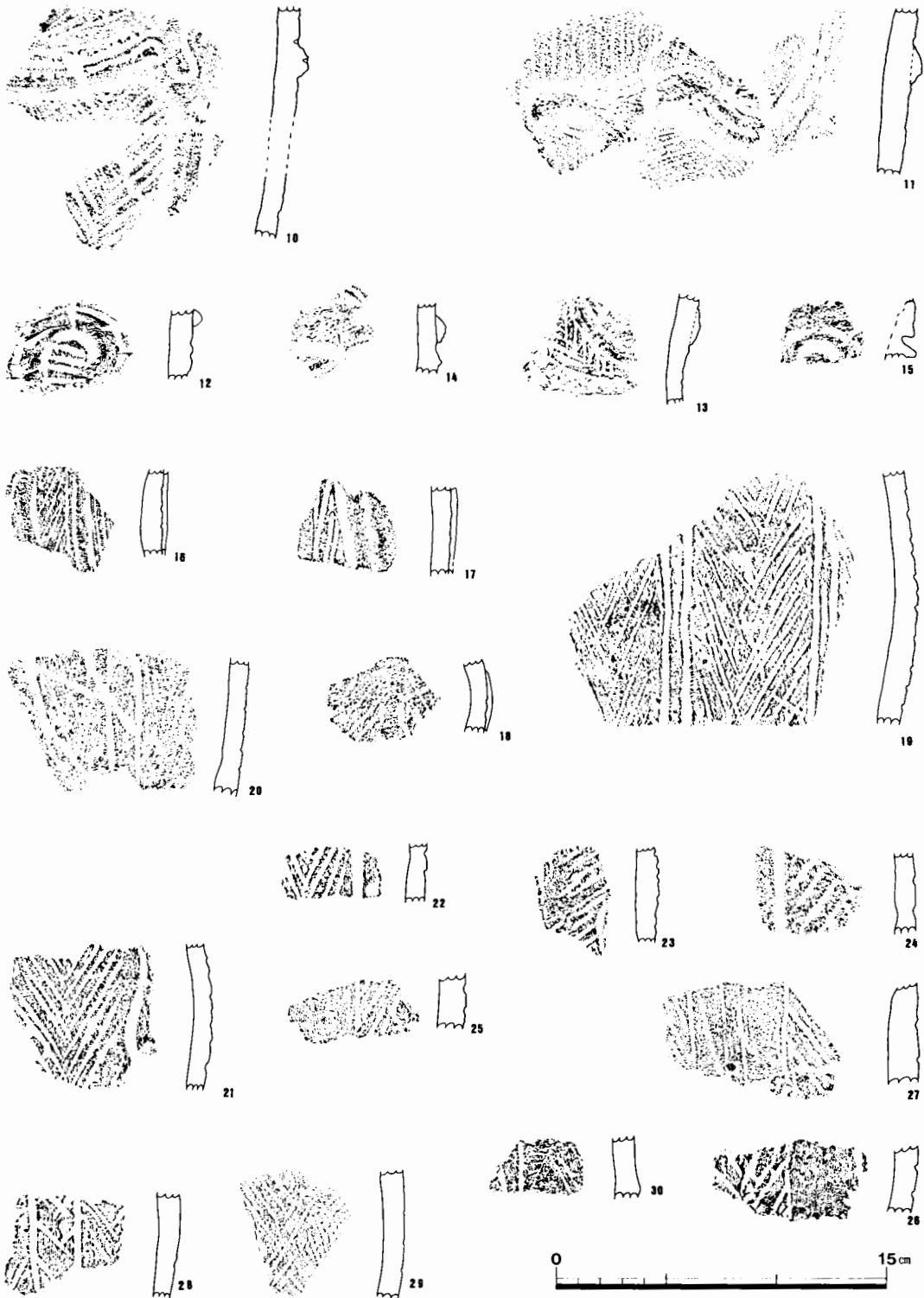
46は口縁部の突起である。48は口縁部で、突起がある。口縁端面には2条のへら状工具による刺突が巡り、内側は突起裏面へとつながる。外面にも同一原体による刺突が見られる。49は棒状の工具による押圧痕が連続している。50も隆帯の下位に棒状の工具の圧痕が見られる。51は口縁部であるが、圧痕が2列施されている。52は押し引きに近いが、沈線として連続してはいない。53・54は竹管状の工具による刺突文が付く。55・56は円形の刺突文がなされる。55は口縁部で、端部には平坦な面をつくっている。57は押し引きの沈線が見られ、その下位には縄文が付けられている。35は幅の狭い半截竹管状の工具による沈線が連続して付けられている。58は口縁部直下に隆帯を付け、隆帯上に沈線を施している。やや内湾する口縁部である。以上の2点は共に中期の土器であろうと考えるが、分類は不明である。

後期の土器 (59~65)

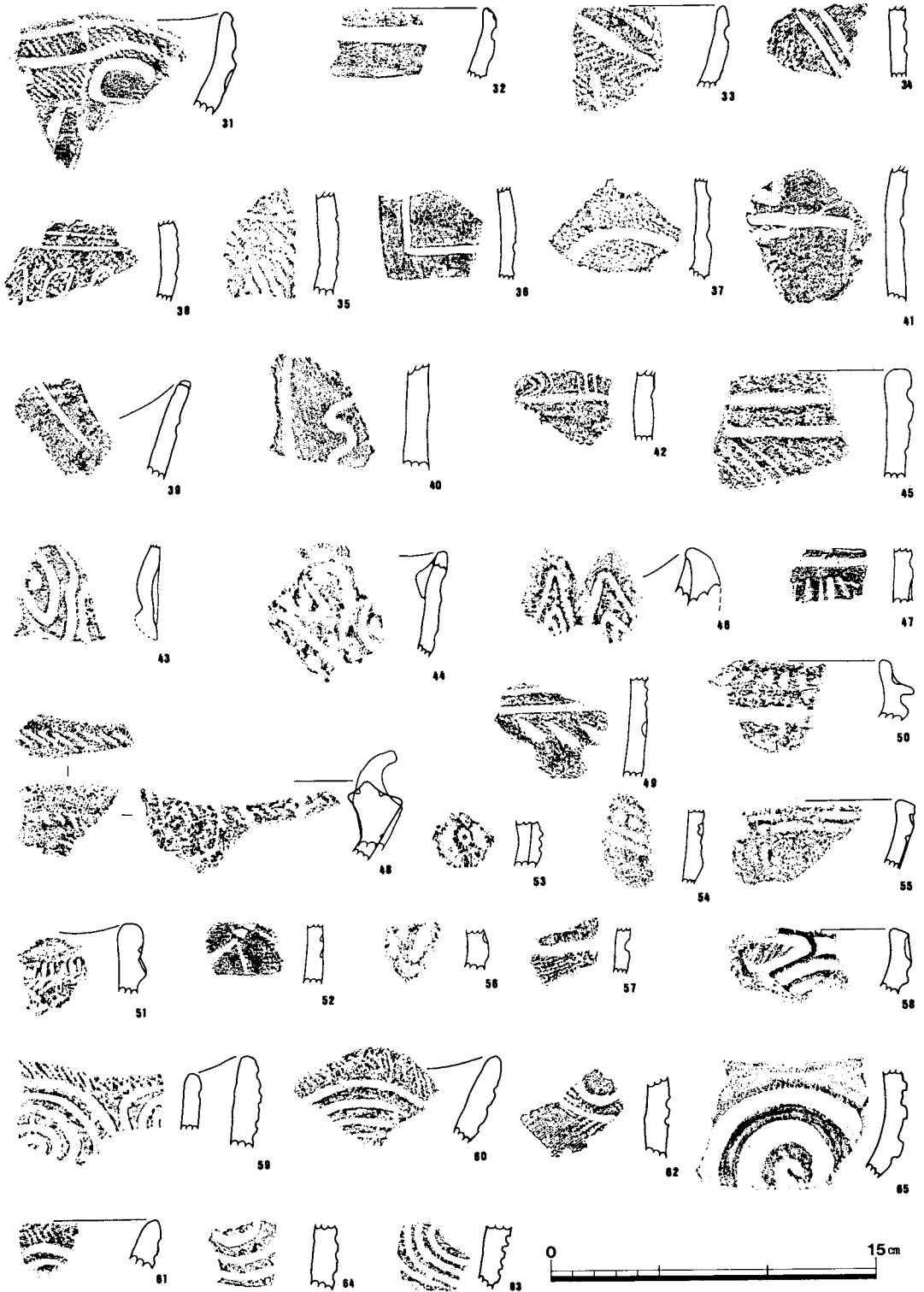
59~65は何れも口縁部に多重の渦文を持つものである。59は波状の口縁で、縄文を地文とし、沈線による5重の渦文を描く。60も同様なものである。59に比べると沈線がやや太い。61・62は縄文が見られる。63・64は渦文のみである。65は隆線によって渦文を描いたものである。胎



第25圖 第1号竖穴住居跡出土縄文土器(1)



第26図 第1号竪穴住居跡出土縄文土器(2)



第27圖 第1号竪穴住居跡出土縄文土器(3)

土は密であり、焼成もよい。上述の59～64とは異質な感を与えるが、後期の土器であろう。

(村木 誠)

第9表 第1号竪穴住居跡出土縄文土器観察表(1)

No	グッド	厨	番号	器種	遺存度	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考
1	SB1		370.1	深鉢	胴部片	条痕	条痕	3～5mm大の砂粒多い	良好	にぶ黄褐色	
2	"		393	"	"	"	"	1mm大の砂粒多い	普通	にぶ黄褐色	
3	"		W044	"	"	不明	ナデ	細かな砂粒多い	"	褐色	
4	"		W003	"	口縁部片	縹糸文	"	0.5～1mmの砂粒多い	良好	褐灰色	
5	"		260	"	胴部片	"	"	0.5mmの砂粒含むが密	"	灰黄褐色	
6	"		369.1	"	口縁部片	ナデか	"	1mmの砂粒多い	もろ	灰褐色	
7	"		300	"	胴部片	縹糸文	"	細かな砂粒多い	ややもろ	にぶ黄褐色	
8	"		W017	"	"	ナデ	"	0.5mm程の砂粒多い	普通	にぶ褐色	
9	"		342	"	口縁部片	不明	"	0.5～2mmの砂粒多い	ややもろ	褐色	磨耗著しい
10	"		343	"	胴部片	ナデ	"	0.5mmの砂粒おおい	普通	褐色	
11	"		345	"	"	"	"	1mmの砂粒わずかに含	"	褐色	
12	"		330	"	"	不明	"	細かな砂粒多い	"	にぶ褐色	
13	"		008	"	"	ナデ	"	1mm大の砂粒含む	"	にぶ褐色	
14	"		W016	"	"	"	"	2mm大の砂粒含む	良好	暗赤褐色	
15	"		261	"	"	ナデか	"	1.2mmの砂粒含む	もろ	にぶ黄褐色	内面剥離
16	"		328	"	"	ナデ	"	1mm以下の砂粒多い	普通	浅黄色	
17	"		W012	"	"	"	"	細かな砂粒多い	"	にぶ褐色	
18	"		W011	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	"	灰黄褐色	
19	"		298	"	"	"	"	1mm以下の砂粒多い	堅緻	黒色	内面にぶ黄褐色、縦目
20	"		061	"	"	"	"	細砂、2mmの砂粒含む	普通	にぶ黄褐色	
21	"		058	"	"	"	"	細かな砂粒多い	"	にぶ黄褐色	
22	"		057	"	"	"	"	0.5mmの砂粒含む	良好	灰褐色	
23	"		106	"	"	"	"	1mm大の砂粒多い	もろ	にぶ褐色	
24	"		105	"	"	"	"	0.5～2mmの砂粒多い	"	にぶ褐色	
25	"		299	"	"	"	"	1～3mmの砂粒多く粗い	ややもろ	黒色	内面にぶ黄褐色
26	"		W013	"	"	"	"	2.3mmの砂粒含む	普通	にぶ褐色	
27	"		060	"	"	"	"	2～4mmの砂粒多い	ややもろ	灰褐色	
28	"		084	"	"	"	"	細かな砂粒多い	良好	褐色	
29	"		347	"	"	"	"	細かな砂粒多い	"	褐色	
30	"		007	"	"	"	"	細かな砂粒多い	"	褐色	
31	"		423.2	"	口縁部片	縄文+ナデ	ナデか	2.3mmの砂粒含む	普通	褐色	
32	"		319	"	"	"	ナデ	細かな砂粒。雲母含む	良好	灰褐色	
33	"		011	"	"	"	"	1mm内外の砂粒多い	普通	褐灰色	
34	"		006	"	胴部片	"	"	1.2mmの砂粒多い	"	にぶ褐色	
35	"		304	"	"	不明	"	細かな砂粒含む	良好	浅黄褐色	
36	"		003	"	"	縄文+ナデ	"	1mmの砂粒含む	普通	にぶ黄褐色	
37	"		004	"	"	"	"	1.2mmの砂粒わずか含	"	にぶ褐色	
38	"		W018	"	口縁部片	"	"	1～3mmの砂粒多い	"	灰褐色	
39	"		324	"	胴部片	ナデ	"	微少な砂粒多い	堅緻	淡黄色	
40	"		083	"	"	"	"	微少な砂粒有るが密	良好	にぶ黄褐色	
41	"		423.6	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	普通	灰褐色	
42	"		W032	"	"	"	"	細かな砂粒多い	良好	褐色	
43	"		227	"	口縁部片	"	"	0.5mmの砂粒多い	普通	灰褐色	
44	"		062	"	"	"	"	微少な砂粒多い	"	灰褐色	
45	"		322	"	"	"	"	1mm前後の砂粒多い	ややもろ	浅黄色	
46	"		373	"	"	"	"	0.5mmの砂粒有るが密	良好	褐色	
47	"		381	"	胴部片	"	"	1mmの砂粒含む	普通	にぶ黄褐色	外面スス付着
48	"		374	"	口縁部片	"	"	0.5mmの砂粒多い	普通	褐色	
49	"		017	"	胴部片	"	"	1mm大の砂粒多く粗い	"	にぶ赤褐色	
50	"		W057	"	"	不明	"	1～3mmの砂粒多く粗い	もろ	にぶ褐色	
51	"		224	"	口縁部片	ナデ	"	1.2mmの砂粒有るが密	良好	黄褐色	
52	"		426.1	"	胴部片	"	"	1mm砂粒含む	普通	褐色	
53	"		167	"	"	"	"	細砂あるが密	ややもろ	褐色	
54	"		026	"	"	"	"	1mm大の砂粒含む	普通	褐色	

第10表 第1号竪穴住居跡出土縄文土器観察表(2)

No	グッド	層	番号	器種	遺存度	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考
55	"		366.1	"	口縁部片	"	"	1~3mmの砂粒含む	"	浅黄橙色	
56	"		254	"	胴部片	"	"	細砂多い	"	灰褐色	
57	"		291	"	"	縄文	"	細砂多い	"	黄橙色	
58	"		W004	"	口縁部片	ナデ	"	1mmの砂粒含む	良好	にぶ黄橙色	
59	"		001	"	"	縄文+ナデ	"	2mm以上の砂礫多い	"	にぶ橙色	スス付着
60	"		012	"	"	"	"	1~3mmの砂礫含む	普通	灰褐色	
61	SBI		W007	深鉢	口縁部片	縄文+ナデ	ナデ	1mmの砂粒含む	普通	橙色	
62	"		018	"	胴部片	"	"	1cmの小礫含む	"	暗赤褐色	
63	"		146	"	"	ナデ	"	1mm内外の砂粒多い	良好	黄橙色	
64	"		005	"	"	"	"	1~5mmの砂礫が多い	"	暗褐色	
65	"		002	"	"	"	"	密。蛭母含む	"	にぶ黄橙色	

2. 第1号土壌(第28図)

46H'グリッドに位置する。第III層上面で確認した。不整形な卵形のプランを呈し、長軸約1.7m、短軸約1.3m、深さ約0.5mである。長軸を北北西に向ける。上層部分に人頭大の自然楕円礫(濃飛流紋岩製)が集中しており、この中に混じって大型の打製石斧が2点出土した。

3. 第2号土壌(第29図)

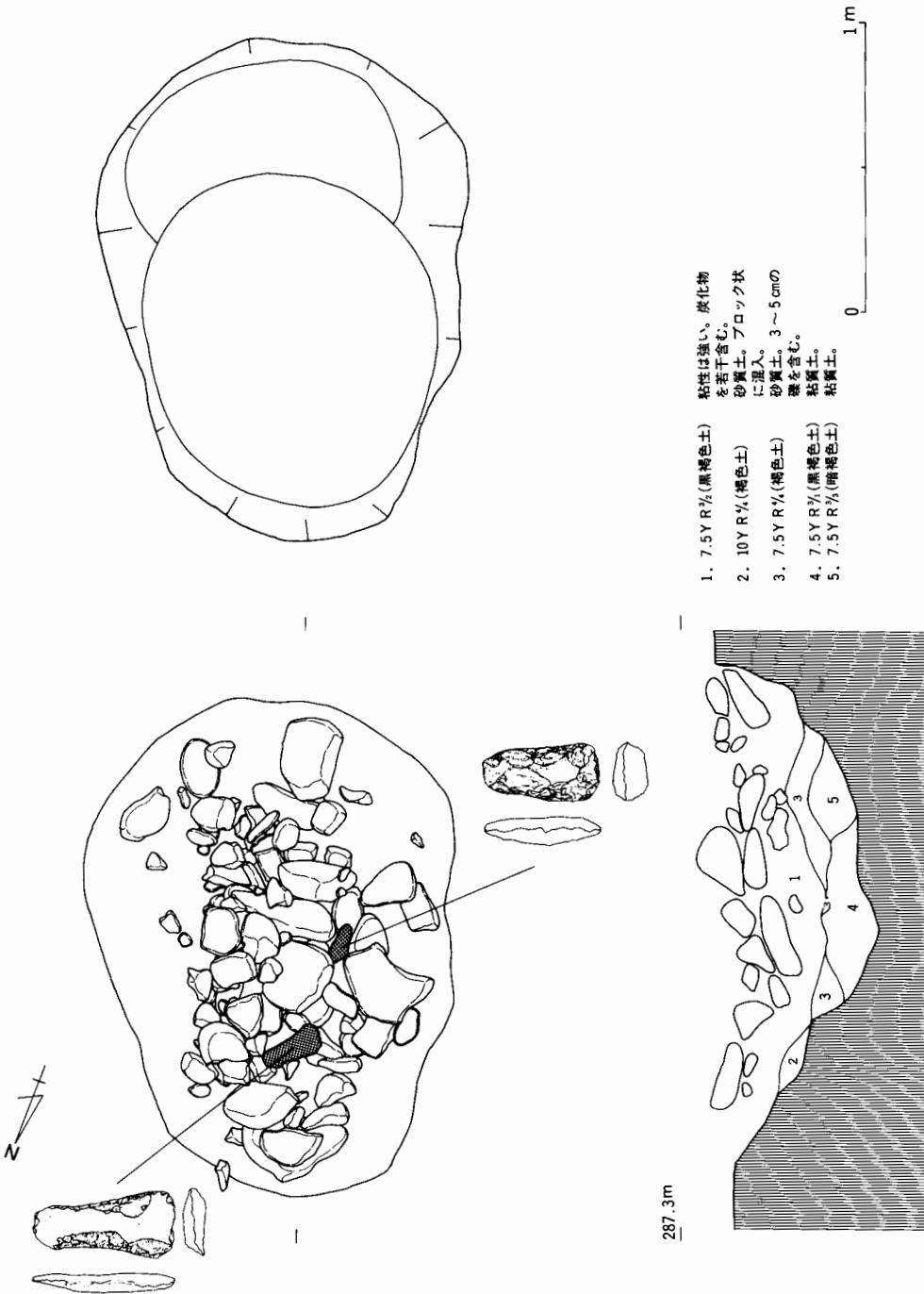
48I'・J'グリッドに位置する。第III層上面で確認した。北部を攪乱されているが、おそらく長方形のプランを呈すると考えられる。現存で縦軸約1.9m、横軸2.2mである。西部にややプランをずらして扁平な人頭大の楕円礫(濃飛流紋岩製)の集中がみられるが、本来は第1号土壌と同じ性格のものと考えられる。北部に焼けて硬化した部分が認められた。

4. 焼礫集積遺構(第30・31図)

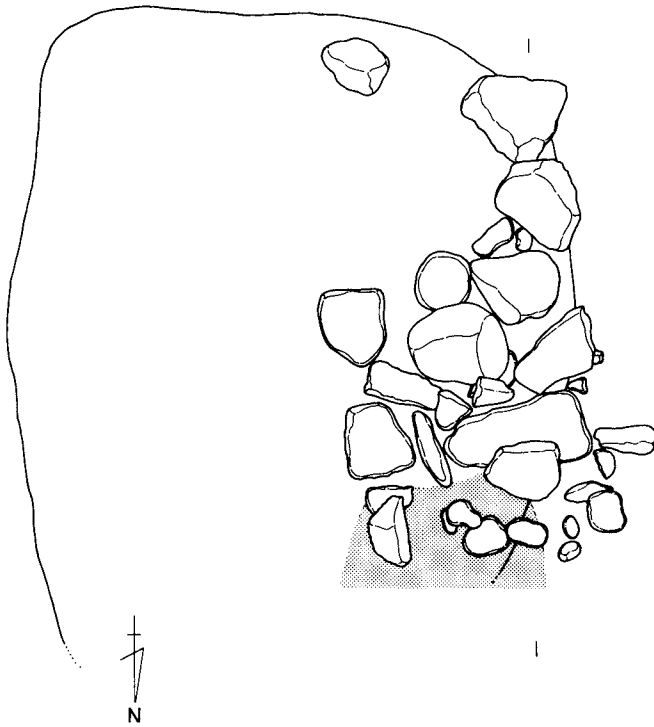
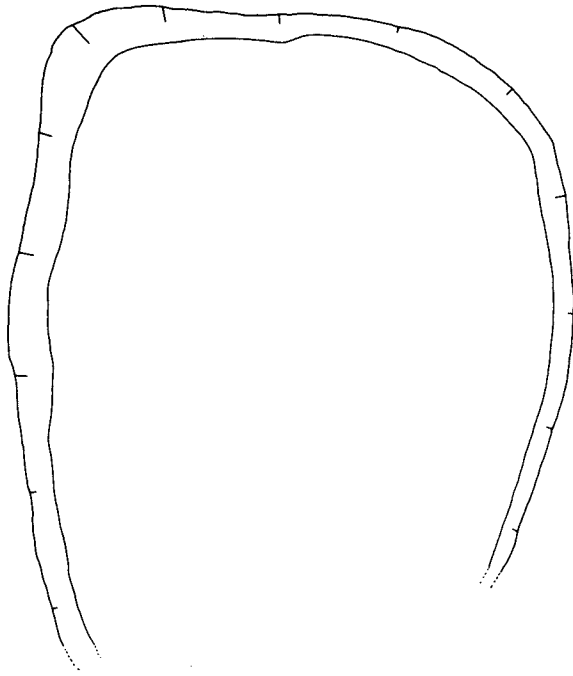
第1号焼礫集積遺構(第32図)

A区-49L'グリッドのやや南西よりに位置する。プランからは掘り込みは観察できなかったが、セクションからの観察結果からは中央部の最深部で約10cmの深さを持つ皿状土壌が伴っていたと考えられる。この楕円形を呈する皿状土壌の中からは404個の礫が出土している。礫の平面分布はほぼ皿状土壌の掘り込みの範囲に限られるが、周辺に散在する礫までを含めると南北1.3m、東西1.5mに及ぶ。中心部には礫のややまばらな部分が存在する。断面の分布範囲は約10cmで土壌上表面のみに分布している。礫の在り方は拳大程のものが大部分であり、100

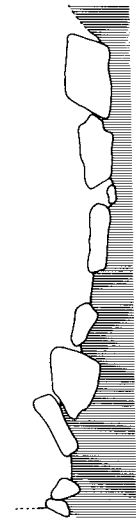
gに満たない礫が主体を占め、平均重量は62.4gである。230個の礫に赤化が(57%)、8個の礫にタール状附着物が(2%)認められた。また、63個の礫が完形であったが、他はすべて破損しており、接合作業を行なった結果 121点の資料の間で接合資料が得られた。接合後の礫の総



第28図 第1号土壌



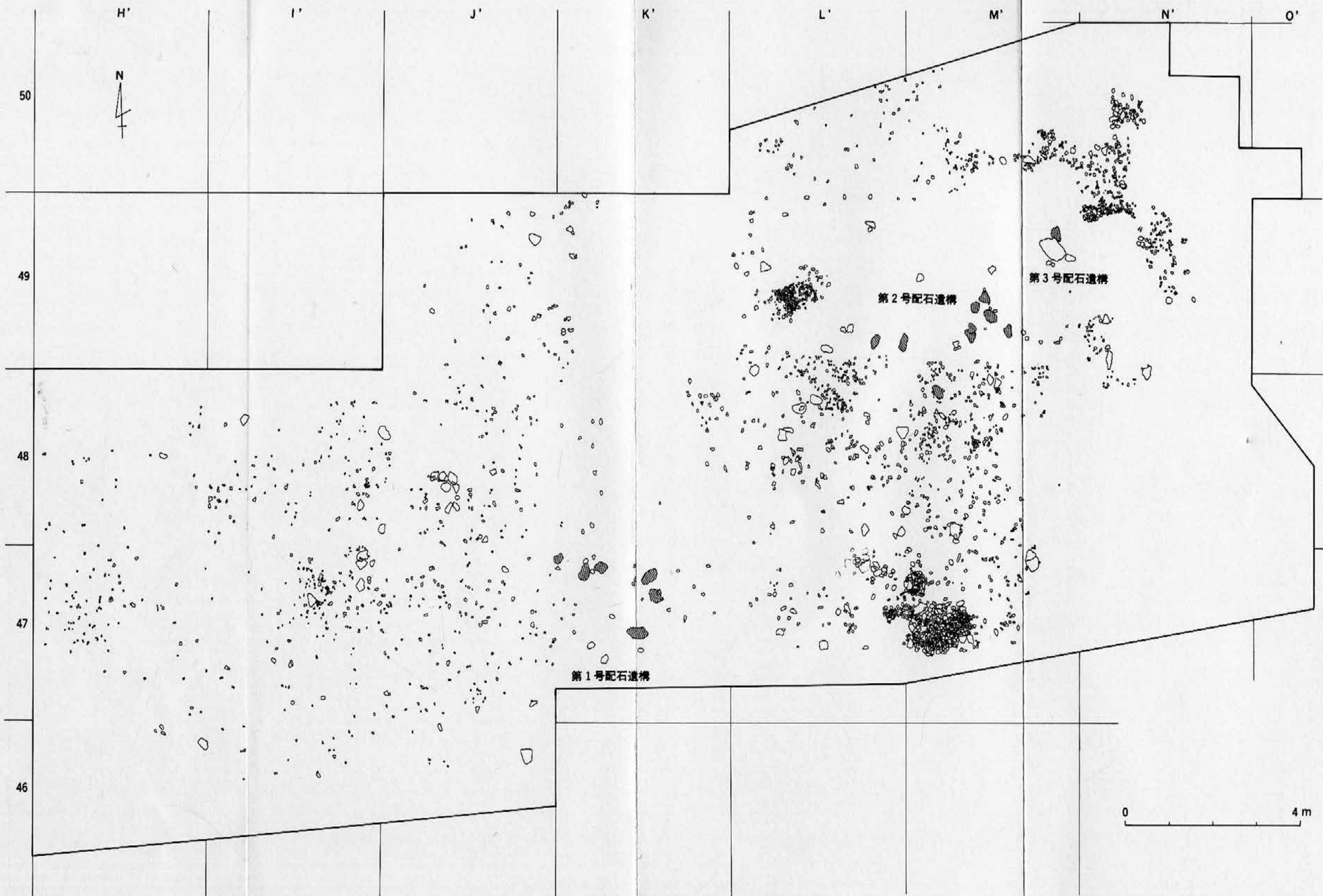
287.8m



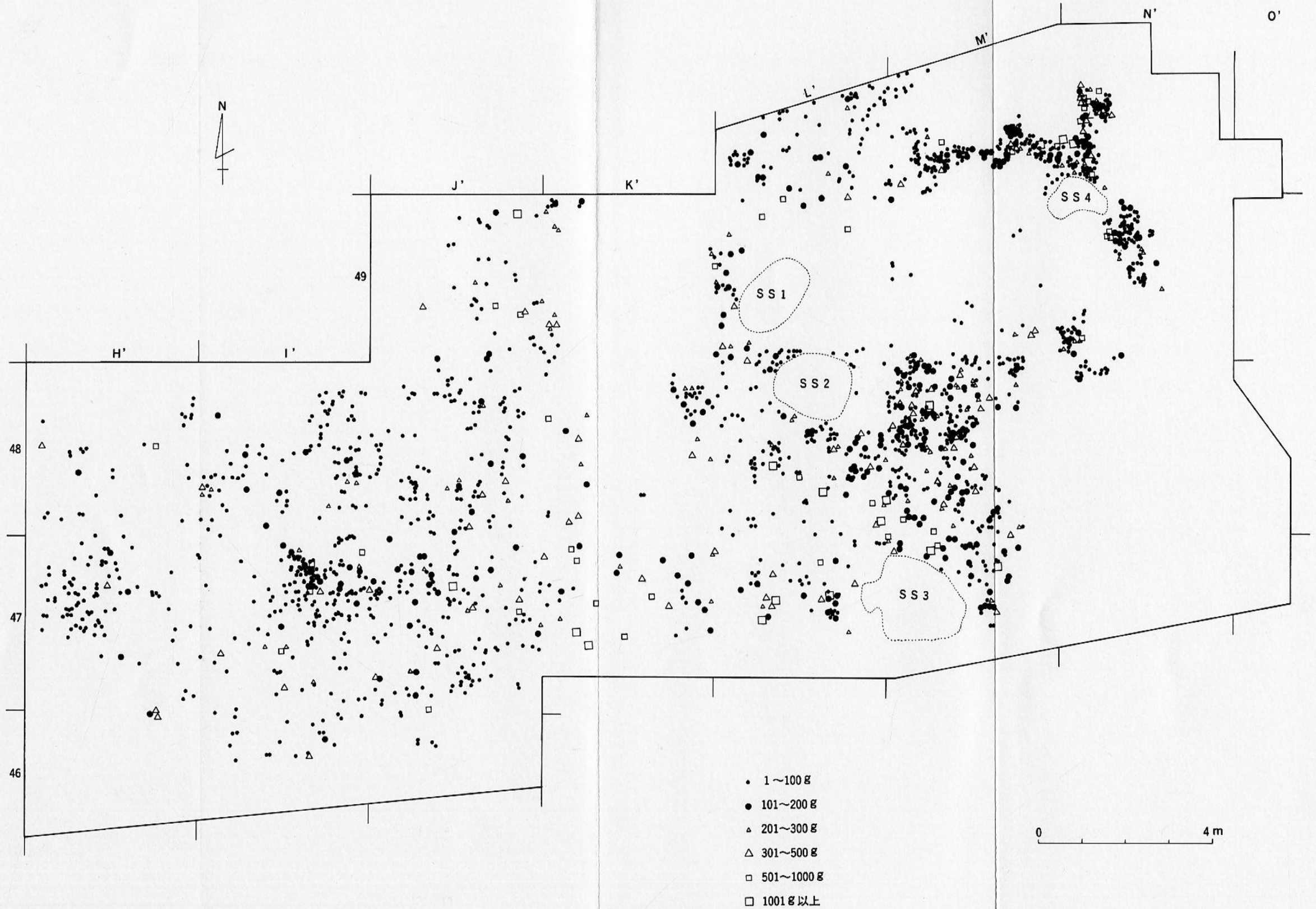
烧土

0 1 m

第29图 第2号土壕



第30图 第VI層磔・配石分布图



第31图 重量別礫分布图

数は 341個で、完形を呈する礫は84個となった。なお、接合関係については本焼礫集積遺構内で帰結している。また、中央の空間部を挟んで両側で接合する礫がかなり存在しており、その使用過程が想起される。掘り込み覆土中からは焼土・炭化物が若干検出されている。なお、本焼礫集積遺構南西隅より早期前半のものと思われる楕円形押型文土器片が出土している。

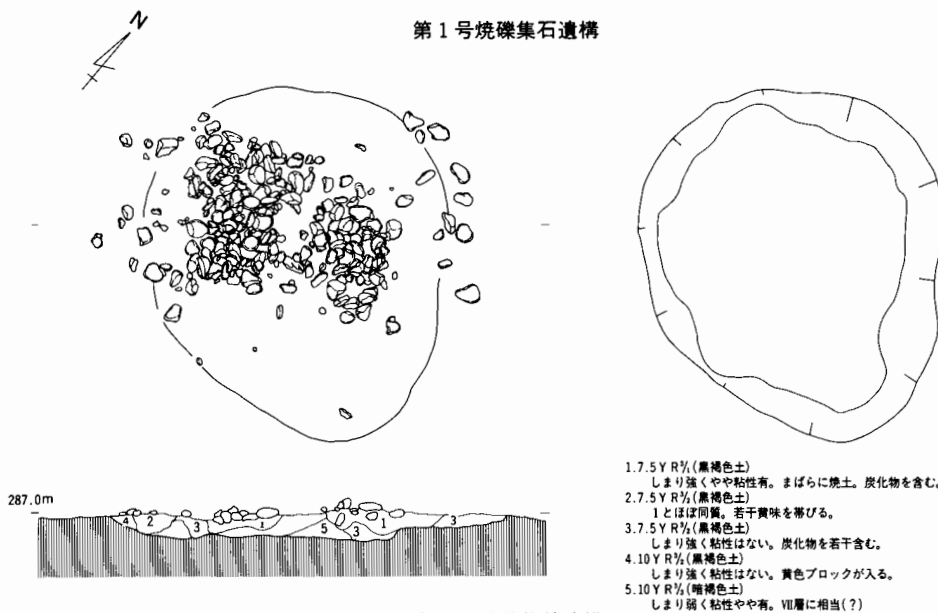
第2号焼礫集積遺構（第32図）

A区-48・49L'グリッドに位置する。北側で第1号焼礫集積遺構に隣接する。楕円形を呈する皿状土壌の中から 121個の礫が出土している。礫の平面分布は疎らであり、皿状土壌の範囲に限れるが、人頭大の礫1個が掘り込みよりやや南西へ外れた状態で出土した。分布範囲は南北 1.5m、東西 1.5mに及び、断面の分布範囲は約10cmであり、土壌上表部だけに分布している。礫の在り方は、人頭大の礫2個の他はすべて拳大の礫で 100g以下の礫が主体を占め、平均重量は43.8gである。78個の礫に赤化が(65%)、3個の礫にタール状付着物が(3%)認められた。また、84個の礫が完形であり、その率は非常に高い。残りの破損礫について接合作業を行なった結果、7点の資料の間で接合資料が得られた。接合後の礫の総数は 114個で、内、完形を呈する礫は86個となった。なお、接合関係については本焼礫集積遺構内で全て帰結している。掘り込み覆土中の礫の最底部レベルに焼土が若干観察された。

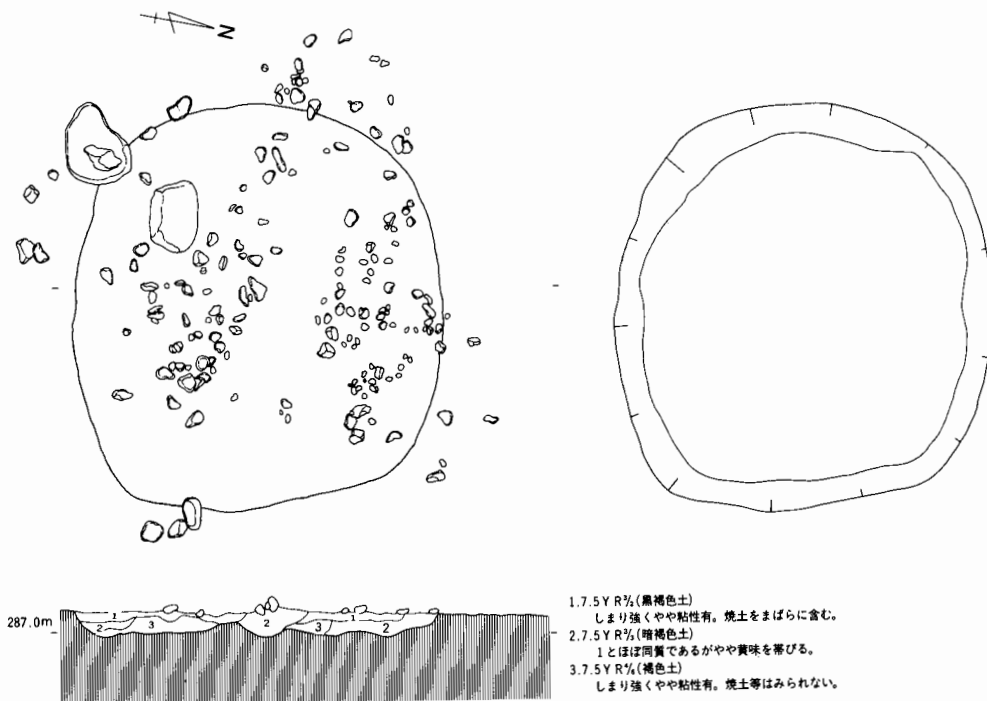
第3号焼礫集積遺構（第33図）

A区-47L'・M'グリッドに位置する。楕円形を呈する皿状土壌の中から 1,094個の礫が出土している。土壌底部には人頭大の礫が敷設されたかのように出土している。礫の平面分布は皿状土壌の範囲に限られ、前述の土壌底部施設直上まで密集累積している。礫の分布範囲は南北 1.3m、東西 1.6mに及び、断面の分布範囲は30cm弱で本遺跡の焼礫集積遺構の中で最大規模を誇る。礫の在り方は、拳大程のものが大部分であるが、上部にも人頭大の礫が散在している。重量は 100gに満たないものがやはり多いが、100~200g、200~300gの範疇のものも多く用いられている。また、土壌底部の人頭大の礫が存在するため 1,000g以上にもピークが認められる。平均重量は 158gである。529個の礫に赤化が(48%)、2個の礫にタール状付着物が(0.2%)認められた。442個の礫が完形であり、他の破損礫について接合作業を行なった結果、323点の資料の間で接合資料が得られた。接合後の礫の総数は 771個で、内、完形を呈する礫は 515個となった。なお、接合関係については本焼礫集積遺構内で全て帰結している。掘り込み覆土中からは焼土・炭化物が多量に検出された。また、覆土中より石鏃(チャート製)が1点出土している。

第1号焼礫集石遺構

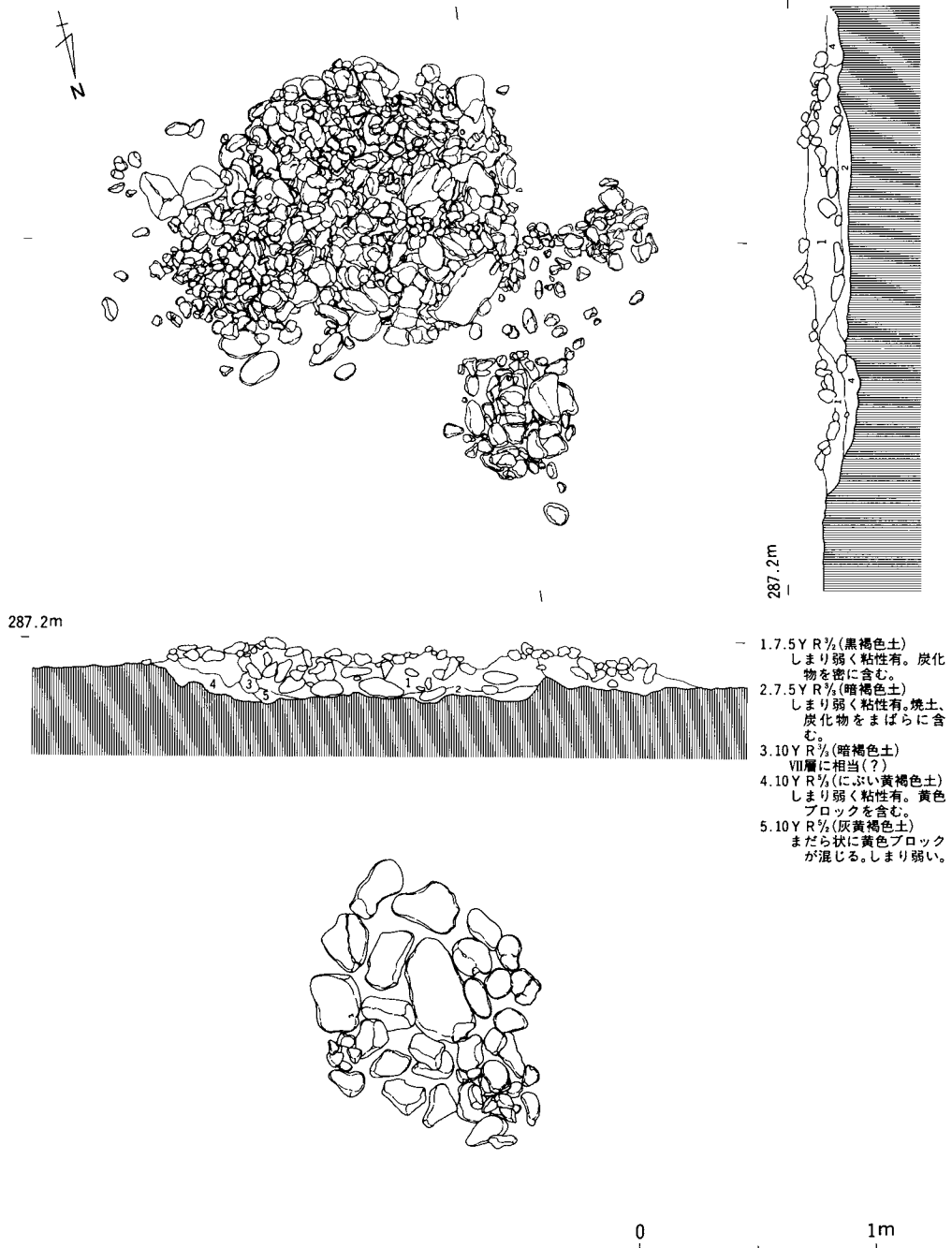


第2号焼礫集石遺構



0 1 m

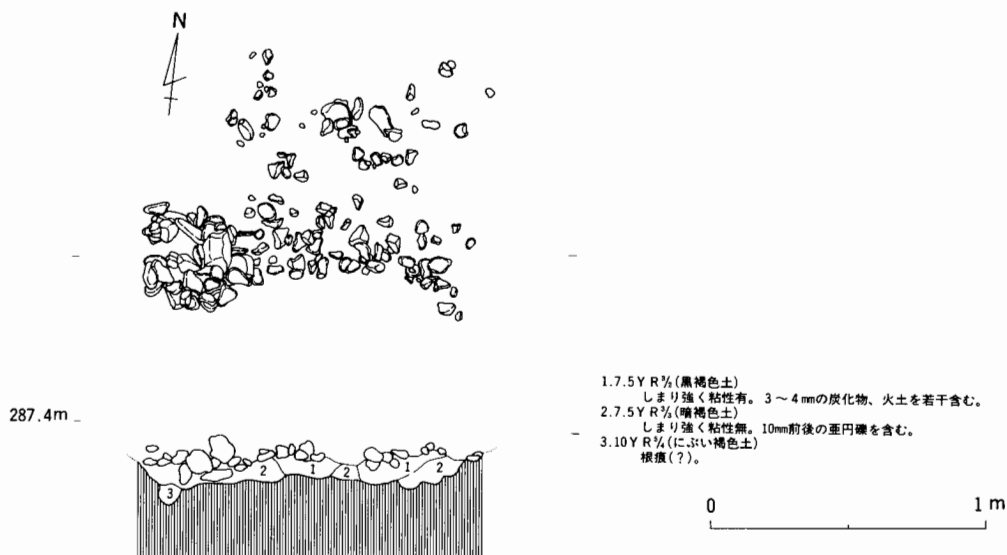
第32図 第1・2号焼礫集石遺構



第33図 第3号焼磔集積遺構

第4号焼礫集積遺構 (第34図)

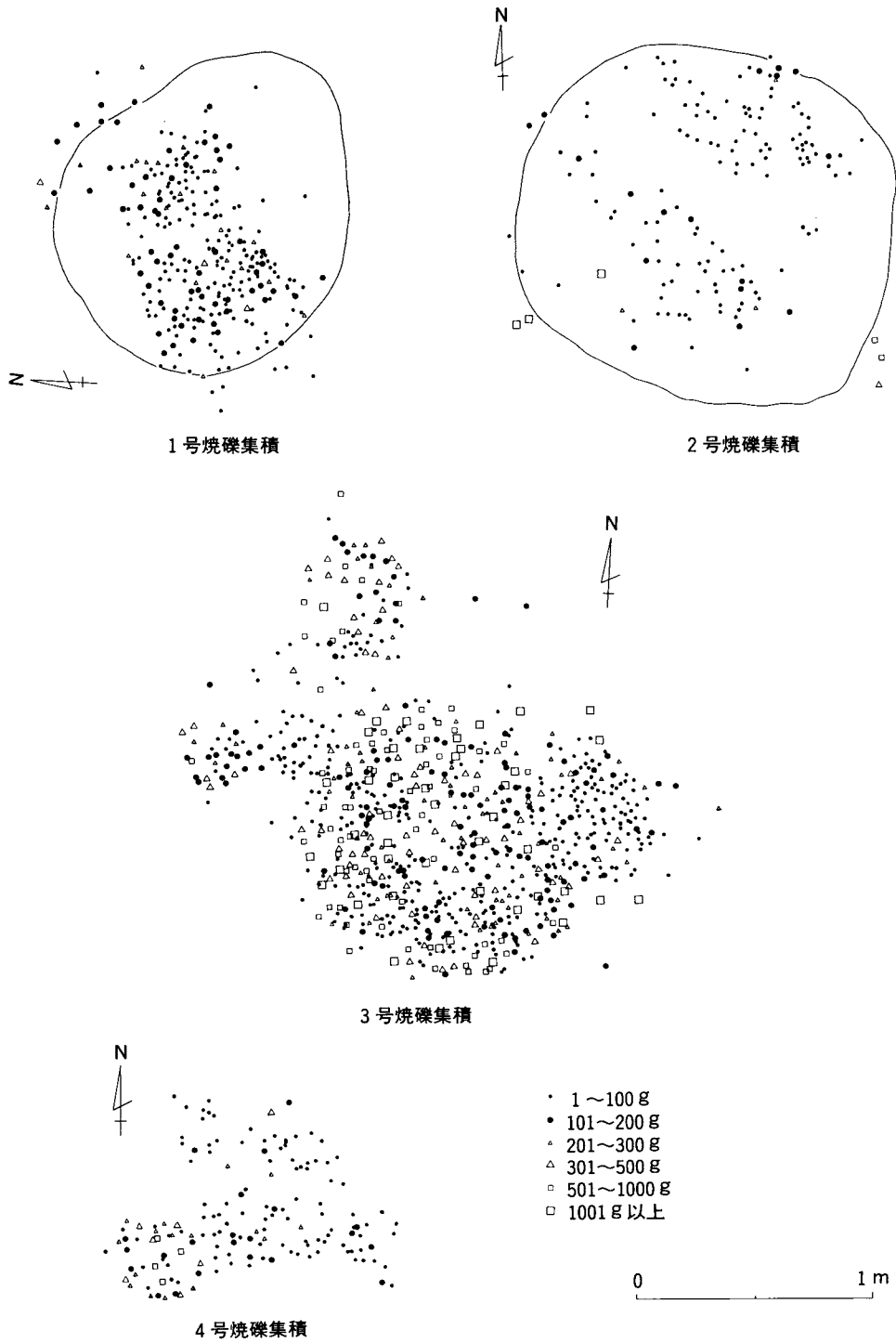
A区-49N'グリッド北西に位置する。北西部を現代の井戸によって攪乱を受けているためにプランから掘り込みをとらえる事はできなかったけれども、断面図から判断すると浅い掘り込みを持つ皿状土壌が存在していたと考えられる。この皿状土壌の中から156個の礫が出土している。礫の平面分布範囲は南北0.8m、東西1.2mであるが、本来は北側への広がりが想定される。断面の分布範囲は約15cmで、土壌上表面のみに分布している。また、本焼礫集積西部に人頭大の礫が集中している箇所が認められる。礫の在り方は拳大程の礫が大部分で、100gに充たない礫が主体を占める。平均重量は115gである。98個の礫に赤化が(63%)、1個の礫のみにタール状付着物が(0.6%)が認められた。93個の礫が完形であり、残りの破損礫について接合作業を行なった結果、10個の資料の間で接合資料が得られた。接合後の礫の総数は146個で、内、完形を呈する礫は95個となった。接合関係については、やはり本焼礫集積内で全て帰結している。なお、掘り込み覆土中上部からは焼土・炭化物が検出されている。



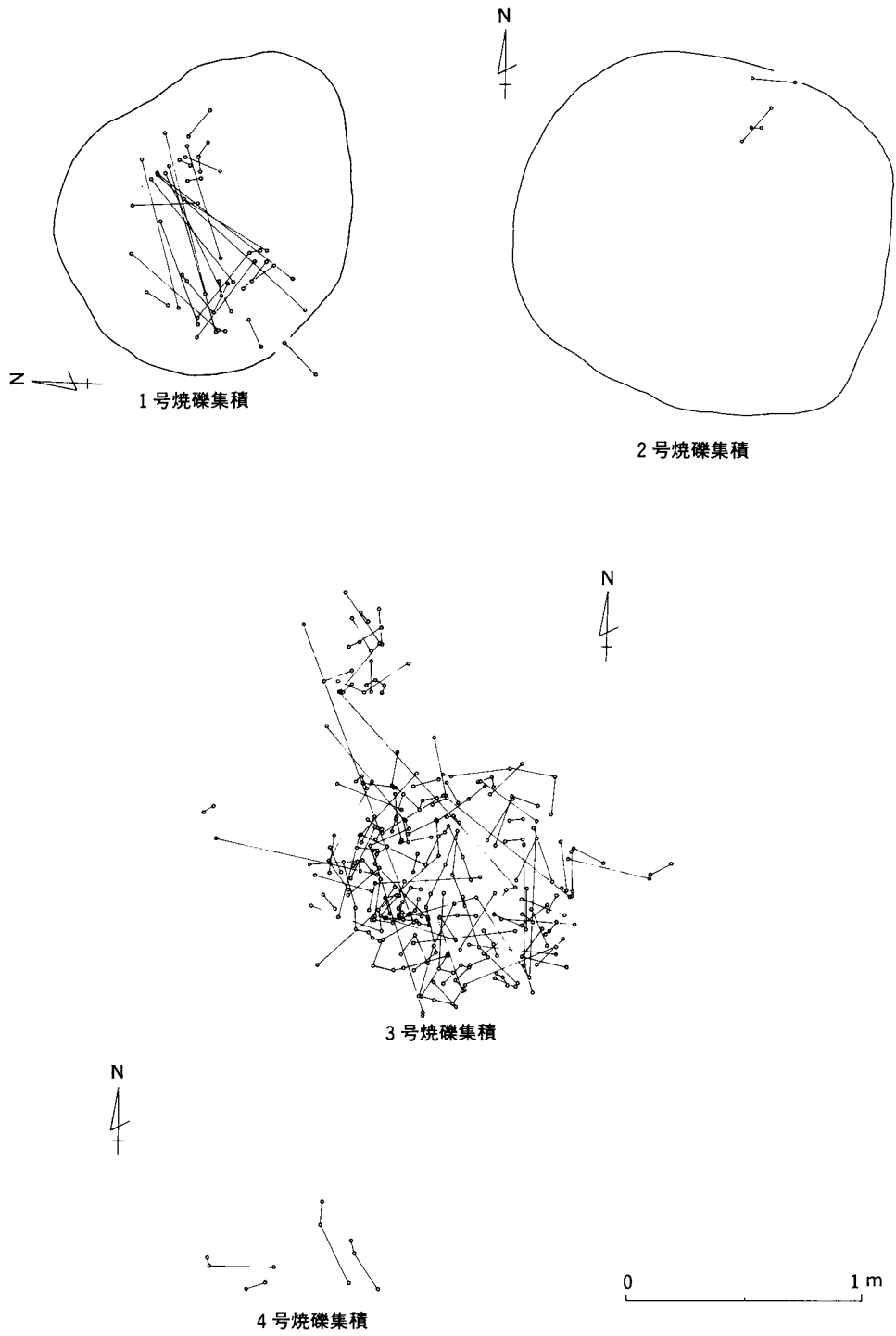
第34図 第4号焼礫集積遺構

5. 配石遺構 (第22図)

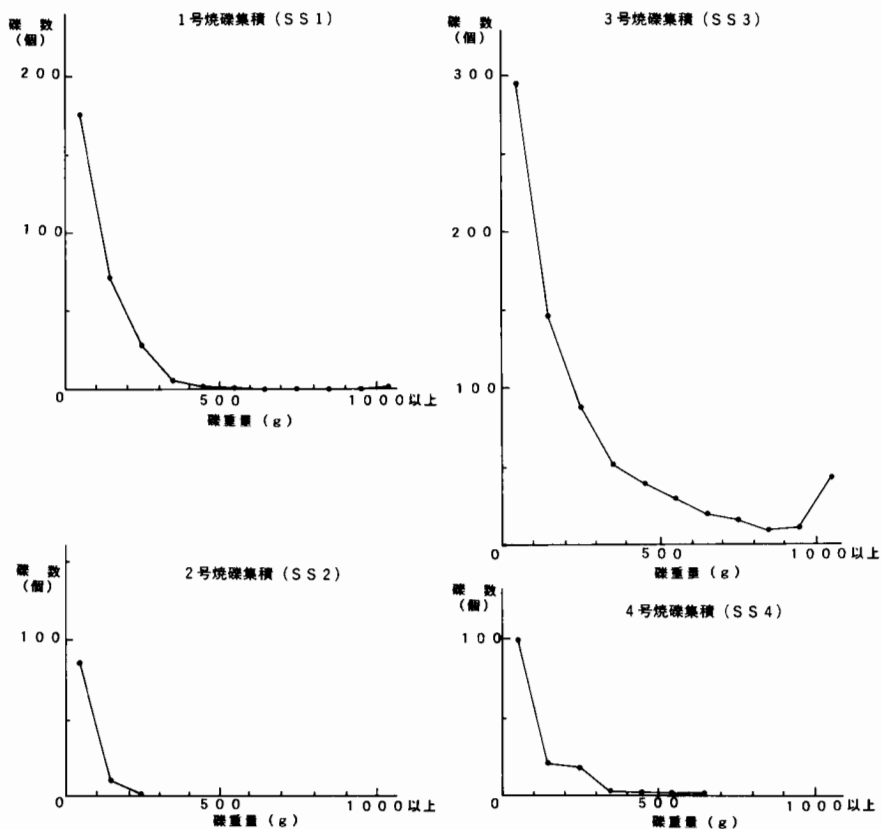
本遺跡において、配石遺構としたものは1kg以上の扁平な非焼け完形礫(濃飛流紋岩)を用い、径約1.3~2.0m程度の範囲に円形に配置したものである。47K'グリッド(第1号配石遺構)、48L'・M'グリッド(第2号配石遺構)、49L'・M'グリッド(第3・4号配石遺構)で計4基確認している。その平面分布は、第1号配石遺構については、東部及び北部を攪乱によって破壊を受けているので焼礫集積遺構の存在については確認し得ないが、他はいずれも第1・2・4号焼礫



第35図 重量別礫分布図



第36图 烧磔集積接合関係图

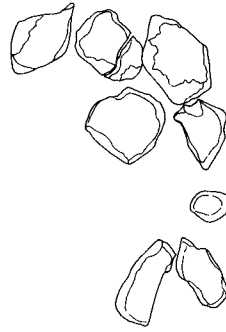
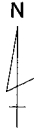


第37図 第1～4号焼礫集積遺構重量構成

集積遺構と若干その位置をずらしながらも位置するが、平面分布上相互の関連が想起される。また、礫のめぐる径内は遺物及び焼礫の分布はまばらとなる。

6. 屋外炉 (第38図)

48J'グリッドで1基確認している。1kg以上の扁平な礫(濃飛流紋岩)を7個を用いてU字形に配置している。礫はいずれも焼け礫である。礫の垂直分布はほぼ同一レベルであり、U字形に区切られた内部底面は焼けて堅くしまっていた。平面分布について見てみると、焼礫集積遺構・配石遺構とは位置を大きくずらしている。周辺からは早期前半と考えられる条痕文系土器片が出土している。(佐野康雄)



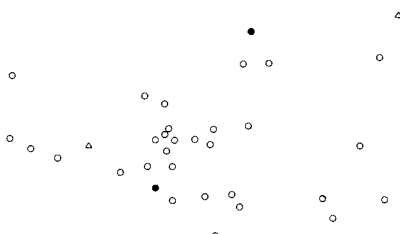
47 I 48 K

0 1 m

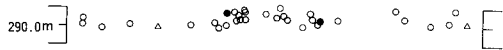
第38図 屋外炉跡



48 L 49 M



47 L 48 M



- △ 使用痕が見られる剥片
- 剥片
- 土器

0 1 m

第39図 第VIII層遺物集中地点分布図

第3節 土器・陶器類

1. 縄文土器

下開田村平遺跡の包含層からは、縄文時代草創期と前期を除く各時期の土器が出土している。有文の土器を中心に、以下早期の土器から順に記述する。なお、何れも細片のため、個体を単位とした分類は明確に行い得ず、破片の分類となっていることを断っておく。

① 早期の土器（第40図 1～19）

早期に分類される土器は、19点出土している。次のように分類する。

S 1 群－押型文土器

S 2 群－「茅山下層式」に類する土器

S 3 群－横位に羽状文を持ち「上ノ山式」に類する土器

S 4 群－無文だが、器壁がきわめて厚いものや胎土中に繊維を含むもの。

S 1 群（1～3） 押型文土器。3点あるが、いずれも胴部の破片である。1は極めて小さな楕円文が施される。焼成後の円形の穿孔が認められる。2は不整な斜格子とでも言うべき文様が施されている。3は小片であるが格子目文、あるいはネガティブな楕円文。以上の3点は出土地点もかなり近い。

S 2 群（4～6） 「茅山下層式」に類する土器。3点ある。4は斜方向の沈線が施される。5は口縁部の突起で、縄文が施される。6は厚い器壁に突帯が付けられている。焼成は不良でややもろい。

S 3 群（7～9） 横方向の羽状文を施した土器。「上ノ山式」土器に類するものである。いずれも、短い沈線による横方向の羽状文を持つ。胎土中には、植物の繊維を多く含む。

S 4 群（10～16） 無文であるが、器壁の厚さや胎土中に大量の繊維を含むことから早期の土器であると判断した土器を一括する。10～15は胎土中に大量の繊維を含む。16は器壁の厚さから早期の土器と判断した。

底部（17～19） 器壁がきわめて厚いことなどから早期の土器の底部と考えられるものが3点存在する。

② 中期の土器（第41図 20～174）

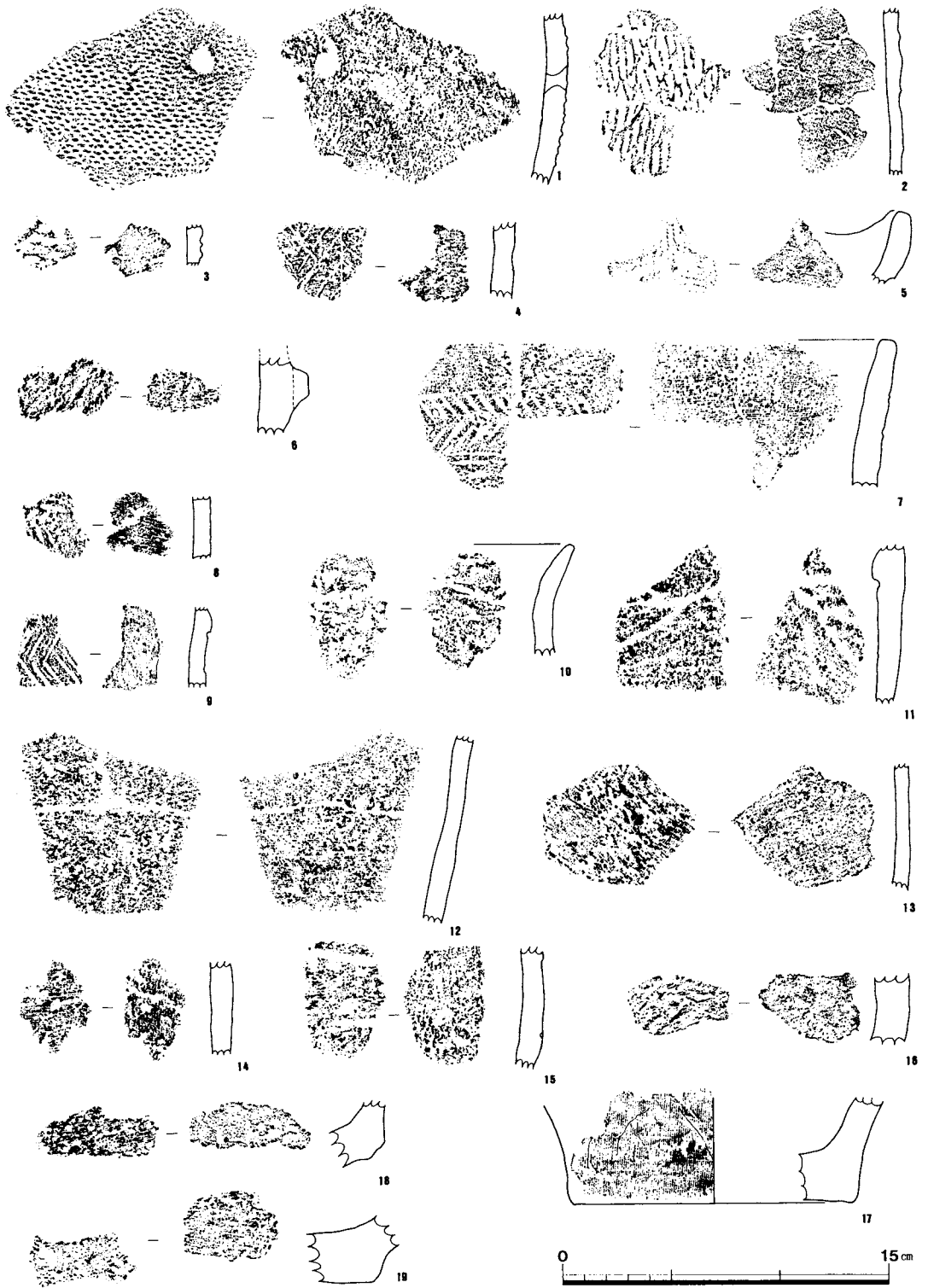
中期の土器を以下のように分類する。

C 1 群－半截竹管状工具による沈線、爪形文を持つもの。

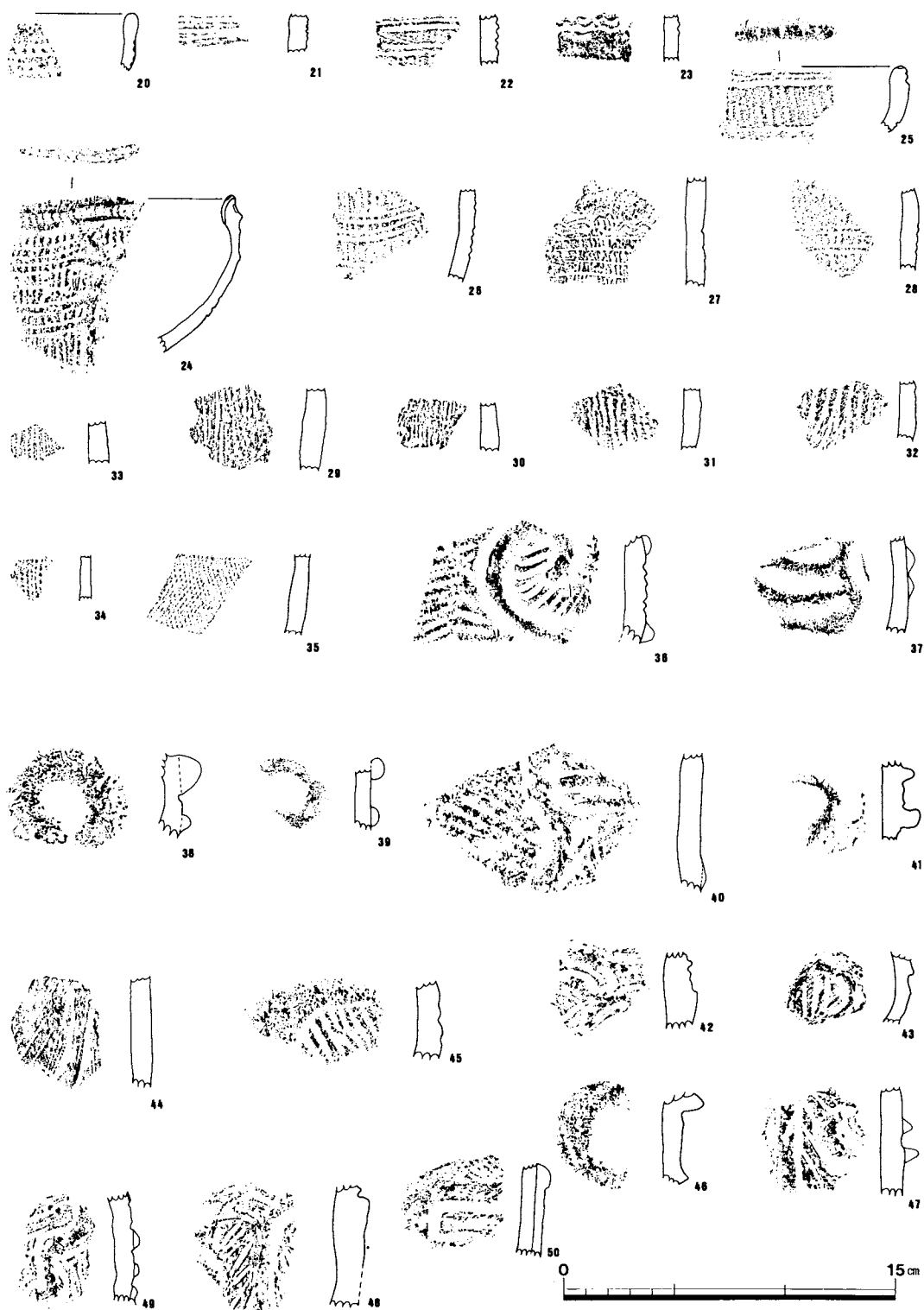
C 2 群－口縁部に渦文や区画文を持つもの。

C 3 群－磨消縄文を持つもの。

C 4 群－無文で沈線のみを持つもの。



第40図 包含層出土縄文土器(1) S1~4群



第41図 包含層出土縄文土器(2) C1・2群

C 5 群—刺突文、爪形文を持つもの。

C 6 群—押し引きの沈線によって特徴付けられるもの。

C 1 群 (20~35) 半截竹管状工具による平行沈線文や爪形文を特徴とするものを本群とし、次のように細分する。

a 類—地文を持たず、半截竹管による平行沈線文、爪形文をもつもの。

b 類—捺糸文を地文とするもの。

a 類 (20~23) 20はΣ字状の原体による押し引きが施されている。21・22は半截竹管状工具による平行沈線文の間に爪形文が施されている。23は半截竹管状工具による波状文が見られる。

b 類 (24~35) 地文の捺糸文を特徴とする土器である。24は口縁部の破片で、口縁端部及び外面口縁部以下の隆線に沿ってC字状の爪形文を施す。半截竹管状工具による平行沈線文も施されている。25も口縁部の破片で、捺糸文を地文とし平行沈線を施す。口縁端部には刻目がやや疎に施されている。26は連弧文と思われる。27には直線文と波状文が施され、28は直線文のみが認められる。29~35は胴部の破片で地文の捺糸文のみが認められるもので、本群に含めておく。本群土器は、中国・近畿に中心的に分布する船元・里木系の土器と考えられ、東海の編年では「中富Ⅰ・Ⅱ式」に比定できよう。

C 2 群 (36~81) 口縁部文様帯に、渦文や渦文に取り付く弧状文、あるいは区画文が認められるもの及び羽状沈線文を特徴とする土器を本群とする。本群土器は、東海西部の編年では、「咲畑式」から「山の神式」までの間に比定できるものであると考えるが、小片のため詳細は知り得ない。取り合えず、以下のように細別して記述する。

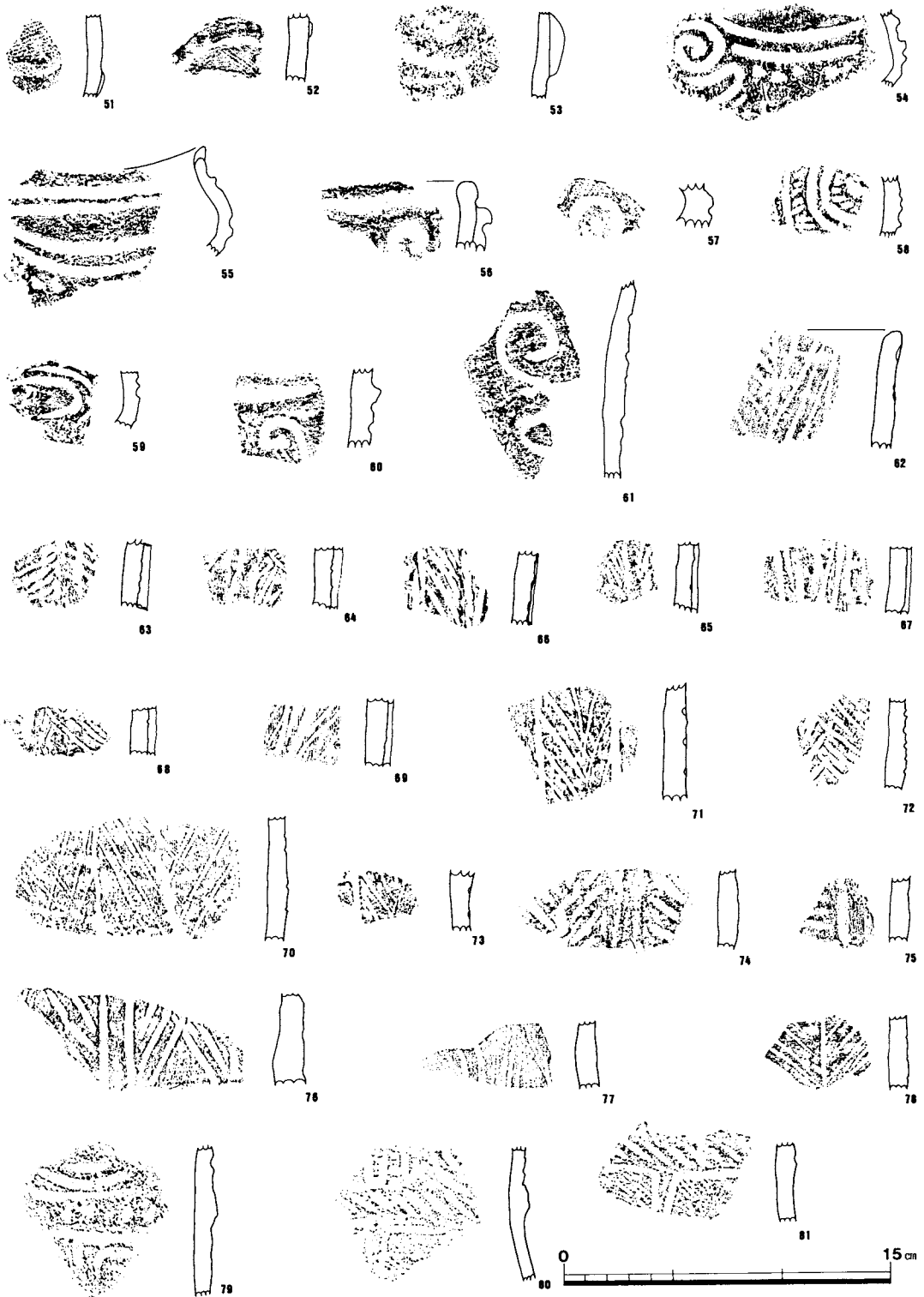
a 類—上記の文様を隆帯によって施すもの。

b 類—同じく沈線によって施すもの。

c 類—口縁部から羽状文を施すもの。

a 類 (36~53) 隆帯によって渦文あるいは弧状文を施した破片は4点ある。36は渦文の内部を沈線によって埋めている。37は渦文にとり付く2条の弧状文を持つ。38・39は渦文のみの破片で、区画文等を為すものは、明確に文様を知り得るものがなく、口縁部付近の破片のもので、隆帯が認められるものを一括してこの類とする。区画の内部を斜方向の沈線で埋めるものが多い。

b 類 (54~61) 沈線によって渦文を描くものは8点ある。54はつよく内湾する口縁に渦文とそれにとり付く弧状文を残す。横長の区画文も見られる。55は渦文に付く2条の弧状文とさらにその下位に連弧文が2条見られる。共に「咲畑式」と言えよう。56は口縁部の破片であり、57は口縁端部を残さないが口縁直下の破片と考えられ、何れも粘土を貼りつけ肥厚させた上で渦文を施している。58は渦文の内部に刺突を施している。61は口縁部というよりは



第42図 包含層出土縄文土器(3) C2群

胴部であるが、ここに含めておく。

c類 (62) 素縁の口縁部から、縦位の羽状文を施したものが1点のみ存在する。

C 2群の口縁部に対応すると考えられる胴部を分類する。以下のように細分する。

胴部 a類—縦位の隆帯の間に縦位の羽状文を施すもの。

胴部 b類—縦位の沈線の間に縦位の羽状文を施すもの。

胴部 c類—横方向の隆帯に、指頭や棒状工具による押圧を加えたもの。

胴部 a類 (63~69) 本類に数えられる土器は7点ある。縦位の羽状文は、ヘラ状工具により細く深く描かれたもの(63~65)と、棒状工具により幅広で浅く描かれたものがある。

胴部 b類 (70~78) 本類に数えられるのは9点ある。a類と同様、沈線の特徴から二分することができる。78は縦位の沈線が欠損した破片であり、a類とも考えられる。

胴部 c類 (79~81) この類と考えた土器は3点ある。79は隆帯上に指頭による圧痕、80・81は棒状工具による押圧痕が認められる。円形の刺突文が施されている。いずれも焼成がやや脆く、器面が荒れた状態を呈している。

以上に述べてきたC 2群の土器は、「咲畑式」をはじめ、東の影響の強い「取組式」から「山の神式」に至る東海地方西部の中期後半の土器型式を構成する深鉢であるが、口縁部と胴部の対応関係の解る例はなく、また口縁部文様帯の破片についても小片が多く、編年上の位置が正確に決められるものは多くないために一括した。

C 3群 (82~124) 広義の磨消状文を持つ土器のうち、縄文帯や沈線の諸特徴から積極的に後期に分類できるものを差し引いた残りを本群として記述する。口縁部を次のように分類し、胴部は一括して提示する。

a類—波状口縁で、縄文帯と無文帯が上下に重なるもの。

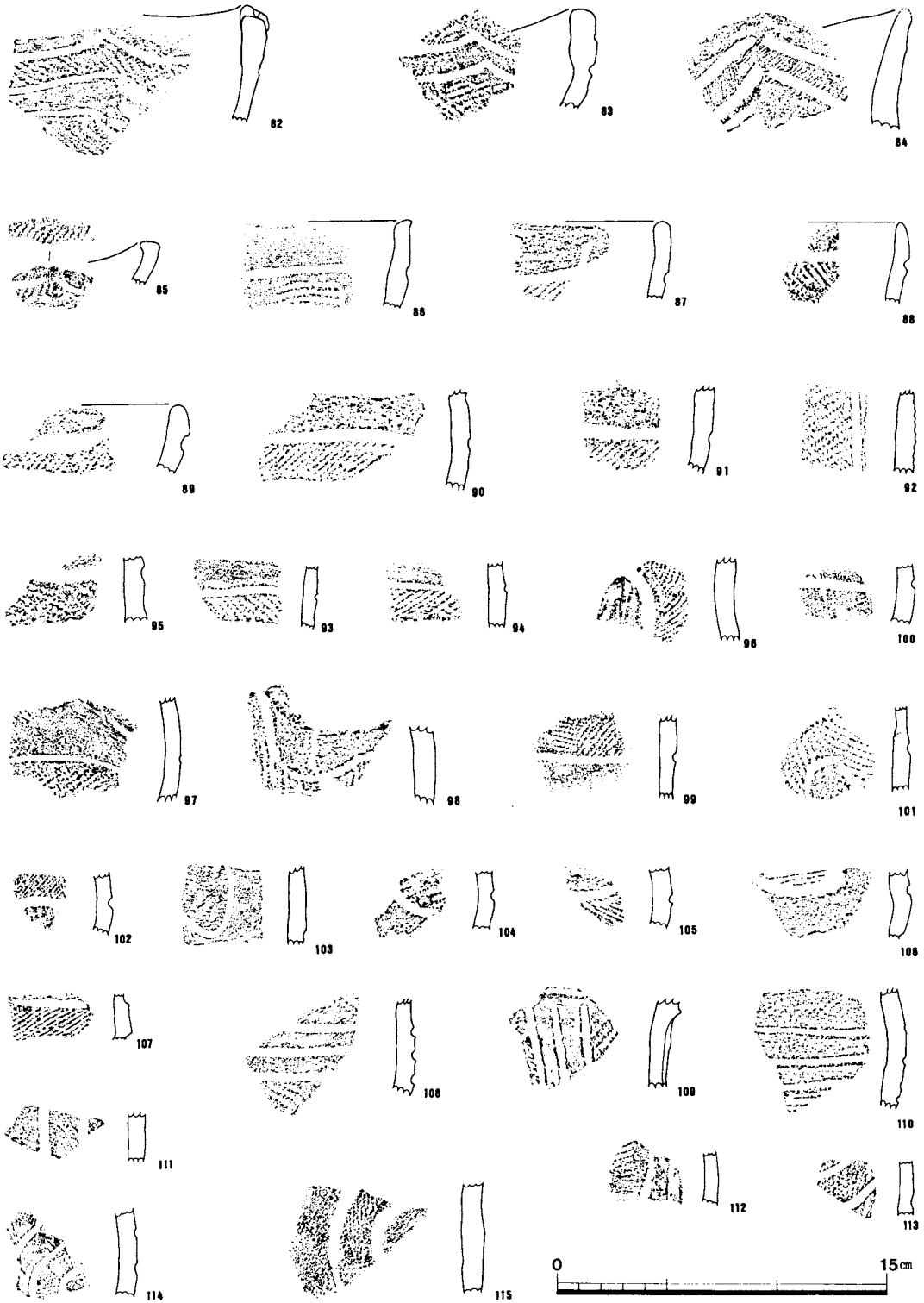
b類—水平口縁で、縄文帯と無文帯が見られるもの。

a類 (82~85) 4点ある。82は低い波状口縁のもので、波頂部口縁端部に刺突文をもつ。83は口縁部直下に屈曲を持つ。84は沈線が連続せず切れている。断面U字形の沈線は幅が広く深い。85も連続しない沈線があり、口唇部にも縄文が施されている。

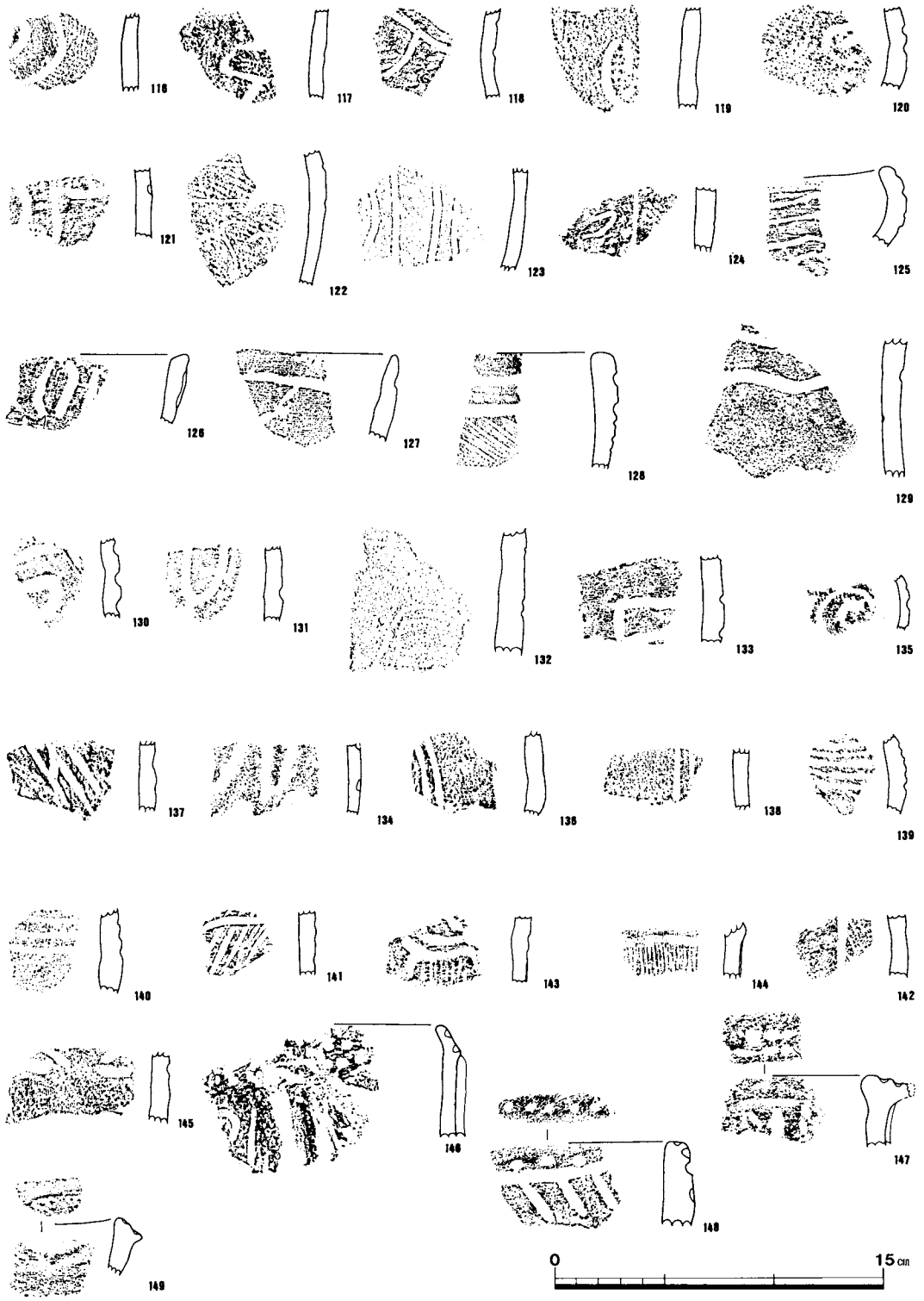
b類 (86~89) 4点あり、何れも口縁部直下が無文帯である。86は低い波状口縁を持つものの一部かも知れない。

胴部資料 (90~124) 90~106は直線的あるいは曲線的な沈線が1条のみ認められる。沈線の幅や深さはバリエーションに富む。90・91は赤褐色を呈し同一個体のものであり、口縁部89の胴部であろう。その他では縄文はLRが多い。107~113は直線的な沈線が2条ないし4条見られるものである。114~116は渦文(あるいは同心円文)に磨消縄文を施すものである。117~124の8点は沈線により描かれた文様の一部が知られる資料である。

C 4群 (125~145) 沈線のみを持つ土器を一括する。あるいは中期には属さないものもある



第43図 包含層出土縄文土器(4) C3群



第44図 包含層出土縄文土器(5) C3~5群

かもしれないが、C3群との類似からここに位置付けておく。125～128は口縁部、他は胴部の破片である。125は波状口縁に復元される。4条の沈線が施される。126は水平口縁、沈線は1条見られる。127は口縁端部が内傾する面をなし、外面には縦位の沈線が施される。129～132は2条の曲線的な文様を描く。132は沈線がきわめて細くかつ浅いものであり、他の3点とは異質である。133は2条の沈線で直線的な文様を施す。あるいはC3群に属するものの縄文が磨耗してしまったものかも知れない。134は波状文が描かれる。135は渦文である。136～140は多条の沈線が施されたものである。136～138は同一個体。141～144はC2群の胴部資料である可能性が高い。

C5群 (146～171) 刺突文や工具による圧痕によって特徴付けられる資料を一括して本群とする。146～155は口縁部、他は胴部である。146は口縁部をわずかに内側に屈折させ、そこに上下2段の円形の刺突文列をめぐらす。147は口縁部を内外に肥厚させ、外傾する面をつくりそこに2条の刺突文列をめぐらす。148は口唇部と口縁部側面に円形の刺突文列がめぐらされる。

149はへら状の工具による刺突文列が2条口縁部に施される。150も波状口縁の波頂部に3条の沈線を施し、へら状工具による刺突をしている。151は口唇部、胴部に沈線を施し、その内部をへら状の原体による刺突文でうめている。152は口縁部に3条の沈線を施し、その間に爪形状の刺突をしている。この土器は焼成が良好で、口縁端部に鋭い稜が残る。153・154は先端の尖った工具による刺突文を施す。155は棒状工具の先端による圧痕が見られる。

胴部の資料では、156～158は円形の刺突文が見られ、159は三角形の刺突が見られる。160はへら状の工具による刺突である。161は爪形文が沈線による区画の内部に見られる。162は沈線内に爪形文を施している。163は棒状工具の先端による圧痕を連続させたものである。

C6群 (172～174) 押し引き沈線によって特徴付けられる土器を一括する。172は波状口縁の波頂部であるが、口縁部を内側に屈折させ、そこに2条の押し引きによる沈線を施す。外面にも同一の原体による押し引きの沈線が認められる。173は平縁。口縁部には縄文が付けられ、その下位に横方向に押し引きされている。174は胴部の破片であるが、薄手の土器である。押し引きによる沈線が縦横にそれぞれ2条見られる。

C3群～C6群とした土器の多くは、C2群との関連が強いものであると思われ、C2群に分類されるべき土器を含んでいるかもしれない。しかし、小片であり、積極的にC2群とする根拠にも欠けるため、このような分類とした。また、その所属時期が不明確なものもあり、一部に中期に属さないものも含んでいる可能性がある。

③ 後期の土器 (第45～47図 175～214)

後期の土器を以下のように分類する。

K1群－磨消縄文系の土器。



第45図 包含層出土縄文土器(6) C5・6群, K1群

K 2 群—縁帯文系の土器。

K 3 群—注口土器

K 4 群—北陸系と考えられる土器。

K 1 群 (175~191) 何れも細片で器形も不明であるし、完結した縄文帯の見られるものがないため、縄文帯の特徴や、沈線の太さやタッチ等から積極的に後期に属すると言い得るもののみを本群とする。

口縁部を中心に以下のように分類し、胴部資料はまとめて述べる。

a 類—波状口縁のもので、沈線が口唇部にまで達するもの。

b 類—波状口縁のもので、刻目のある隆帯を口縁部に施したもの。

c 類—平口縁のもの。

a 類 (175・176) 175は波頂部が富士山形を呈し、そこから2条の沈線が施される。176は波頂部に平坦面をつくり、4条の沈線を施していると推定される。

b 類 (177・178) 同一個体の破片が2点ある。口縁端部は内外に肥厚し、そこから刻目のある隆帯を垂下させる。暗褐色を呈し、焼成は良好である。

c 類 (179~182) 4点ある。179は口縁直下が縄文帯、他は口縁直下が無文帯となっている。いくぶん内湾する口縁部である。縄文はLR。180は暗褐色を呈し堅緻焼成である。縄文はRL。181は内湾する口縁である。縄文はLR。182の縄文もLRである。181・182はあるいは低い波状口縁に復元されるものかもしれない。

胴部 (183~191) 183~185は2条の曲線的な沈線による縄文帯が見られる。縄文帯の幅は1cm前後である。186は沈線が3条認められる。187は縄文帯が磨耗しているものと考えられる。188には多条の沈線が施されている。

以上のように、K 1 群土器は、細片が多いため詳細は不明といわざるを得ないが、口縁部資料の特徴から「中津式」併行期としておく。

K 2 群 (192~211) 縁帯文系の土器を本群とする。次のように細分する。

a 類—頸部のくびれた器形で、口縁部を内側に肥厚させ一条の沈線を施すもの。

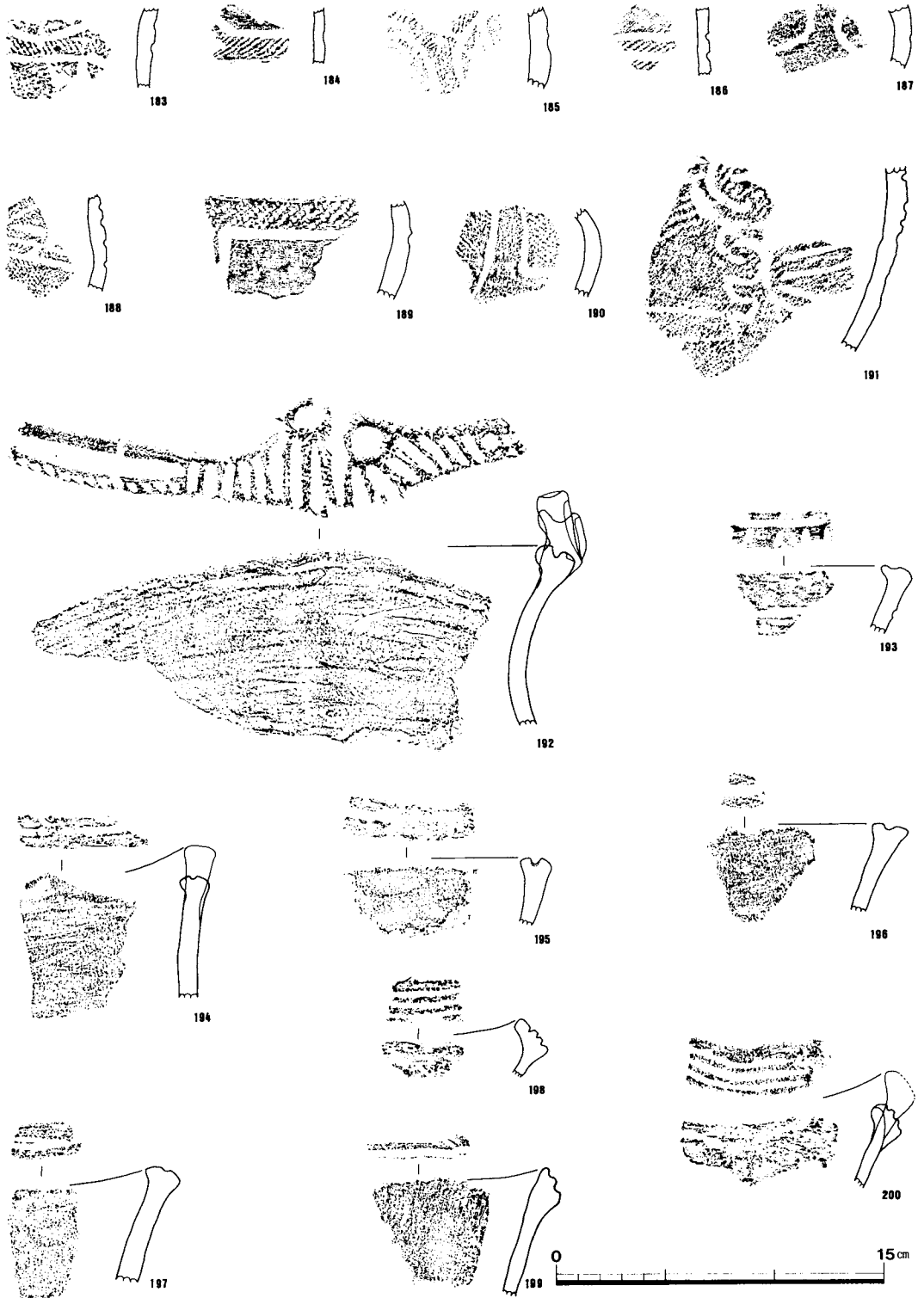
b 類—口縁部を内外に拡張し2条ないし4条の沈線を施すもの。

c 類—上記に含み得ないものを一括する。

a 類 (192~197) 口縁部を内側に肥厚させ、そこに1条の沈線をめぐらすものを本類とする。192は2個を単位とする突起の周辺に縦位あるいは斜位の沈線を施し、その他の部分は1条の沈線を巡らせ、その外側に棒状工具による押圧が巡る。くびれた頸部は無文である。

193は沈線の外側に圧痕を持つ。194は波状口縁で、波頂部に刺突文を持つ。195は沈線内に刺突が施される。196・197は沈線のみが見られる。

b 類 (198~200) 198は口縁部を内側に拡張し3条の沈線を施すものである。199・200は口



第46図 包含層出土縄文土器(7) K1・2群



第47図 包含層出土縄文土器 (8) K 2 ~ 4 群

縁部を外側に拡張している。199は2条、200は3条の沈線が施されている。

c類(201~211) 縁帯文系の土器で、以上の分類に含み得なかったものを一括して記述する。これらの土器は「類」というまとまりを持つものではないが、煩雑さをさけるため、便宜的にこうしておく。201・202は同一個体であり、口縁部を肥厚させ内傾する面をつくり、そこに3条の沈線を施すものである。203は口縁部をわずかに外折させるもので、外面は2条の沈線の間に刺突文を加える。口縁部内面に突起が付けられている。204は口縁部に押圧のみが施されている。205・206は端部を欠くが口縁部と思われる。肥厚させた部分に沈線文が施される。207は口縁部がわずかに立ち上がる。208は小さな山形を呈する口縁部に圧痕を付けている。外面は条痕調整。209は2条の沈線内に刺突が施される。

K3群(212) 注口部のみ破片が1点出土している。

K4群(213・214) 後期の土器のうち、北陸系と考え得るものを本群とする。2点ある。

213は口縁部。連弧状の文様が見られる。焼成の良い土器である。214は断面が三角形を為す隆帯とへら状の工具による沈線が見られる。

④ 晩期の土器(第48図 215~243)

以下のように分類した上で記述する。

B1群—口縁に凸帯文を持つ条痕調整深鉢形土器。

B2群—無文の精製土器。

B1群(215~240) 215~218は口縁部、219~240は胴部の破片である。215は貝殻による押圧を施した突帯を貼りつける。「五貫森式」に比定できよう。216~218は指頭による押圧が施された突帯を持ち、口唇部を面取りして平坦な面を作り出す。218は口唇部にアナグラ属の貝殻縁による押し引きが施されており、胴部には櫛状工具による条痕が施されている。これらは「樗王式」に比定されよう。本群土器の口縁部の直下の条痕の方向は、ほとんどの個体で横方向であるが、219はやや右下がりに施される。胴部の破片はいずれも極めて粗い条痕が認められる。

B2群(241~243) 3点ある。何れも器面をミガキあるいは丁寧なナデによって平滑に仕上げている。焼成も良好で、暗褐色から黒褐色を呈する。241は段を為して立ち上がる口縁部である。他の2点は素縁である。

⑤ 時期不明の土器(第49図 244~251)

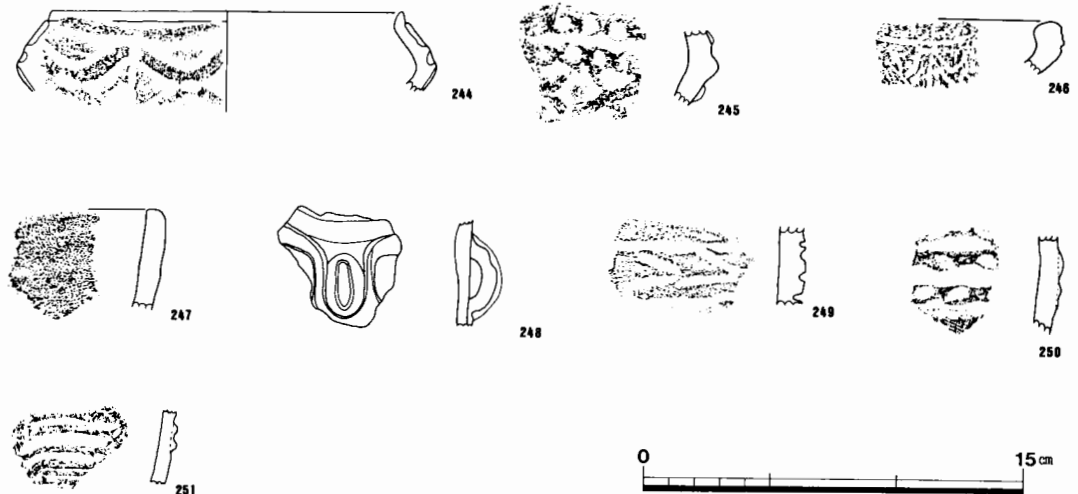
以下の8点は、所属する時期や土器型式を決めかねる土器である。中期のものではないかとも考えたが、明確に決定できないため、不明としてここで提示する。

244は強く内湾する口縁部で、口縁端部は真っすぐ立ち上がる。外面にはX字状の隆線を施



第48図 包含層出土縄文土器(9) B1・2群

し、その交点に刺突を施している。245も内湾する口縁であろう。外面には押圧のある隆帯を2条巡らし、その下位にX字状の隆線を付ける。246はやや内湾する口縁部の外面に波状の沈線が付く。口縁端部は内傾する面を持つ。247は平口縁。外面に原体不明の細かな圧痕が付く。248は把手である。249は胴部で2条の横位の沈線間に短く羽状に沈線を施している。250は押圧のある突帯を2条貼りつけたものである。251は隆帯上に棒状の工具による沈線を施している。これは中期に置くことができるものかもしれない。(村木 誠)



第49図 包含層出土縄文土器 (10)

第11表 包含層出土縄文土器観察表 (1)

No	グッド	層	番号	器種	遺存度	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考
1	50N'	VI	332.1	深鉢	胴部片	押型文	不明	3mm大の砂粒含み粗い	良好	黒褐色	焼成後の穿孔有り
2	50M'	VII	381.1	"	"	"	ナデ	わずかに砂粒含むが密	良好	明褐色	黒色物附着
3	48M'	VIII	420	"	"	"	"	微細な砂粒多い	普通	じいれ褐色	
4	1C'	II	233	"	"	ナデ	"	1~2mm大の砂粒含み粗	普通	じいれ黄褐色	
5	1C'	II	229	"	口縁部片	縄文	"	1, 2mmの砂粒含みや粗	良好	褐色	
6	2D'	II	174	"	胴部片	不明	不明	1, 2mmの砂粒含み粗い	やや粗い	じいれ褐色	
7	1D'	II	213	"	口縁部片	ナデ	ナデ	2mmの砂粒多い。繊維多	やや粗い	じいれ黄褐色	
8	2D'	II	168	"	胴部片	不明	"	1mm前後の砂粒含む	普通	淡黄色	
9	3F'	W	034	"	"	ナデ	"	1mmの砂粒。繊維多い	普通	淡黄色	
10	49N'	VI	100.3	"	"	不明	不明	微砂粒多く含む	普通	じいれ赤褐色	
11	47L'	VI	90.2	"	"	不明	ナデか?	微細な砂粒多い	粗い	褐灰色	繊維の痕有り
12	47L'	VI	90.1	"	"	不明	ナデか?	微細砂粒多い	粗い	褐灰色	繊維の痕あり
13	46J'	III	001	"	"	ナデ	ナデ	1mmの砂粒あるが密	良好	浅黄褐色	内面黒色炭化物附着
14	49N'	VI	100.7	"	"	ナデ	ナデ?	3~5mmの砂粒含む	普通	じいれ赤褐色	
15	47L'	VI	80.1	"	"	不明	ナデか?	微細砂粒多い	粗い	明黄褐色	繊維痕残る
16	1C'	II	067	"	"	ナデ	ナデ	1mm大の砂粒含む	良好	じいれ褐色	
17	1E'	II	026	"	底部片	ナデ	ナデ	5mm大の砂粒含み粗い	普通	じいれ黄褐色	内面黒色炭化物附着
18	2D'	II	265	"	"	ナデ	ナデ	3mm大の砂粒含み粗い	やや粗い	褐色	内面黒褐色
19	1C'	II	226	"	"	ナデ	ナデ	1~3mmの砂粒多く粗い	普通	褐色	
20	46I'	II	002	"	口縁部片	ナデ	ナデ	砂粒少々含む	普通	じいれ褐色	
21	48M'	VI	002	"	胴部片	ナデ	ナデ	2mm大の砂粒含む	良好	じいれ褐色	
22	47I'	II	003	"	"	ナデ	"	細砂含む	良好	褐色	
23	1E'	II	036	"	"	ナデ?	"	微細な砂粒多い	良好	明赤褐色	

第12表 包含層出土縄文土器観察表(2)

No	割付	層	番号	器種	遺存度	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考		
24	46H'	II	001	"	"	口縁部片	燃糸文	"	"	2mm大の砂粒多い	普通	浅黄褐色	黒色スス付着
25	3C'	II	003	"	"	"	"	"	"	1mm大の砂粒多し	普通	褐色	黒褐色スス付着
26	61'	II	005	"	"	胴部片	"	"	"	細かな砂粒多い	普通	にぶ褐色	
27	1C'	II	232	"	"	"	"	"	"	2.3mmの砂粒多く粗い	普通	褐色	
28	1C'	II	093	"	"	"	"	"	"	1.2mmの砂粒。雲母有	普通	暗褐色	黒色炭化物付着
29	2D'	II	167	"	"	"	"	"	"	1.2mm大の砂粒含む	普通	浅黄褐色	外面黒褐色スス付着
30	2D'	II	189	"	"	"	"	"	"	1.2mm大の砂粒含む	普通	褐色	
31	1C'	II	079	"	"	"	"	"	"	2.3mmの砂粒含む	普通	黄灰色	
32	1C'	"	234	"	"	"	"	"	"	3mm大の砂粒あり	普通	橙色	黒色炭化物付着
33	3F'	II	038	"	"	"	"	"	"	1mm大の砂粒含む	普通	橙色	
34	1C'	II	025	"	"	"	"	"	"	1~3mmの砂粒含む	普通	浅黄褐色	
35	1C'	II	217	"	"	"	"	"	"	微小な砂粒多い	良好	にぶ褐色	内面黒褐色
36	2C' N	II	004	"	"	"	"	"	"	0.5mmの砂粒多い	普通	淡黄色	一部にスス付着
37	3F'	II	013	"	"	"	"	"	"	1mm大の砂粒多い	普通	浅黄褐色	
38	2D'	II	173	"	"	"	"	"	"	0.5mm以下の砂粒多い	普通	褐色	
39	3F'	II	005	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒多い	普通	浅黄褐色	
40	1C'	II	170	"	"	"	"	"	"	5mm大の砂粒あり	普通	灰黄色	
41	1C'	II	015	"	"	"	"	"	"	1mmの砂粒多く粗い	普通	褐色	
42	1D'	II	143	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒含む	良好	褐色	
43	4D'	II	007	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒含む	普通	灰白色	
44	3E'	II	011	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒含む	"	黒色	内面にぶ褐色
45	2C'	II	059	"	"	"	"	"	"	2mm大の砂粒含み粗い	"	淡黄色	
46	1C'	II	250.1	"	"	"	"	"	"	1mm程度の砂粒多い	"	褐色	
47	2D' N	II	003	"	"	"	"	"	"	3mmの砂粒有り	良好	褐色	
48	1D'	II	017	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒含む	"	灰赤色	スス付着
49	1D'	II	134	"	"	"	"	"	"	2mm大の砂粒多い	普通	にぶ褐色	
50	3E'	II	012	"	"	条痕か?	"	"	"	細かな砂粒多い	"	にぶ黄褐色	
51	3E'	II	002	"	"	ナデ	"	"	"	1mmの砂粒多く粗	"	暗褐色	
52	4D'	II	009	"	"	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	良好	暗褐色	
53	1C'	II	033	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒多し	むが	赤褐色	
54	2D'	II	162	"	"	"	ナデ条痕か	"	"	1mmの砂粒多く粗い	普通	淡黄色	
55	1C'	II	164	"	"	"	"	"	"	2mmの砂粒多く粗い	むが	"	
56	1C'	II	216	"	"	口縁部片	"	ナデ	"	1mmの砂粒含む	良好	"	
57	2D' N	II	009	"	"	"	"	"	"	1mmの砂粒含む	"	浅黄褐色	
58	3E'	II	034	"	"	胴部片	"	"	"	1mmの砂粒わずかに含	普通	淡黄色	黒色スス付着
59	1E'	II	012	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒多い	"	赤褐色	
60	46H'	II	002	"	"	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	"	灰白色	
61	2C'	II	152	深鉢	"	胴部片	ナデ	ナデ	"	1mmの砂粒多い	良好	褐色	
62	1C'	II	215	"	"	"	"	"	"	2mmの砂粒含む	むが	明赤褐色	
63	6K'	II	002	"	"	"	"	"	"	1~3mmの砂粒多い	普通	淡黄色	
64	3F'	"	036	"	"	"	"	"	"	3~5mmの砂粒含む	"	褐色	内面黒色炭化物付着
65	48I'	"	004	"	"	"	"	"	"	微細な砂粒多い	"	にぶ黄褐色	
66	2D'	II	273	"	"	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	"	灰褐色	
67	2C'	II	001	"	"	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	"	にぶ黄褐色	
68	1E'	II	056	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒含む	"	灰褐色	
69	1E'	II	021	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒多い	良好	淡黄色	
70	4I'	II	009	"	"	"	"	"	"	1~5mmの砂粒多く粗い	"	褐色	黒色スス付着
71	4E'	II	001	"	"	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多く粗い	普通	灰褐色	
72	1D'	II	087	"	"	"	"	"	"	1mm大の砂粒多い	良好	"	
73	2C'	II	256	"	"	"	"	"	"	1~3mmの砂粒多く粗い	普通	淡黄色	
74	3F' W	"	002	"	"	"	"	"	"	1mm砂粒。雲母含む	"	赤褐色	75と同一個体か
75	3F' w	"	005	"	"	"	"	"	"	1.2mmの砂粒含む	"	"	74と同一個体か
76	3E'	II	010	"	"	"	"	"	"	細かな砂粒多い	良好	にぶ黄褐色	スス付着
77	3F' E	"	002	"	"	"	"	"	"	微小な砂粒多い	"	暗褐色	
78	4D'	"	009	"	"	"	"	"	"	3mmの砂粒わずかに含	普通	浅黄褐色	
79	1C'	II	029	"	"	"	不明	"	"	1.2mmの砂粒多い	むが	褐色	器面荒れている
80	3F'	"	003	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
81	3F' S	"	001	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
82	1D'	II	106	"	"	口縁部片	縄文+ナデ	ナデ	"	1.2mmの砂粒多く含む	普通	にぶ褐色	縄文R.L

第13表 包含層出土縄文土器観察表(3)

No	グット	層	番号	器種	遺存度	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考
83	1D'	II	124	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多し	"	赤褐色	
84	2D'	II	266	"	"	"	"	3~5mmの砂粒有り	"	赤色	
85	1C'	II	228	"	"	"	"	微小な砂粒有るが良好	"	橙色	口唇部にも縄文L.R
86	2C'	II	251	"	"	"	"	1mm大の砂粒多く含む	やや多い	暗褐色	
87	2D'	II	012	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	"	にぶい橙色	
88	2D'	II	186	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	普通	にぶい黄褐色	
89	3F'	II	043	"	"	"	"	2.3mmの砂粒多い	"	明赤褐色	89, 90, 91は同一個体
90	3F'	II	001	"	胴部片	"	"	"	"	"	縄文L
91	3F'	II	007	"	"	"	"	"	"	"	
92	4I'	II	010	"	"	"	"	1.2mmの砂粒少量含む	"	にぶい黄褐色	縄文L.R
93	4E'	II	016	"	"	"	"	1.2mmの砂粒含む	"	褐色	縄文R.L
94	1C'	II	006	"	"	"	"	微小砂粒含むが密	"	にぶい橙色	縄文L
95	3F' W		003	"	"	"	"	微小な砂粒含む	"	暗灰色	縄文R.L
96	3F' S		008	"	"	"	"	1~3mmの砂粒含む	"	にぶい黄褐色	
97	2C' N	II	005	"	"	"	"	"	"	にぶい橙色	縄文L.R
98	2D'	II	074	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	"	橙色	
99	4D'		035	"	"	"	"	1~5mmの砂粒含む	"	にぶい赤褐色	
100	2D'	II	027	"	"	"	"	1mm砂粒含む	"	褐色	
101	1E'	II	029	"	"	"	"	1mm程の砂粒含む	"	浅黄褐色	
102	2D'	II	343	"	"	"	"	1mm大の砂粒多い	"	褐色	
103	2D'	II	071	"	"	"	"	1mmの砂粒。雲母多し	良好	暗赤褐色	
104	3F' W		045	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	普通	明赤褐色	
105	2D'	II	007	"	"	"	"	0.5mm以下の砂粒多い	"	"	
106	3J'	II	027	"	"	"	"	1mmの砂粒少量含む	良好	にぶい黄褐色	
107	2D'	II	285	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	普通	灰褐色	縄文L
108	1D'	II	174	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	"	灰褐色	
109	1E'		032	"	"	"	"	砂粒わずかに含むが密	良好	にぶい黄褐色	
110	4D'	II	006	"	"	"	"	1~3mmの砂粒。雲母	普通	褐色	
111	1C'	II	253.1	"	"	"	"	1mm以下の砂粒含む	やや多い	にぶい褐色	
112	3D' S		004	"	"	"	"	0.5mm以下の砂粒多い	やや多い	にぶい黄褐色	
113	1C'	II	241	"	"	"	"	微細な砂粒含む	普通	にぶい黄褐色	
114	3J'	II	028	"	"	"	"	0.5~1mmの砂粒含む	"	にぶい黄褐色	
115	1D'	II	130	"	"	"	"	1mmの砂粒多く含む	"	淡黄色	
116	2D'	II	021	"	"	"	"	1mm以下の砂粒多い	"	にぶい褐色	
117	4E'	II	018	"	"	"	"	1mm以下の砂粒多い	やや多い	にぶい黄褐色	
118	2C'	II	066	"	"	"	"	1mm大の砂粒多い	普通	にぶい褐色	
119	4D'	II	003	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	"	淡黄色	
120	2D'	II	022	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	やや多い	にぶい黄褐色	内面黒色、磨耗著しい
121	2D'	II	005	深鉢	胴部片	縄文+ナデ	ナデ	1.2mmの砂粒含む	普通	にぶい黄褐色	黄褐色の付着物あり
122	2C'	II	122	"	"	"	"	1mmの砂粒含む	良好	赤灰色	内面褐色、縄文R.L
123	2C'	II	124	"	"	"	"	1.2mmの砂粒含む	普通	にぶい黄褐色	縄文R.L
124	2D'	II	075	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	"	暗褐色	
125	2C'	II	119	浅鉢	口縁部片	ナデ	只澁条痕	細かい砂粒含むが密	良好	にぶい褐色	
126	1C'	II	003	深鉢	"	"	ナデ	1mmの砂粒。雲母含む	普通	にぶい黄褐色	
127	2D'	II	270	"	"	"	"	0.5mmの砂粒含む	"	褐色	
128	3F' W		012	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	良好	浅黄色	
129	3F' W		003	"	胴部片	"	"	3~10mmの小礫含む	普通	褐色	
130	1C'	II	182	"	"	"	"	1~3mmの砂粒含む	"	にぶい褐色	
131	1C'	II	225.5	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	"	灰褐色	
132	3E'	II	036	"	"	"	"	1.2mmの砂粒含む	"	浅黄褐色	
133	2D'	II	020	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	"	にぶい褐色	
134	2C'	II	163	"	"	"	"	2mmの砂粒多い	"	にぶい黄褐色	
135	2C'	II	004	"	"	不明	"	0.5mm以下の砂粒含む	"	にぶい黄褐色	
136	1C'		382.1	"	"	ナデ	"	0.5~2mmの砂粒含む	"	褐色	137, 138は同一個体
137	1C'		382.2	"	"	"	"	"	"	"	
138	1C'		382.3	"	"	"	"	"	"	"	
139	2C'	II	052	"	"	"	"	0.5mmの砂粒。雲母含	"	にぶい褐色	黒色スス付着
140	2D'	II	003	"	"	"	"	3mmの砂粒多い	"	にぶい黄褐色	
141	47N'	II	002	"	"	"	"	1mmの砂粒有るが密	良好	灰褐色	

第14表 包含層出土縄文土器観察表(4)

No	割付	層	番号	器種	遺存度	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考
142	1C'	II	221.1	"	"	"	"	1mm以下の砂粒含む	普通	じい黄褐色	
143	4D'	II	006	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	"	淡黄色	
144	46I'	II	003	"	"	"	"	微小な砂粒多い	良好	黒褐色	内面褐色
145	1C'	II	035	"	"	"	"	2~5mmの砂粒含む	普通	褐色	
146	2C'	II	115	"	口縁部片	"	"	1, 2mmの砂粒多い	じい	灰褐色	
147	46II'	II	328.1	"	"	不明	"	微小な砂粒多い	普通	淡黄色	
148	50N'	II	001	"	"	ナデ	"	1, 2mmの砂粒多い	良好	淡黄色	
149	3F'	"	074	"	"	"	"	1mm程度の砂粒多い	普通	褐色	
150	6L'	II	006	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	"	淡黄色	
151	2D'	II	013	"	"	"	"	1, 2mmの砂粒含む	やばい	淡黄色	
152	3F'E	"	001	"	"	"	"	1mmの砂粒含む	堅緻	褐色	内面黒色
153	2D'	II	163	"	"	不明	"	1~3mmの砂粒多く粗い	やばい	淡黄色	外面摩滅
154	4I'	II	001	"	"	ナデ	不明	1mmの砂粒多い	普通	褐色	内面剥離
155	2C'	II	118	"	"	"	ナデ	1mmの砂粒有り	良好	じい黄褐色	内面褐色
156	1C'	II	160	"	胴部片	"	"	微細な砂粒多い	普通	淡黄色	外面スス付着
157	48M'	VI	001	"	"	縄文	"	1~3mmの砂粒含む	良好	灰黄色	
158	4N'	II	001	"	"	ナデ	"	1, 2mmの砂粒含む	普通	じい褐色	
159	2D'	II	239	"	"	"	"	1mmの砂粒含む	"	浅黄色	
160	47II'	II	"	"	"	"	"	0.5mmの砂粒含む	"	褐色	
161	2D'	II	006	"	"	"	"	1, 2mmの砂粒多く粗い	"	褐色	
162	2D'	II	282	"	"	"	"	1mmの砂粒含む	"	淡黄色	
163	2D'	II	033	"	"	"	"	1mmの砂粒有り	"	褐色	
164	1D'	II	092	"	"	"	"	1mmの砂粒含む	"	じい褐色	
165	3E'	II	003	"	"	"	"	微細な砂粒有るが密	良好	暗褐色	
166	1D'	II	085	"	"	"	"	0.5mmの砂粒多い	やばい	じい黄色	
167	4D'	II	016	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	普通	灰黄色	
168	2C'	II	137	"	"	"	"	1mmの砂粒多い	良好	明赤褐色	
169	2C'	II	038	"	"	"	"	1mmの砂粒有り	やばい	褐色	
170	2C'	II	021	"	"	"	"	1mmの砂粒含む	"	浅黄色	
171	1C'	II	088	"	"	"	"	1, 2mmの砂粒多い	普通	褐色	
172	2C'	II	254	"	口縁部片	"	"	1mm以下の砂粒多い	良好	褐色	
173	4D'	"	002	"	"	縄文+ナデ	"	1mmの砂粒多い	"	じい黄褐色	
174	47I'	I	001	"	胴部片	ミガキ	"	微小な砂粒。雲母含む	普通	褐色	
175	1D'	III	107	"	口縁部片	縄文+ナデ	"	1mmの砂粒有るが密	良好	暗褐色	黒色スス付着
176	2D'	II	267	"	"	"	"	微細な砂粒多い	普通	褐色	
177	1D'	II	125	"	"	ナデ	"	1mmの砂粒多い	良好	じい褐色	178は同一個体
178	1D'	II	108	"	"	"	"	1mm以下の砂粒多い	"	じい褐色	
179	1D'	II	129	"	"	縄文+ナデ	"	1mmの砂粒含むが密	"	褐色	縄文LR
180	1D'	II	023	"	"	"	"	1mmの砂粒含むが密	"	赤褐色	口縁、内面は黒褐色
181	6J'	II	004	深鉢	口縁部片	縄文+ナデ	ナデ	1, 2mmの砂粒多い	普通	褐色	縄文LR
182	2D'	II	001	"	"	"	"	1, 2mmの砂粒多い	"	じい黄褐色	
183	"	"	"	"	胴部片	"	"	1mm程の砂粒含む	良好	暗赤褐色	
184	2D'	II	191	"	"	"	"	1mmの砂粒多く含む	普通	じい褐色	
185	1C'	II	252.1	"	"	"	"	1mmの砂粒わずかに含	"	じい黄褐色	
186	6J'	II	002	"	"	"	"	微小な砂粒。雲母含む	"	褐色	
187	4I'	II	008	"	"	"	"	0.5mmの砂粒含む	やばい	じい黄褐色	
188	3J'	II	029	"	"	"	"	0.5mmの砂粒多い	普通	明赤褐色	
189	1E'	II	031	"	"	"	"	1mm以下の砂粒多い	"	じい褐色	
190	2D'	II	280	"	"	"	"	1mmの砂粒わずかに含	"	じい黄褐色	
191	2C'	II	34.3	"	"	"	"	1~3mmの砂粒多い	"	じい黄褐色	
192	3D'S	"	001	"	口縁1/4	"	"	1mmの砂粒含むが密	良好	じい黄褐色	口径29.0cm
193	2D'	II	067	浅鉢	口縁部片	"	"	微小砂粒多いが密	"	じい褐色	
194	2D'	II	333	深鉢	"	"	"	きわめて密	堅緻	褐色	
195	4I'	II	003	"	"	ナデか	"	1mm砂粒わずかに含む	良好	じい黄褐色	
196	1C'	II	001	"	"	ナデ	"	微小砂粒多い	普通	じい褐色	
197	2D'	II	015	"	"	"	"	微細砂粒含むが密	良好	じい褐色	
198	6L	II	007	"	"	"	"	1, 2mmの砂粒多い	普通	じい褐色	
199	47I'	II	002	"	"	ナデか	"	1mmの砂粒多く含む	普通	浅黄褐色	内面黒色
200	1C'	II	154	"	"	ナデ	条痕	微細な砂粒多い	普通	じい褐色	

第15表 包含層出土縄文土器観察表(5)

No	グッド	層	番号	器種	遺存度	外面調整	内面調整	胎土	焼成	色調	備考
201	1C'	II	223.1	浅鉢	"	"	ナデ	1.2mmの砂粒多く粗い	普通	淡黄色	202と同一個体
202	1C'	II	068	"	"	"	"	"	"	"	
203	2C'	II	116	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多し	"	明赤褐色	
204	4D'		001	深鉢	"	"	"	微細砂粒含むが密	良好	赤褐色	
205	2C'	II	023	"	"	ナデ、縄文	ナデ	2.3mmの砂粒含む	普通	じい褐色	
206	6J'	II	001	"	"	ミガキか	ミガキか	砂粒わずか。雲母含む	良好	じい褐色	
207	3J'	II	001	"	"	ナデ	ナデ	1mm以内の砂粒多し	普通	黄褐色	
208	2C'	II	022	"	"	条痕か	"	微小な砂粒多い	やや多い	褐色	
209	4D'	II	001	"	"	ナデ	"	1.2mmの砂粒含む	良好	じい褐色	
210	1D'	II	001	"	"	ナデか	"	1.2mm砂粒多い。雲母	普通	じい褐色	
211	3E'S		001	浅鉢か	"	ナデ	"	2~5mmの砂粒含み粗い	やや多い	褐色	
212	3J'	II	002	注口土器	注口部片	"	"	1.2mmの砂粒多く含む	良好	じい褐色	
213	4D'	II	002	浅鉢か	口縁部片	"	"	砂粒有るが密	"	赤灰色	
214	4D'		034	深鉢か	胴部片	"	"	微小砂粒含むが密	良好	じい褐色	
215	47J'	I	001	深鉢	口縁部片	条痕	"	細かな砂粒含むが密	良好	褐色	
216	47J'	I	015	"	"	"	"	1mm砂粒きわめて多い	"	褐色	
217	1E'	I	001	"	"	"	"	2mm砂粒。雲母含む	普通	じい褐色	スス付着
218	1D'	II	216	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多し	やや多い	じい褐色	
219	2C'	II	146	深鉢	胴部片	"	"	細かな砂粒多し	普通	褐色	
220	50M'	VM	384.1	"	"	"	"	砂粒多い	普通	じい褐色	
221	3F'		027	"	"	"	"	1mmの砂粒多し	多い	褐色	
222	1D'	II	135	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多し	良好	じい褐色	
223	1E'	II	004	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多く粗	普通	褐色	
224	1C'	II	231	"	"	"	"	0.5mm~2mmの砂粒多し	やや多い	褐色	粘土雜目残る
225	1D'	II	006	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多く粗	普通	じい褐色	
226	10D'	II	007	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多く粗	多い	褐色	粘土雜目残る
227	1E'	II	060	"	"	"	"	0.5mm大の砂粒多く粗	"	褐色	
228	1D'	II	177	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多し	普通	褐色	
229	1D'	II	081	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多く粗	"	褐色	
230	2C'	II	058	"	"	"	"	0.5~2mmの砂粒多し	多い	褐色	
231	1D'	II	084	"	"	"	"	1mm大の砂粒多し	"	褐色	
232	1E'	II	013	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多し	やや多い	褐色	
233	3G'	II	002	"	"	"	"	細かな砂多し	良好	じい褐色	
234	1D'	II	184	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多く粗	やや多い	じい褐色	
235	1D'	II	026	"	"	"	"	0.5~2mmの砂粒多し	良好	じい褐色	
236	1D'	II	009	"	"	"	"	1mmの砂粒多し	普通	じい褐色	
237	2C'	II	117	"	"	"	"	0.5~2mmの砂粒多し	多い	褐色	
238	1C'	II	016	"	"	"	"	1.2mmの砂粒多く粗い	普通	褐色	
239	1D'	II	181	"	"	"	"	1mmの砂粒。雲母含む	"	じい褐色	
240	4I'	II	006	"	"	"	"	細かな砂粒多い	良好	じい褐色	
241		II	2.1	浅鉢	口縁部片	ナデ	ナデ	精密	堅緻	黒色	
242	6L'	II	008	"	"	ミガキ	行、ミ計	1mmの砂粒。雲母含む	"	じい褐色	炭化物付着
243	6L'	II	009	"	"	ナデ	ナデ	1mm大の砂粒含む	良好	黒色	
244	2D'N			深鉢	口縁部片	ナデ	"	1mm程の砂粒多い	普通	褐色	復元口径14.0cm
245	4I'		001	"	"	"	"	細かな砂粒多い	やや多い	じい褐色	
246	2D'	II	066	"	"	ナデ+縄文	"	1mmの砂粒多い	普通	灰褐色	
247	2D'	II	031	"	"	不明圧痕	"	1.2mmの砂粒あり	良好	褐色	
248	3E'	II	039	"	把手部	ナデ	"	1mmの砂粒多く含む	"	じい黄褐色	
249	47N'	II	009	"	胴部片	"	"	1mm程度の砂粒含む	"	じい赤褐色	黒色炭化物付着
250	3F'		006	不明	"	"	"	1.2mmの砂粒多い	普通	褐色	
251	2D'W		020	"	"	"	"	0.5mmの砂粒多い	良好	褐色	

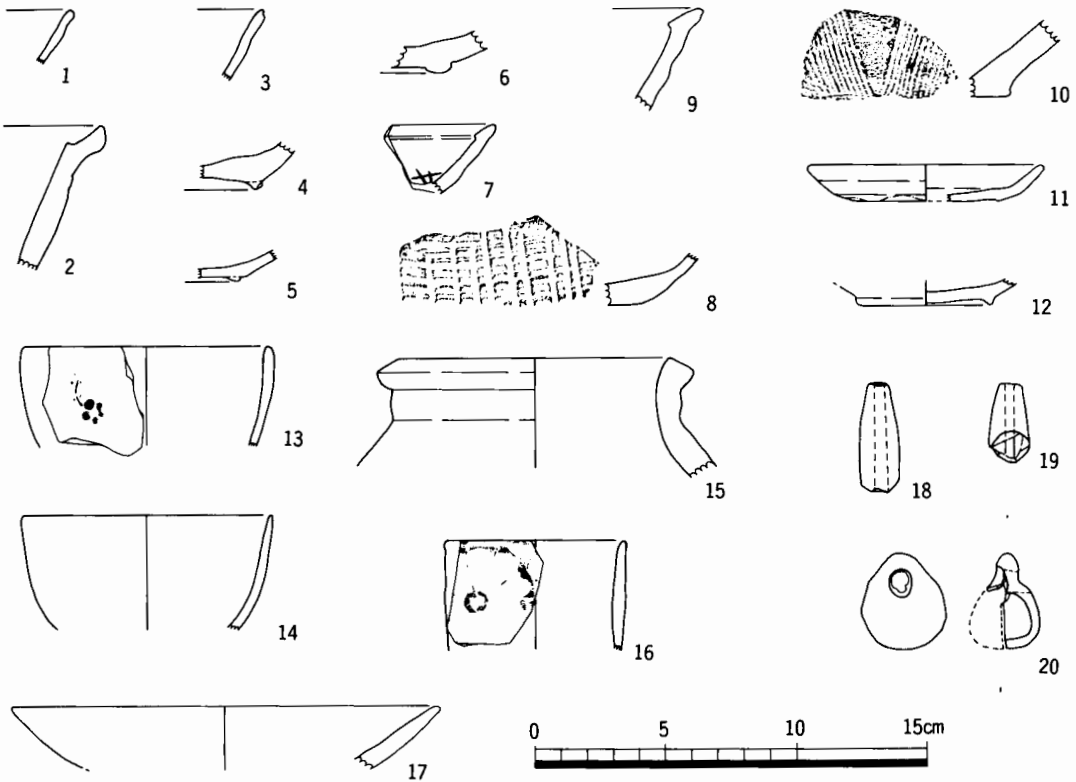
2. その他の土器・陶磁器類 (第50図 1~17)

① 須恵器 [1・2]

第2地区より2点出土。1は坏の口縁部破片。推定径約12cm。焼成良好堅緻。胎土は砂粒多い。色調は灰白色。2は鉢の口縁部破片。推定径約22cm。口縁部内面に段を有するもので、内面は横ナデ調整を施す。外面は口縁部下よりヘラケズリ調整を施す。1~2mmの長石粒を含む胎土、焼成良好堅緻。色調は暗青灰色。

② 山茶碗類 (白瓷系陶器) [3~5]

いずれも無釉の碗の破片で第2地区より4点出土。3・4は南部系(荒肌手)山茶碗の破片。3は口縁部、推定径約14cm。4は底部。3・4は砂粒の多い胎土・灰白色の色調等同一個体と考えられる。5は北部系(均質手)山茶碗の小碗の破片。砂粒少なく胎土は密。焼成良好堅緻。色調は淡黄灰白色。



第50図 包含層出土その他の土器・陶磁器類

③ 窖窯製品 [6~8]

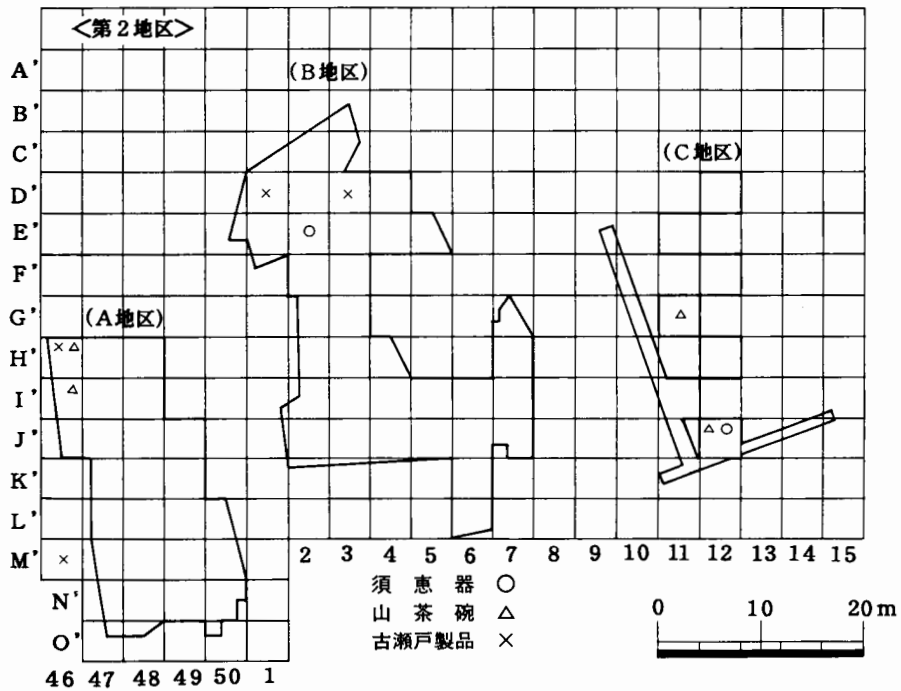
古瀬戸後期のものが第2地区より7点出土。ほとんど灰釉のものであるが、1点だけ鉄釉である。6は15世紀代の灰釉平碗の底部の小破片。卸皿の破片は4点出土。7は卸皿の口縁部、8は底部の破片。いずれも胎土は密。焼成良好。これらはIV期(15世紀後半)に比定される。

④ 大窯製品 [9~12]

播鉢の破片4点、灰釉小皿1点、鉄釉小皿1点、灰釉皿1点、計7点、いずれも第2地区から出土している。9は錆釉の播鉢の口縁部の破片。推定径約28cm。胎土は均一で密。10は底部付近の破片である。胎土に1mm内外の砂粒を少し含む。11は灰釉小皿の破片で、推定径約8.8cm、器高約1.4cm、底径約5.5cm、腰部に段を持つ。12は灰釉皿の底部の破片で、低く細い高台を持つ。底径約5.0cm。いずれも16世紀後半と思われる。

⑤ 近世・近現代陶磁器類 [13~16]

近世代のものは27点出土しているが、いずれも小破片で、器形のわかるものは4点だけである。13は油滴状鉄釉の丸碗の口縁部で、胴部に小梅を描く。推定径約9.4cm。14は飴釉の丸碗の口縁部で、推定径約9.6cm。15は呂宋壺の影響を受けて作られたいわゆる祖母懐の茶壺の口縁部の破片である。推定径約10.4cm、胎土に微粒を含むが、焼成堅緻、色調は淡茶褐色で無釉



第51図 須恵器・山茶碗・古瀬戸製品分布図

である。いずれも18世紀代のものと思われる。その他、図示しなかったが18世紀代の尾呂茶碗の胴部破片が出土している。16は19世紀前半の太白碗の口縁部の破片、推定径約 6.8cm。他は不明。

近現代のものも少し出土しているが、いずれも小破片のものばかりである。

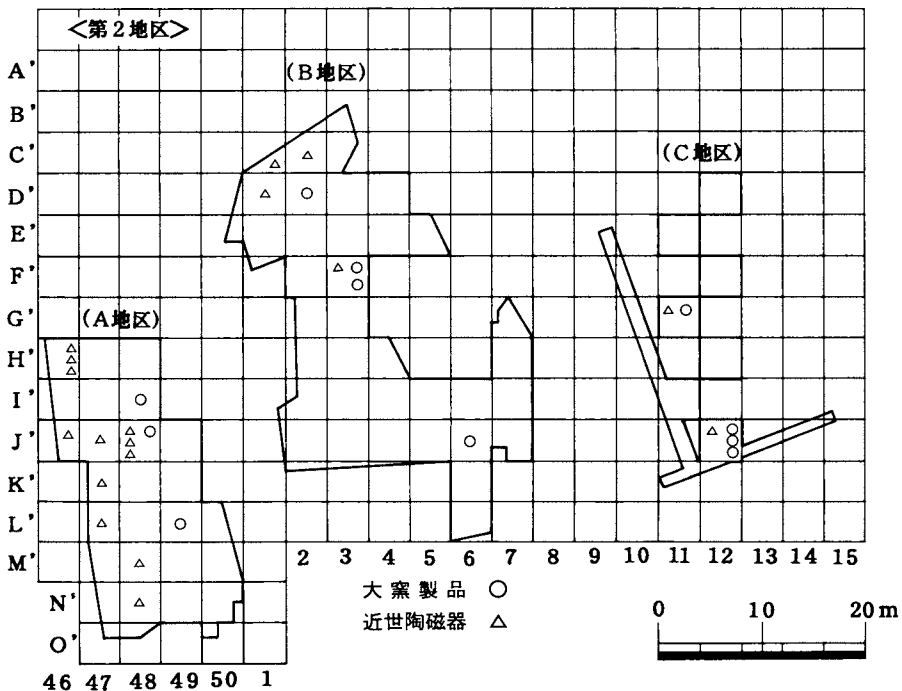
⑥ 土師質土器 [17]

16世紀前半代と思われる土師皿の口縁部破片が1点出土している。胎土はきめ細かく密で、焼成良好、色調は淡黄灰白色。丁寧な成形を施した畿内系のものであるが、搬入品ではなく在地(西濃地域)で製作したものと考えられる。

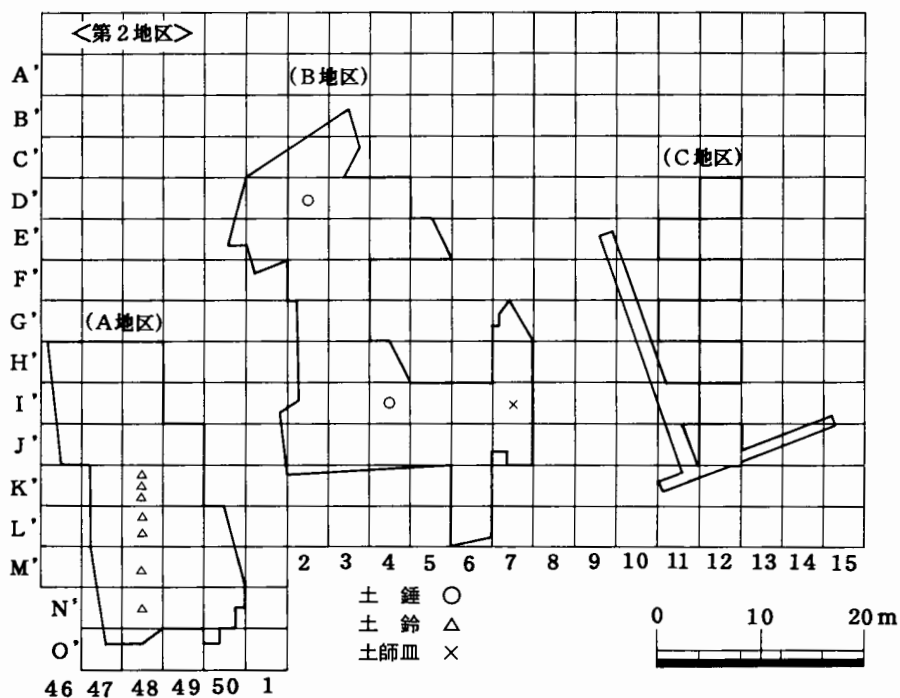
3. 土製品 (第※※図 18~20)

① 土 錘 [18・19]

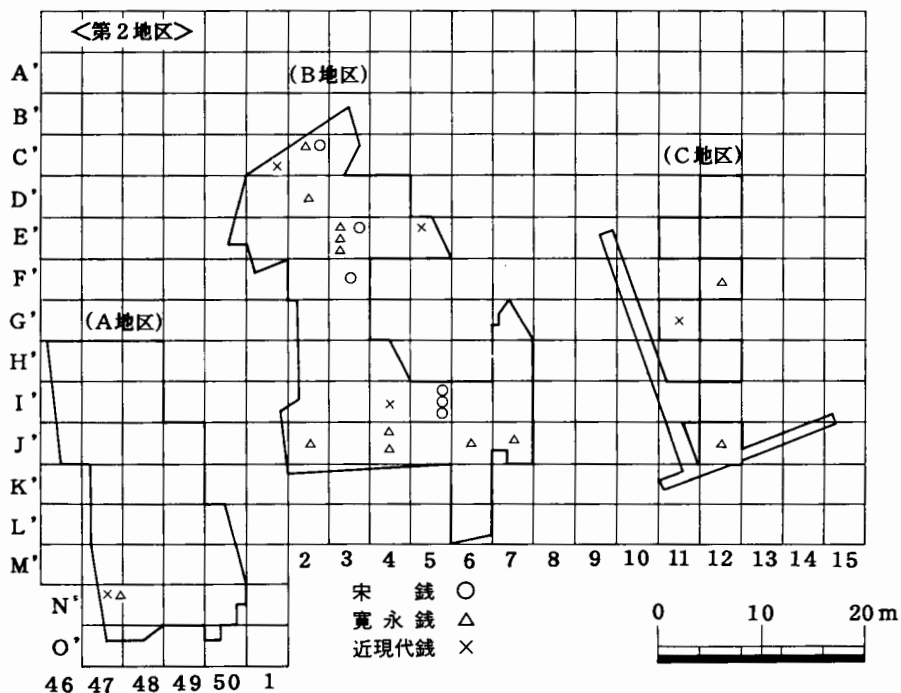
2点とも管状土錘。第2地区の第II層から出土している。いずれも欠損しているが、中膨らみの弱いものである。18は残存長43mm・胴部最大径15.6mm・孔は楕円形で孔径5.6×4.5mm・重さ 8.4gを計る。色調は淡黄褐色。胎土に砂粒を含む。焼成はやや不良。19は残存長31mm・胴部最大径16mm・孔はほぼ円形で孔径3.5×3.3mm・重さ 5.8gを計る。色調は橙灰色。胎土は密。焼成良好。



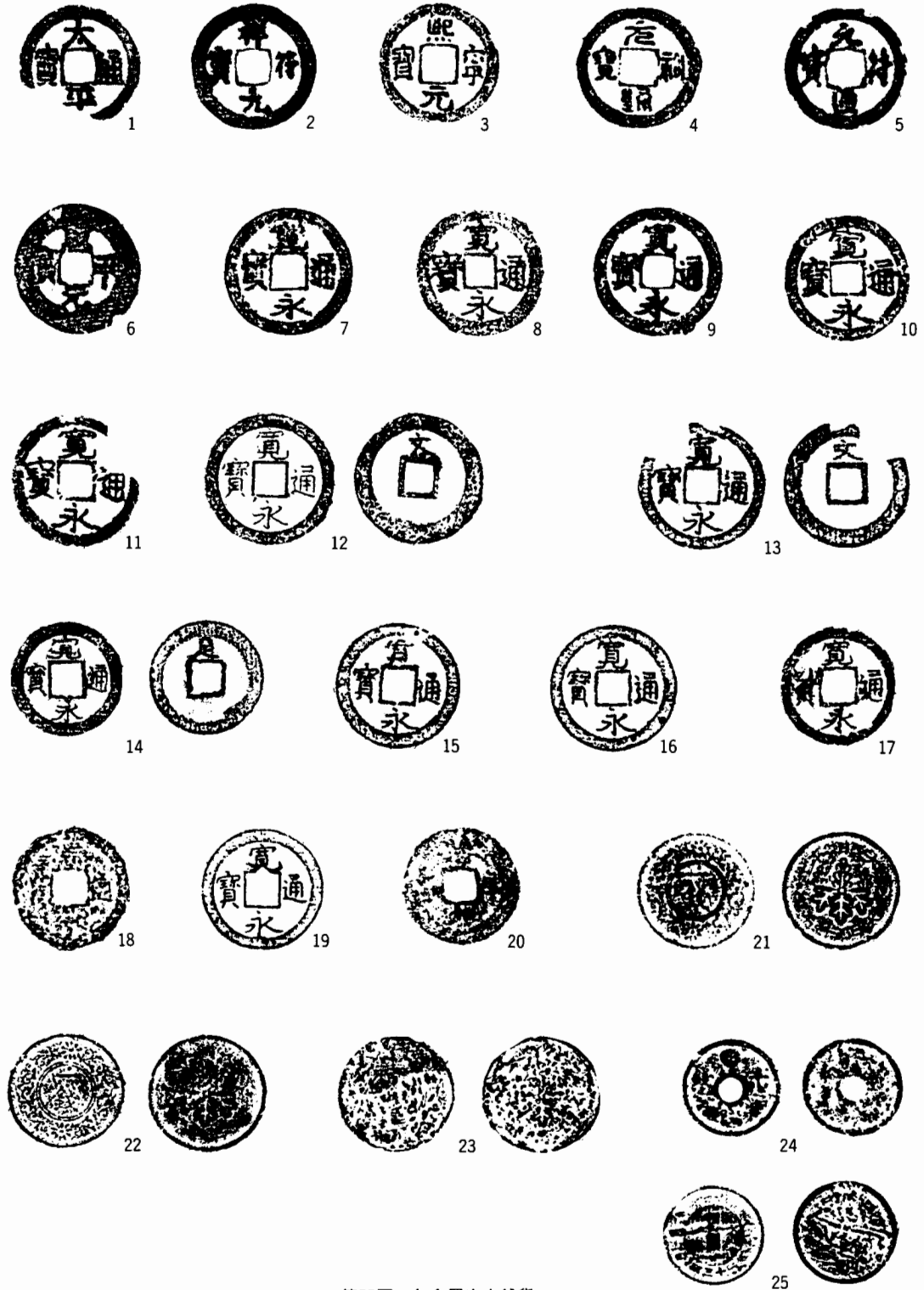
第52図 大窯製品・近世陶磁器分布図



第53図 土錘・土鈴・土師皿分布図



第54図 銭貨分布図



第55図 包含層出土銭貨

② 土 鈴 [20]

第2地区より6点破片が出土しているが、いずれも胎土・色調等異なり別個体と考えられる。いずれも小破片のため図示できたものは20だけである。焼成良好。胎土は密。色調は淡黄褐色。

4. その他の遺物 (第55図 1~25, 附表16)

① 中・近世の銭貨 [1~20]

宋銭(1~6)は、いずれも第2地区のB地区の第I・II層から6点出土している。

また、寛永通寶(7~20)は第2地区のA・B・C地区から14点出土しているが、B地区に集中している。そのうち5点は寛文年代以前に鑄造された「古寛永」銭で、残りの9点は寛文年代以降に鑄造された「新寛永」銭である。この新寛永銭の中には、背面の内郭の上に「文」の一字が鑄込まれた「文銭」2枚と、背面の内郭の上に「足」が鑄込まれた下野足尾所鑄造の1枚がある。

② 近・現代の銭貨 [21~25]

第2地区から大正10年鑄造の1銭青銅貨が3点、昭和19年鑄造の穴あき10銭錫貨、鑄造年不明の1円アルミ貨が1点出土している。

(宇野治幸)

第16表 銭貨一覧表

1. 宋銭												
No.	出地点	層	銭名	対角	裏	径(mm)	孔径(mm)	厚mm	重g	初鑄年代	材質	備考
1	51'	I	太平通寶	対角	無	欠損×24.3	6.1×6.1	1.1	(1.9)	寛永 976年	銅	真青
2	3F	II	祥符元寶	右回	無	24.6×24.5	6.3×6.4	1.3	2.4g	寛永 1009年	銅	真青
3	2C'	II	熙寧元寶	右回	無	23.6×23.7	6.7×6.5	1.7	3.3g	寛永 1068年	銅	真青
4	3E'	II	元祐通寶	右回	無	23.7×24.0	6.3×6.6	1.5	3.7g	寛永 1086年	銅	篆青
5	51'	I	元符通寶	右回	無	23.7×23.7	6.8×7.1	1.5	2.9g	寛永 1098年	銅	真青
6	51'	I	□平元寶	右回	無	25.2×25.3	5.4×5.4	1.9	6.2g	(寛永 998年)	銅	成? 真青
2. 寛永通寶												
No.	出地点	層	銭名	対角	裏	径(mm)	孔径(mm)	厚mm	重g	初鑄年代	材質	備考
7	2C'	II	寛永通寶	太字	無	24.8×24.9	6.1×6.8	1.5	3.5g	寛永 1637年	銅	古寛永備前岡山所鑄銭
8	2D'	II	寛永通寶	太字	無	25.2×25.2	5.4×5.3	1.5	3.7g	寛永 1639年	銅	" 備前岡山所鑄銭
9	3E'	II	寛永通寶	太字	無	24.8×24.8	6.0×5.9	1.5	3.6g	寛永 1637年	銅	" 吉田所鑄銭
10	3E'	II	寛永通寶	太字	無	24.4×24.5	5.5×5.4	1.5	3.6g	寛永 1656年	銅	" 駿河谷谷所鑄銭
11	4J'	II	寛永通寶	太字	無	25.6×25.3	5.8×5.6	1.5	(2.5)	寛永 1656年	銅	" 駿河谷谷所鑄銭
12	2J'	II	寛永通寶	細字	文	25.5×25.5	5.7×5.6	1.7	3.3g	寛永 1668年	銅	新寛永江戸亀戸所鑄銭
13	47N	II	寛永通寶	細字	文	欠損×24.7	6.1×6.2	1.1	(1.6)	寛永 1668年	銅	" 江戸亀戸所鑄銭
14	12J'	II	寛永通寶	細字	足	22.3×22.4	5.9×5.6	1.2	2.4g	寛永 1741年	銅	" 下野足尾所鑄銭
15	3E'	II	寛永通寶	細字	無	24.1×24.1	6.4×6.2	1.2	3.2g	寛永 1726年	銅	" 京都七条所鑄銭
16	4J'	II	寛永通寶	細字	無	24.5×24.5	5.9×5.9	1.4	3.9g		銅	"
17	5X	I	寛永通寶	細字	無	22.7×22.9	5.8×6.2	1.2	2.7g		銅	"
18	7J'	II	寛永通寶	細字	無	23.0×22.9	6.7×6.8	0.8	1.5g	不明	銅	磨滅激
19	12F'	—	寛永通寶	細字	無	23.6×23.6	6.2×6.1	1.1	2.8g		銅	新寛永
20	6J'	II	寛永通寶	不明	—	23.1×23.0	6.0×5.8	1.3	1.9g	不明	銅	磨滅激取不能
3. 近現代金貨												
No.	出地点	層	銭名	材質	裏	径(mm)	孔径(mm)	厚mm	重g	初鑄年代	備考	
21	1C'	II	1銭	青銅	銅	22.8×22.9	—	1.1	3.1g	大正10年		
22	5E'	II	1銭	青銅	銅	23.3×23.2	—	1.4	3.3g	大正10年		
23	11G'	—	1銭?	青銅	銅	23.0×23.0	—	1.5	3.3g	大正10年		
24	41'	II	10銭	錫	—	19.2×19.1	4.9×4.7	1.8	2.4g	昭和19年		
25	47N	II	1円	アルミ	鋳	19.9×19.8	—	1.5	1.8g	不明		

第4節 石器類

本遺跡A地点及びB地点から出土した石器群は、総計 901点である。C地点での出土は見られなかった。A地点においては第II層・第VI層・第VIII層より、B地点においては第II層よりそれぞれ縄文時代中期～晩期・早期(ポジティブ押型文)・早期(ネガティブ押型文)に帰属すると考えられる石器群が出土している。それぞれの内訳は、第II層より石鏃10点、削器8点、石錐1点、楔形石器12点、石核12点、二次加工のある剥片8点、使用痕のある剥片5点、剥片352点、碎片73点、磨製石斧8点、打製石斧33点、石刀1点、礫石錘12点、切り目石錘39点、磨石11点、凹石8点、第VI層より石鏃2点、石匙1点、削器2点、石核4点、二次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片3点、剥片240点、碎片28点、打製石斧1点、敲石1点、第VIII層より使用痕のある剥片2点、剥片30点である。

平面分布については、第II層に関しては層序の項で書いたとおり攪乱がひどく、確かな遺構に伴うもの以外は原位置を留めているものが少ないと考えられ、第VI層に関しては、A区の発掘区のはほぼ全体に広がって出土している。ただし、A区の西部では出土が見られず、遺跡の広がりを捉えてよいのかもしれない。第VIII層に関しては45M'グリッドを中心に集中箇所が見られた。

石材に関しては、どの文化層においてもチャートが90%以上を占めており、他に黒曜石・石英・安山岩・珩岩・砂岩等が若干混じる。以下に、各文化層ごとに石器分類を中心に事実記載・分析を行う。

1. 第VIII層文化の石器群

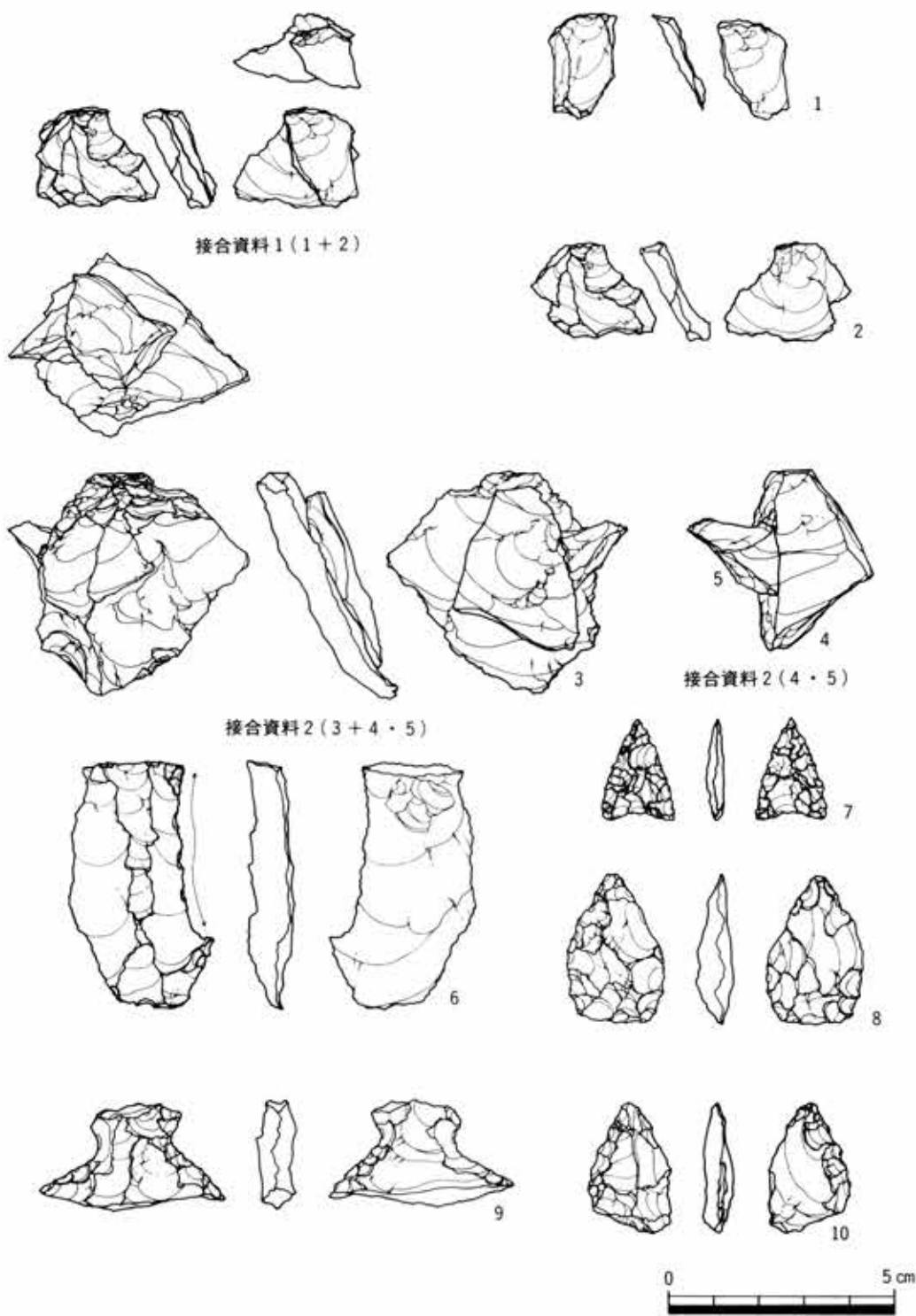
本層からは30点(すべてチャート製)の剥片及び使用痕のある剥片1点(チャート製)が出土している。この中から2点の接合資料が得られた。合計5点の剥片が接合している。

接合資料1 (第56図1・2)

2点の資料が接合している。不定形剥片と小形の縦長剥片の接合例である。3には180°打撃方向の異なる剥離面も見られるが、両者とも平坦打面からの一定方向による打撃である。目的性等は不明である。

接合資料2 (第56図3・4・5)

接合資料1と同一母岩に属する資料である。幅広な不定形剥片と縦長剥片の接合例である。5の縦長剥片は頭部(打点部)を剥離段階での加撃の際に節理面にそって折れたと考えられる。また、端部及び両側縁部は背面側より折り取られている。両者とも平坦打面からの一定方向による打撃である。



第56図 包含層出土石器(1)

使用痕のある剥片 (第56図 6)

2点出土している。うち1点を図示した。6はチャート製の縦長剥片を用いている。右縁に連続した微細な使用痕が観察される。

2. 第VI層文化の石器群**石鏃 (第56図 7・8)**

2点出土している。7は第3号焼礫集積遺構中より出土している。半円形のわずかな抉り込みのはいるもので、平面形は二等辺三角形を呈する。8は安山岩を用いている。基部はほぼ直線上で、やや分厚な剥片を素材とし、裏面に大きく素材の剥離面を残している。

石匙 (第56図 9)

1点出土している。下部を欠損しているが、おそらく横長の石匙と考えられる。裏面に残る素材の剥離面より幅広の剥片を素材とし、周縁に調整を加えつまみ部を作り出している。

削器 (第56・57図 10・11)

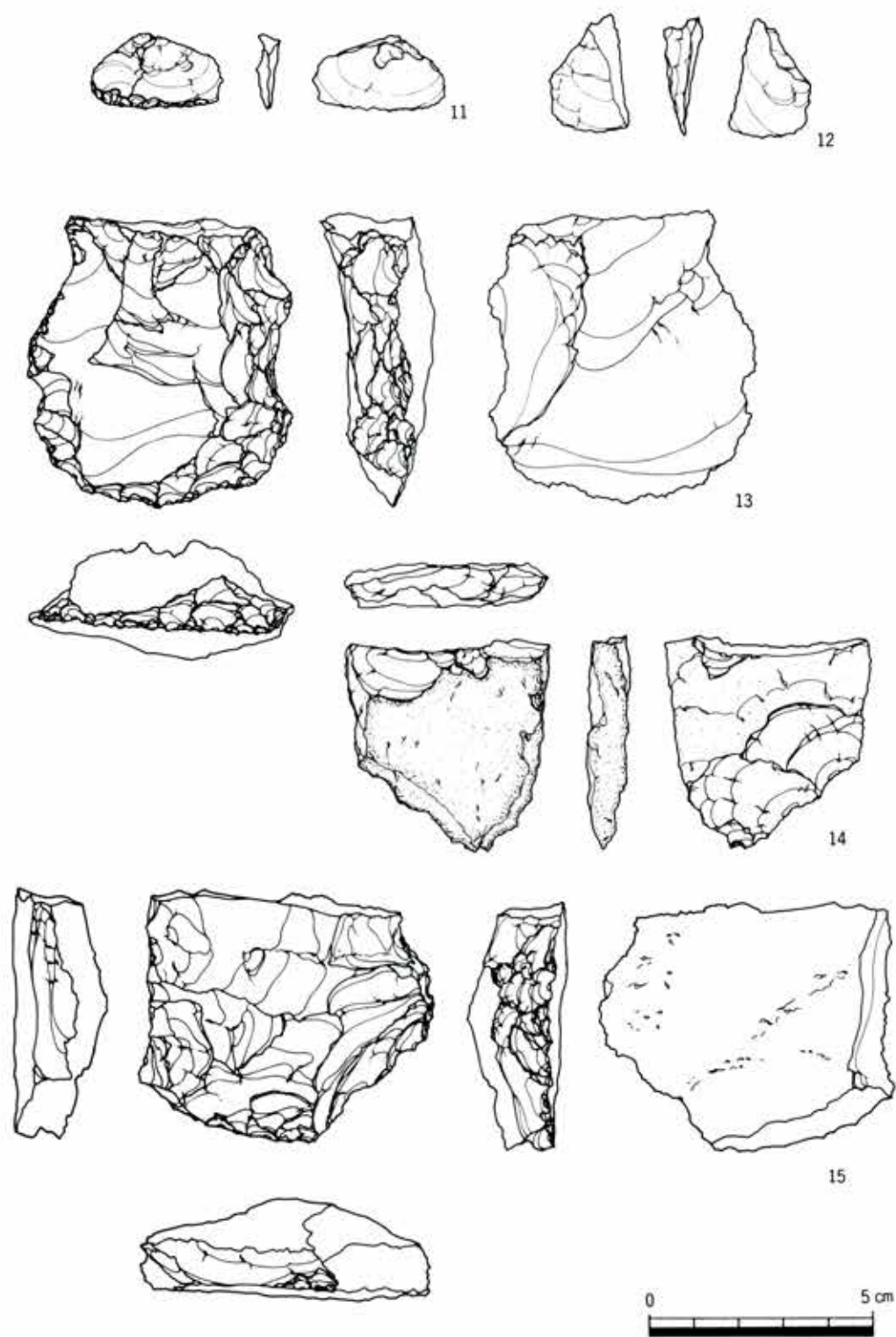
2点出土している。10は縦長剥片を素材とし、左縁にまず表面側から続いて裏面側にやや大きめの剥離で刃部を作り出している。11は下端に使用痕の発達したような刃部をしているが、ある程度の連続性があり、鋸歯状を呈するため本類に含めた。横長剥片を素材としている。

使用痕のある剥片 (第57図 12)

3点出土している。1例図示した。12は不定形剥片を素材とし、側縁は一方が折断面、他方が断面となっているのであるいは楔形石器の範疇に入る可能性もあるが、下端部に使用による微細な剥離痕が見られるのでこの類に含めた。

石核 (第57図 13・14・15)

4点出土している。3例図示した。3例とも厚手の板状剥片を利用している。13は上端の平坦な剥離面を打面とし、やや大型の剥片を剥がした後、裏面に大きく打面調整を行った後90°の打面転移を行い小形の貝殻状剥片を取っている。14は周辺部の下辺の平坦な礫表を打面とし剥片剥離作業を行なっているが、剥離された剥片の数は2枚程度であると考えられる。15は右側縁・下辺は板状剥片に残る周辺部の平坦打面より、左側縁部は裏面の礫表を打面として求心的に剥片剥離作業を行なっている。剥離された剥片は右側縁からのものは縦長状を呈するが、他は貝殻状の寸づまりな剥片が多い。上辺は右側縁部からの加撃の際に伴う折れと考えられる。



第57圖 包含層出土石器(2)

敲石 (第58図 16)

1例出土している。砂岩礫を用いたもので、下端部に顕著な敲打痕が見られる。

3. 第II層文化の石器群**石鏃 (第58図 17~23)**

未製品・破損品を含め10点出土している。全体的に小形品が多く、すべてチャート製で占められる。17・18は丸味をおびた深い抉り込みが入る一群である。17は調整加工は周縁のみに丁寧に行われているため裏面に大きく素材の剝離面を残している。18は撰先端部・脚部への移行部の先端にノッチ状の微細な調整加工が入り、特異な形態となっている。19~21は所謂円基式と呼ばれるものである。19はやや厚手の剥片を素材とし、両面全体に調整加工を施すが、やや荒い感じを受ける。20は周辺に荒い調を施すのみで、裏面に主剝離面が大きく残る。21も裏面に素材の剝離面を残す。円基部はやや突出した形態に作り出している。22・23は未製品と考えられる。2点とも両面全体に荒い調整加工を加えているが、下縁に折断面状の剝離面を残している。

石錐 (第58図 24)

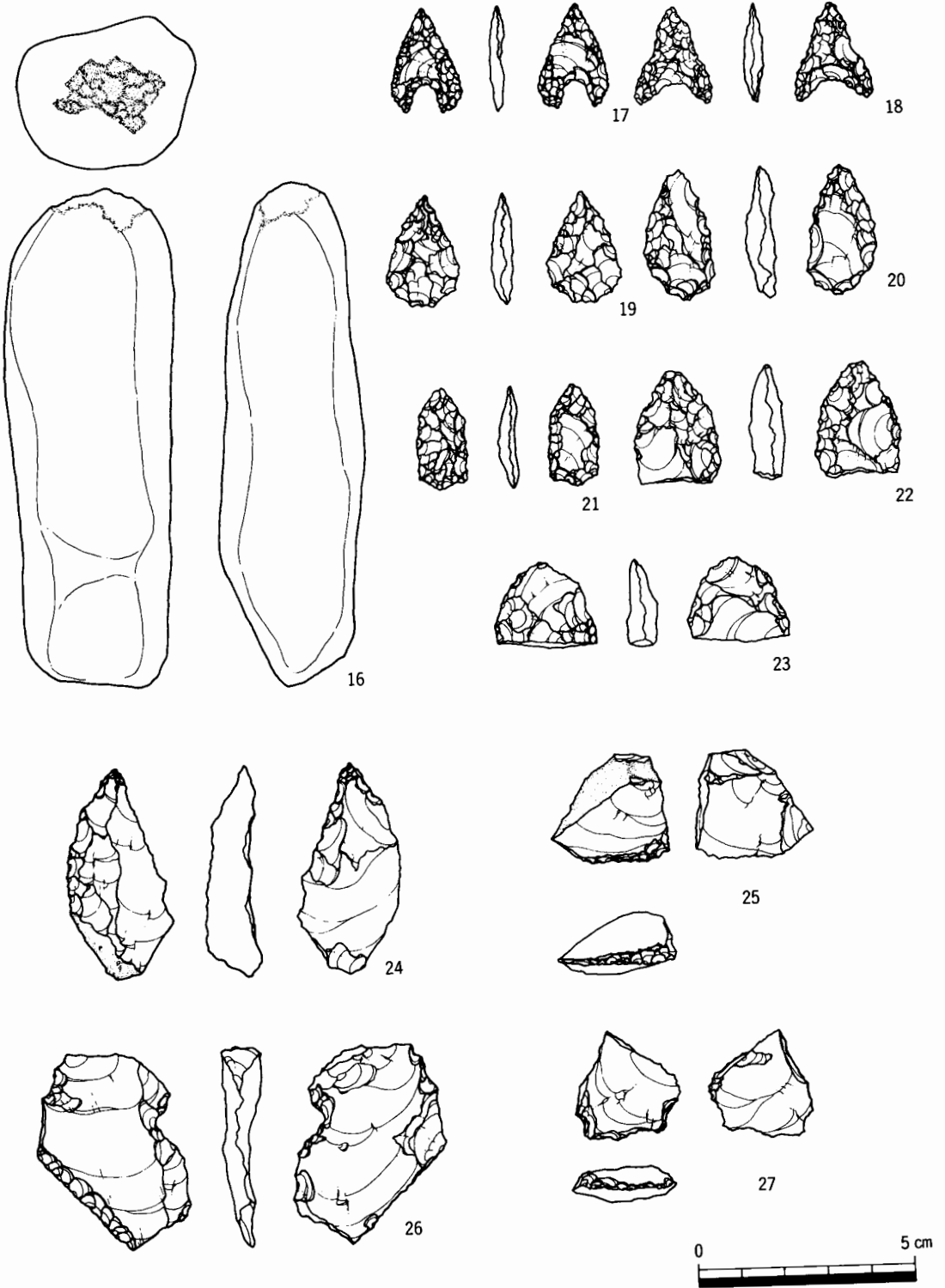
1点出土している。縦長状の剥片を素材として、素材の形を大きく変えることはなく、先端部付近のみ裏面から調整加工を施し錐部を作り出している。先端をわずかに欠損している。

削器 (第58・59図 25~31)

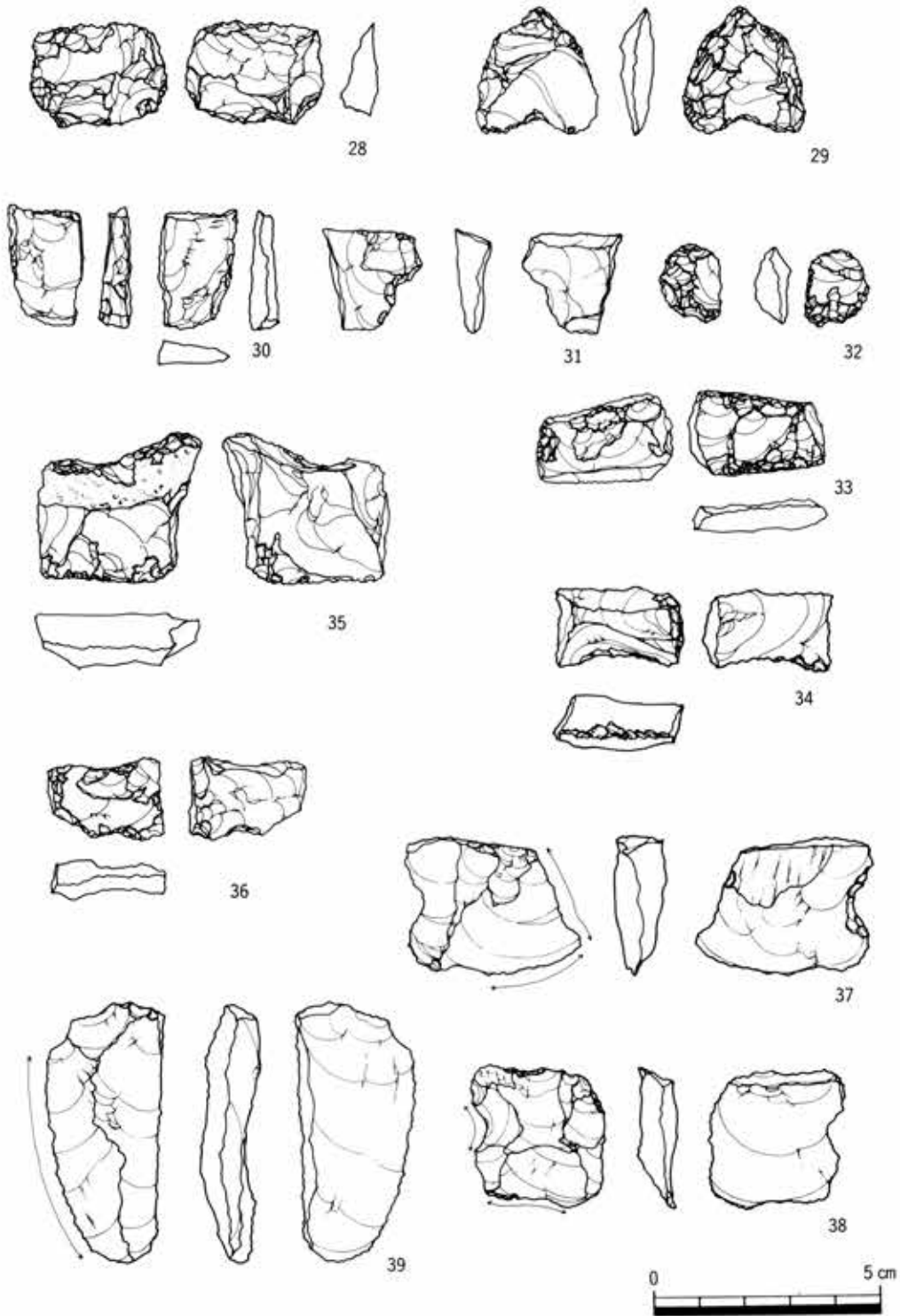
8点出土している。7点図示した。すべて素材となった剥片の形状を大きく変えることはなく、多様な形態を見せている。25は表皮の残る厚い不定形剥片の下縁部に腹面側から細かい調整剝離を加えている。26は縦長状剥片両側縁に腹面側より荒い調整剝離を施しているが、抉入型刃部と真直な刃部が併存している。27は不定形な剥片を素材とするが、打面部は欠損している。下縁部に荒い調整剝離を加えている。28は裏面上・下縁部に調整剝離を加え刃部としているが、つぶれ状の剝離が認められ、あるいは楔形石器の範疇に入るのかもしれない。29は不定形剥片の裏面側に正面から打撃痕が多く残る細かな調整剝離を両側縁に加えている。30は一側縁に折断面をもつ横長剥片を素材とし、他方に両面からの調整剝離を加えている。31は不定形剥片の右側縁に数回の剝離でノッチ状の刃部を作出している。

楔形石器 (第59図 32~36)

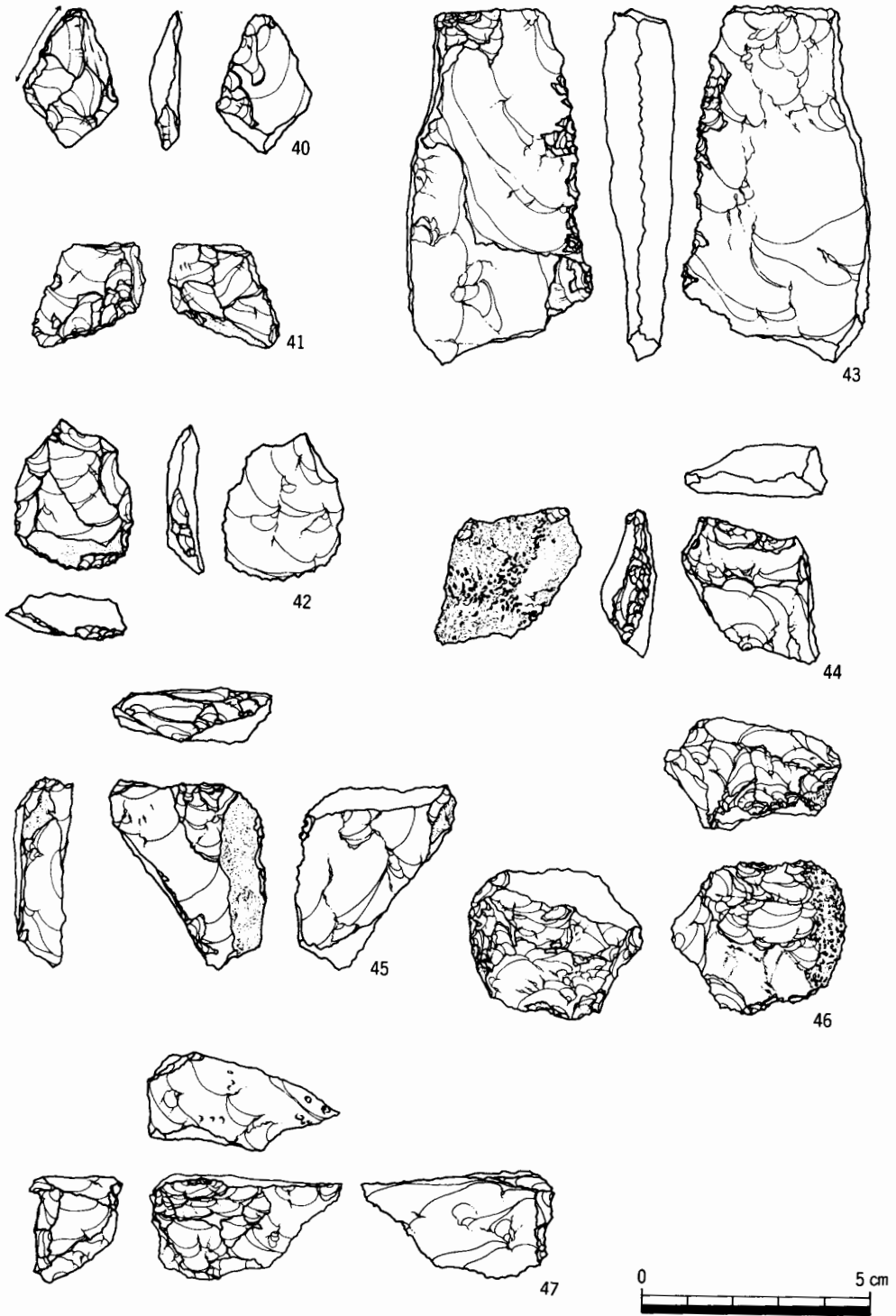
12点出土している。うち5点図示した。全体的には楔形石器としては小形の部類に入るものが多い。32は非常に小形の不定形剥片を素材としている。上縁には細かい階段状剝離が見られ



第58圖 包含層出土石器(3)



第59図 包含層出土石器(4)



第60圖 包含層出土石器(5)

るが、下縁には三枚の小剥離痕が認められるが、上縁同様の階段状剥離は見られない。使用の際の加撃によって破碎された結果かもしれない。33は一方の側縁に顕著な截断面が見られる。また、上・下縁に階段状剥離が認められる。34は背面中央に古い剥離面を残す分厚い縦長剥片の側縁に階段状剥離が集中し、つぶれ状を呈している。35は一方の側縁が折断面、他方が折断面及び剥離面となっている。背面の礫面及び節理面にはつぶれ状の打撃痕が集中している。また、下縁には小剥離痕が認められる。36は打面、末端部に表皮を残す縦長状の剥片を素材とし上・下縁中央につぶれ状の打撃痕が集中する。

使用痕のある剥片 (第59・60図 37~40)

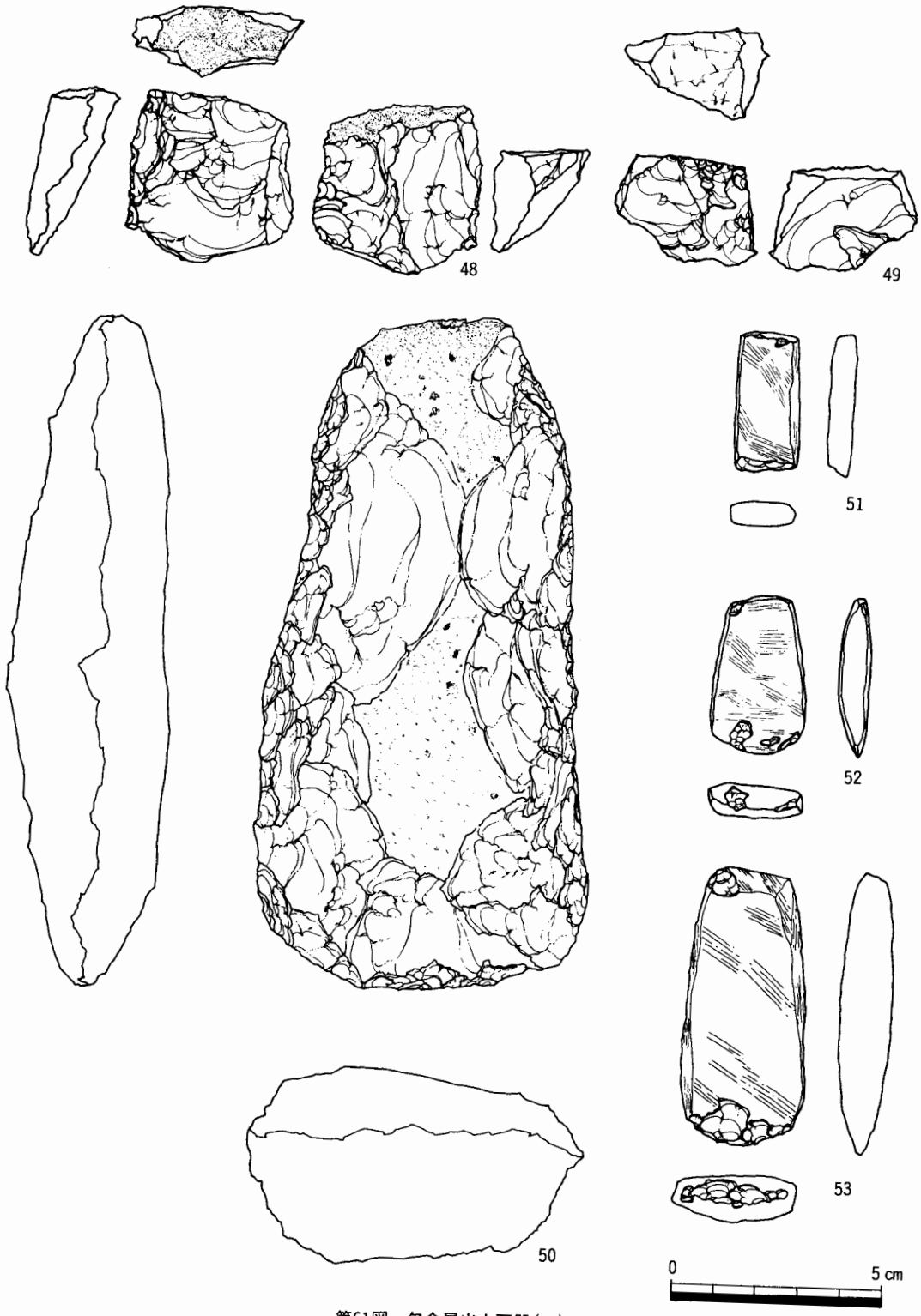
5点出土している。うち4点図示した。37は幅広な不定形剥片を素材としたもので、右側縁及び下縁部に連続して微細な剥離痕が見られる。38も同じく幅広な剥片を素材とし、左側縁のノッチ状を呈する部分及び下縁部に連続した使用痕が認められる。39は縦長剥片を素材とし、左側縁部に連続して小剥離痕が見られる。40は不定形剥片の腹面側に調整加工が認められ、何らかの未製品の可能性もあるが左側縁に使用痕が見られる。図示しなかった例も含め、いずれも素材の選択、使用部分の位置等にまったく意図的な傾向は何もない。

二次加工のある剥片 (第60図 41~43)

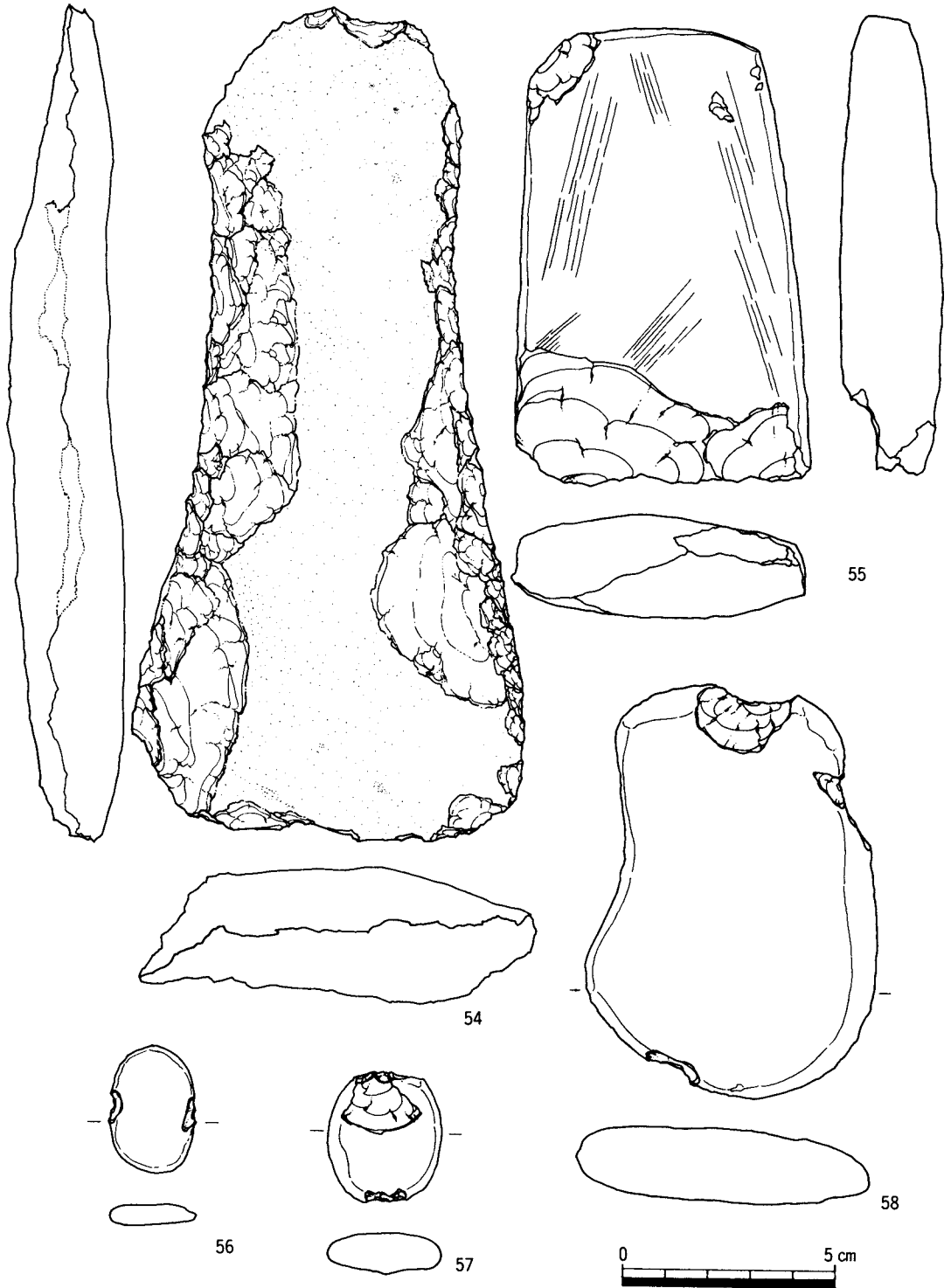
8点出土している。うち3点図示した。41は不定形剥片を素材とするが、打面は除去してある。下縁部に裏面から数回やや荒い調整加工を施している。42は貝殻状剥片を素材としているが、頭部を正面より折り取っている。右側縁下端から下縁部にかけて連続したやや角度のある調整加工を施している。43は大型の縦長状剥片を素材として、左側縁の正・裏面に細かい調整剥離を散漫に施している。

石核 (第60・61図 44~49)

12点出土している。うち6点図示した。44・46は円礫を分割したような厚手の剥片を素材としている。裏面には礫面が全体に残り、この礫面から推定して拳大程度の円礫を用いたものと考えられる。44は裏面の礫面を打面とし上・下縁より幅広で寸づまりの剥片を剥取しているが、本石核からの剥片剥離点数は少なかったと考えられる。46は最初に裏面に残る礫面を打面として正面上縁から、続いて下縁から剥片剥離作業を行う。次に最初の作業面を打面として裏面へ、また続いてその作業面を打面として正面へと剥片剥離作業を行なっている。結果的には各作業面が打面調整の役割を果たしていたことになってきたと考えられる。小形の所謂貝殻状剥片が剥取されているが、安定はしていない。45は断面が長方形を呈する板状剥片を素材とする。三枚の剥離で後方にやや傾斜する打面を作出している。作業面は一面に限定される。47・49は厚



第61圖 包含層出土石器(6)



第62図 包含層出土石器(7)

手の剥片を素材とする。47の打面は一枚の剥離面よりなる単剥離打面である。打面上には多くの打撃痕が多く認められる。正面上縁には著しいつぶれ状の階段状剥離が集中している箇所が認められるが、それ以前に寸づまりな割合と安定した剥片を剥取している。49は後方に傾斜する節理面を打面としている。剥離作業は正面のみに限られ、小形の幅広剥片を生産している。下縁裏面側に使用痕かと思われる微細な剥離痕が連続している。48は厚手の幅広な剥片を素材とし、周辺に残る平坦な礫面及び剥離面を打面として、正面・裏面ともに剥片の生産を行っている。正・裏面とも90°の打面転移を行っている。

石 刀 (第61図 51)

1のみ出土。中間部と思われ、玢岩製である。両側縁に狭小な側面をもち、断面は四角形となる。やや荒い研磨痕が前面に認められる。

打製石斧 (第61図 50・第62図 54)

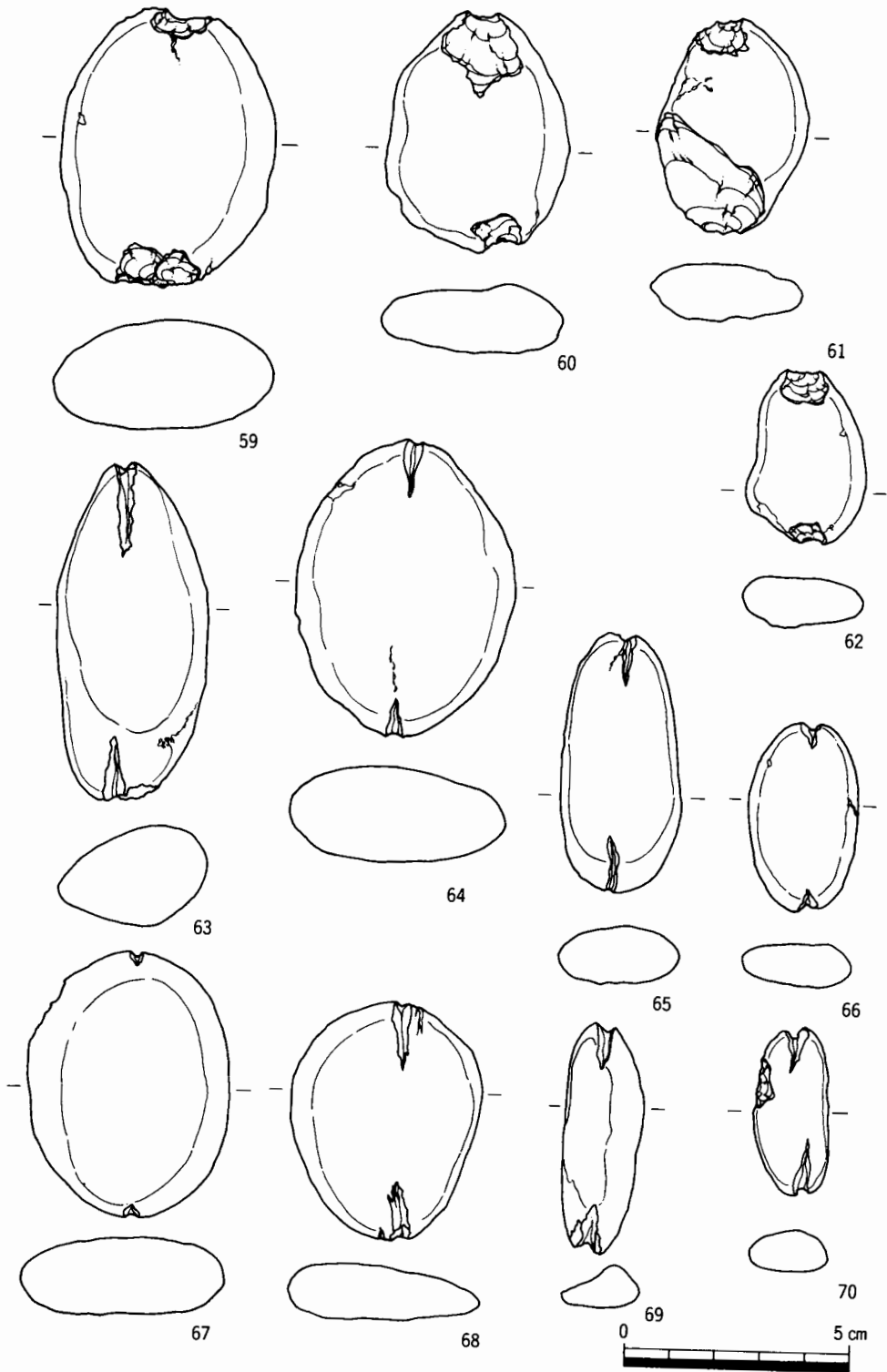
33点出土しているが、ほとんどが刃部等のみの残存、あるいは打製石斧製作にかかわる剥片であり、全容が把握できる2点を図示した。2点とも第1号土壌の出土である、49は分厚な横長剥片を素材とした揆形の石斧である。調整加工によって素材の厚さはあまり減じられていない。刃部には摩滅が認められる。53も厚手の横長剥片を素材としており、正面周辺部のみの調整を加えているために大きく表皮を残す。両側縁はやや内湾気味に調整剥離が加えられている。やはり揆形の石斧である。刃部は最初の剥離でできた薄く鋭利な部分を利用している。

磨製石斧 (第61図 52～53・第62図 55)

8点出土している。第1号堅穴住居跡からも1点出土している。うち3点図示した。すべて定角式の石斧である。刃部形態は両刃、片刃が見られる。石材は玢岩・結晶片岩が用いられている。51は長さ4cmで刃部形態は片刃を呈する。正面刃部には刃こぼれと思われる数枚の剥離痕が見られ、また裏面刃部には斜交する線状痕が認められる。全体に丁寧に研磨されている。52も刃部形態は片刃を呈する。正面刃部には刃こぼれと思われる3枚の剥離痕が見られる。基部側に丁寧な研磨痕が見られる。54は刃部を欠損しているが、おそらく刃部は両刃を呈すると考えられる。第1号堅穴住居跡床面直上から出土している。

礫石錘 (第62・63図 56～62)

12点出土している。第1号堅穴住居跡からも2点出土している。うち7点図示した。石材は砂岩・安山岩・泥岩・玢岩が用いられている。いずれも扁平な楕円礫の長軸の両端に1～3枚程度の剥離によって抉入部を作出しているが、61の1点のみ短軸の両端にそれぞれ一枚の剥離



第63図 包含層出土石器(8)

によって抉入部を作り出している。重量からみても、10g前後、20g前後、40g前後の三者に大別できる。

切目石錘（第63図63～70）

39点出土している。SB1からも2点出土している。うち8点図示した。石材は砂岩・安山岩・泥岩・ホルンフェルスが用いられている。いずれも扁平な楕円礫の長軸の両端に切目を入れている。重量から見てみると、10～30g、50～70g、90～100gの三者に大別できる。

磨石・凹石

磨石 11点出土している。石材は玢岩・安山岩・閃緑岩が用いられている。分厚な楕円礫の長軸の両端に研磨痕を有するものがほとんどであるが、主面に研磨痕を有するものも認められる。

凹石 8点出土している。礫面に明らかに凹を有するものを本類とした。石材は安山岩・閃緑岩・玢岩・砂岩・流紋岩が用いられている。主面のみに凹を有するものと両面に凹を有するものに大別できる。
(佐野康雄)

第17表 包含層出土石器計測表（1）

削器計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	挿図
1	4 J	II	12	チャート	4.6	3.4	0.7	10.7	58-26
2	4 8 II	VI	106	チャート	1.7	2.9	0.4	2.2	57-11
3	4 I	III	2	チャート	2.5	2.4	1.3	8.2	58-25
4	4 6 H	II	5	チャート	2.9	2.2	1.1	8.0	59-28
5	1 C	II	6	チャート	2.5	2.7	0.6	4.8	59-29
6	4 8 C	VI	20-1	チャート	3.0	1.7	0.7	4.8	56-10
7	2 C	II	16	チャート	2.8	2.1	0.7	5.3	
8	6 K	II	7	チャート	2.7	1.7	0.7	4.5	
9	4 D	II	13	チャート	2.0	2.3	0.7	4.6	58-27
10	Aトレ	II	4	チャート	2.3	2.0	0.8	3.6	59-31

剥片計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	挿図	備考
1	4 8 M	VII	413	チャート	2.6	2.2	0.6	0.6	56-2	接合資料
2	4 8 M	VII	406	チャート	2.5	1.5	0.5	1.7	56-1	接合資料
3	4 8 M	VIII	409	チャート	5.0	4.7	1.3	18.3	56-3	接合資料
4	4 8 M	VIII	398	チャート	4.0	2.8	1.0	9.5	56-4	接合資料
5	4 8 M	VII	401	チャート	1.9	2.1	0.9	3.0	56-5	接合資料

第18表 包含層出土石器計測表(2)

石鏃属性表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	抉深	最大幅	折損部	挿図
					長	幅	厚					
1	3F	II	1	チャート	22.5	17.9	4.4	1.2	-4.6	B	—	58-18
2	4N	II	2	チャート	(24.4)	16.6	2.7	(1.0)	-6.4	B	a	58-17
3	2D	II	25	チャート	18.0	(12.1)	3.3	(0.5)	-3.6	B	c	
4	11G	II	1	チャート	15.7	11.5	3.3	(0.5)	(-1.1)	B	c	
5	SS3	VI	356	チャート	23.5	16.5	4.1	1.4	-2.0	B	—	
6	1E	II	4	チャート	(16.1)	17.1	3.5	(0.6)	-2.6	B	a	
7	49L	I	1	チャート	(30.9)	16.2	6.3	(3.4)	+7.1	B	a	58-20
8	2C	I	2	チャート	24.3	11.9	4.0	1.2	+2.2	B	—	58-21
9	47I	I	3	チャート	25.9	16.7	4.9	2.2	+7.0	B	—	58-19
10	Cトレ		1	チャート	26.8	20.3	7.3	4.4	—	B	—	58-22
11	48N	I	7	チャート	20.4	24.5	7.1	4.0	—	B	—	58-23
12	49K	VI	2	安山岩	33.4	21.6	7.6	4.9	0	B	—	56-8

石錐属性表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	尖頭部 (mm)			折損	挿図	
					長	幅	厚		長	幅	厚			断面形
1	1E	II	3	チャート	(48.7)	23.8	12.2	(12.3)	(8.7)	6.4	5.1	三角形	先端	58-24

楔形石器計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	重量 (g)	挿図
1	1D	II	20	チャート	19.3	31.0	6.4	5.5	59-33
2	46II	II	2	チャート	35.9	19.2	6.2	4.9	
3	46I	II	21	チャート	31.5	21.7	13.2	9.9	
4	4D	I	12	チャート	18.4	25.1	9.0	4.2	59-34
5	47N	II	49	チャート	17.0	13.3	6.9	1.8	59-32
6	48N	I	1	チャート	11.6	18.9	4.1	0.9	
7	3E	II	4	チャート	34.4	37.1	11.5	16.7	59-35
8	47N	II	24	チャート	28.9	20.6	7.4	4.6	
9	47N	II	53	チャート	26.1	10.1	8.1	2.7	
10	46I	II	12	チャート	26.3	17.6	11.1	6.7	59-36
11	1D	II	19	チャート	30.1	32.2	10.2	9.8	
12	46J	II	2	チャート	(27.5)	16.5	5.3	(1.9)	

礫石錘計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長1 (mm)	全長2 (mm)	全幅 (mm)	全厚 (mm)	a	b	重量 (g)	挿図
1	49M	II	1	砂岩	63.1	61.7	50.2	25.2	12.8	17.1	115.6	63-59
2	18M	I	1	安山岩	96.8	88.8	68.4	17.1	18.9	11.8	175.6	63-58
3	1D	II	23	砂岩	49.7	48.4	39.3	15.8	9.3	11.3	49.7	
4	1C	II	11	砂岩	54.5	51.6	41.6	15.6	5.5	7.6	43.0	63-60
5	2D	II	19	泥岩	41.1	(34.9)	30.6	10.8	5.7	(15.5)	(20.1)	
6	46II	II	8	玢岩	39.6	37.6	27.9	12.2	6.8	6.0	20.0	63-62
7	P44		2	砂岩	39.1	38.5	23.6	9.9	4.6	5.9	13.2	
8	1C	II	5	砂岩	39.7	38.9	28.4	12.1	2.8	5.9	20.2	
9	5I	II	1	泥岩	20.4	19.1	30.9	4.9	7.2	6.0	4.9	62-56
10	2C	II	24	礫片	48.9	47.4	34.5	12.7	9.8	(3.1)	(26.2)	63-61
11	SC1P2		2	砂岩	32.2	31.0	27.8	10.3	9.4	7.0	11.9	62-57

第19表 包含層出土石器計測表(3)

切り目石錘計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図
1	4J	II	2	砂岩	36.9	34.7	15.1	25.9	
2	1D	I	2	安山岩	52.5	17.3	10.3	12.3	63-69
3	SB1		1	砂岩	38.2	16.7	10.3	9.6	63-70
4	6K	II	2	玢岩	35.4	23.9	10.0	11.6	
5	46I	II	17	砂岩	48.5	24.3	14.5	23.2	
6	1D	II	25	玢岩	34.6	23.4	12.2	10.5	
7	1D	II	17	砂岩	34.1	27.1	8.9	14.6	
8	1C	II	10	砂岩	46.0	34.1	14.6	31.1	
9	2E	II	7	砂岩	39.2	23.1	12.1	16.9	
10	2C	II	1	砂岩	42.4	25.9	11.8	19.0	63-66
11	1E	II	6	砂岩	68.0	27.0	16.8	45.1	
12	1E	II	11	砂岩	40.8	26.7	11.2	17.3	
13	2D	II	11	砂岩	42.9	25.5	10.2	16.8	
14	48H	II	1	砂岩	44.2	25.2	15.5	23.1	
15	4J	II	3	砂岩	44.5	27.3	14.5	26.1	
16	P33		1	緑閃石片	9.0	26.9	12.6	32.4	63-65
17	1C	II	20	砂岩	42.9	37.7	15.1	31.1	
18	1C	II	9	砂岩	43.9	27.3	18.5	27.2	
19	2D	II	35	砂岩	49.8	30.6	17.5	33.6	
20	4D	II	1	砂岩	60.6	24.8	12.6	29.4	
21	49K	II	1	緑閃石片	45.1	27.3	11.2	18.4	
22	47N	II	22	安山岩	52.9	34.5	21.6	55.7	
23	3D	II	1	砂岩	53.8	43.3	12.0	39.9	63-68
24	6J	II	4	砂岩	45.1	34.9	11.5	26.0	
25	4J	II	4	安山岩	76.1	35.2	21.8	73.1	63-63
26	6K	II	1	砂岩	60.2	46.2	17.5	77.9	63-67
27	46I	II	16	砂岩	57.3	46.4	23.4	94.5	63-64
28	6L	II	16	砂岩	67.0	50.8	21.6	99.4	
29	46H	II	1	砂岩	(50.9)	31.8	22.9	(47.6)	
30	2C	II	2	緑閃石片	(49.4)	(29.6)	(12.6)	(17.3)	
31	2D	I	11	泥岩	(48.7)	(37.1)	(13.6)	(28.6)	
32	47L	II	1	砂岩	(38.6)	(34.1)	13.8	(26.4)	
33	47H	II	1	砂岩	64.9	34.1	17.1	54.6	
34	47I	I	1	砂岩	(25.5)	(23.5)	15.6	(11.1)	
35	2C	II	25	緑閃石片	42.0	(21.9)	9.3	(11.5)	
36	2D	II	13	緑閃石片	35.7	(27.5)	19.3	(21.3)	
37	SB1P1			緑閃石片	(41.8)	(24.3)	15.3	(22.6)	
38	SB1		4	緑閃石片	47.8	39.0	(36.8)	(15.1)	
39	SB1		1	砂岩	41.1	28.6	15.5	27.5	

第20表 包含層出土石器計測表(4)

磨製石斧計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	挿図
1	SB1		318-1	結晶片岩	(12.9)	8.9	2.5	(341.6)	62-55
2	5I	II	5	結晶片岩	3.9	2.4	0.7	13.2	61-52
3	4I	I攪乱	1	玢岩	6.5	3.1	1.3	50.9	
4	1D	II	38	玢岩	6.8	3.0	1.2	39.4	61-53
5	47M	II	1	玢岩	16.8	7.3	3.5	390.8	
6	2C	I	1	玢岩	8.8	3.8	1.3	94.1	
7		I	1	玢岩	10.3	6.0	3.9	353.7	
8	1D	I	6-1	玢岩	17.7	7.4	3.6	709.0	

打製石斧計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	挿図
1	SK1		219-1	砂岩	19.8	9.5	2.4	525	62-54
2	SK1	II	212-2	玢岩	16.4	7.9	3.7	630	61-50

石刀計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	挿図
1	2D	II	24	玢岩	(33.5)	(15.4)	(6.2)	(7.0)	61-51

石匙計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	挿図
1	48M	VI	57	チャート	(2.5)	(4.2)	(0.9)	(6.9)	56-9

敲石計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	挿図
1	50M	VI	306	砂岩	1.5	4.1	3.5	258.9	58-16

使用痕のある剥片計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	挿図
1	3D	II	1	チャート	6.1	2.8	1.4	22.5	59-39
2	1D	II	9	チャート	3.1	4.0	1.1	9.1	59-37
3	4D	I	11	チャート	3.3	3.0	0.9	9.5	59-38
4	47J	I	5	チャート	3.0	2.1	0.7	7.8	60-40
5	50N	VI	173	チャート	2.7	1.8	0.9	2.5	57-12
6	48M	VII	419	チャート	5.6	3.3	1.2	16.6	56-6

二次加工のある剥片計測表

NO	出土区	出土層位	遺物番号	石材	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	挿図
1	2C	II	20	チャート	3.4	3.1	0.9	9.8	
2	47H	II	3	チャート	2.5	2.2	0.7	4.9	
3	P34		1	チャート	3.3	2.5	0.6	7.0	60-42
4	2D	II	17	チャート	7.4	4.0	1.2	50.6	60-43
5	1D	II	9	チャート	3.0	3.8	1.1	11.8	
6	1D	II	26	チャート	2.7	4.9	2.5	0.6	
7	47M	II	5	チャート	1.9	3.2	1.5	12.0	
8	47J	II	5	チャート	2.0	2.5	0.7	4.8	60-41

第22表 礎計測表(2)

番号	構成遺骸	所屬	重量(g)	完形度	焼(山形面)	焼(四柱面)	備考	番号	構成遺骸	所屬	重量(g)	完形度	焼(山形面)	焼(四柱面)	備考
181	1	SS1	341	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	341	1	焼	1	焼
182	1	SS1	242	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	242	1	焼	1	焼
183	1	SS1	243	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	243	1	焼	1	焼
184	1	SS1	244	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	244	1	焼	1	焼
185	1	SS1	245	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	245	1	非焼	1	非焼
186	1	SS1	246	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	246	1	焼	1	焼
187	1	SS1	247	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	247	1	焼	1	焼
188	1	SS1	248	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	248	1	焼	1	焼
189	1	SS1	249	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	249	1	焼	1	焼
190	1	SS1	250	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	250	1	焼	1	焼
191	1	SS1	251	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	251	1	焼	1	焼
192	1	SS1	252	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	252	1	焼	1	焼
193	1	SS1	253	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	253	1	非焼	1	非焼
194	1	SS1	254	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	254	1	焼	1	焼
195	1	SS1	255	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	255	1	焼	1	焼
196	1	SS1	256	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	256	1	焼	1	焼
197	1	SS1	257	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	257	1	非焼	1	非焼
198	1	SS1	258	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	258	1	非焼	1	非焼
199	1	SS1	259	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	259	1	非焼	1	非焼
200	1	SS1	260	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	260	1	非焼	1	非焼
201	1	SS1	261	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	261	1	非焼	1	非焼
202	1	SS1	262	1	SS1	1	焼	1	SS1	1	262	1	焼	1	焼
203	1	SS1	263	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	263	1	非焼	1	非焼
204	1	SS1	264	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	264	1	非焼	1	非焼
205	1	SS1	265	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	265	1	非焼	1	非焼
206	1	SS1	266	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	266	1	非焼	1	非焼
207	1	SS1	267	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	267	1	非焼	1	非焼
208	1	SS1	268	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	268	1	非焼	1	非焼
209	1	SS1	269	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	269	1	非焼	1	非焼
210	1	SS1	270	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	270	1	非焼	1	非焼
211	1	SS1	271	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	271	1	非焼	1	非焼
212	1	SS1	272	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	272	1	非焼	1	非焼
213	1	SS1	273	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	273	1	非焼	1	非焼
214	1	SS1	274	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	274	1	非焼	1	非焼
215	1	SS1	275	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	275	1	非焼	1	非焼
216	1	SS1	276	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	276	1	非焼	1	非焼
217	1	SS1	277	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	277	1	非焼	1	非焼
218	1	SS1	278	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	278	1	非焼	1	非焼
219	1	SS1	279	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	279	1	非焼	1	非焼
220	1	SS1	280	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	280	1	非焼	1	非焼
221	1	SS1	281	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	281	1	非焼	1	非焼
222	1	SS1	282	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	282	1	非焼	1	非焼
223	1	SS1	283	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	283	1	非焼	1	非焼
224	1	SS1	284	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	284	1	非焼	1	非焼
225	1	SS1	285	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	285	1	非焼	1	非焼
226	1	SS1	286	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	286	1	非焼	1	非焼
227	1	SS1	287	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	287	1	非焼	1	非焼
228	1	SS1	288	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	288	1	非焼	1	非焼
229	1	SS1	289	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	289	1	非焼	1	非焼
230	1	SS1	290	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	290	1	非焼	1	非焼
231	1	SS1	291	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	291	1	非焼	1	非焼
232	1	SS1	292	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	292	1	非焼	1	非焼
233	1	SS1	293	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	293	1	非焼	1	非焼
234	1	SS1	294	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	294	1	非焼	1	非焼
235	1	SS1	295	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	295	1	非焼	1	非焼
236	1	SS1	296	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	296	1	非焼	1	非焼
237	1	SS1	297	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	297	1	非焼	1	非焼
238	1	SS1	298	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	298	1	非焼	1	非焼
239	1	SS1	299	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	299	1	非焼	1	非焼
240	1	SS1	300	1	SS1	1	非焼	1	SS1	1	300	1	非焼	1	非焼

夕一外付着

夕一外付着

第24表 礫計測表(4)

番号	構成層	所属	直径 (g)	先形度	焼白率	備考	番号	構成層	所属	直径 (g)	先形度	焼白率	備考	番号	構成層	所属	直径 (g)	先形度	焼白率	備考
121	1	S.S.3	74	10	焼		181	1	S.S.3	661	10	焼		241	1	S.S.3	153	10	焼	
122	1	S.S.3	69	10	焼		182	1	S.S.3	245	10	焼		242	1	S.S.3	215	10	焼	
123	1	S.S.3	189	10	焼		183	1	S.S.3	180	10	焼		243	1	S.S.3	110	10	焼	
124	1	S.S.3	161	10	焼		184	1	S.S.3	895	10	焼		244	1	S.S.3	65	10	焼	
125	1	S.S.3	96	10	焼		185	1	S.S.3	448	10	焼		245	1	S.S.3	145	10	焼	
126	1	S.S.3	97	10	焼		186	1	S.S.3	943	10	焼		246	1	S.S.3	402	10	焼	
127	1	S.S.3	36	10	焼		187	1	S.S.3	124	10	焼		247	1	S.S.3	118	10	焼	
128	1	S.S.3	58	10	焼		188	1	S.S.3	579	10	焼		248	1	S.S.3	51	10	焼	
129	1	S.S.3	97	10	焼		189	1	S.S.3	525	10	焼		249	1	S.S.3	71	10	焼	
130	1	S.S.3	67	10	焼		190	1	S.S.3	886	10	焼		250	1	S.S.3	82	10	焼	
131	1	S.S.3	58	10	焼		191	1	S.S.3	587	10	焼		251	1	S.S.3	52	10	焼	
132	1	S.S.3	84	10	焼		192	1	S.S.3	714	10	焼		252	1	S.S.3	129	10	焼	
133	1	S.S.3	29	10	焼		193	1	S.S.3	300	10	焼		253	1	S.S.3	175	10	焼	
134	1	S.S.3	132	10	焼		194	1	S.S.3	501	10	焼		254	1	S.S.3	99	10	焼	
135	1	S.S.3	42	10	焼		195	1	S.S.3	459	10	焼		255	1	S.S.3	142	10	焼	
136	1	S.S.3	78	10	焼		196	1	S.S.3	116	10	焼		256	1	S.S.3	270	10	焼	
137	1	S.S.3	49	10	焼		197	1	S.S.3	542	10	焼		257	1	S.S.3	139	10	焼	
138	1	S.S.3	31	10	焼		198	1	S.S.3	377	10	焼		258	1	S.S.3	11	10	焼	
139	1	S.S.3	54	10	焼		199	1	S.S.3	183	10	焼		259	1	S.S.3	74	10	焼	
140	1	S.S.3	44	10	焼		200	1	S.S.3	210	10	焼		260	1	S.S.3	54	10	焼	
141	1	S.S.3	112	10	焼		201	1	S.S.3	284	10	焼		261	1	S.S.3	55	10	焼	
142	1	S.S.3	31	10	焼		202	1	S.S.3	360	10	焼		262	1	S.S.3	40	10	焼	
143	1	S.S.3	36	10	焼		203	1	S.S.3	344	10	焼		263	1	S.S.3	144	10	焼	
144	1	S.S.3	110	10	焼		204	1	S.S.3	250	10	焼		264	1	S.S.3	43	10	焼	
145	1	S.S.3	70	10	焼		205	1	S.S.3	107	10	焼		265	1	S.S.3	127	10	焼	
146	1	S.S.3	70	10	焼		206	1	S.S.3	314	10	焼		266	1	S.S.3	56	10	焼	
147	1	S.S.3	91	10	焼		207	1	S.S.3	414	10	焼		267	1	S.S.3	179	10	焼	
148	1	S.S.3	30	10	焼		208	1	S.S.3	667	10	焼		268	1	S.S.3	177	10	焼	
149	1	S.S.3	61	10	焼		209	1	S.S.3	422	10	焼		269	1	S.S.3	94	10	焼	
150	1	S.S.3	20	10	焼		210	1	S.S.3	643	10	焼		270	1	S.S.3	34	10	焼	
151	1	S.S.3	45	10	焼		211	1	S.S.3	287	10	焼		271	1	S.S.3	69	10	焼	
152	1	S.S.3	78	10	焼		212	1	S.S.3	281	10	焼		272	1	S.S.3	99	10	焼	
153	1	S.S.3	51	10	焼		213	1	S.S.3	822	10	焼		273	1	S.S.3	189	10	焼	
154	1	S.S.3	44	10	焼		214	1	S.S.3	450	10	焼		274	1	S.S.3	264	10	焼	
155	1	S.S.3	108	10	焼		215	1	S.S.3	680	10	焼		275	1	S.S.3	335	10	焼	
156	1	S.S.3	43	10	焼		216	1	S.S.3	280	10	焼		276	1	S.S.3	44	10	焼	
157	1	S.S.3	75	10	焼		217	1	S.S.3	462	10	焼		277	1	S.S.3	390	10	焼	
158	1	S.S.3	82	10	焼		218	1	S.S.3	431	10	焼		278	1	S.S.3	155	10	焼	
159	1	S.S.3	68	10	焼		219	1	S.S.3	617	10	焼		279	1	S.S.3	135	10	焼	
160	1	S.S.3	81	10	焼		220	1	S.S.3	313	10	焼		280	1	S.S.3	259	10	焼	
161	1	S.S.3	75	10	焼		221	1	S.S.3	217	10	焼		281	1	S.S.3	175	10	焼	
162	1	S.S.3	69	10	焼		222	1	S.S.3	209	10	焼		282	1	S.S.3	239	10	焼	
163	1	S.S.3	60	10	焼		223	1	S.S.3	225	10	焼		283	1	S.S.3	107	10	焼	
164	1	S.S.3	120	10	焼		224	1	S.S.3	158	10	焼		284	1	S.S.3	27	10	焼	
165	1	S.S.3	62	10	焼		225	1	S.S.3	508	10	焼		285	1	S.S.3	38	10	焼	
166	1	S.S.3	100	10	焼		226	1	S.S.3	243	10	焼		286	1	S.S.3	86	10	焼	
167	1	S.S.3	91	10	焼		227	1	S.S.3	194	10	焼		287	1	S.S.3	76	10	焼	
168	1	S.S.3	40	10	焼		228	1	S.S.3	394	10	焼		288	1	S.S.3	62	10	焼	
169	1	S.S.3	34	10	焼		229	1	S.S.3	1000	10	焼		289	1	S.S.3	8	10	焼	
170	1	S.S.3	38	10	焼		230	1	S.S.3	610	10	焼		290	1	S.S.3	47	10	焼	
171	1	S.S.3	42	10	焼		231	1	S.S.3	283	10	焼		291	1	S.S.3	72	10	焼	
172	1	S.S.3	289	10	焼		232	1	S.S.3	463	10	焼		292	1	S.S.3	148	10	焼	
173	1	S.S.3	624	10	焼		233	1	S.S.3	321	10	焼		293	1	S.S.3	53	10	焼	
174	1	S.S.3	627	10	焼		234	1	S.S.3	449	10	焼		294	1	S.S.3	33	10	焼	
175	1	S.S.3	187	10	焼		235	1	S.S.3	175	10	焼		295	1	S.S.3	47	10	焼	
176	1	S.S.3	235	10	焼		236	1	S.S.3	199	10	焼		296	1	S.S.3	29	10	焼	
177	1	S.S.3	585	10	焼		237	1	S.S.3	255	10	焼		297	1	S.S.3	61	10	焼	
178	1	S.S.3	165	10	焼		238	1	S.S.3	151	10	焼		298	1	S.S.3	66	10	焼	
179	1	S.S.3	185	10	焼		239	1	S.S.3	165	10	焼		299	1	S.S.3	37	10	焼	
180	1	S.S.3	522	10	焼		240	1	S.S.3	90	10	焼		300	1	S.S.3	40	10	焼	

第25表 礫計測表 (5)

番号	構成数	所屬	重量 (g)	完形度	焼白然面	接合部	備考	番号	構成数	所屬	重量 (g)	完形度	焼白然面	接合部	備考
381	1	SS3	124	10	焼	10	焼	381	1	SS3	397	10	非焼	10	非焼
382	1	SS3	136	10	焼	10	焼	382	1	SS3	546	10	非焼	10	非焼
383	1	SS3	45	10	焼	10	焼	383	1	SS3	238	10	非焼	10	非焼
384	1	SS3	240	10	焼	10	焼	384	1	SS3	500	10	非焼	10	非焼
385	1	SS3	166	10	焼	10	焼	385	1	SS3	800	10	非焼	10	非焼
386	1	SS3	90	10	焼	10	焼	386	1	SS3	263	10	非焼	10	非焼
387	1	SS3	112	10	焼	10	焼	387	1	SS3	373	10	非焼	10	非焼
388	1	SS3	147	10	焼	10	焼	388	1	SS3	170	10	非焼	10	非焼
389	1	SS3	63	10	焼	10	焼	389	1	SS3	189	10	非焼	10	非焼
390	1	SS3	237	10	焼	10	焼	390	1	SS3	158	10	非焼	10	非焼
391	1	SS3	189	10	焼	10	焼	391	1	SS3	125	10	非焼	10	非焼
392	1	SS3	65	10	焼	10	焼	392	1	SS3	169	10	非焼	10	非焼
393	1	SS3	142	10	焼	10	焼	393	1	SS3	446	10	非焼	10	非焼
394	1	SS3	124	10	焼	10	焼	394	1	SS3	270	10	非焼	10	非焼
395	1	SS3	78	10	焼	10	焼	395	1	SS3	134	10	非焼	10	非焼
396	1	SS3	45	10	焼	10	焼	396	1	SS3	186	10	非焼	10	非焼
397	1	SS3	48	10	焼	10	焼	397	1	SS3	123	10	非焼	10	非焼
398	1	SS3	67	10	焼	10	焼	398	1	SS3	149	10	非焼	10	非焼
399	1	SS3	66	10	焼	10	焼	399	1	SS3	351	10	非焼	10	非焼
400	1	SS3	30	10	焼	10	焼	400	1	SS3	196	10	非焼	10	非焼
401	1	SS3	63	10	焼	10	焼	401	1	SS3	118	10	非焼	10	非焼
402	1	SS3	10	10	焼	10	焼	402	1	SS3	182	10	非焼	10	非焼
403	1	SS3	51	10	焼	10	焼	403	1	SS3	117	10	非焼	10	非焼
404	1	SS3	31	10	焼	10	焼	404	1	SS3	37	10	非焼	10	非焼
405	1	SS3	39	10	焼	10	焼	405	1	SS3	170	10	非焼	10	非焼
406	1	SS3	24	10	焼	10	焼	406	1	SS3	215	10	非焼	10	非焼
407	1	SS3	41	10	焼	10	焼	407	1	SS3	44	10	非焼	10	非焼
408	1	SS3	66	10	焼	10	焼	408	1	SS3	146	10	非焼	10	非焼
409	1	SS3	74	10	焼	10	焼	409	1	SS3	65	10	非焼	10	非焼
410	1	SS3	78	10	焼	10	焼	410	1	SS3	75	10	非焼	10	非焼
411	1	SS3	41	10	焼	10	焼	411	1	SS3	141	10	非焼	10	非焼
412	1	SS3	124	10	焼	10	焼	412	1	SS3	37	10	非焼	10	非焼
413	1	SS3	37	10	焼	10	焼	413	1	SS3	60	10	非焼	10	非焼
414	1	SS3	26	10	焼	10	焼	414	1	SS3	97	10	非焼	10	非焼
415	1	SS3	19	10	焼	10	焼	415	1	SS3	22	10	非焼	10	非焼
416	1	SS3	54	10	焼	10	焼	416	1	SS3	155	10	非焼	10	非焼
417	1	SS3	73	10	焼	10	焼	417	1	SS3	186	10	非焼	10	非焼
418	1	SS3	42	10	焼	10	焼	418	1	SS3	172	10	非焼	10	非焼
419	1	SS3	65	10	焼	10	焼	419	1	SS3	112	10	非焼	10	非焼
420	1	SS3	30	10	焼	10	焼	420	1	SS3	42	10	非焼	10	非焼
421	1	SS3	45	10	焼	10	焼	421	1	SS3	242	10	非焼	10	非焼
422	1	SS3	45	10	焼	10	焼	422	1	SS3	146	10	非焼	10	非焼
423	1	SS3	55	10	焼	10	焼	423	1	SS3	249	10	非焼	10	非焼
424	1	SS3	55	10	焼	10	焼	424	1	SS3	161	10	非焼	10	非焼
425	1	SS3	31	10	焼	10	焼	425	1	SS3	66	10	非焼	10	非焼
426	1	SS3	30	10	焼	10	焼	426	1	SS3	100	10	非焼	10	非焼
427	1	SS3	58	10	焼	10	焼	427	1	SS3	87	10	非焼	10	非焼
428	1	SS3	54	10	焼	10	焼	428	1	SS3	51	10	非焼	10	非焼
429	1	SS3	52	10	焼	10	焼	429	1	SS3	138	10	非焼	10	非焼
430	1	SS3	30	10	焼	10	焼	430	1	SS3	53	10	非焼	10	非焼
431	1	SS3	45	10	焼	10	焼	431	1	SS3	41	10	非焼	10	非焼
432	1	SS3	45	10	焼	10	焼	432	1	SS3	33	10	非焼	10	非焼
433	1	SS3	16	10	焼	10	焼	433	1	SS3	156	10	非焼	10	非焼
434	1	SS3	27	10	焼	10	焼	434	1	SS3	40	10	非焼	10	非焼
435	1	SS3	76	10	焼	10	焼	435	1	SS3	94	10	非焼	10	非焼
436	1	SS3	57	10	焼	10	焼	436	1	SS3	46	10	非焼	10	非焼
437	1	SS3	70	10	焼	10	焼	437	1	SS3	203	10	非焼	10	非焼
438	1	SS3	550	10	非焼	10	非焼	438	1	SS3	74	10	非焼	10	非焼
439	1	SS3	324	10	非焼	10	非焼	439	1	SS3	22	10	非焼	10	非焼
440	1	SS3						440	1	SS3					

礫化骸付着
夕一付着

礫化骸付着

第26表 礎計測表(6)

番号	構成層数	所属	重量(g)	完形度	焼自然面	焼層下面	備考	番号	構成層数	所属	重量(g)	完形度	焼自然面	焼層下面	備考
481	1	S.S.3	341	1	S.S.3	1	S.S.3	341	2	S.S.3	343	10	焼	焼層下面	焼
482	1	S.S.3	342	1	S.S.3	30	非焼	602	2	S.S.3	546	10	焼	焼	焼
483	1	S.S.3	343	1	S.S.3	30	非焼	603	2	S.S.3	2000	10	焼	焼	焼
484	1	S.S.3	344	1	S.S.3	184	非焼	604	3	S.S.3	750	10	焼	焼	焼
485	1	S.S.3	345	1	S.S.3	6	非焼	605	5	S.S.3	750	10	焼	焼	焼
486	1	S.S.3	346	1	S.S.3	32	非焼	606	2	S.S.3	755	10	焼	焼	焼
487	1	S.S.3	347	1	S.S.3	19	非焼	607	2	S.S.3	525	10	焼	焼	焼
488	1	S.S.3	348	1	S.S.3	7	非焼	608	2	S.S.3	1220	10	焼	焼	焼
489	1	S.S.3	349	1	S.S.3	42	非焼	609	2	S.S.3	1160	10	焼	焼	焼
490	1	S.S.3	350	1	S.S.3	12	非焼	610	6	S.S.3	510	10	焼	焼	焼
491	1	S.S.3	351	1	S.S.3	13	非焼	611	2	S.S.3	520	10	焼	焼	焼
492	1	S.S.3	352	1	S.S.3	18	非焼	612	2	S.S.3	620	10	焼	焼	焼
493	1	S.S.3	353	1	S.S.3	13	非焼	613	2	S.S.3	1	1	非焼	非焼	非焼
494	1	S.S.3	354	1	S.S.3	7	非焼	614	1	S.S.3	482	10	焼	焼	焼
495	1	S.S.3	355	1	S.S.3	1	非焼	615	9	S.S.3	487	10	焼	焼	焼
496	1	S.S.3	356	1	S.S.3	5	非焼	616	2	S.S.3	294	10	焼	焼	焼
497	1	S.S.3	357	1	S.S.3	2	非焼	617	2	S.S.3	346	10	焼	焼	焼
498	1	S.S.3	358	1	S.S.3	2	非焼	618	2	S.S.3	216	10	焼	焼	焼
499	1	S.S.3	359	1	S.S.3	3	非焼	619	4	S.S.3	1990	10	焼	焼	焼
500	1	S.S.3	360	1	S.S.3	1	非焼	620	5	S.S.3	2000	10	焼	焼	焼
501	1	S.S.3	361	1	S.S.3	1	非焼	621	2	S.S.3	86	5	焼	焼	焼
502	1	S.S.3	362	1	S.S.3	1	非焼	622	2	S.S.3	578	6	焼	焼	焼
503	1	S.S.3	363	1	S.S.3	1	非焼	623	2	S.S.3	289	9	焼	焼	焼
504	1	S.S.3	364	1	S.S.3	1740	非焼	624	3	S.S.3	52	2	焼	焼	焼
505	1	S.S.3	365	2	S.S.3	835	非焼	625	3	S.S.3	225	7	焼	焼	焼
506	1	S.S.3	366	2	S.S.3	645	非焼	626	6	S.S.3	489	8	焼	焼	焼
507	1	S.S.3	367	2	S.S.3	1510	非焼	627	4	S.S.3	300	6	焼	焼	焼
508	1	S.S.3	368	2	S.S.3	2350	非焼	628	2	S.S.3	84	7	焼	焼	焼
509	1	S.S.3	369	1	S.S.3	374	非焼	629	3	S.S.3	344	7	焼	焼	焼
510	1	S.S.3	370	1	S.S.3	630	非焼	630	2	S.S.3	349	3	焼	焼	焼
511	1	S.S.3	371	2	S.S.3	830	非焼	631	2	S.S.3	300	5	焼	焼	焼
512	1	S.S.3	372	2	S.S.3	484	非焼	632	2	S.S.3	230	5	焼	焼	焼
513	1	S.S.3	373	5	S.S.3	830	非焼	633	2	S.S.3	511	8	焼	焼	焼
514	1	S.S.3	374	8	S.S.3	317	非焼	634	2	S.S.3	173	6	焼	焼	焼
515	1	S.S.3	375	2	S.S.3	584	非焼	635	2	S.S.3	85	6	焼	焼	焼
516	1	S.S.3	376	2	S.S.3	412	非焼	636	3	S.S.3	52	3	焼	焼	焼
517	1	S.S.3	377	6	S.S.3	990	非焼	637	2	S.S.3	358	6	焼	焼	焼
518	1	S.S.3	378	2	S.S.3	479	非焼	638	2	S.S.3	113	5	焼	焼	焼
519	1	S.S.3	379	2	S.S.3	269	非焼	639	2	S.S.3	357	6	焼	焼	焼
520	1	S.S.3	380	3	S.S.3	165	非焼	640	2	S.S.3	422	9	焼	焼	焼
521	1	S.S.3	381	3	S.S.3	285	非焼	641	1	S.S.3	893	10	焼	焼	焼
522	1	S.S.3	382	2	S.S.3	379	非焼	642	1	S.S.3	400	7	焼	焼	焼
523	1	S.S.3	383	2	S.S.3	329	非焼	643	3	S.S.3	1240	9	焼	焼	焼
524	1	S.S.3	384	2	S.S.3	516	非焼	644	2	S.S.3	343	9	焼	焼	焼
525	1	S.S.3	385	2	S.S.3	510	非焼	645	4	S.S.3	117	7	焼	焼	焼
526	1	S.S.3	386	2	S.S.3	730	非焼	646	4	S.S.3	319	5	非焼	非焼	非焼
527	1	S.S.3	387	2	S.S.3	205	非焼	647	6	S.S.3	35	3	焼	焼	焼
528	1	S.S.3	388	2	S.S.3	223	非焼	648	6	S.S.3	527	6	焼	焼	焼
529	1	S.S.3	389	2	S.S.3	80	非焼	649	6	S.S.3	765	7	焼	焼	焼
530	1	S.S.3	390	2	S.S.3	570	非焼	650	7	S.S.3	1750	10	焼	焼	非焼
531	1	S.S.3	391	1	S.S.3	419	非焼	651	5	S.S.3	294	7	焼	焼	焼
532	1	S.S.3	392	2	S.S.3	193	非焼	652	3	S.S.3	91	9	焼	焼	焼
533	1	S.S.3	393	2	S.S.3	186	非焼	653	3	S.S.3	68	3	焼	焼	焼
534	1	S.S.3	394	3	S.S.3	483	非焼	654	2	S.S.3	120	10	焼	焼	焼
535	1	S.S.3	395	4	S.S.3	83	非焼	655	2	S.S.3	176	7	焼	焼	焼
536	1	S.S.3	396	4	S.S.3	36	非焼	656	2	S.S.3	339	6	焼	焼	非焼
537	1	S.S.3	397	2	S.S.3	37	非焼	657	2	S.S.3	700	6	焼	焼	非焼
538	1	S.S.3	398	2	S.S.3	1610	非焼	658	2	S.S.3	515	10	焼	焼	非焼
539	1	S.S.3	399	3	S.S.3	2270	非焼	659	3	S.S.3	1640	10	焼	焼	非焼
540	1	S.S.3	400	3	S.S.3	1210	非焼	660	3	S.S.3	512	9	焼	焼	非焼

ス文(付着)

第27表 礫計測表 (7)

番号	構成礫数	所属	重量(g)	完形度	個自然面	燒痕打面	備考	番号	構成礫数	所属	重量(g)	完形度	個自然面	燒痕打面	備考	番号	構成礫数	所属	重量(g)	完形度	個自然面	燒痕打面	備考
641	2	SS3	234	9	燒	燒		721	5	SS3	34	5	非燒	燒		731	1	SS4	221	16	燒		
642	2	SS3	166	4	燒	燒		722	7	SS3	949	9	燒	非燒		732	2	SS4	215	10	燒		
643	1	SS3	172	5	燒	燒		723	2	SS3	1328	7	燒	燒		733	3	SS4	309	10	燒		
644	2	SS3	289	3	燒	燒		724	2	SS3	452	7	燒	燒		734	4	SS4	238	18	燒		
645	2	SS3	333	9	燒	燒		725	2	SS3	220	10	燒	燒		735	5	SS4	245	18	燒		
646	1	SS3	316	6	燒	燒		726	2	SS3	680	10	燒	燒		736	6	SS4	225	10	燒		
647	2	SS3	40	9	燒	非燒		727	3	SS3	95	7	燒	非燒		737	7	SS4	88	10	燒		
648	3	SS3	78	10	燒	非燒		728	1	SS3	18	1	燒	燒		738	8	SS4	89	18	燒		
649	5	SS3	254	10	燒	非燒		729	3	SS3						739	9	SS4	212	16	燒		
650	4	SS3	78	9	燒	非燒												SS4	95	10	燒		
651	2	SS3	121	10	燒	非燒												SS4	132	10	燒		
652	7	SS3	251	9	燒	非燒												SS4	644	18	燒		
653	1	SS3	1540	9	燒	燒												SS4	124	10	燒		
654	1	SS3	325	9	燒	非燒												SS4	141	18	燒		
655	1	SS3	318	4	燒	燒												SS4	514	10	燒		
656	3	SS3	328	7	燒	非燒												SS4	228	10	燒		
657	3	SS3	315	7	燒	非燒												SS4	199	10	燒		
658	11	SS3	1335	9	燒	非燒												SS4	82	16	燒		
659	1	SS3	119	9	燒	非燒												SS4	185	10	燒		
660	1	SS3	912	9	燒	非燒												SS4	99	10	燒		
661	7	SS3	1104	9	燒	非燒												SS4	39	10	燒		
662	4	SS3	1125	9	燒	非燒												SS4	126	10	燒		
663	2	SS3	289	8	燒	非燒												SS4	249	10	燒		
664	3	SS3	320	8	燒	非燒												SS4	71	16	燒		
665	10	SS3	1940	10	燒	非燒												SS4	128	10	燒		
666	2	SS3	430	4	燒	非燒												SS4	222	10	燒		
667	2	SS3	218	8	燒	非燒												SS4	214	10	燒		
668	3	SS3	316	6	燒	非燒												SS4	107	10	燒		
669	2	SS3	718	5	燒	非燒												SS4	99	10	燒		
670	5	SS3	38	2	燒	非燒												SS4	37	10	燒		
671	2	SS3	316	9	燒	非燒												SS4	88	10	燒		
672	5	SS3	725	9	燒	非燒												SS4	121	10	燒		
673	2	SS3	146	6	非燒	非燒												SS4	61	10	燒		
674	2	SS3	157	3	燒	非燒												SS4	80	18	燒		
675	2	SS3	159	10	燒	非燒												SS4	71	10	燒		
676	8	SS3	214	9	燒	非燒												SS4	38	10	燒		
677	1	SS3	840	9	燒	非燒												SS4	52	18	燒		
678	3	SS3	385	9	燒	非燒												SS4	28	10	燒		
701	2	SS3	235	4	非燒	非燒												SS4	37	10	燒		
702	2	SS3	389	9	燒	非燒												SS4	18	10	燒		
703	3	SS3	184	3	燒	非燒												SS4	10	18	燒		
704	3	SS3	189	4	燒	非燒												SS4	68	10	燒		
705	4	SS3	980	9	燒	非燒												SS4	21	10	燒		
706	4	SS3	1150	9	燒	非燒												SS4	119	10	燒		
707	3	SS3	383	10	燒	非燒												SS4	19	10	燒		
708	6	SS3	499	7	燒	非燒												SS4	118	10	燒		
709	3	SS3	1058	10	燒	非燒												SS4	53	10	燒		
710	3	SS3	540	6	燒	非燒												SS4	22	10	燒		
711	3	SS3	440	10	燒	非燒												SS4	13	10	燒		
712	3	SS3	511	10	燒	非燒												SS4	132	10	燒		
713	2	SS3	224	10	燒	非燒												SS4	56	10	燒		
714	4	SS3	680	10	燒	非燒												SS4	26	10	燒		
715	2	SS3	310	9	燒	非燒												SS4	39	10	燒		
716	13	SS3	123	4	燒	非燒												SS4	39	10	燒		
717	4	SS3	42	2	非燒	非燒												SS4	52	10	燒		
718	7	SS3	349	10	燒	非燒												SS4	35	10	燒		
719	2	SS3	246	9	燒	非燒												SS4	12	18	燒		
720	2	SS3	42	6	非燒	非燒												SS4	13	10	燒		

夕一ル村著

第6章 下開田村平遺跡の考察

下開田村平遺跡は旧徳山村のうち最も下流部にあたる下開田の旧集落一帯に分布し、揖斐川本流の右岸段丘上に立地している。平成2年度に、国道417号より山側の畑地や水田のあった第1地区と、民家のあった川側の第2地区の計1,688㎡の範囲にわたって発掘調査を実施した。

遺跡地には民家・畑・田地があったためと、民家の移転にともなって削平されたり掘削されたために攪乱部分が多かったが、9層の堆積層が識別できた。そのうち第Ⅲ層の40～60cmの厚さの褐色の砂礫層で縄文時代中期・後期・晩期の遺物を含む包含層、厚さ10～20cmの第Ⅵ層＝暗黒褐色の粘質土層と、厚さ10cmほどの第Ⅷ層＝暗黒褐色土層から縄文時代早期の文化層が確認された。

遺構としては、第Ⅲ層上面で竪穴住居跡1軒、土壇2基、ピット群などが検出され、第Ⅶ層上面では焼礫集積遺構4基、屋外炉1基、配石遺構4基が確認された。いまここでは、そのうちの主要なものとして、竪穴住居と焼礫集積遺構について記し、若干の考察を加えておこう。

竪穴住居跡は遺存状態が悪いが、石囲炉をもつ隅丸方形と堆定できる。覆土中からは縄文時代早期～後期の土器片が混在した状態で出土し、住居跡の所属年代の同定は困難であった。

第Ⅶ層上面の4基の焼礫集積遺構は短径が0.8～1.3m、長径が1.2～1.6mの浅い楕円形の皿状土壇の中に100個ないし1,000個に近い円礫あるいは角礫を詰めたものであり、礫石は拳大のものが大部分を占める。過半数の礫石は火熱を受けて赤化しており、タール状の付着物のみられるものもわずかに認められる。また覆土中には焼土や炭化物が残っている。

これらの焼礫集積遺構に類似したものとしては、旧徳山村大字戸入の小の原遺跡（文献20）で検出された12基の集石遺構があげられる。いまそれらについて要約するならば、いずれも土壇を掘ってその中に円礫あるいは角礫を置いた遺構で、礫石の多くは火熱を受け、土壇中から炭化物や焼土が検出されたので、集石炉と名づけられた。土壇の平面形は円形と楕円形に分かれるが、円形のもの7基で、さらに径は65～85cmの小型のものと、100～121cmの大型のものに分かれる。本遺跡の土壇と同じように平面形が楕円形のもの3基で、うち2基は短径が約60cm、長径が115cm。1基は183cm×235cmで大型である。時期の特定可能なものは円型大型のもの2基で、1基は早期、他は前期に属するものである。

集石炉の多くは、土壇内に径10～15cmの円礫または角礫が詰まっており、礫は火熱を受けて赤変したものが多い。また炭化物や焼土の混じったものが目だっている。この類の集石遺構は先土器時代から縄文時代前期にかけてよくみられるもので、焼いた礫石を土壇内に詰めて、その上に肉・魚介類・球根・根栽類を置き、石の余熱で焼いたり、木の葉で包んで蒸したりした調理施設だったと考えられる。

遺物包含層からの出土遺物は縄文時代の土器と石器類、古代～現代の陶磁器類や土製品などに大別できる。

縄文土器には草創期と前期を除く早期・中期・後期・晩期のものが含まれるが、層序的に把握することはできなかった。早期の土器は19点と少量ではあるが、前半の押型文土器と後半の茅山下層式や上ノ山式などの条痕文系土器が含まれている。中期と識別できる土器は155点で、中国・近畿地方を中心に分布する船元・里木式の系譜をひく中富Ⅰ・Ⅱ式や中期後半の中富Ⅳ式～山の神式などが認められるが、細片が多く判別できるものは少ない。後期と認められるものは140点で、後期前半の中津式並行土器、堀之内式土器、縁帯文系土器及び北陸系土器がみられる。晩期は28点で、五貫森式が主である。

古代以降の陶磁器類や土製品、銭貨などは資料がきわめて限られているが、識別できたものの概略は第5章に記した通りである。

本遺跡から出土した縄文時代の石器類は、第Ⅱ層からの593点、第Ⅵ層からの284点、第Ⅷ層からの32点で、合計909点にのぼる。そのうち剥片・碎片・石核など739点を除くと、定形石器は第Ⅱ層で143点、第Ⅵ層では7点、第Ⅷ層では0で、ほとんどは第Ⅱ層出土ということになる。この層は縄文時代中期・後期・晩期の土器が混在しており、二次堆積の可能性が多いため、それぞれの石器の所属時期を判別することはできないが、とくに目だつものは、石錘と打製石斧である。石錘は切目石錘39点と礫石錘（打欠石錘）12点からなる計51点で、定形石器の約36%を占めている。その重量をみると、10g前後のものから100g前後までいろいろであるが、岐阜県内の石錘を出す遺跡は、この遺跡と同じように河岸段丘上に多いことから、その大部分は河川における漁網具として使用されていたと考えてよいであろう。

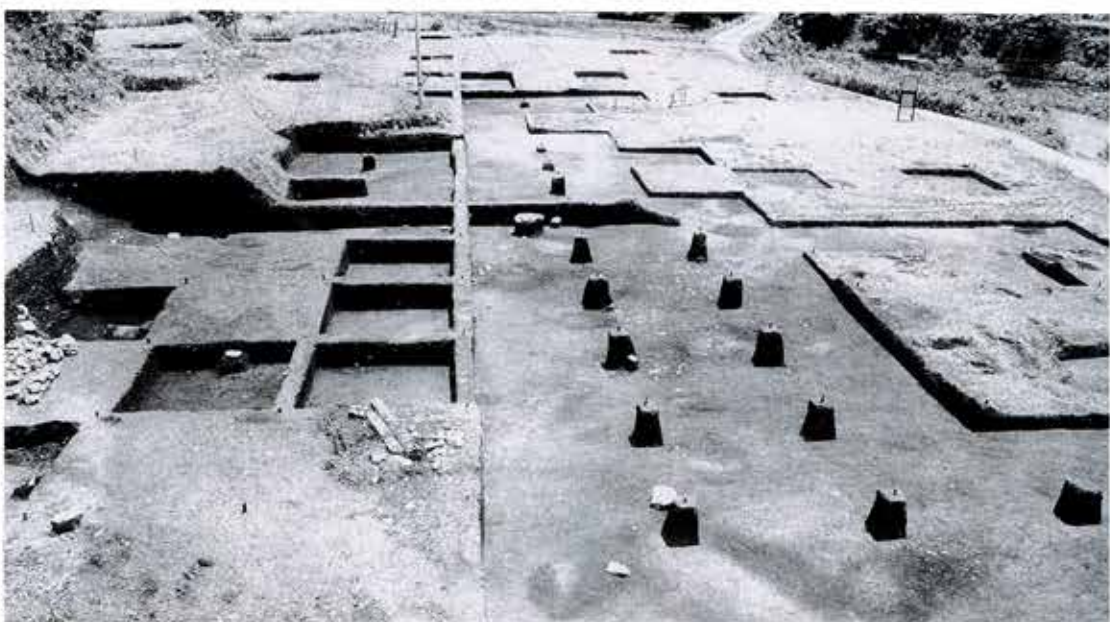
打製石斧は33点で、全体の約23%となる。第4章の追分遺跡の考察で見てきたように、日常生活のなかで、打製石斧による根栽類の採集や植栽が重要な位置を占めていたと想定することができるであろう。

（大参 義一）

[参考文献]

- 天瀬町教育委員会 1 『平草遺跡』 1982
 泉 拓良 2 「西日本縄文土器再考—近畿地方縄文中期後半を中心に—」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』 1982
- 伊藤楨樹・篠田通弘 3 「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観 3 中期II』 小学館 1988
 今村 啓爾 4 「緑帯文土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』 小学館 1989
- 牛丸周太郎・梶田澄雄 5 「美濃徳山村の切目石錘（越美山系をめぐって）」『岐阜史学』第76号 1982
 6 「称名寺式土器の研究（上）（下）」『考古学雑誌』第63巻1号・2号 1977
 7 「揖斐川上流地域学術調査報告（地質）」『揖斐川上流域総合学術調査報告書』—岐阜県文化財調査報告書 第3輯— 岐阜県教育委員会 1963
- 上田 典男 8 「縄文時代焼礫集積遺構の形態的把握」『物質文化』41
 小江 慶雄 9 「滋賀県番の面縄文式住居遺跡」『京都学芸大学学報』A（文科）No.9 1956
 大江 命 10 『宮ノ脇遺跡』 可児町教育委員会 1976
 大参 義一 11 「縄文式土器から弥生式土器へ—東海地方西部の場合—（I）」『名古屋大学文学部研究論集』LVI 1972
 12 「東海地方西部における縄文時代後期前半期の土器について」『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV 1978
- 小川 栄一 13 「徳山城址」『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』 第7輯 1938
 14 「塚奥山石器時代遺跡」『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第11輯 1950
 15 『美濃の石器時代』 1952
- 小澤 一弘 16 「美濃徳山村宮ヶ原遺跡出土の縄文時代遺物」『古代文化』第27巻第10号 1975
 各務 光洋 17 「城之内遺跡 II」 岐阜県文化財保護センター調査報告書 第3集 1991
 岐阜県教育委員会 18 「揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書」 1984
 19 「はいづめ遺跡」 徳山埋蔵文化財発掘調査報告書 1989
 20 「小の原遺跡・戸入障子暮遺跡」 徳山埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 1993
- 清見村教育委員会 21 『はつや遺跡』 1989
 紅村 弘・増子康真他 22 『東海先史文化の諸段階 資料編I』 1977
 23 『東海先史文化の諸段階 資料編II』 1978
- 設楽 博己 24 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』 第34巻第4号 1982
 篠田 通弘 25 「岐阜県揖斐郡徳山村の遺跡」『古代文化』 第33巻第11号 1980
 上嶋 善治 26 『史跡 高山陣屋跡』 岐阜県文化財保護センター調査報告書 第1集 1991
 関市教育委員会 27 「塚原遺跡・塚原古墳群」 1989
 瀬戸市教育委員会 28 「尾呂」 1990
 高山市教育委員会 29 「糠塚遺跡」 1982
 玉田 芳英 30 「中津・福田KII式土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』 小学館 1989
- 内藤町遺跡調査会 31 『内藤町遺跡』 1992
 東京都埋蔵文化財センター 32 『多摩ニュータウン遺跡』 1991
- 徳山村 33 『徳山村史』 1973
 徳山村教育委員会 34 「大昔の徳山村 —縄文人の息吹きを追って—」 1986
 徳山村の歴史を語る会 35 「徳山村のあけぼのを求めて—岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告—」 1984
 中津川市教育委員会 36 「平遺跡・銭亀遺跡・子野遺跡」 1984
 野津町教育委員会 37 「新生遺跡・下藤遺跡」 1984
 東田原八幡遺跡調査団 38 「東田原八幡遺跡」 1981

- 日置弥三郎 39 「近世における徳山村」『揖斐川上流域総合学術調査報告書』—岐阜県文化財調査報告書 第3輯— 岐阜県教育委員会 1963
- 堀 武義・川地利昭 40 「揖斐川流域上流の植物群落」『揖斐川上流域総合学術調査報告書』—岐阜県文化財調査報告書 第3輯— 岐阜県教育委員会 1963
- 堀 武義・鳥居 進 41 「揖斐川河畔上流の植物群落」『揖斐川上流域総合学術調査報告書』—岐阜県文化財調査報告書 第3輯— 岐阜県教育委員会 1963
- 間壁 忠彦 42 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 1971
- 増子 康眞 43 「縄文文化の遺構と遺物」『牧野小山遺跡』岐阜県教育委員会 美濃加茂市教育委員会 1973
- 44 「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階 本文編・補足改訂版』 1981
- 45 「近畿地方縄文中期後半土器編年の問題点—東海西部との対比から—」『求心能道 巽三郎先生古希記念論集』 1988
- 矢野 健一 46 「出土遺物」『押型文土器に関する考察』『奈良県天理市布留遺跡縄文時代早期の調査』埋蔵文化財天理教調査団 考古学調査研究中間報告14 1988
- 山梨県教育委員会 47 「岡の公園第二遺跡発掘調査報告書」 山梨県企業局 1989
- 山下 勝年 48 「林ノ峰貝塚Ⅰ」南知多町文化財調査報告書第5集 南知多町教育委員会 1983
- 山下勝年・磯部幸男 49 「清水ノ上貝塚」南知多町文化財調査報告書第1集 南知多町教育委員会 1976

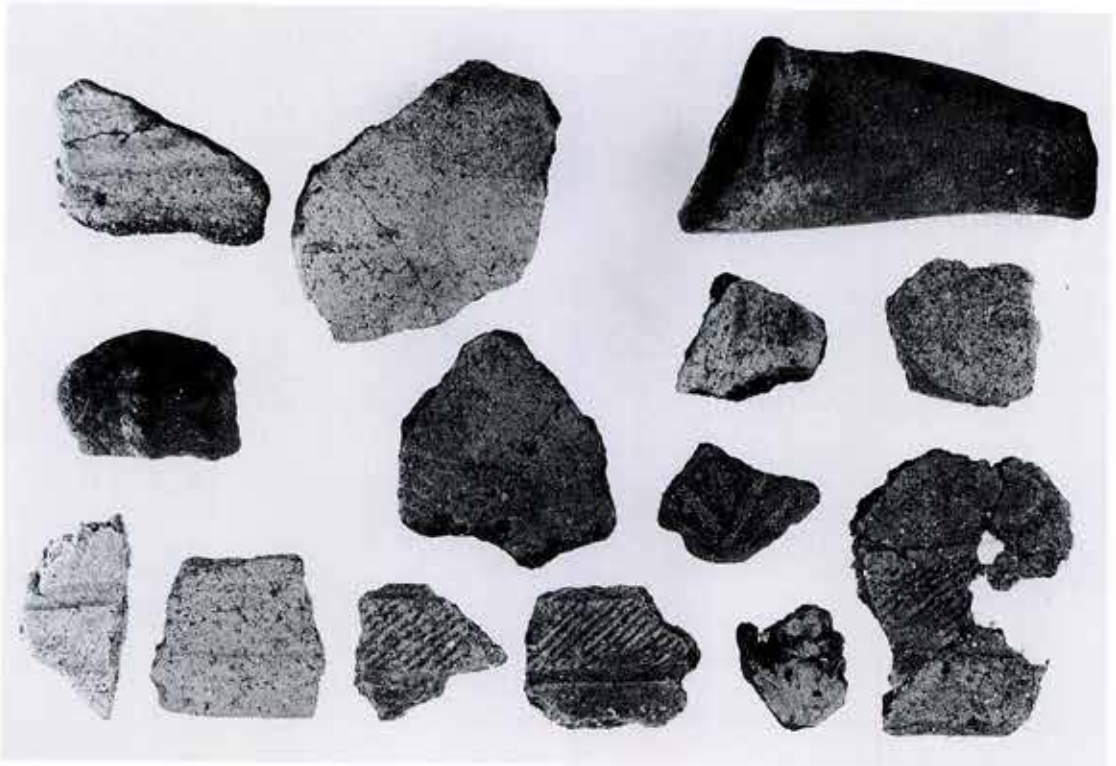
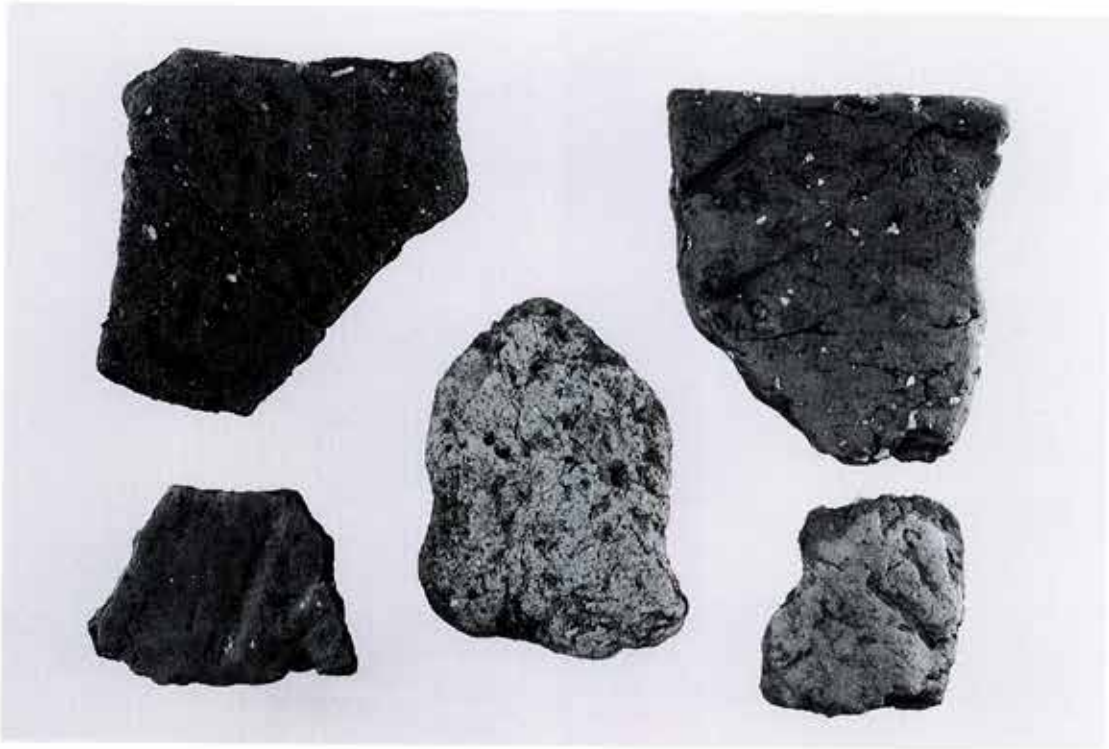


1. 追分遺跡調査前全景 2. A地区7列上位段丘土層状況
3. A地区7列中位段丘土層状況 4. 追分遺跡調査後全景



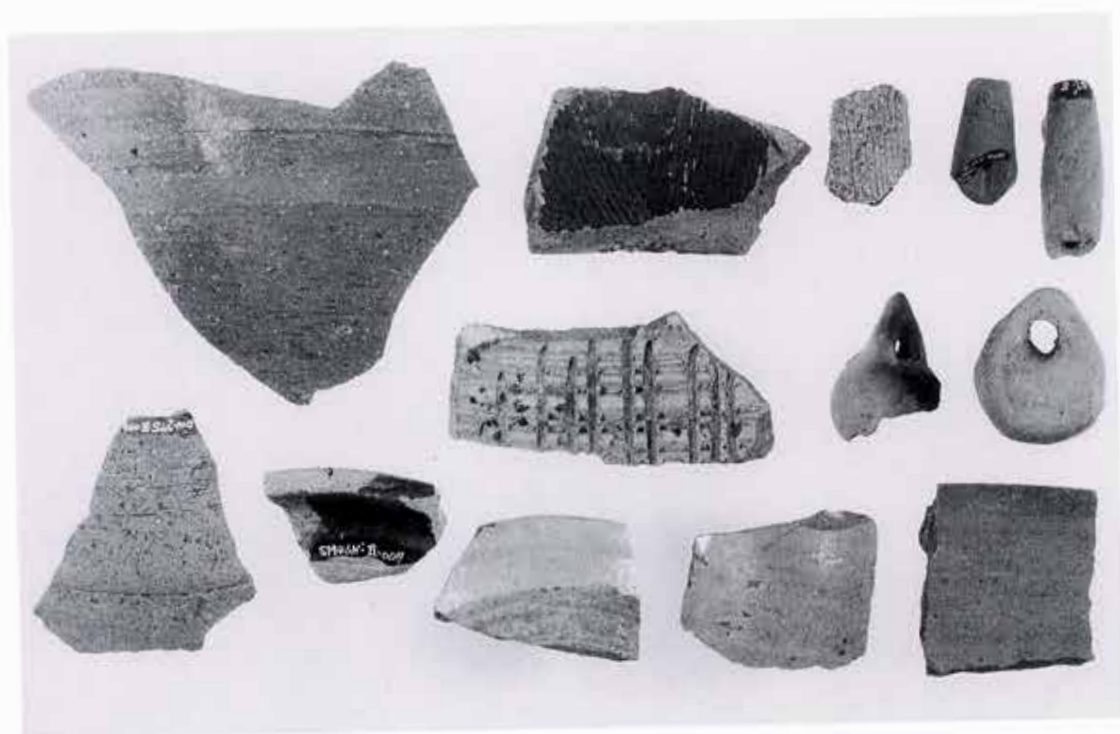
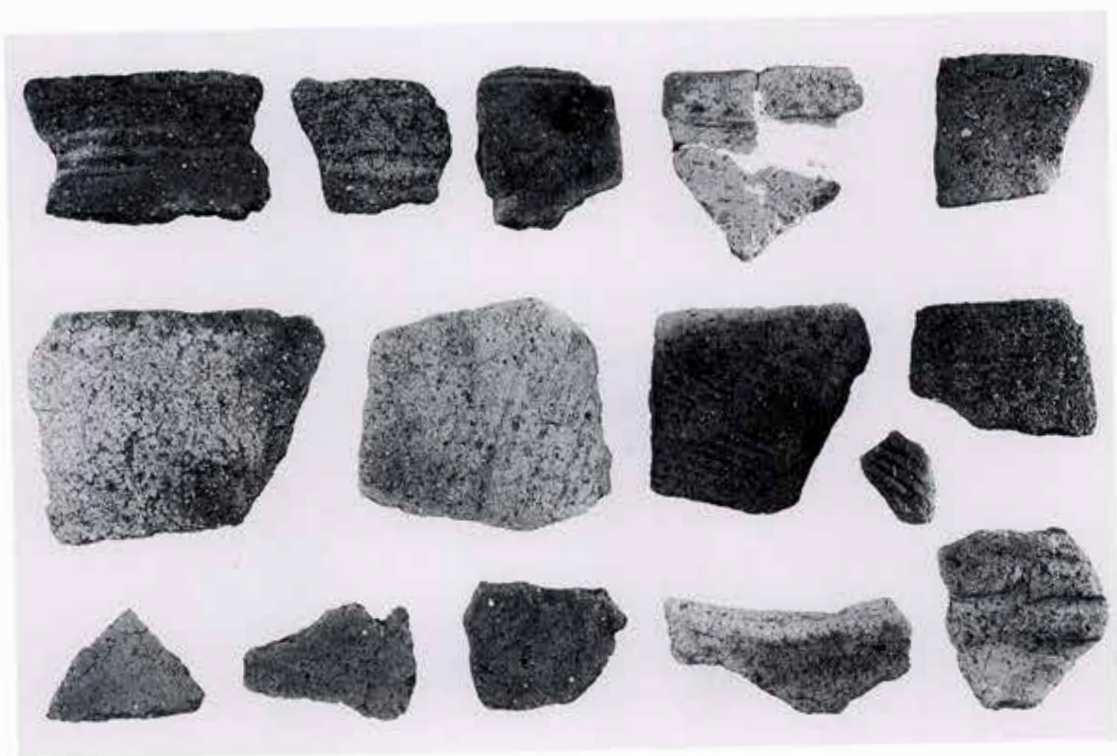
1. B地区発掘状況 2. B地区土層状況

3. 4. C地区発掘状況

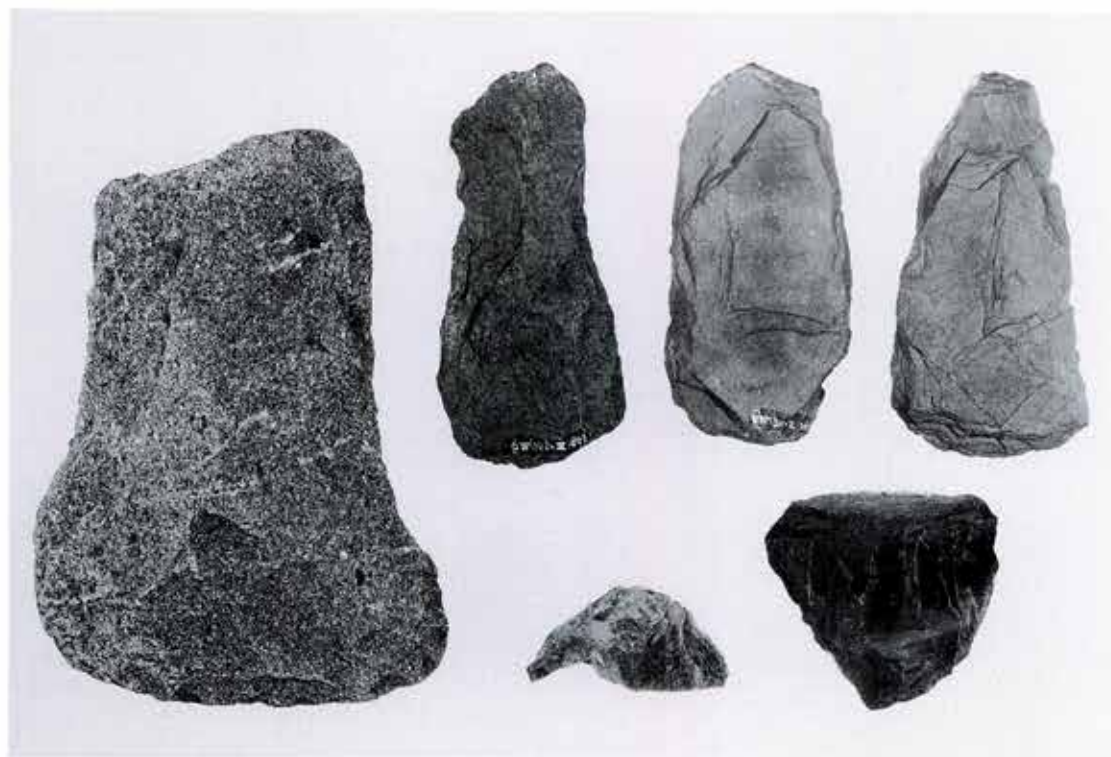


1. 縄文土器① I 群土器

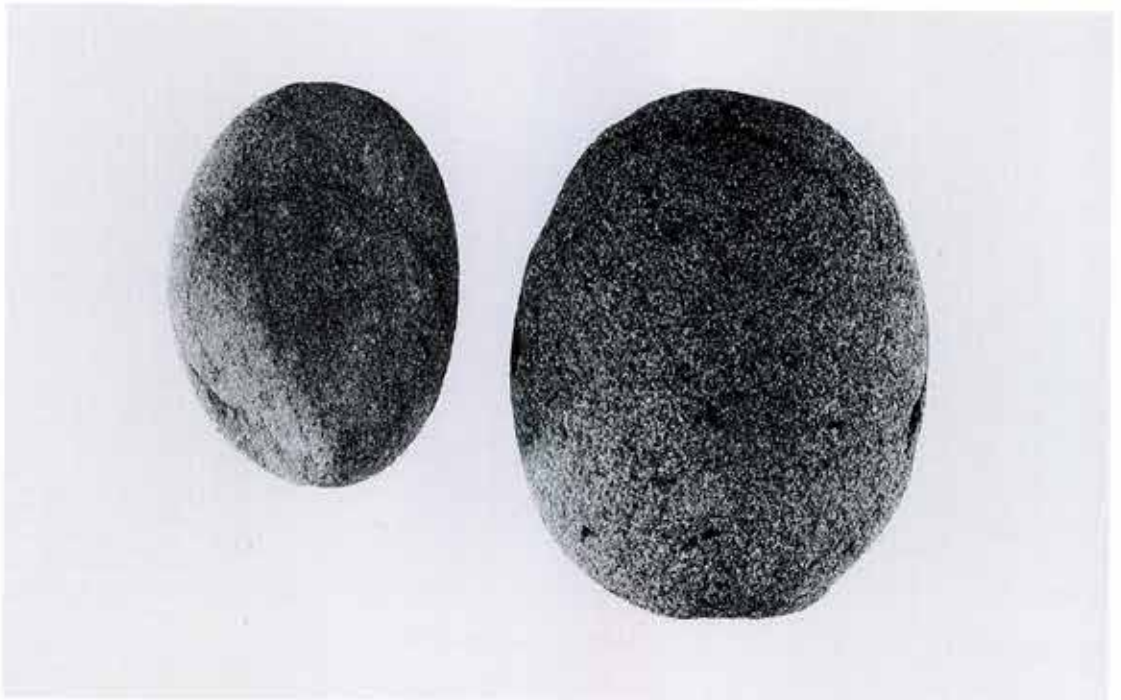
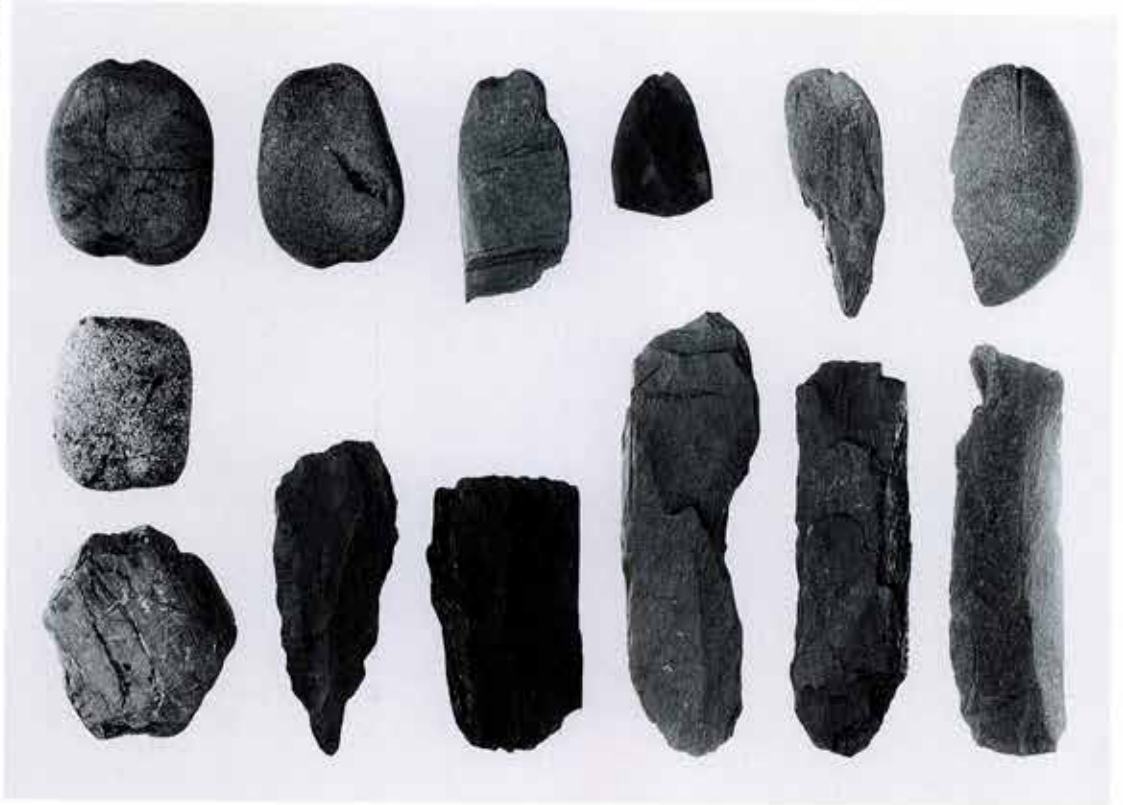
2. 縄文土器② II 群土器



1. 縄文土器③Ⅲ群土器 2. 須恵器・陶器・土製品



1. 石器①石鏃，石匙，削器 2. 石器②石核，打製石斧



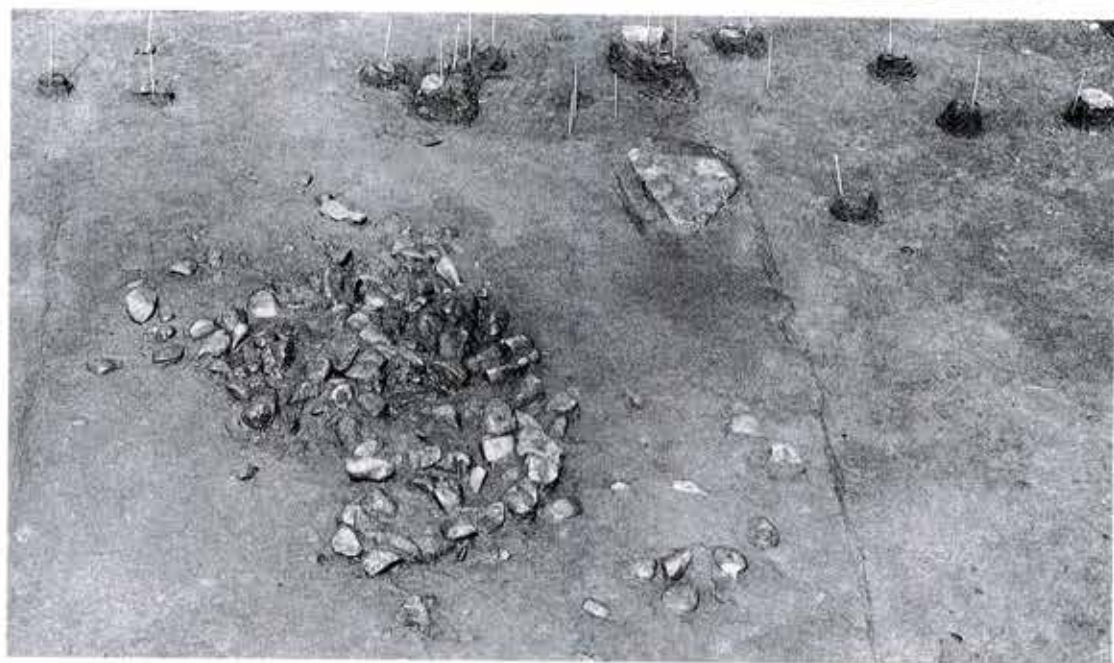
1. 石器③打欠石錘，切目石錘，潰れのみられる縦長剥片
2. 石器④磨石・叩石，凹石



1. 下開田集落移転前全景 2. A地区下位遺構面全景（南から）



1. B地区全景 2. 第1号竖穴住居跡 3. 発掘状況

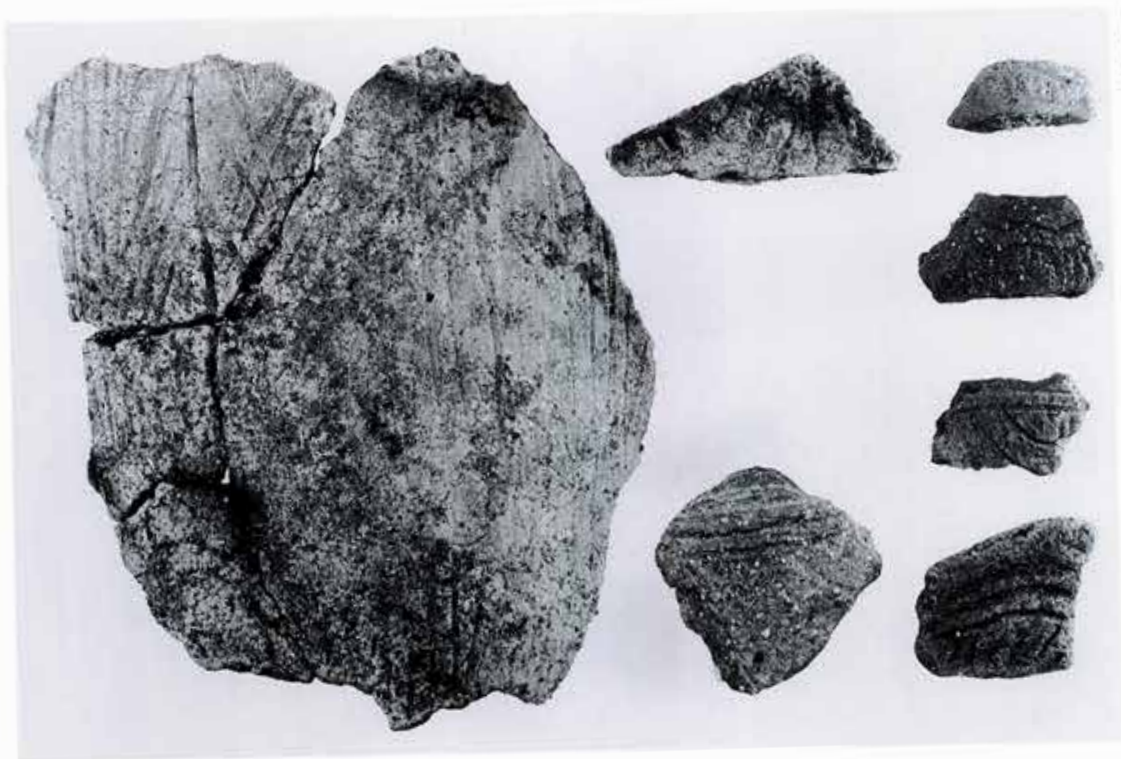


1. 第1号土壤跡検出状態
2. 第1号土壤内打製石斧出土状態
3. 第1号焼礫集積遺構検出状態
4. 第1号焼礫集積遺構半剖状態



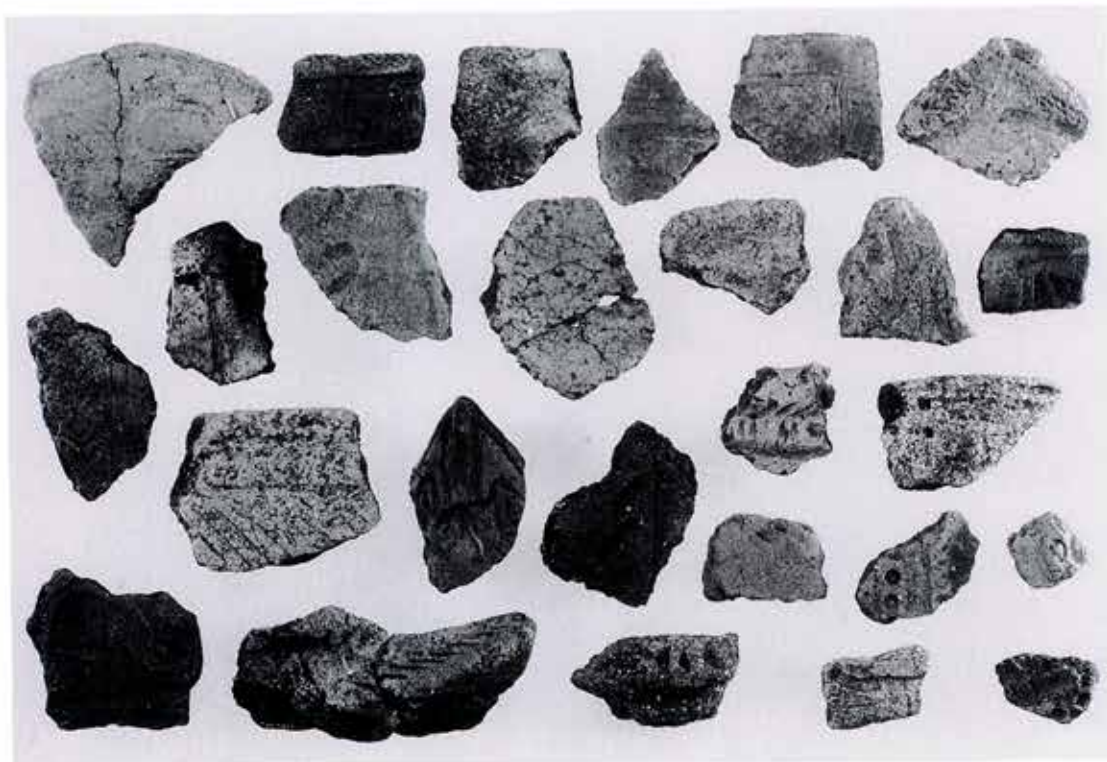
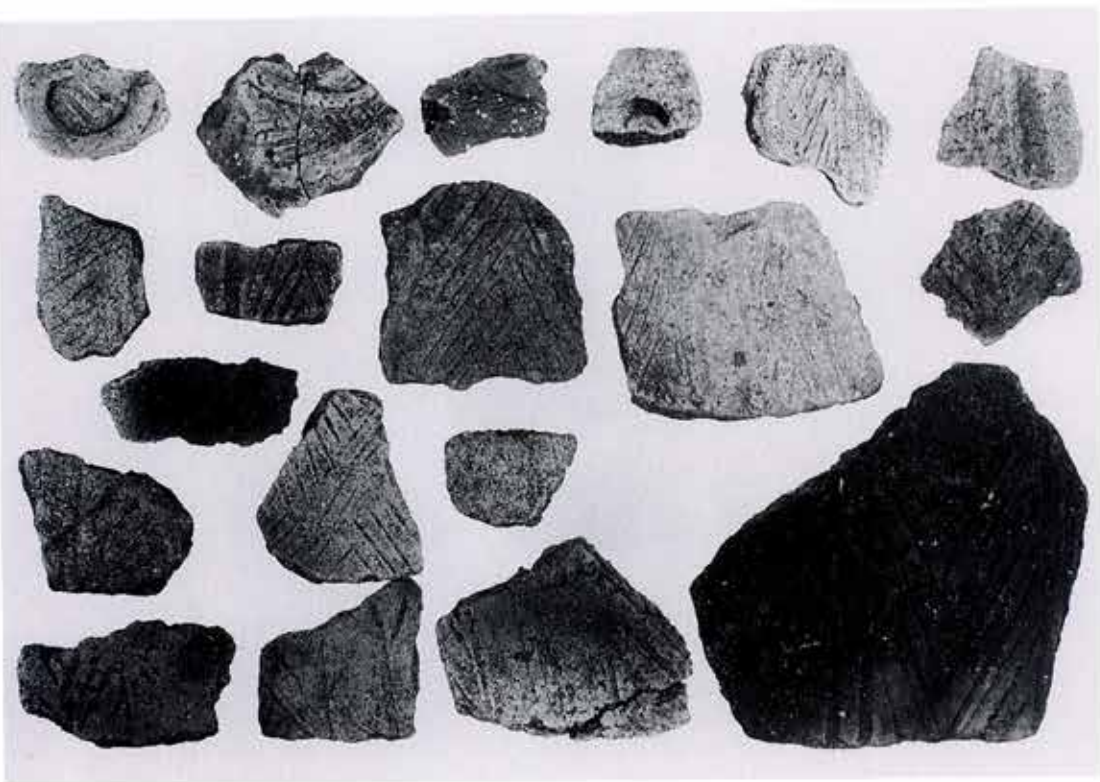
1. 第3号烧碟集積遺構検出状態

2. 第1号配石遺構検出状態



1. SB1出土縄文土器①早期・C1群

2. SB1出土縄文土器②C2群(1)

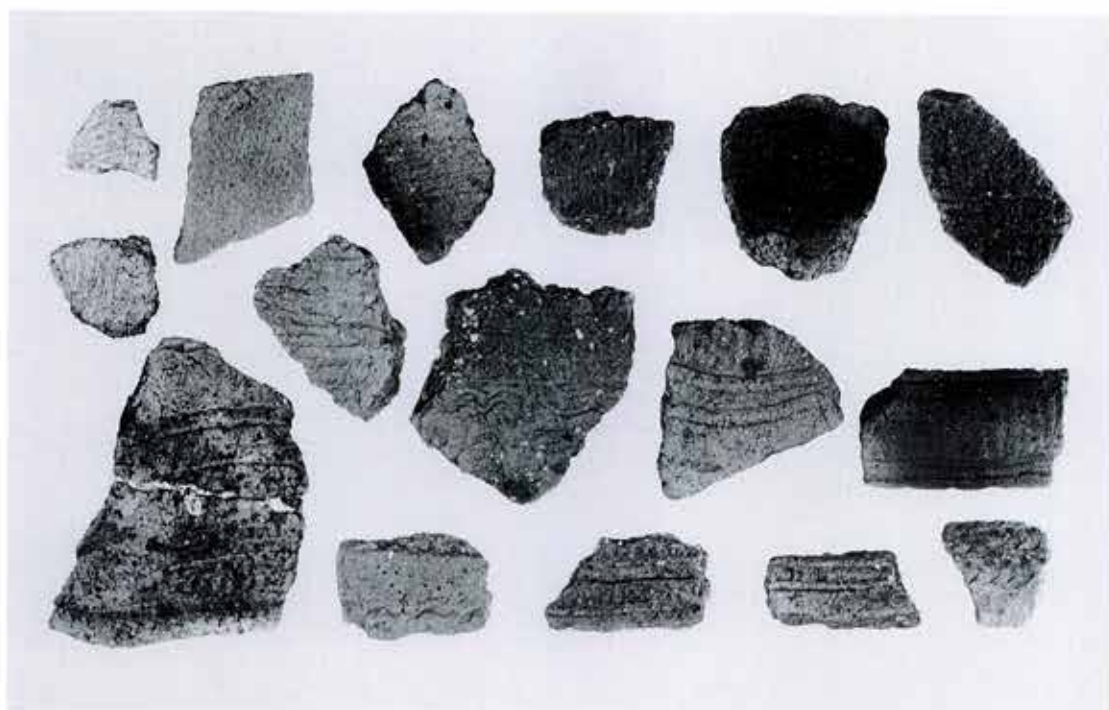


1. SB1出土縄文土器③C2群(2)

2. SB1出土縄文土器④C3~5群

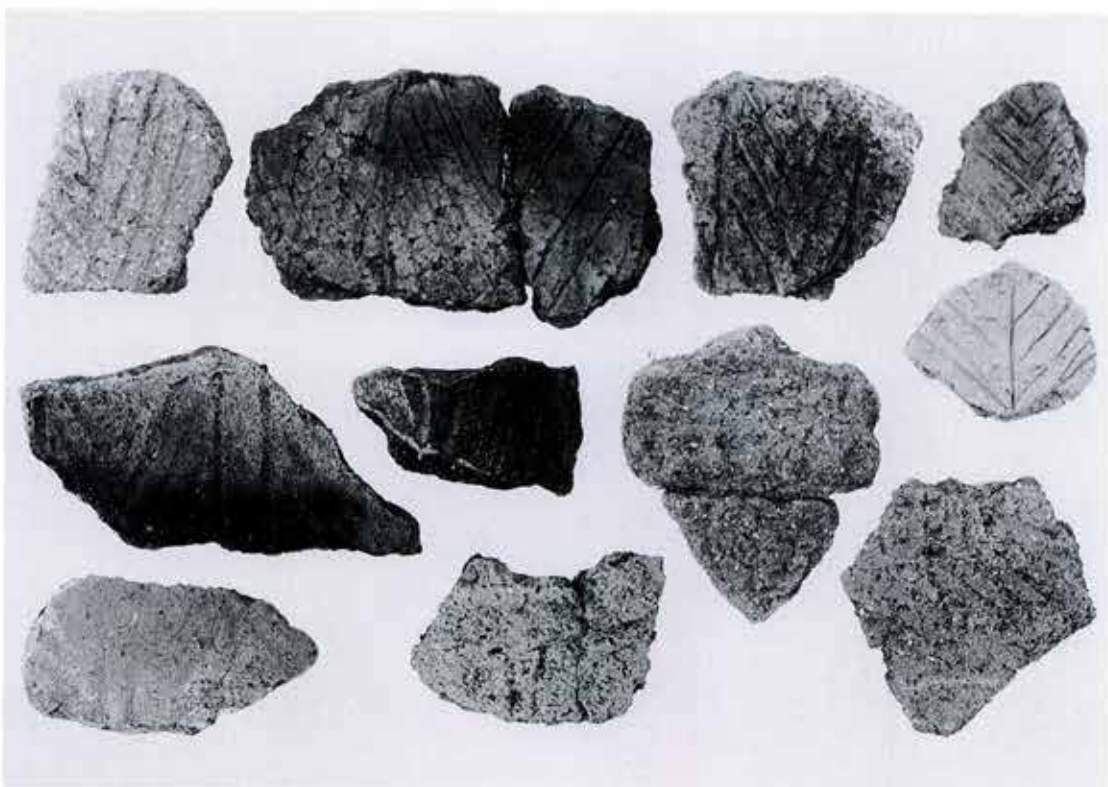
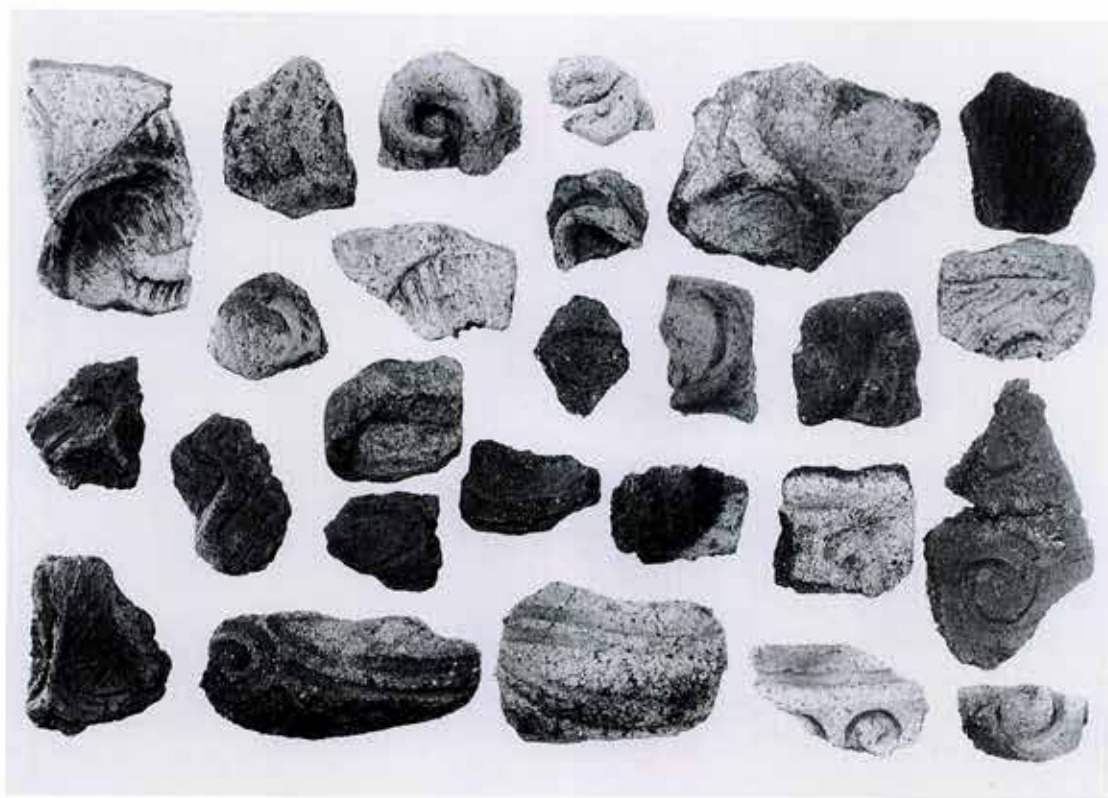


1. SB1出土縄文土器⑤K1群 2. 包含層出土縄文土器①S1~3群

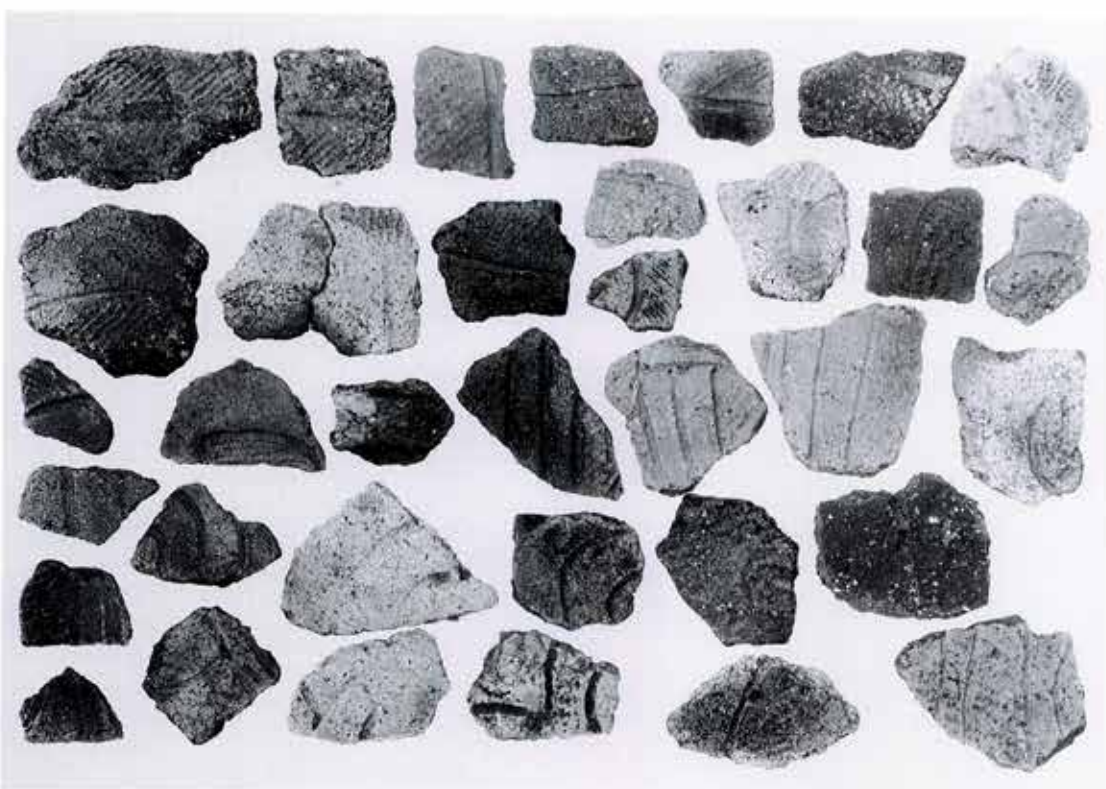


1. 包含層出土縄文土器②S4群・底部

2. 包含層出土縄文土器③C1群

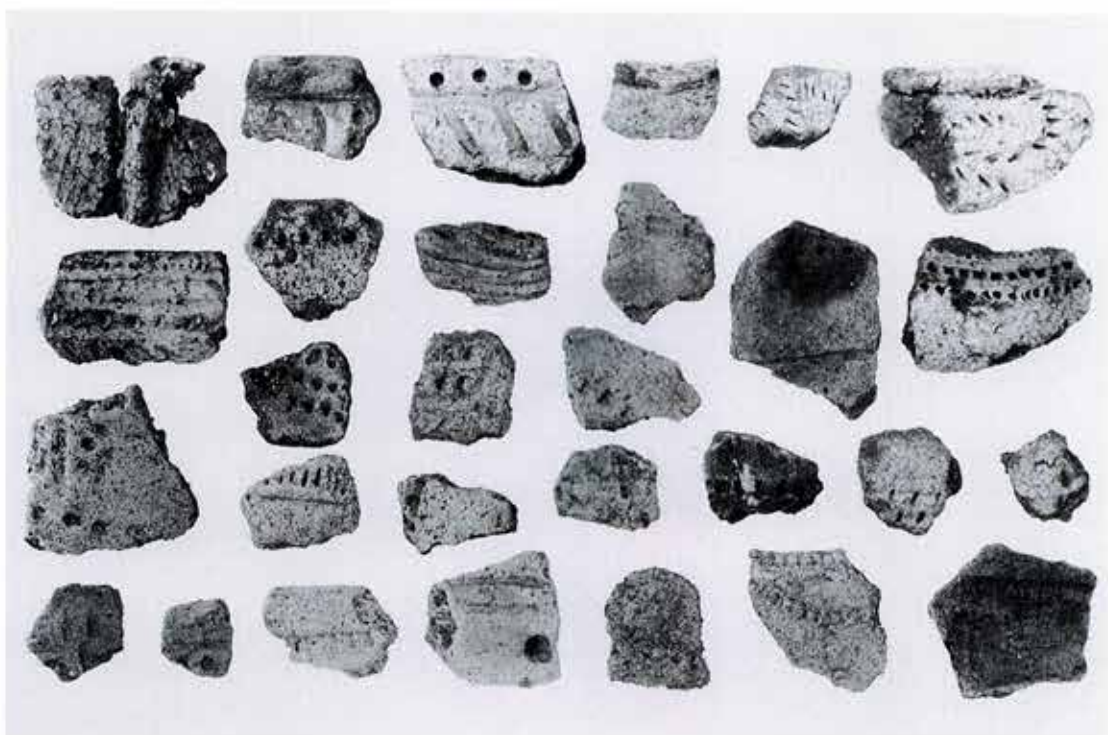
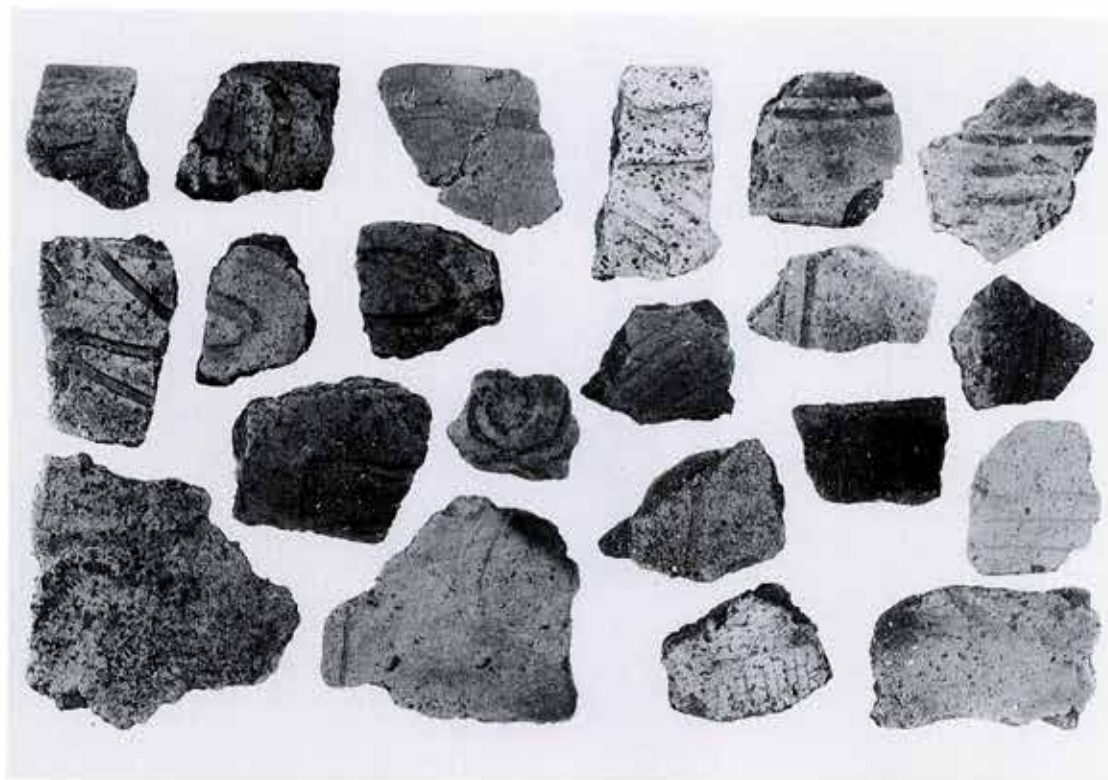


1. 包含層出土繩文土器④C 2 群口緣部
2. 包含層出土繩文土器⑤C 2 群胴部

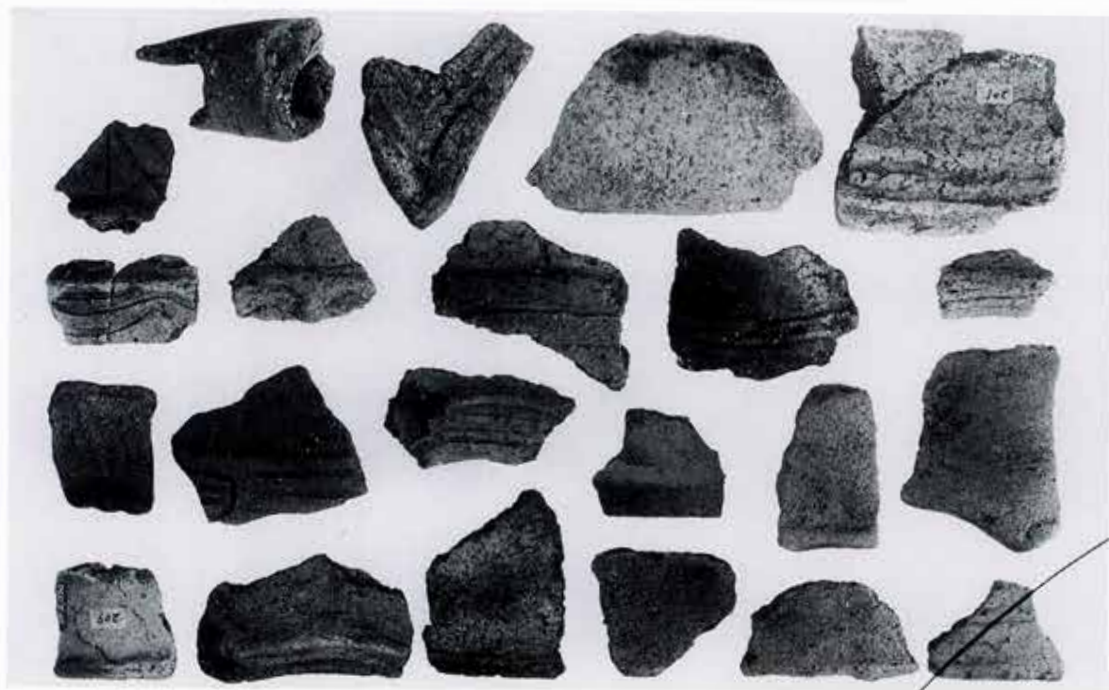


1. 包含層出土縄文土器⑥C3群口縁部

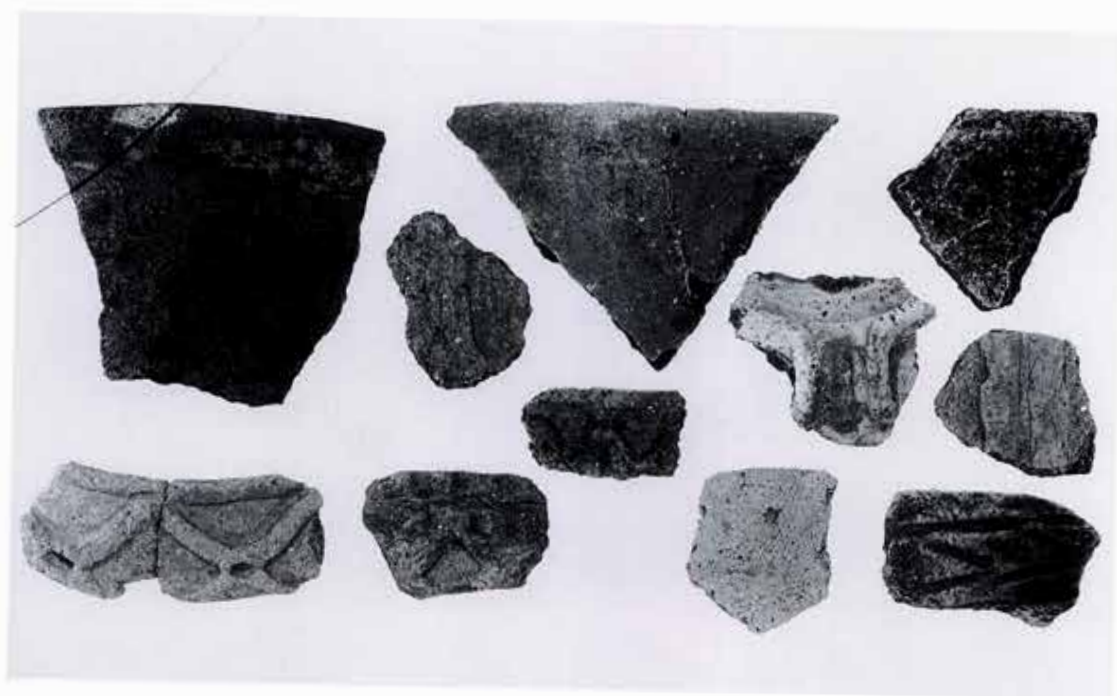
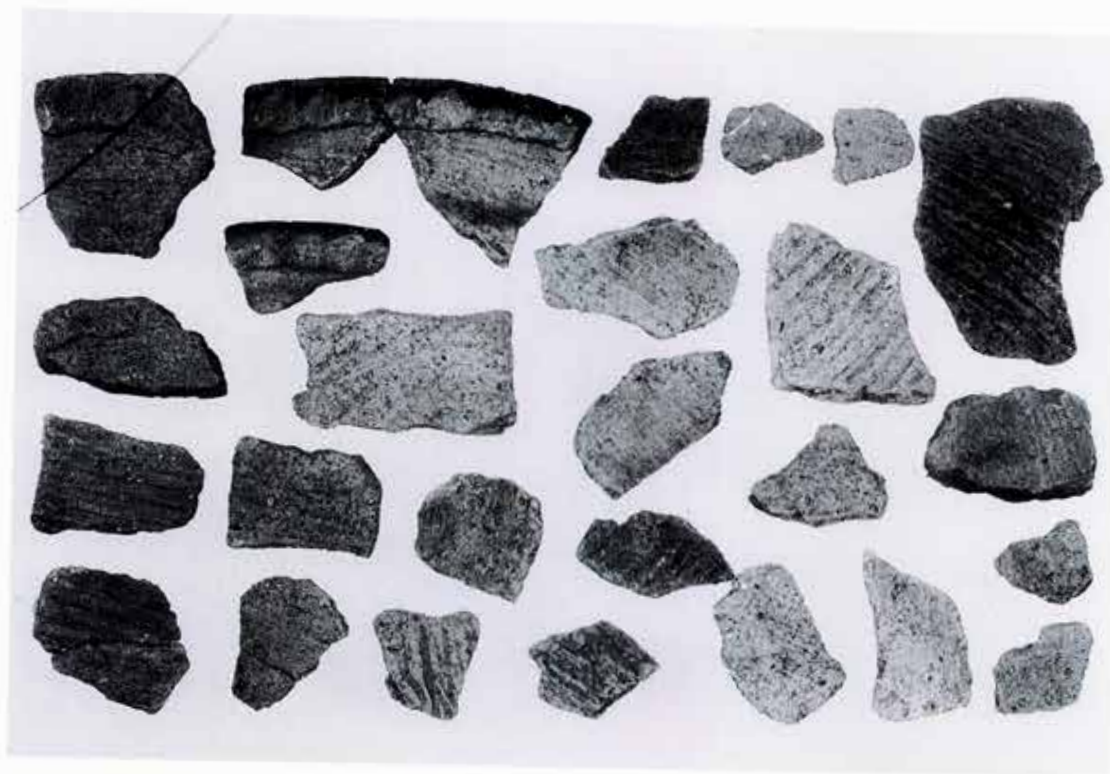
2. 包含層出土縄文土器⑦C3群胴部



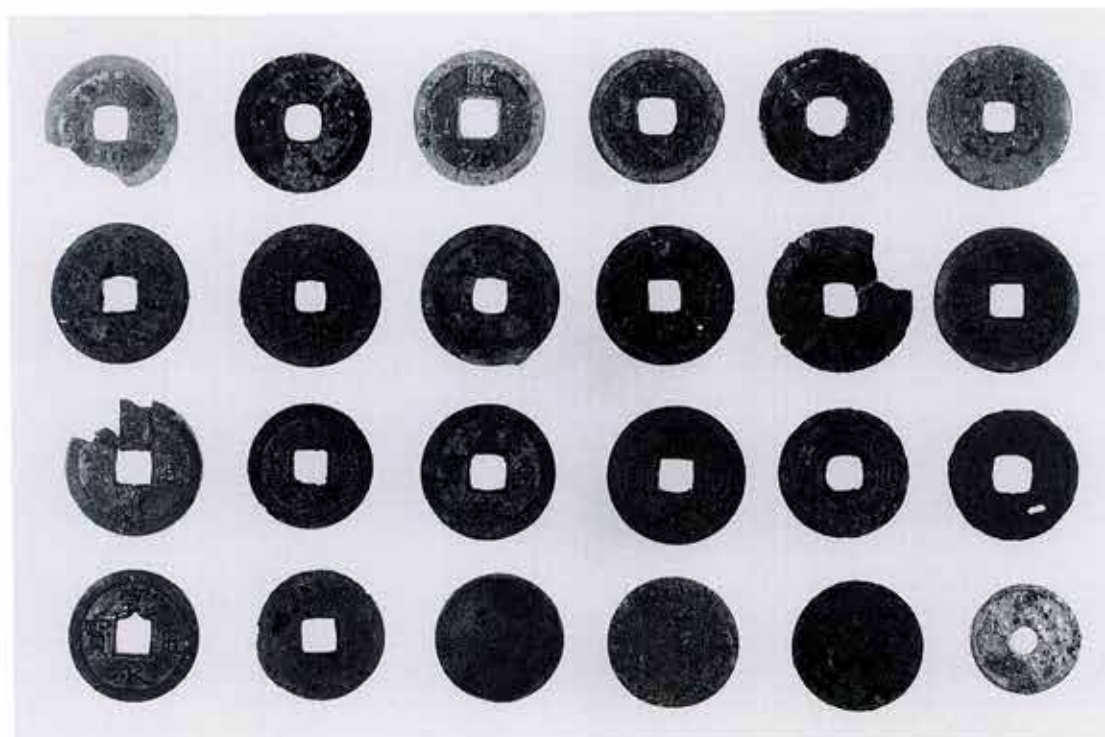
1. 包含層出土繩文土器⑧C 4群 2. 包含層出土繩文土器⑨C 5群



1. 包含層出土繩文土器⑩K 1群
2. 包含層出土繩文土器⑪K 2群(1)
3. 包含層出土繩文土器⑫K 2群(2)・K 3群



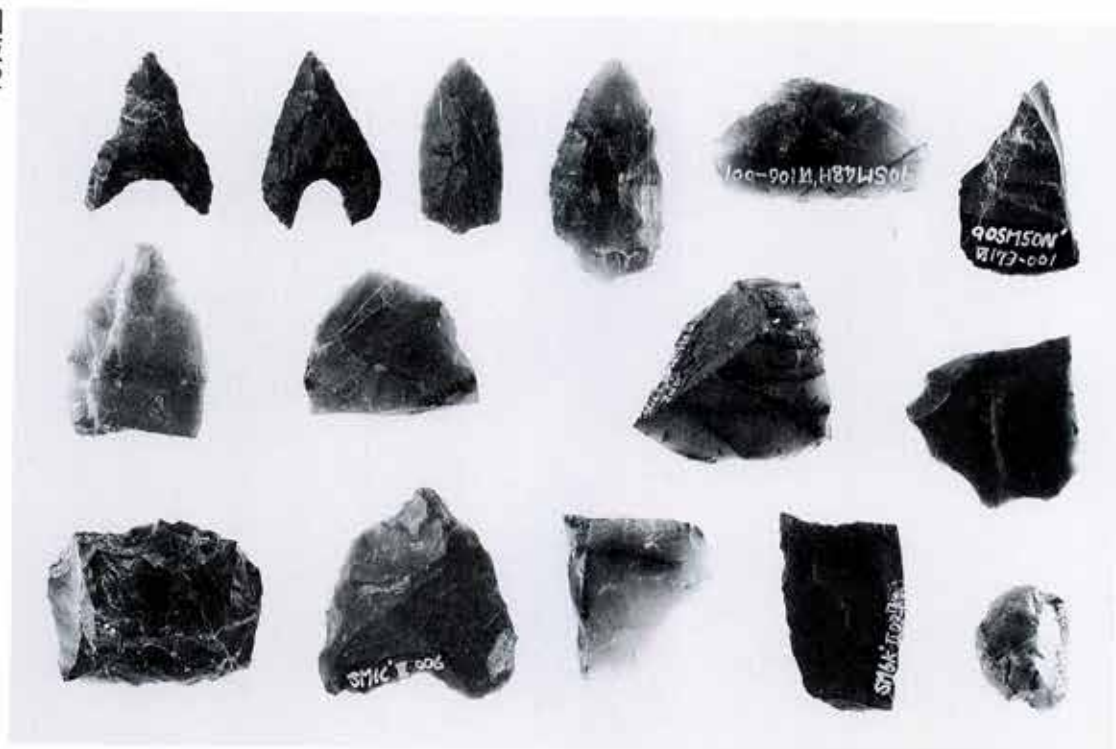
1. 包含層出土縄文土器⑬B 1群 2. 包含層出土縄文土器⑭B 2群, 時期不明の土器



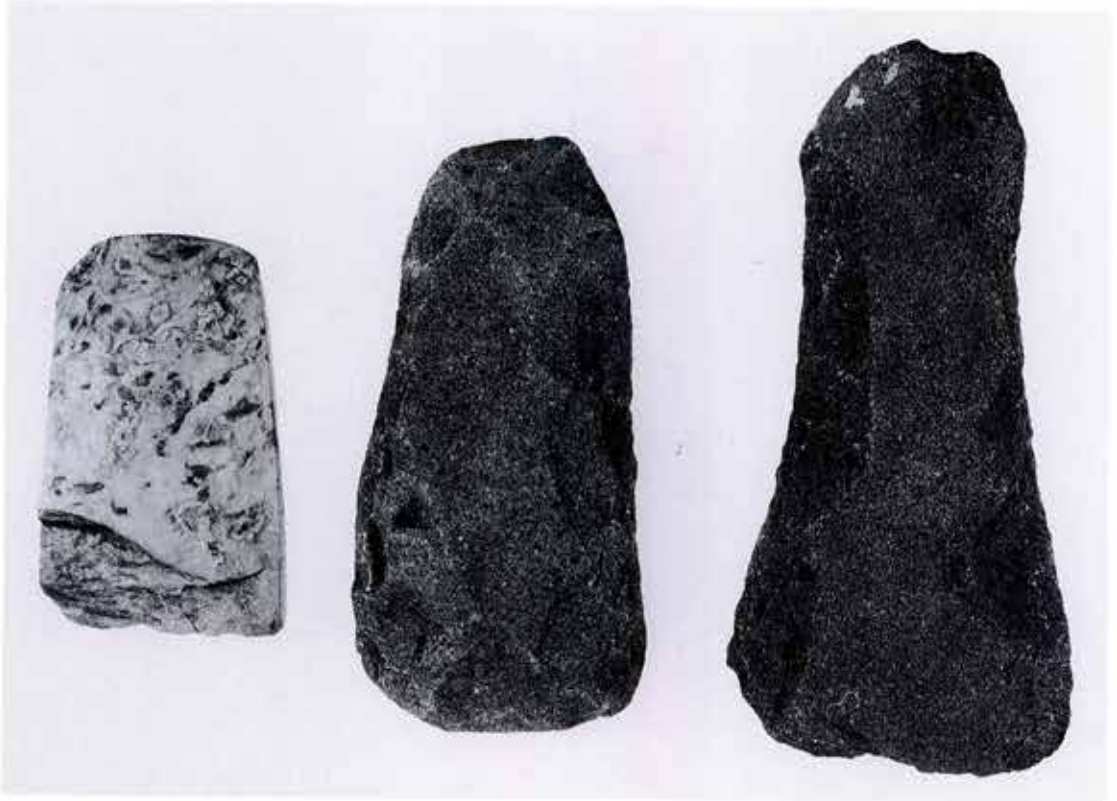
1. その他の土器・陶器類 2. 銭貨



1. 石器①接合資料・使用痕のある剝片・石鏃・石匙・削器
2. 石器②石核・石錘・削器・敲石

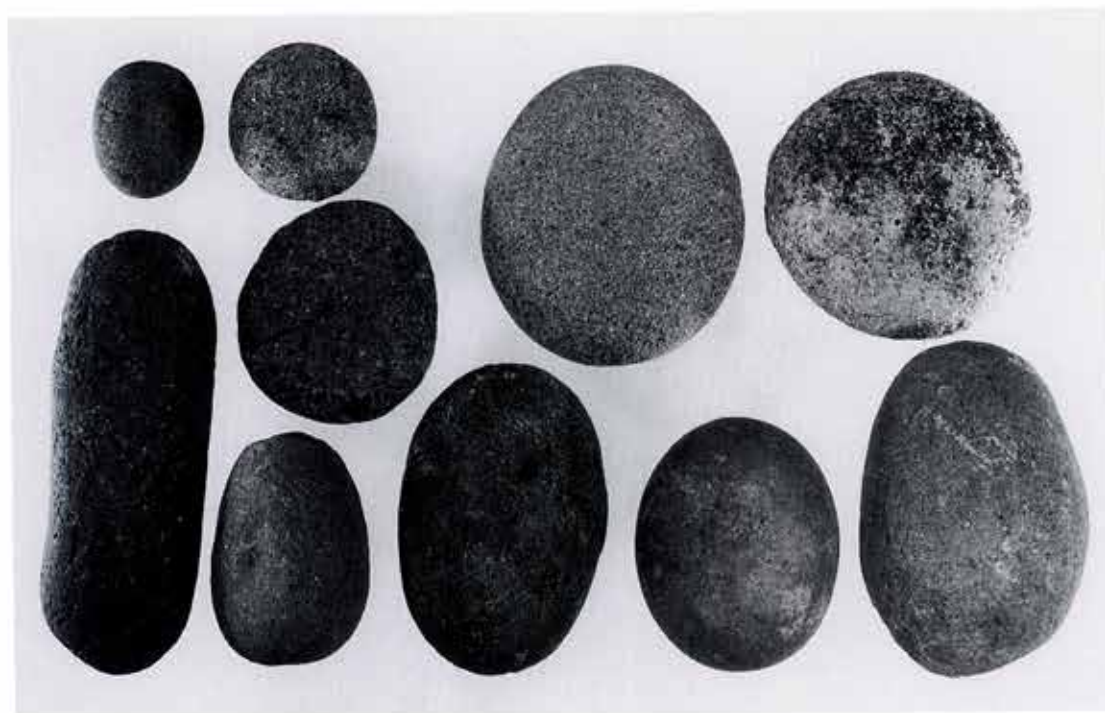
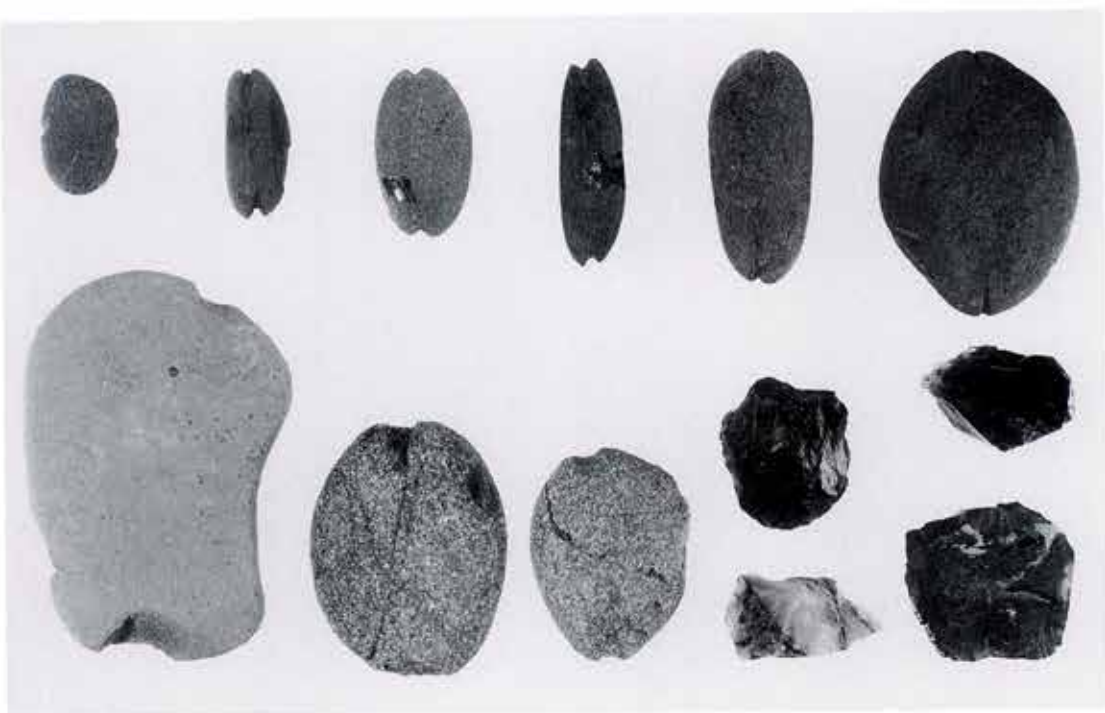


1. 石器③石鏃 削器・使用痕のある剝片・楔形石器
2. 石器④使用痕のある剝片・楔形石器



1. 石器⑤二次加工のある剥片・磨製石斧

2. 石器⑥打製石斧・磨製石斧



1. 石器⑦石核·打欠石锤·切目石锤
2. 石器⑧磨石·敲石

文献データシート

書名	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第5集 徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集 「追分遺跡・下開田村平遺跡」
執筆者	大参義一・佐野康雄・村木 誠・宇野治幸他
発行所	財団法人岐阜県文化財保護センター
発行年月	1993年3月
遺跡名	追分遺跡・下開田村平遺跡
読み	おいわけいせき・しもかいでんむらだいらいせき
所在地	追分遺跡：岐阜県 揖斐郡 藤橋村 大字開田 字追分 下開田村平遺跡：岐阜県 揖斐郡 藤橋村 大字開田 字村平
調査原因	徳山ダム建設
種別	追分遺跡：散布地， 下開田村平遺跡：集落跡（焼礫集積遺構・住居跡他）
時代	追分遺跡：縄文（早・後・晩）・古代～近世 下開田村平遺跡：縄文（早・中・後・晩）・古代～近現代

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第5集
徳山ダム水没地区埋蔵文化財
発掘調査報告書 第3集

追分遺跡・ 下開田村平遺跡

1993年3月25日 印刷

1993年3月31日 刊行

編集・発行 岐阜県本巣郡穂積町牛牧宮下 395
財団法人 岐阜県文化財保護センター
印刷 西濃印刷株式会社